

白井遺跡群 - 古墳時代編 -


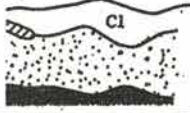


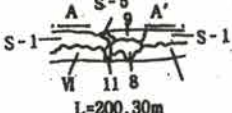
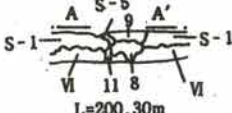
(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)
(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)


一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

1997

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

『白井遺跡群 - 古墳時代編 -』 正誤表

頁	誤	正
P.92 第95図		
P.150 第153図		
P.366 第348図		
P.423 表1 右側最下段	FP下(Ⅲ)	FP下(Ⅳ)

	群馬県埋蔵文化財 調査事業団	01-351
No. 97-2674	平成9年12月17日	191
		1(6)

SHIROI

白井遺跡群 - 古墳時代編 -

(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)
(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

1997

建設省
群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



白井遺跡群遠景 右手から利根川、左手から吾妻川が流れ白井遺跡群の南で合流する。左手奥が子持山。



白井北中道遺跡6区 白線で印のしてあるものがF P 軽石層の下面で検出したウマの蹄跡。



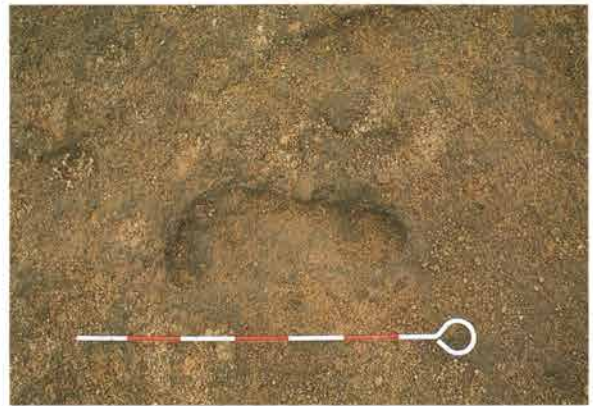
ウマの蹄跡（北中道6区） 手前がつま先側。



ウマの歩行跡（北中道2区）



ウマの蹄跡の集中部（北中道6区）



人間の足跡（北中道2区） 指の跡まで残る。



畦状遺構の断面（丸岩3区） 白色の層がF P、畦状遺構の下部の灰褐色の層がF A。



畦状遺構の焼土（丸岩3区）



地表面の様子（南中道3区） 畦状遺構を境に変化がある。



道（北中道5区）



立木の痕跡（北中道3区）



草本類の根株の痕跡（北中道5区） 黒みがかった部分。



地表面に残る植物の痕跡（北中道6区）



白井から榛名山を望む 左下隅が北中道2区。



調査風景 刷毛を用いて旧地表面を検出する。



F A層の上面で検出した耕作の痕跡（南中道4区）



F Aの火砕流で倒された木の断面（二位屋5号倒木） 灰褐色の層が火砕流。

序

本県と埼玉、新潟県を繋ぐ幹線道路である国道17号線は、従来渋川市と子持村にかかる鯉沢交差点が渋滞し、道路交通情報でもおなじみの地点です。建設省が所管した総延長5.5kmの鯉沢バイパスは、こうした交通混雑解消のために計画され、平成8年10月に開通した後、大幅に交通事情は改善されました。

群馬県埋蔵文化財調査事業団の実施した白井遺跡群の発掘調査は、この鯉沢バイパス建設に先立って行ったもので、平成3年度から順次整理に入り、報告書は時代別、遺構別に編成して、これまでに集落編Ⅰ、Ⅱ、中世編を刊行しております。この報告書は、白井遺跡群の古墳時代編として、6世紀の放牧地、畠、馬の足跡群が発掘された遺跡として全国的に脚光を浴びた白井二位屋、南中道、丸岩、北中道の各遺跡群の報告を一冊に編集しております。とくに、古墳時代の馬のひずめ跡が多数、組織的に発掘、分析され、当時の馬を木曾駒程度の中型馬と推定したり、農法を示唆する資料、放牧地の形態等をまとめて報告している点は、従来にない画期的な内容の報告書となりました。この間の事情は本文に詳しいところですが、貴重な成果であることに鑑み、動物考古学の国際学会から招聘を受けた担当職員が、分析結果をドイツで発表し、大きな反響を呼びました。群馬県という地域での発掘成果が、国際的に求められ、高く評価されることがあり得るという一例です。

今回の報告書刊行に至るまでには、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会、地元関係者の皆様には、格別の御尽力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げます。本報告書が、広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成9年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本書は一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う、白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡の古墳時代に関する発掘調査報告書である。これらの遺跡は事業名称をそれぞれ仁位屋遺跡・下宿遺跡・中宿遺跡・白井1遺跡と呼称していた。また、白井地区の鯉沢バイパス関係の各遺跡をとりまとめて「白井遺跡群」の名称を使用することとする。
- 2 本遺跡は群馬県北群馬郡子持村大字白井に所在する。
- 3 事業主体 建設省関東地方建設局
- 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成2年4月1日～平成3年3月31日(平成2年度、二位屋・南中道・北中道)
平成3年4月1日～平成4年3月31日(平成3年度、二位屋・南中道・丸岩・北中道)
平成4年4月1日～平成4年12月11日(平成4年度、南中道・丸岩・北中道)
平成5年4月1日～平成5年5月31日(平成5年度第1次、南中道・丸岩・北中道)
平成5年12月1日～平成6年3月31日(平成5年度第2次、丸岩・北中道)
平成6年4月1日～平成6年7月31日(平成6年度、北中道)
平成7年4月1日～平成7年12月11日(平成7年度、丸岩・北中道)
- 6 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
常務理事 邊見長雄(平成2～4年度) 中村英一(平成5～7年度)
事務局 長 松本浩一(平成2～3年度) 近藤 功(平成4～6年度)
原田恒弘(平成7年度)
管理部長 田口紀雄(平成2年度) 佐藤 勉(平成3～5年度)
蜂巢 実(平成6～7年度)
調査研究部長 神保侑史(平成2～7年度)
庶務課長 岩丸大作(平成2～3年度) 齊藤俊一(平成4～6年度)
小淵 淳(平成7年度)
調査研究部第2課長 能登 健(平成2～5年度)
調査研究部第4課長 中東耕志(平成6～7年度)
事務担当 国定 均 笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂
高橋定義 松下 登 大澤友治 野島のぶ江 並木綾子 吉田恵子
今井もと子 角田みづほ 松井美智代 塩浦ひろみ 内山佳子 星野美智子
羽鳥京子 菅原淑子
調査担当 平成2年度 飯島義雄 下城 正 石北直樹 神谷佳明 麻生敏隆
南雲芳昭 黒田 晃 根岸 仁 高井佳弘
平成3年度 飯塚卓二 大木紳一郎 坂口 一 洞口正史 徳江秀夫
麻生敏隆 南雲芳昭 黒田 晃 志塚雅美 井上昌美
関口博幸 (囑託員 外山政子)
平成4年度 大木紳一郎 洞口正史 徳江秀夫 南雲芳昭 飯森康広
井上昌美
平成5年度 綿貫邦男 洞口正史 南雲芳昭 井上昌美 矢口裕之
平成6年度 洞口正史 井上昌美 矢口裕之
平成7年度 洞口正史 斎藤利昭 廣津英一

- 7 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成7年4月1日～平成9年3月31日
- 9 整理組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 常務理事 中村英一(平成7年度) 菅野 清(平成8年度)
- 事務局長 原田恒弘(平成7～8年度)
- 管理部長 蜂巢 実(平成7～8年度)
- 調査研究部長 神保侑史(平成7年度) 赤山容造(平成8年度)
- 総務課長 小淵 淳(平成7～8年度)
- 調査研究第4課長 中東耕志(平成7年度)
- 調査研究第2課長 岸田治男(平成8年度)
- 事務担当 国定 均 笠原秀樹 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 高橋定義 宮崎忠司
大澤友治 吉田恵子 今井もと子 松井美智代 内山佳子 星野美智子
羽鳥京子 菅原淑子 山口陽子 佐藤美佐子
- 整理担当 南雲芳昭 井上昌美
- 整理班員 青木静江 藤井輝子 吉田文子 岩淵フミ子 阿部和子 大友美代子
千代谷和子 五十嵐由美子 市田武子 池田和子 中曾根貞子 佐藤久美子
田中佐恵子 市橋晴子 萩原由香 大野容子

10 本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 南雲芳昭 井上昌美

執 筆 5章3節、7章P458～463 麻生敏隆

6章 本文中に記載

7章P453～455 能登 健

7章P456～457 洞口正史

上記以外 井上昌美

遺構・遺物図面整理、図版作成等

青木静江 藤井輝子 吉田文子 岩淵フミ子 阿部和子 大友美代子 千代谷和子 五十嵐由美子 市田武子 池田和子 中曾根貞子 佐藤久美子 田中佐恵子 市橋晴子 萩原由香 大野容子

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一 小材浩一 土橋まり子 小沼恵子 萩原妙子

11 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめとして、遠方からも多数の方々に参加していただいた。調査に尽力していただいた作業員の方々に感謝の意を表す次第である。

12 出土遺物と、白井遺跡群に関する整理済み記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

13 本書の作成にあたっては、次の方々には有益な指導と助言を賜った。記して深甚なる感謝の意を表す次第である。

石井克己 伊藤正起 大江正直 大塚初重 置田雅昭 小林正春 佐々木高明 佐原 真 白石太一郎

申 敬澈 鈴木健夫 高谷好一 田村 孝 辻井弘忠 都出比呂志 西中川駿 松井 章 宮崎重雄

Peter Rowley-Conwy 飯田市教育委員会 指宿市教育委員会 宇土市教育委員会 熊本県立装飾古墳館

群馬県馬事公苑 群馬県競馬組合 更埴市教育委員会 四條畷市立歴史民俗資料館 城南町教育委員会

JRA競馬博物館 根岸競馬記念公苑 (敬称略)

凡 例

- 1 調査区域には、国家座標に基づいて4m間隔のグリッドを設定した。白井二位屋・白井南中道・白井丸岩遺跡の、グリッドの原点AA-00は日本平面直角座標系第IX系のX=55.650km、Y=-72.800kmである。白井北中道遺跡のグリッド原点AA-00は、第IX系のX=55.650km、Y=-72.400kmで、AA-100が白井二位屋遺跡などのAA-00にあたる。
- 2 本書では榛名山の噴出物である、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-F A)層をF Aと表記し、F A層中の各ユニットをS-1、S-2などと表す。同様に榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-F P)層をF Pと表記し、F P層中の各ユニットをI-1、I-2などと表す。
- 3 第3章、第5章3節の遺構番号は、発掘調査時に付された番号に重複等があったため、本報告書では新たに番号を付け直した。第4章、第5章の一部については発掘調査時に付された番号をそのまま使用しているが、時期を問わず通番でふっているために、古墳時代以外の遺構番号が欠落している。
- 4 本文中で使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図「前橋」、「榛名山」、「中之条」、「沼田」、20万分の1の地勢図「宇都宮」、「長野」である。付図は子持村都市計画図(1/2,500)、渋川市都市計画図(1/2,500)、北橋村平面図(1/1万)、赤城村平面図(1/1万)を資料とした。
- 5 遺構および遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。また、挿図中の「L=○○m」は、断面図の水糸標高を示す。

- 6 第3章の畦状遺構の土層注記は、特別なものを除いては以下の記号・網掛けを用いた。

Aは黒褐色土、Bは暗褐色土、CはF A主体の褐色土を表し、それぞれ次のように分類した。

A1：あまり夾雑物を含まない。 B1：あまり夾雑物を含まない。 C1：あまり夾雑物を含まない。

A2：炭化物を含む。 B2：炭化物を含む。 C2：黒褐色土を含む。

A3：F Aのブロックを含む。 B3：F Aのブロックを含む。 C3：暗褐色土含む。

A4：炭化物・F Aブロック含む。 B4：炭化物・F Aブロック含む。 C4：炭化物・黒褐色土含む。

A5：焼土を含む。 B5：焼土を含む。

A6：焼土・炭化物を含む。 B6：焼土・炭化物を含む。

A7：炭化物層が縞状に入る。 B7：炭化物層が縞状に入る。

数字の右肩にダッシュ記号がある場合は、それぞれの夾雑物が多いことを示す。

網掛け部分は次のことを意味する。

 F Pを多く含む黒褐色土  F A  地山  焼土  炭化物  攪乱

F Aについては、ユニットのわかるものについてユニットの記号を記したが、末尾に?マークの付くものは、確定できないもの、またはそれを主体として複数のユニットが混合しているものである。

- 7 第3章の畦状遺構の一覧表に用いた記号は以下のことを示す。

F P混じり土 ○：あり -：なし

炭化物 ○：炭化物層あり △：炭化物含む -：なし

焼土 ○：あり -：なし

F Aの残存 S-10○：S-10があり、畦の周囲よりも残りがよい。

S-10△：S-10があり、畦の周囲も同様である。

S-10×：S-10があり、畦の周囲よりも残りが悪い。

FAの残存 - : 確認できない

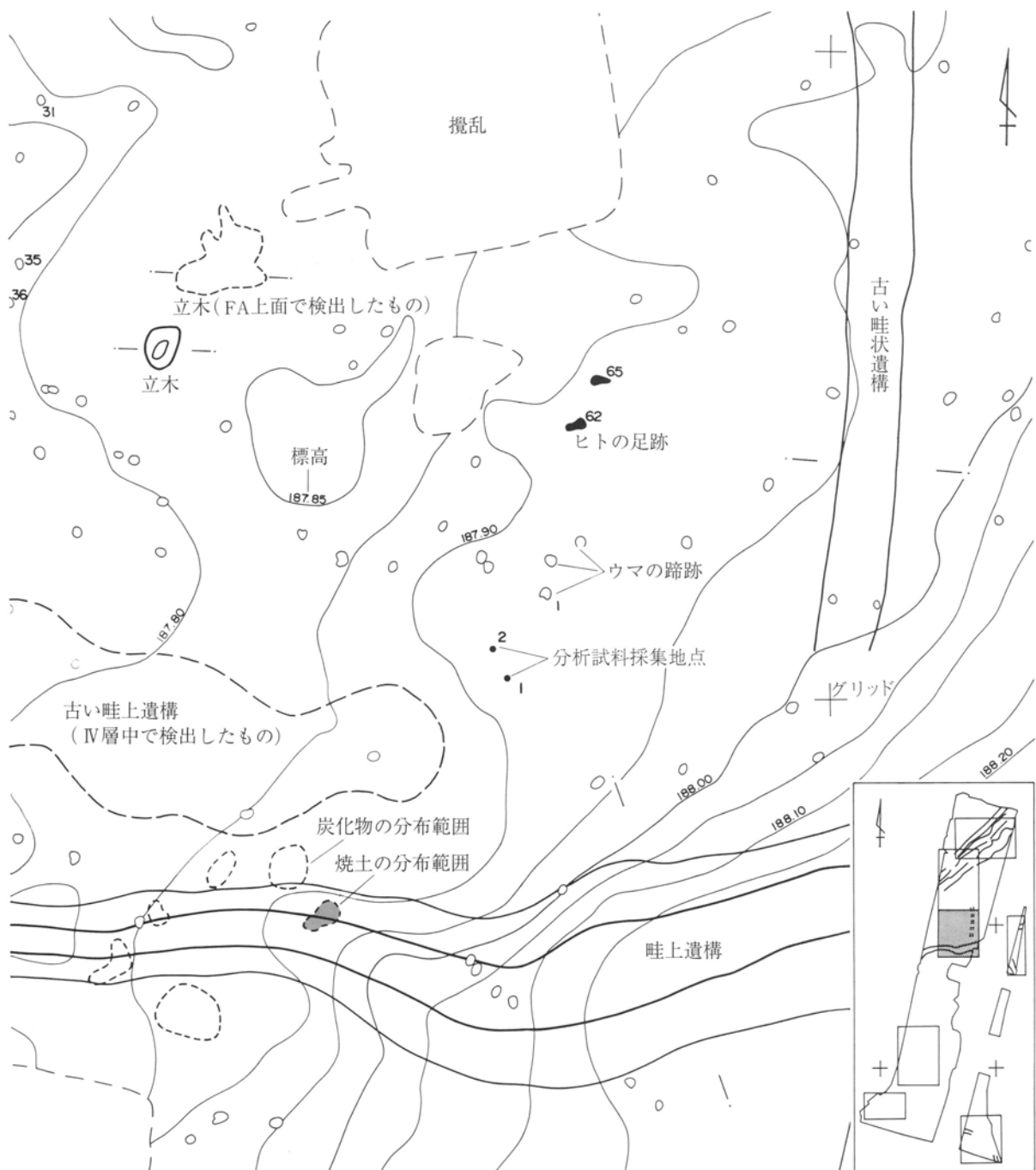
FA下面凹凸 - : なし

8 土層断面の注記に用いた色調は、概ね農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。

9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壤物理研究会による基準に従い、細砂粒(<0.5mm)、粗砂粒(0.5~2.0mm)、細礫(2.0~5.0mm)、中礫(5.0mm>)とした。

(2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。



目 次

口絵
序
例言
凡例
報告書抄録

第1章 調査の経緯		第5章 F A層下面の調査	
第1節 調査の経緯	2	第1節 調査方法と調査の概要	310
第2節 調査の方法	3	第2節 遺構・遺物	312
第2章 地理的・歴史的環境		第3節 倒木・立木	327
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	6	第6章 自然科学分析	
第2節 周辺の遺跡	7	白井遺跡群における古墳時代のテフラ	370
第3節 基本土層	11	白井遺跡群における植物珪酸体分析	381
第3章 F P層下面の調査		白井遺跡群出土炭化材の樹種同定	420
第1節 調査方法と調査の概要	14	白井遺跡群より出土した炭化種実について	430
第2節 白井二位屋遺跡	22	ウマの蹄跡の認定について	439
第3節 白井南中道遺跡	38	第7章 まとめ	
第4節 白井丸岩遺跡	110	F P下面調査の成果と課題	444
第5節 白井北中道遺跡	168	白井遺跡群のプラントオパール分析について	453
足跡計測値・ウマの蹄跡計測値一覧表	271	耕地遺跡としての白井遺跡群	456
第4章 F A層上面の調査		倒木・立木について	458
第1節 調査方法と調査の概要	288		
第2節 遺構	291		
第3節 痕跡の調査	293		

付図1 白井遺跡群・吹屋遺跡群調査区全体図

F P層直下の遺跡位置図

付図2 F P層下面調査区別全体図(1)~(16)

白井遺跡群発掘調査報告書

既刊

白井遺跡群—中世編—(二位屋・南中道遺跡)

白井遺跡群—集落編Ⅰ—(二位屋遺跡)

白井遺跡群—集落編Ⅱ—(南中道遺跡)

続刊

白井遺跡群—旧石器・縄文時代編—

(二位屋・南中道・丸岩・北中道遺跡)

白井遺跡群—中世・近世編—(丸岩・北中道遺跡)

報告書抄録

ふりがな	しろいいせきぐん こふんじだいへん							
書名	白井遺跡群－古墳時代編－(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)							
副書名	一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第4集							
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	南雲芳昭 井上昌美							
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団							
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511							
発行年月日	西暦1997年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろい にいや 白井二位屋	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 03"	139° 01' 02"	19900401～19910331 19911101～19920131	7,600 600	道路建設
しろいみなみなかみち 白井南中道	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 15"	139° 01' 05"	19900401～19921031 19930401～19930531	21,324 501	道路建設
しろいまるいわ 白井丸岩	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 29"	139° 01' 08"	19910401～19921031 19930401～19930531 19931201～19940331 19950401～19951211	5,718 1,815 1,612	道路建設
しろいきたななみち 白井北中道	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 42"	139° 01' 13"	19900702～19901128 19910715～19921211 19930401～19930531 19931201～19940731 19950401～19951211	3,500 8,070 3,929 3,036	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
白井二位屋 白井南中道 白井丸岩 白井北中道	放牧地	古墳 6世紀初頭～ 6世紀中葉	ウマの放牧地、畦状遺構 77条、道6条、溝1条、 火山災害倒木31基、 立木74基		土師器甕、 坏、埴、 鉄鎌	軽石下の旧地表面からウマの 蹄跡を多数検出し、放牧地と 考えた。 火砕流による倒木を検出した。		

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経緯

鯉沢バイパスは、国道17号線の渋川市や子持村の市街地および、子持村鯉沢交差点付近での渋滞を緩和するために計画された、渋川市東町から子持村上白井までの5.5kmのバイパスである。東町から白井字北中道の国道353号線バイパスとの交差点までが第1期工事区間で、約2.3kmに及び、それ以北が第2期工事区間となっている。

この地域は、古墳時代の集落遺跡で日本のポンペイと呼ばれる国指定史跡黒井峯遺跡から南東へ2kmほどに位置しており、第1期工事区間で5遺跡、第2期工事区間で5遺跡が確認された。まず第1期工事区間の発掘調査を実施することになり、1990(平成2)年に白井二位屋遺跡(事業名称：仁位屋遺跡)・白井南中道遺跡(事業名称：下宿遺跡)・白井北中道遺跡(事業名称：白井1遺跡)の調査を着手した。翌年からは白井丸岩遺跡(事業名称：中宿遺跡)の調査も加わり、白井遺跡群の調査は1995(平成7)年まで続いた。1996(平成8)年の東町関下遺跡(事業名称：東町遺跡)の調査をもって、第1期工事区間の発掘調査を終了した。本報告書で扱う遺跡は、このうちの白井二位屋・南中道・丸岩・北中道の4遺跡である。

子持村白井地区は、古墳時代における榛名山の2度の噴火に伴う火山灰(FA)と軽石(FP)の層が堆積しており、調査はこれらの層の上面・下面および縄文時代の包含層の5面にわたり、さらに旧石器時代の試掘調査を行った。その結果、旧石器時代、縄文時代草創期・前期・中期の遺物、古墳時代の放牧地、奈良・平安時代の集落、中世の城郭の堀、近世の土坑群などを検出した。

特に古墳時代の調査では、1990年に白井北中道遺跡で6世紀中葉に降下したFP軽石層の下から、ウマの蹄跡を確認し、その後白井二位屋遺跡から白井北中道遺跡までの5万㎡を超える調査区のほとんどで、ウマの蹄跡が残っているのが確認できた。このことは当時の農業形態やウマの飼育のあり方に、重要な視点を投げかけた。



第1図 鯉沢バイパス路線図 (S=1:10,000)

第2節 調査の方法

第1期工事区間の子持村分の遺跡は、路線のセンター杭番号No.30～45が白井二位屋遺跡で、調査区を1～3区に分けた。同様にNo.45～71が白井南中道遺跡で1～5区の調査区を、No.72～85が白井丸岩遺跡で1～3区の調査区を、No.88～119が白井北中道遺跡で1～6区の調査区を設定した。

調査区域には、国家座標に基づいて4m間隔のグリッドを設定した。東西をアルファベット、南北をアラビア数字で呼称し、南東隅のグリッド杭の名称をグリッドの名称とした。白井二位屋・白井南中道・白井丸岩遺跡におけるグリッドの原点AA-00は、日本平面直角座標系第IX系のX=55.650km、Y=-72.800kmである。白井北中道遺跡のグリッド原点AA-00は、同座標系第IX系のX=55.650km、Y=-72.400kmで、白井北中道遺跡のAA-100が白井二位屋遺跡などのAA-00に相当する。

この地域は榛名山の噴火に伴う火山灰層(FA)と

軽石層(FP)があり、各遺跡とも5面の調査と旧石器の試掘を行っている。表土層とFP軽石層の除去にあたっては、大型掘削重機(バックホー)を用い、その他は基本的に手作業による遺構・遺物の検出を行った。

古墳時代の調査は、FP層の下面、FA層の上面、FA層の下面の3面について行った。通常、テフラ(火山砕屑物の総称)層や洪水層の下位には旧地表面が残されている。この地域では6世紀初頭のFAと6世紀中葉のFPというテフラがあり、火山災害に見舞われる直前の、古墳時代後期の2つの時期の地表面が検出できるわけである。

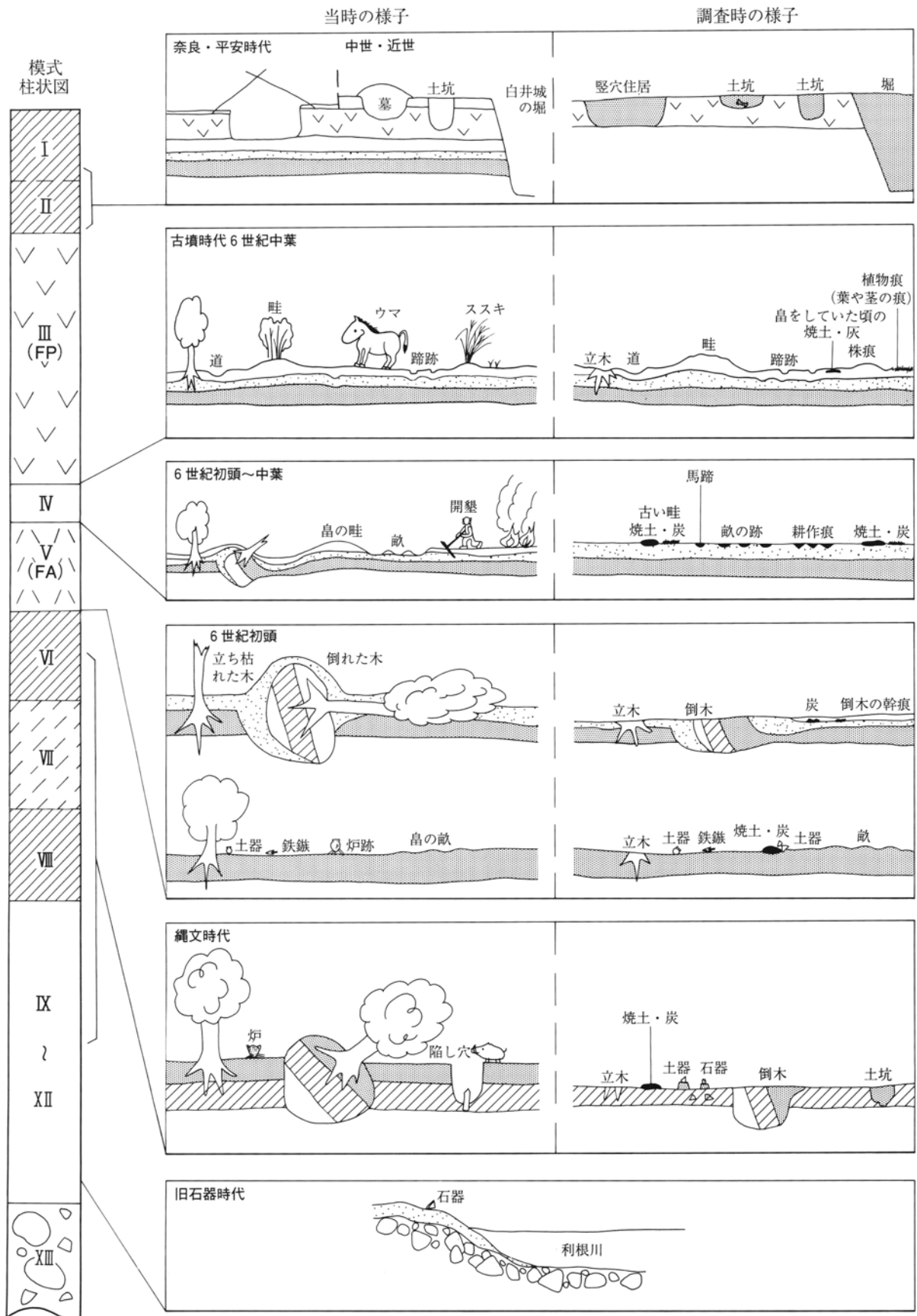
またFA層の上面には、FA災害後からFP降下までの限られた期間の行為が痕跡として残っている可能性があり、この3面を調査の対象とした。それぞれの面の調査方法に関する詳細は各章に譲ることとする。

なお、次ページに白井遺跡群の、各時代を通じた調査内容を模式図で示す。



現状の鯉沢バイパス

第1章 調査の経緯



第2図 調査内容の模式図

第 2 章

地理的·歷史的環境

第1節 遺跡の位置と周辺の地形

白井遺跡群は、洪川市の市街地から北東へ1.5kmほど離れた子持村大字白井に所在しており、群馬県の中央部やや北よりにあたる。子持村は新潟へ向かう国道17号と長野方面に向かう国道353号の分岐点で交通の要衝となっている。

村の主な産業は、こんにゃくの生産と軽量ブロックの製造であるが、これらは古墳時代の榛名山の噴火による軽石層の存在によるものである。遺跡の所在する白井地区には、中世の白井城跡や近世市場町の町並みが保存されており、白井宿として観光名所となっている。

子持村は東に赤城山、西に榛名山、北に子持山・小野子山と三方を山に囲まれ、関東平野の北端部に位置している。また北から利根川、北西から吾妻川が流下し、村の南端部でそれらが合流する。

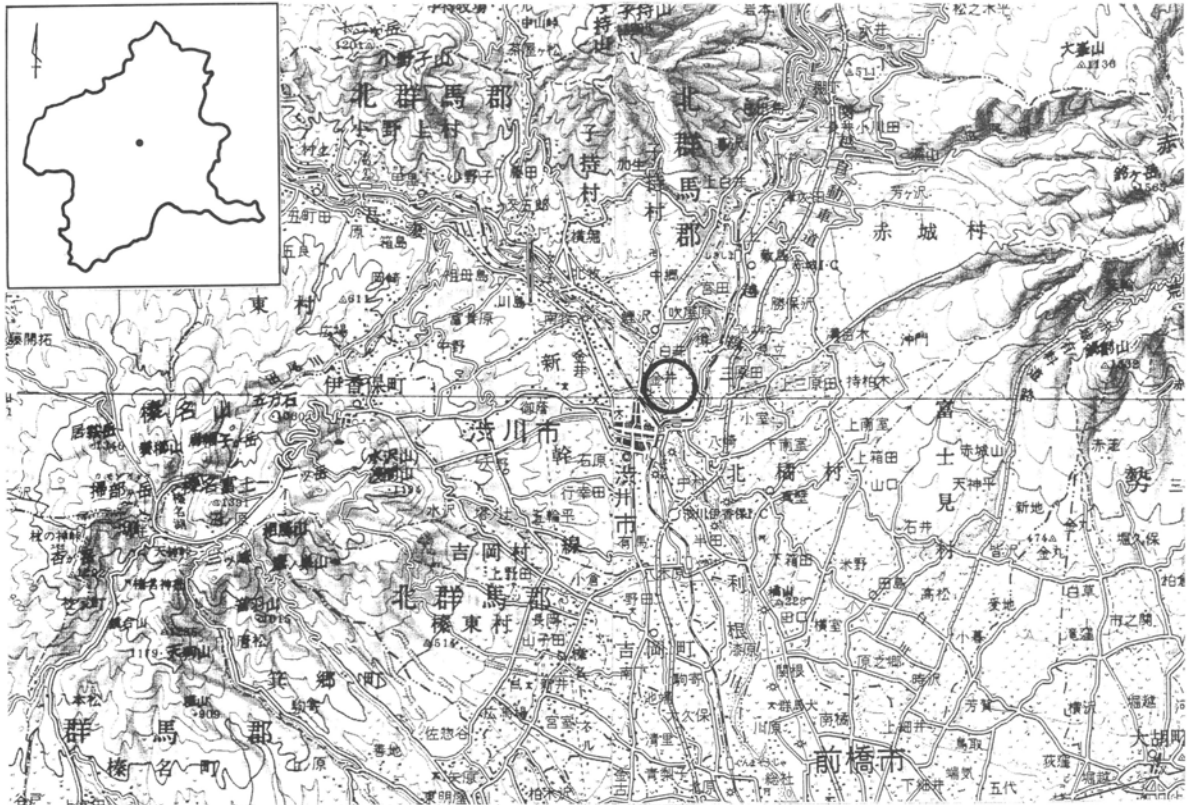
山地から平野部への変換点にあたる村の南部で

は、利根川と吾妻川により形成された河岸段丘が発達している。これらの段丘面は形成年代の古い順に、雙林寺面、長坂面、西伊熊面、白井面、浅田面と呼ばれている。白井遺跡群は、利根川と吾妻川の合流点にほど近い、利根川右岸の白井面上に立地している。ちなみに、長坂面には吹屋犬子塚遺跡・田尻遺跡、雙林寺面には黒井峯遺跡がそれぞれ立地している。

白井遺跡群付近の白井面は、標高190～210m前後で、利根川の現在の河床からの比高は15mほどである。上位段丘の長坂面との比高差は概ね10mほどで、全体にほぼ平坦であり、北から南へ向けて緩やかに傾斜している。

この白井遺跡群の立地する白井面は、面積が約100haである。この面には河川がなく、長坂面との段丘崖よりに湧水点が1カ所確認されているが、比較的水に乏しい。現在では、戦後に開発された一部の水田を除いて、他のほとんどの部分は畑として利用されている。

白井面の形成された年代は、段丘礫層上に浅間山



第3図 遺跡位置図

(S=1:20万)

起源の浅間一板鼻黄色軽石(As-YP)が部分的に認められることから、約1万4千年前頃に離水したものと考えられる。

この地域はその後、古墳時代になって2度の火山災害に見舞われた。6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う、火山灰と火砕流の堆積物(Hr-FA)が、白井二位屋遺跡で約40cm認められる。この火山灰は遺跡群の北側に行くにしたがって薄くなり、白井北中道遺跡では約8cm認められる。

榛名山の6世紀中葉の噴火では、軽石と火山灰が降下しており(Hr-FP)、白井二位屋遺跡で約40cm堆積している。これはFAとは逆に、遺跡群の北側に行くにしたがって厚くなり、白井北中道遺跡では最大190cm堆積している。なお、白井遺跡群は噴火口から東北東へ約10kmの位置に所在している。

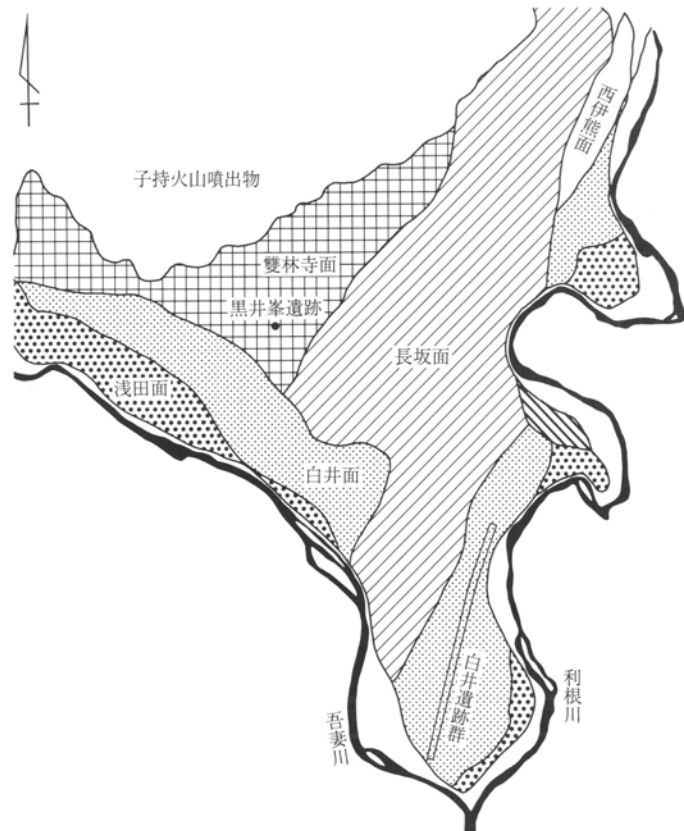
第2節 周辺の遺跡

白井遺跡群が所在する子持村とこれに隣接する渋川市、勢多郡の赤城村、北橋村では、数多くの遺跡が発掘調査されている。これらの地域は、古墳時代における榛名山の2回の噴火に伴う火山灰(FA)や軽石(FP)が降下した地域である。

特に2回目の噴火に伴うFPについては、子持村が軽石の降下した範囲の中心軸上に位置しており、最も厚い部分では2mにも及ぶ軽石層が認められる。このため、黒井峯遺跡に代表される、軽石層に直接埋没した集落や水田が各地で発掘調査されており、墳墓や畠を含めた集落の構造を考える上で重要な遺跡が多い。

ここでは、子持村とこれに隣接する地域の遺跡のうち、古墳時代の遺跡について限定し、なかでも榛名山が噴火した前後の時期に焦点を絞り、その主なものについて概観してみたい。

白井遺跡群に最も近接する吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡では、この遺跡群と同様にFP直下の馬蹄跡が検出され、馬蹄跡がこの遺跡群の立地する段丘

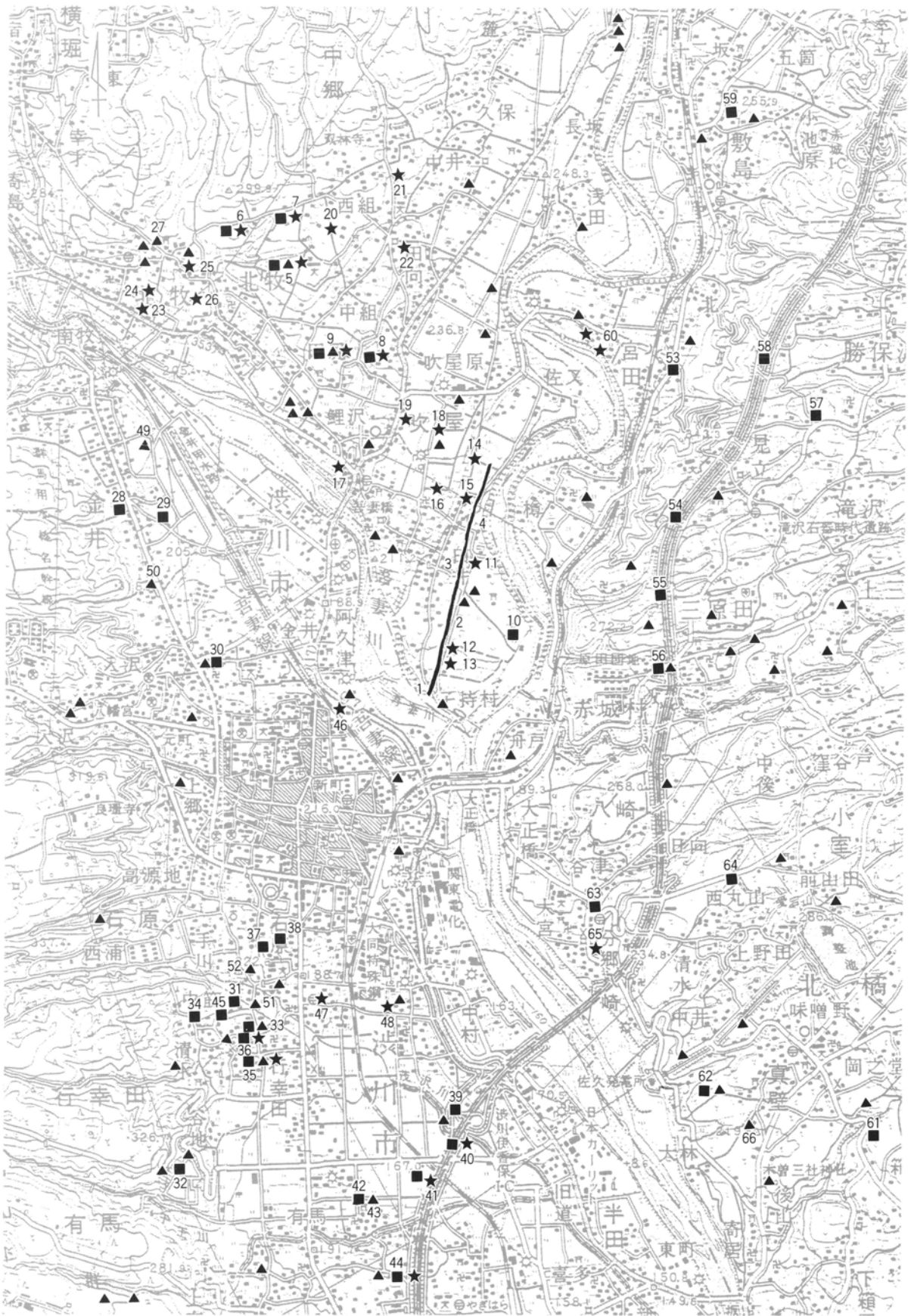


第4図 段丘面分類図(『文献：子持村誌上巻』)(S=1:50,000)

面に限定されることなく、上位の段丘面にも分布することが確認された。また、その一部には畠も検出されて、この一帯における土地利用に示唆的な資料を提供している。

黒井峯遺跡、押手遺跡、西組遺跡、田尻遺跡などでは、白井遺跡群と同じFPに埋没した集落、墳墓、水田、畠などが検出され、特に黒井峯遺跡では、竪穴住居、平地住居、家畜小屋、畠、道などが検出されている。これらは、古墳時代における火山災害の状況や当時の住居構造を詳細に示すとともに、検出された遺構の同時性から、集落構造の解明に貴重な資料を提供した。また、田尻遺跡では、竪穴住居の周囲と墳墓上からも馬蹄跡が検出され、集落内にも馬の行動が認められる点で興味深い。

黒井峯遺跡、田尻遺跡、丸子山遺跡などからは、FP層の上下から墳墓が検出されており、このなかには中ノ峯古墳に代表されるFPの直下のものも存在する。これらは墓域として、居住域と水田や畠などの生産域とともに、この地域における集落の展開



第5図 周辺の古墳時代遺跡 S=1:40,000

■ 集落 ▲ 墳墓 ★ 生産跡

に関する貴重な資料を提供している。

一方、子持村に隣接する地域では、洪川市の中筋遺跡でFAに埋没した竪穴住居、平地住居、水田、畠などが検出され、黒井峯遺跡よりやや年代の遡った時期の集落構造や、住居構造を解明する資料を提供している。

洪川市の有馬遺跡、有馬条里遺跡、八木原沖田遺跡、北橋村の田ノ保遺跡などでは、FAやFPに埋没した水田や畠と集落が検出されて、特に広範囲に検出されたFAやFPに埋没した水田と畠は、生産域と集落との関係を明らかにするとともに、水田そのものの状況やその構築課程などを明らかにする資料を提供している。また、田ノ保遺跡では、FAに埋没した水田から馬蹄跡が検出されており、古墳時代における馬の利用の一端を示したものとして興味深い。

また、空沢遺跡、諏訪ノ木遺跡などでは墳墓群が検出されているが、これらは層位的にFA下、FP下、FP上に位置し、火山の噴火前後における古墳造営の継続性に関して良好な資料を提供している。

以上、子持村とその周辺地域における、主として榛名山の噴火に関連した遺構を概観してきた。当該地域では、この火山灰を鍵層として遺構・遺物の年代を明確に判定することができるとともに、当時の旧地表面を広く範囲にわたって検出することができる、全国的にも希有な地域である。黒井峯遺跡に代表される集落構造の分析は、こうした特徴を活かした成果であることは言うまでもない。今後は、この白井遺跡群のような、明確に居住域、生産域、墓域という区別のできない部分の土地利用を含めて、広い範囲を対象とした集落構造の解明が課題となろう。

周辺の古墳時代遺跡一覧

No	遺跡名	遺跡の概要	文献	No	遺跡名	遺跡の概要	文献
1	白井二位屋遺跡	FP下放牧地	1	33	行幸田寺後遺跡	集落、墳墓	17
2	白井南中道遺跡	FP下放牧地	1	34	行幸田西遺跡	集落	20
3	白井丸岩遺跡	FP下放牧地	1	35	行幸田畑中遺跡	集落、畠、墳墓	20
4	白井北中道遺跡	FP下放牧地	1	36	中筋遺跡	FA下集落、墳墓、水田、畠	21
5	黒井峯遺跡	FP下集落、墳墓、水田他	2	37	石原久保貝道A遺跡	集落	17
6	押手遺跡	FP下集落、畠	3	38	石原久保貝道B遺跡	集落	17
7	西組遺跡	FP下集落、水田、畠	4	39	中村遺跡	集落	16
8	八幡神社遺跡	FP下集落、畠	5	40	八木原沖田遺跡	FP下水田、後期集落	22
9	田尻遺跡	FP下集落、墳墓、畠	5	41	有馬条里遺跡	集落、C下・FA下畠、FP下水田	23
10	渡屋遺跡	FA以前集落	6	42	後田東遺跡	集落	24
11	白井大宮遺跡	FP下馬蹄跡	7	43	有馬後田東II遺跡	集落、墳墓	17
12	白井二位屋遺跡 (ガソリンスタンド地点)	FP下馬蹄跡	8	44	有馬遺跡	集落、C下・AA下・FA下畠	25
13	白井二位屋遺跡 (トラクターミナル地点)	FP下畠、馬蹄跡	8	45	靴屋遺跡	集落	24
14	白井北中道II遺跡	FP下畠、FP下馬蹄跡	9	46	坂ノ下遺跡	FA下水田	26
15	白井上宿遺跡	FP下馬蹄跡	10	47	石原東遺跡	FP下水田	27
16	源空寺裏遺跡	FP下馬蹄跡、境界	5	48	中村日焼田遺跡	溝	27
17	吹屋瓜田遺跡	FA下水田、FP下水田	11	49	金井丸山古墳	FP下墳墓	28
18	吹屋犬子塚遺跡	FA下水田、FP下馬蹄跡	9	50	金井前原古墳	FA下墳墓	18
19	吹屋中原遺跡	FP下畠、FP下馬蹄跡	9	51	空沢遺跡	FA下墳墓、FP下墳墓、FP上墳墓	29
20	館野遺跡	FP下畠	12	52	諏訪ノ木遺跡	FP上墳墓、FP以前溝	30
21	池田沢東遺跡	FP下道、畠、境界	13	53	瘤ノ木遺跡	FP下集落	31
22	中組遺跡	FP下道、畠	12	54	見立溜井遺跡	集落	32
23	後田遺跡	FP下水田	6	55	諏訪西遺跡	集落	33
24	畑中遺跡	FP下水田	14	56	三原田城遺跡	集落、墳墓	34
25	丸子山遺跡	FP下墳墓、FP上墳墓、生産跡	14	57	寺内遺跡	FA下・FP下集落	35
26	相ノ田遺跡	FP下水田	8	58	勝保沢中ノ山遺跡	集落	36
27	中ノ峯古墳	FP下墳墓	15	59	小池原遺跡	集落	37
28	西裏遺跡	集落	16	60	宮田畦畔遺跡	水田	38
29	金井下新田遺跡	集落	16	61	箱田遺跡群	後期集落	39
30	金井原遺跡	集落、FP上?墳墓	17	62	水泉寺地区遺跡群	集落、墳墓群	12
31	伊勢森南遺跡	集落	18	63	北町遺跡	前期集落	40
32	行幸田山遺跡	集落、墳墓	19	64	群馬用水分郷八崎遺跡	後期集落	41
				65	田ノ保遺跡	FA下水田、FP下水田	40
				66	経塚古墳	後期墳墓	42

第2章 地理的・歴史的環境

文 献

- (1) 本報告書
- (2) 『黒井峯遺跡Ⅰ』 子持村教育委員会 1985 他
- (3) 『押手遺跡発掘調査概報』子持村文化財調査報告第5集 子持村教育委員会 1987
- (4) 『西組遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告第2集 子持村教育委員会 1985
- (5) 『年報11』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (6) 子持村教育委員会 石井克己氏のご教示による。
- (7) 『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第150集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (8) 『年報14』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- (9) 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第207集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- (10) 『年報12』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (11) 『吹屋瓜田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第212集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- (12) 『年報8』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (13) 『年報7』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (14) 『年報12』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (15) 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村文化財調査報告第1集 子持村教育委員会 1980
- (16) 『中村遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-111) 渋川市教育委員会 1986
- (17) 『市内遺跡Ⅵ』渋川市発掘調査報告書第33集 渋川市教育委員会 1993
- (18) 『市内遺跡Ⅱ』渋川市発掘調査報告書第23集 渋川市教育委員会 1989
- (19) 『行幸田山遺跡』渋川市発掘調査報告書第12集 渋川市教育委員会 1987
- (20) 『市内遺跡Ⅴ』渋川市発掘調査報告書第31集 渋川市教育委員会 1992
- (21) 『中筋遺跡』渋川市発掘調査報告書第13集 渋川市教育委員会 1987 他
- (22) 『八木原沖田Ⅲ遺跡』渋川市発掘調査報告書第32集 渋川市教育委員会 1993
- (23) 『有馬条里遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第97集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 他
- (24) 『市内遺跡Ⅰ』渋川市発掘調査報告書第19集 渋川市教育委員会 1988
- (25) 『有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第94集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 他
- (26) 『坂ノ下遺跡』渋川市発掘調査報告書第20集 渋川市教育委員会 1988
- (27) 『石原東・中村日焼田遺跡』渋川市発掘調査報告書第26集 渋川市教育委員会 1991
- (28) 『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市文化財発掘調査報告Ⅱ 渋川市教育委員会 1978
- (29) 『空沢遺跡』渋川市文化財発掘調査報告書Ⅲ 渋川市教育委員会 1979 他
- (30) 『諏訪ノ木遺跡発掘調査報告書』渋川市発掘調査報告書Ⅴ 渋川市教育委員会 1981
- (31) 『宮田嶺ノ木遺跡』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 赤城村教育委員会 1995
- (32) 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC-V 赤城村教育委員会 1985
- (33) 『中畦・諏訪西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第45集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (34) 『年報2』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (35) 『寺内遺跡』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 赤城村教育委員会 1975
- (36) 『勝保沢ノ山遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第75集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (37) 『敷島村誌』敷島村誌編纂委員会 1959
- (38) 『宮田畦畔遺構調査概要』時報第25号 群馬大学史学会 1961
- (39) 『村内遺跡Ⅰ』北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 北橋村教育委員会 1993
- (40) 『村内遺跡』北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 北橋村教育委員会 1994
- (41) 『分郷八崎遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 北橋村教育委員会 1986
- (42) 『真壁向山遺跡Ⅴ』北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 北橋村教育委員会 1995

第3節 基本土層

白井遺跡群の立地する地域は、段丘礫層を基盤として、その上位に砂礫層、ローム層、火山噴出物を挟む黒ボク土が堆積している。現在は平坦な地形であるが、下位にいくにしたがって小さな谷や微高地が表れ、Ⅷ層からⅫ層は地点により堆積状況が様々である。すべての層が一度にそろうところはない。

I層：黒褐色土。現在の耕作土で、Hr-FP、As-B軽石が混じる。20cm～50cmの層厚をもつ。

II層：黒褐色土。Hr-FP、As-B軽石が混じる。I層よりも色調が暗い。

III層：Hr-FP。白色軽石。榛名山の噴火に伴う軽石で、噴出年代は6世紀中葉と考えられている。最大粒径20cm、40cm～190cmの層厚をもつ(P370参照)。上面が奈良・平安時代以降の遺構確認面で、下面は6世紀中葉の旧地表面。

IV層：黒褐色土～暗褐色土。FAとFPの間の土壌層。5cm～10cmの層厚をもつ。2つのテフラに挟まれた限られた時間に形成された層。

V層：Hr-FA。あずき色火山灰、灰色火砕流など。榛名山の噴火に伴うもので、噴出年代は6世紀初頭と考えられている。8cm～40cmの層厚をもつ(P370参照)。上面が6世紀前半の痕跡調査の検出面で、下面が6世紀初頭の旧地表面。

VI層：黒褐色土。上部にAs-C軽石を含む。縄文時代の遺物包含層。

VII層：暗褐色土。いわゆる淡色黒ボク土。縄文時代の遺物包含層。

VIII層：黒褐色土。谷部分に堆積する。縄文時代の遺物包含層。

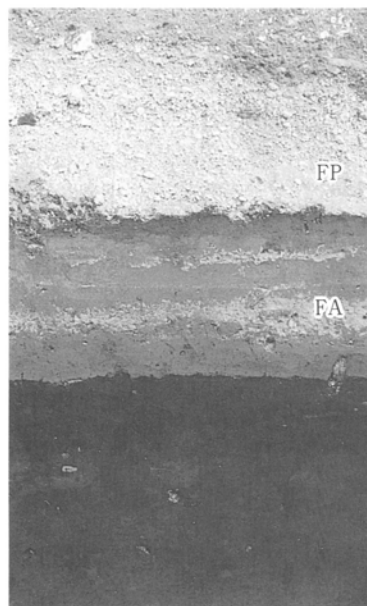
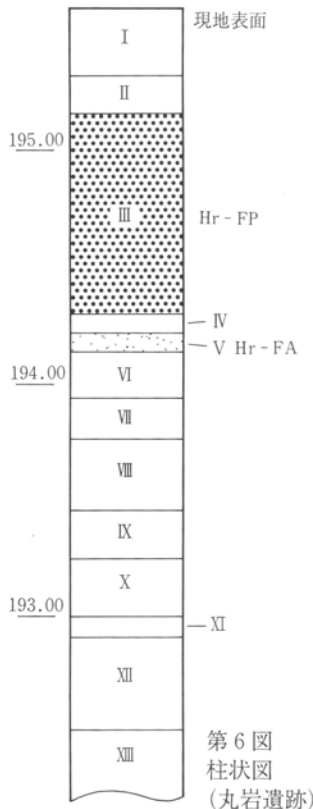
IX層：暗褐色土。ローム層との漸移層。縄文時代の遺物包含層。

X層：褐色土。ローム層。軟質。

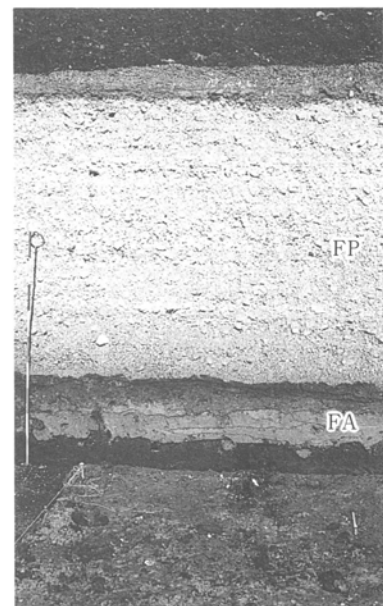
XI層：褐色土。ローム層。硬質で、やや砂質。部分的にAs-YP(1.3万～1.4万年前)を含む。旧石器時代の遺物を僅かに含む。

XII層：砂礫層。シルト層、細粒～粗粒砂層、拳大の礫を含む層まで様々な層の互層。ラミナの発達する層もある。

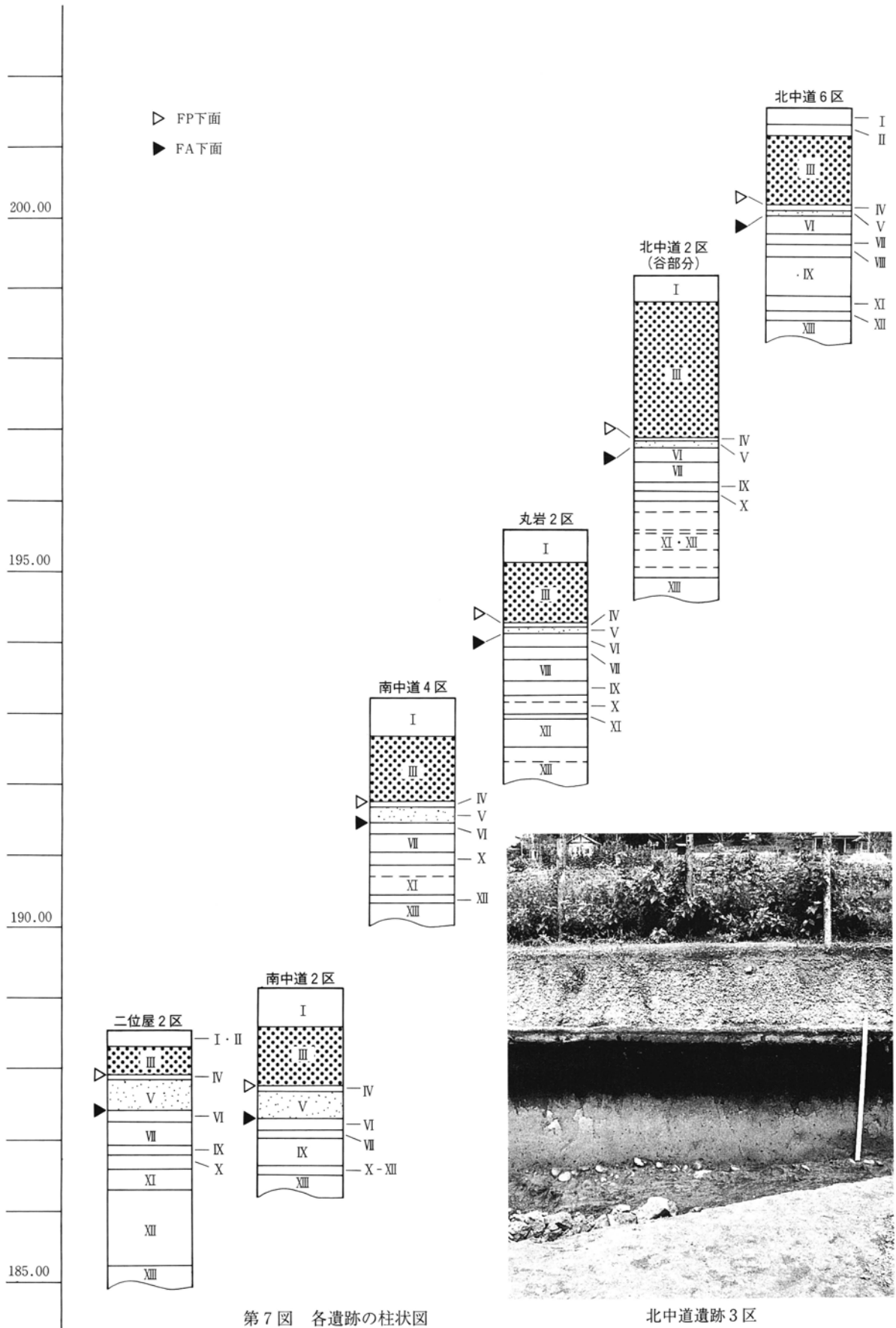
XIII層：段丘礫層。利根川の旧河床で、段丘面の基盤層。最大で直径1m程度の礫を含む。



二位屋遺跡3区

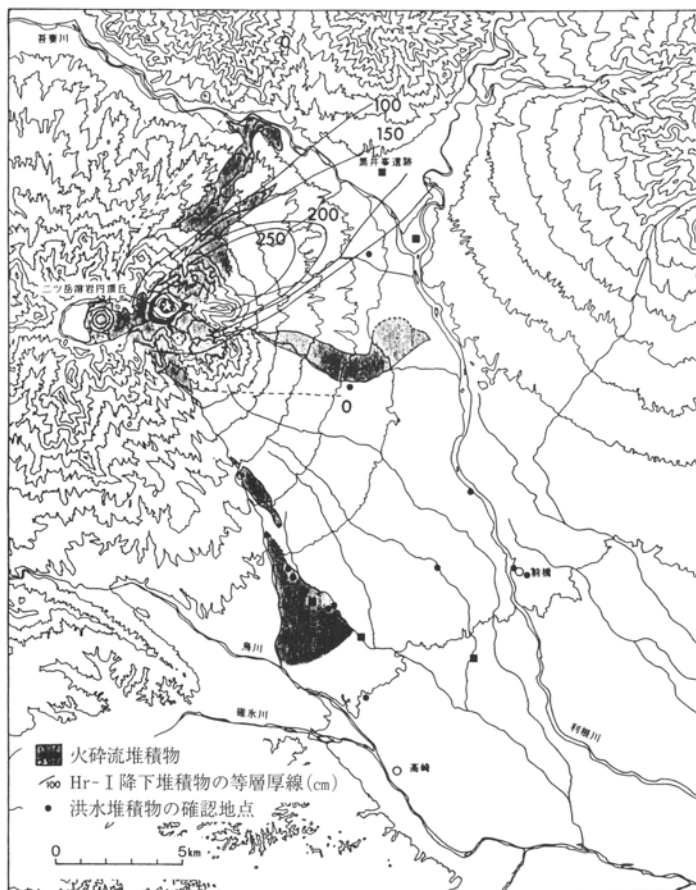


北中道遺跡1区

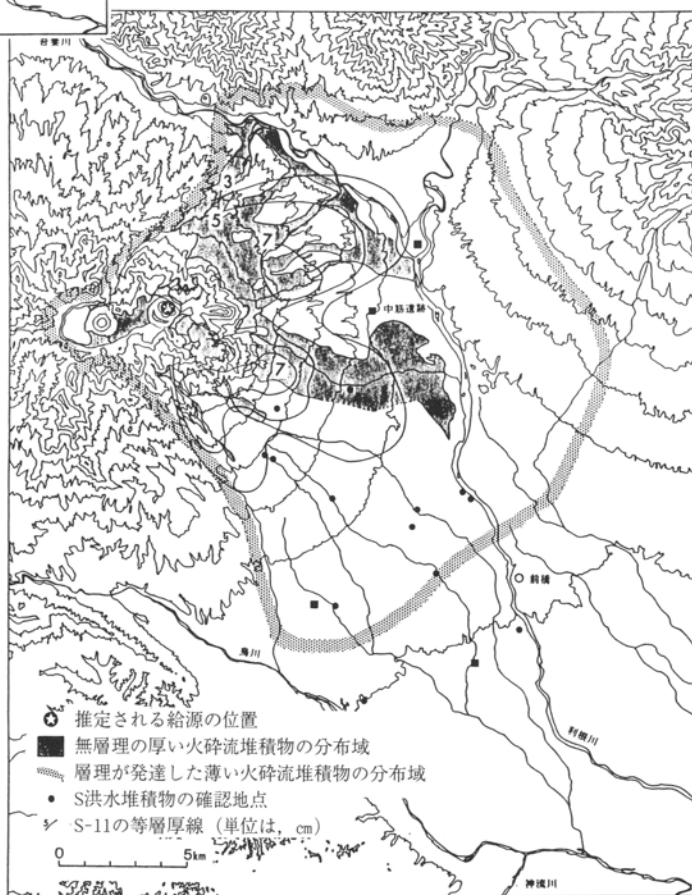


第7図 各遺跡の柱状図

第3章 FP層下面の調査



Hr-FPの分布 (早田, 1989)



Hr-FAの分布 (早田, 1989)

文献 早田勉「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」第四紀研究 Vol.27 No.4(1989)

第1節 調査方法と調査の概要

FP下面の調査方法

まずはじめにFP上面で、黒井峯遺跡の様な住居の屋根跡などがあるかどうか確認したが、その様なものは認められなかった。一部の区画では、堆積したFP層の厚さよりも低い建造物の存在を考慮して、FP層の中間で平面確認を行ったが、後世の木の根によるものと思われる黒い汚れを除いて、明らかに遺構と認定できるものはなかった。

次にFPを10cm程度残して、その上部は大型掘削重機で取り除いた。その後ジョレンを用いて、桃色がかった軽石層(I-2)を残して軽石を取り除き、最後に2～3cm残った軽石層を、ハケを使って、旧地表面を傷めないように掃き採った。この際に、FPの純層のみを取り除き、FP混じりの土壌は残した。

この遺跡群のFP下面の調査では、住居址や土坑、溝などの遺構は検出できなかった。しかし旧地表面には多くの情報が残されており、当時の土地利用を

考える上で以下の調査の概要で述べるような、遺構および痕跡の調査を行った。しかし、今までに調査例のない遺跡であったこと、調査が多年にわたったことから、その都度視点が異なり、試行錯誤を重ねた結果、必ずしも均質な調査とはなっていない。

FP下面の調査の概要

畦状遺構 FPを取り除くと、带状の僅かな高まりが確認できた。それは、水田や畝立てのある畠を囲むようになるわけでもなく、断面の形状が人為的と判断できるほど明瞭に作られていない。杭穴などの建造物の痕跡と認められるものも、ほとんどない。しかし、地形に規制されることなく伸びることから、自然にできる微地形ではなく、人為的な要素が加わっていると考え、畦状遺構と呼称することとした。これは調査開始時は北中道6区で、ほぼ東西南北方向に伸び、方形区画を作り出しているような、带状



調査風景（北中道5区）

第1節 調査方法と調査の概要

の高まりを検出し、その上面で炭化材を確認したことから柵列と考えたが、その後の調査で同様な例が見られず、柵の杭穴もほとんど確認できないことから、柵列と断定せずに、畦状遺構とした経緯がある。

また、畦状遺構と認めたものよりも僅かな帯状の高まりで、表面の様子は周囲の平坦面と変化のないものがある。地表面を僅かに削ると炭化物や焼土が、この高まり部分に沿って点々と分布する。これを上記の畦状遺構よりも古い段階の畦状遺構と位置づけ、古い畦状遺構とした。

畦状遺構は規模や構成要素などから、いくつかのタイプに分けられるため、以下の項目を観察のポイントとした。①盛り上がりがりひと山⇔ふた山。②幅が広い⇔狭い。③走向が直線的⇔曲がりくねる。④

FP混じりの土が有る⇔無い。⑤炭化物の薄層を挟む⇔挟まない。⑥焼土が有る⇔無い。⑦畦下のFAの残存状況が良い⇔悪い。⑧FA下面でも帯状の高まりが有る⇔無い。⑨柱穴が有る⇔無い。⑩畦上に蹄跡が付く⇔付かない。⑪表面の凹凸が激しい⇔あまり凹凸がない。⑫畦上のFPの堆積状況に変化が



道（北中道5区）



畦状遺構（北中道5区） 凹凸少ない。



畦状遺構（丸岩3区） 凹凸激しい。



畦状遺構の断面（丸岩3区）

第3章 FP層下面の調査

有る⇔無い。

畦状遺構の性格に関する結論は出ていないが、畦を境に両側で地表面に差が認められる例があることから、何らかの区画線となっていると考えられる。

道 周囲より僅かに凹んで硬化している、幅30cm程の帯状の遺構である。目的地となるような遺構は、調査区域内では確認できなかった。

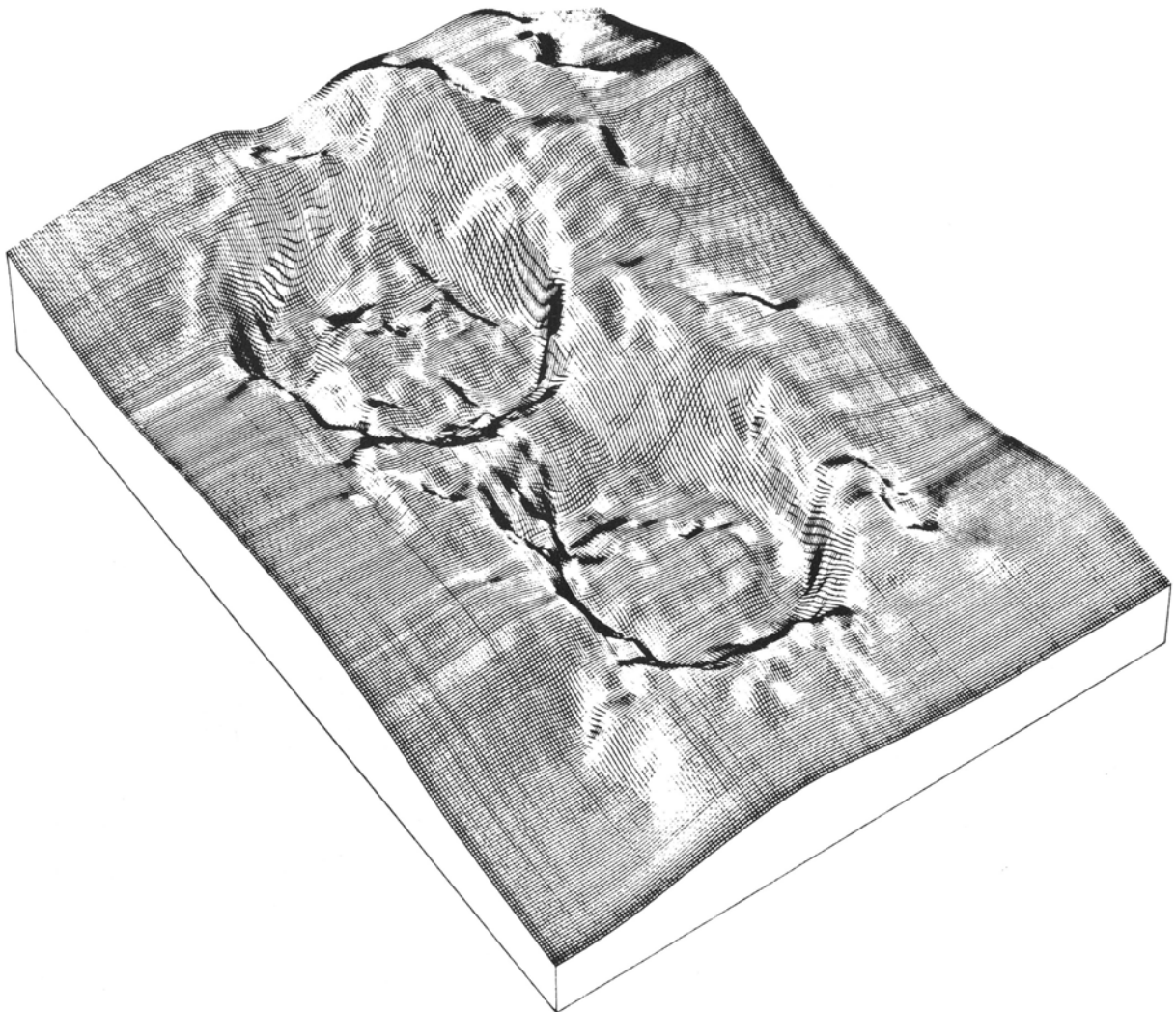
当初は人間の使う踏み分け道と考えたが、ウマの蹄跡が道に残されていること、現生のウマが放牧地内に、踏み分け道と同規模の道を作ることから、現段階ではヒトの作った道かウマの作った道かの判断がついていない。今後、目的地となるような遺構が検出されれば判断がつく可能性がある。

ウマの蹄跡 FP層下の地表面に、ある一定の大きさをした円形の窪みを多数確認した。それらはそ

の形状から、ウマの蹄跡と認定された。認定の根拠については第7章で詳述する。ウマの蹄跡は約2万5千個確認できたが、そのほとんどは規則性がなく、行跡(歩行の様子)が確認できたのはほんの数例である。ウマ以外の動物の足跡は確認できなかった。

調査では、蹄跡を残したのはどのようなウマで、どのような状況にあったのかを知るために、蹄跡の計測と行跡の確認を行い、蹄跡と畦状遺構の関係や分布密度などに注目した。

蹄跡は幅10cm前後のものが多く、子ウマと思われる小さな足跡も検出した。行跡は北中道2区で3例確認したが、いずれも谷へ向かって斜面を下りるように残されていた。また、畦状遺構との関係では、畦状遺構を境に蹄跡の残り方に大きな差がある場合と、差がなく畦の上にも蹄跡がつく場合がある。



第8図 コンピュータグラフィックによる蹄跡(縦方向を2倍に拡大)

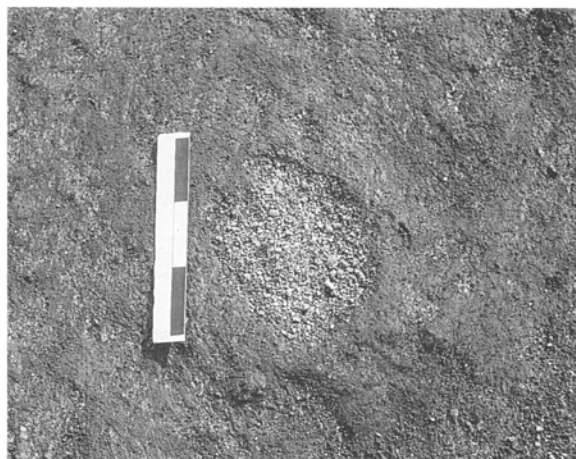
蹄跡に規則性がないこと、広範囲に渡って検出できたことから、当時この地域は、ウマの放牧地として利用されていたと考えられる。

ヒトの足跡 南中道3・4区、丸岩1区、北中道2区で検出した。北中道2区では指の形まで確認できた。大きさは平均23.3cmで、行動の様子が追えるものはない。

立木痕 FPの純層を取り除いた時点で、円形の落ち込み、すり鉢状の落ち込み、不定形の落ち込みを確認した。それらはさらにFP混じりの土が埋まっており、断面を確認したところ、樹木の根跡状になっていた。また、FP混じり土を全て取り除いたところ、パイプ状の空洞が数多く入り乱れていた。以上のことから、これらは樹木の根跡と考え、倒れた木の根跡と区別するために、立木痕と呼称するこ



ウマの歩行跡（北中道2区）



蹄跡（北中道5区） 軽石を除去する前



木曾馬の蹄（親子）



蹄跡（北中道2区） 前足と後足が重なる。



人間の足跡（北中道2区）

第3章 FP層下面の調査

ととした。また、FP下面では落ち込みとして認識できなかった場合でも、FA上面でFP混じりの土が埋まっており、立木痕と確認できる場合がある。

立木痕を残した樹木の年代、根鉢の規模を確かめるために、断面調査を行った。また本当に立木痕なのか、いつ生えていたのかを、自然科学の面からも探るために北中道1区で植物珪酸体分析を試みた。

根跡部分の土層にFPのみが混じるもの、FAとFPの両方が混じるものなどいくつかのパターンが見られる。

倒木痕 楕円形の高まりと、その脇の落ち込みとして認識できる。高まり部分には、木が倒れる際に持ち上げた下層の礫を伴う場合が多い。断面観察の結果、ほとんどがFA災害時の倒木であることがわ

かった（詳細はP327参照）。FA災害の倒木の痕跡が、FP降下時まで残存していることも、当時の土地利用を考える上で、要点となると考えられる。



立木痕の断面（北中道3区）



立木痕（丸岩3区）



立木痕（北中道3区）



倒木痕（南中道2区）



株痕（北中道5区） ススキなどの根株跡と思われる。

第1節 調査方法と調査の概要

株痕 直径が60~70cmほどの、円形の僅かな高まりがある。周囲よりやや黒みを帯び、蹄跡は付かない。このような高まりについて、北中道5区で植物珪酸体分析を行ったところ、ススキ属の珪酸体が多く検出されたため、ススキなどの根株跡と考えた。しかし、必ずしもススキ属が多く検出されるとは限らなかった。

ススキの株の大きさや密度が、この場所が放牧地として利用されていた期間を推定する資料になると考えられる。

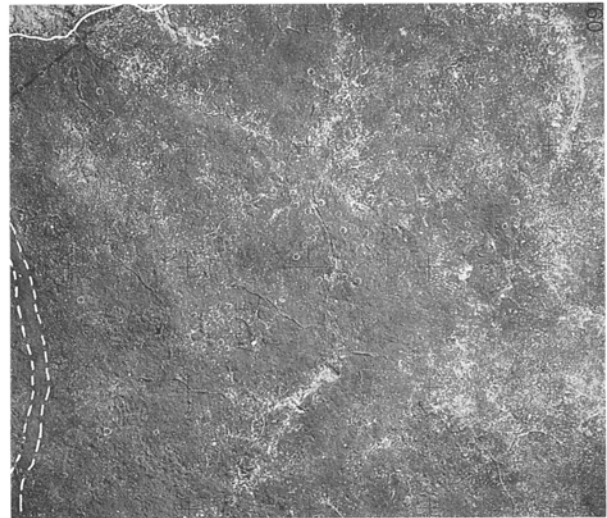
植物痕 FPを掃き採ると、地表面に細長い筋が表れる。周囲にはFP最下部の火山灰層が残っているが、この部分は暗褐色土となるため、筋が見える。これを植物の痕跡と考え、植物痕と呼称することにした。

形状はすべて細長い棒状で、植物を特定するには至っていないが、植物珪酸体分析で検出されているススキなどのイネ科植物の痕跡である可能性がある。分布については、残存状況に差はあるものの、全ての区画で確認できる。

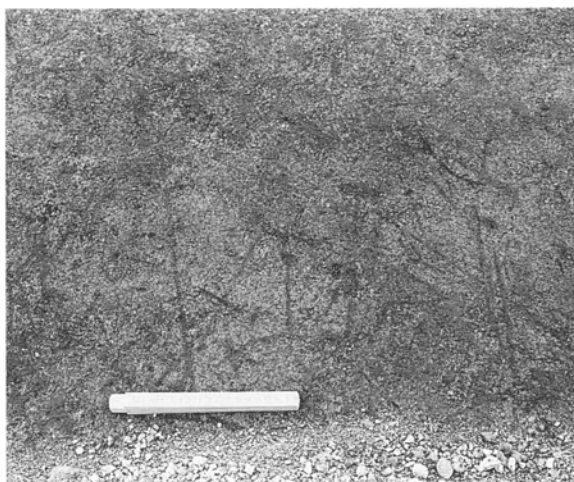
また、植物痕とは別に、地表面のところどころに炭化した植物片が検出できる。茎や葉に相当するような薄いものや、細かな材片などがあり、いずれも磨耗されていないことから、炭化した当時の原位置を保っていると考えられる。

動物生痕 直径5cmほどでトンネル状や半地下式の、水平方向に広がるパイプ状の穴を、すべての区で検出した。分布に偏りはなく、どこでも一様に確認できる。それらはFPで充填されており、その形状から、モグラやジネズミの生痕ではないかと考えた。しかし、明確にモグラ塚や、巣穴といえるものは確認しておらず、その年代も不明である。

樹木の根も同様な形状を示す場合があるが、それらと明確に分類するには至っていない。



動物生痕？（丸岩3区） モグラなどのトンネルか？



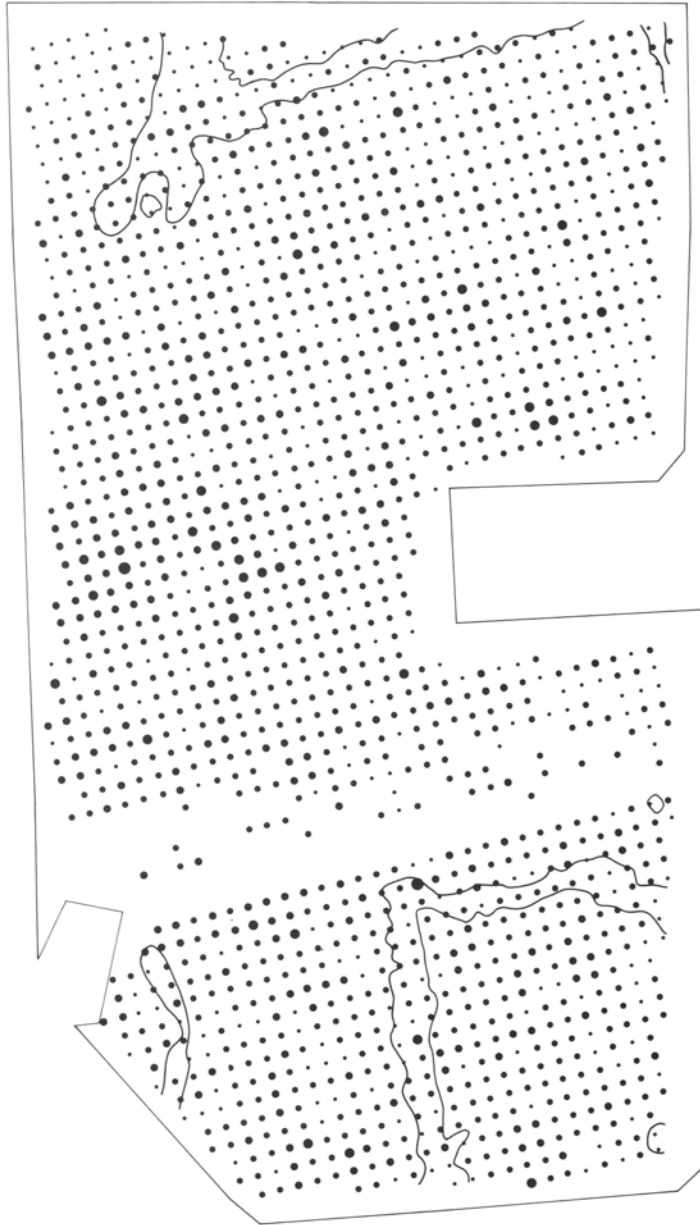
植物痕（北中道6区）



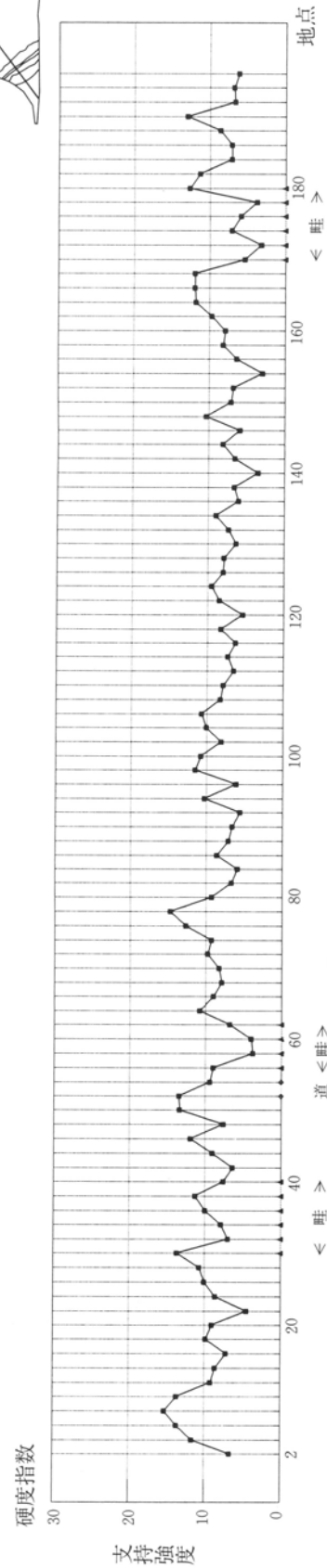
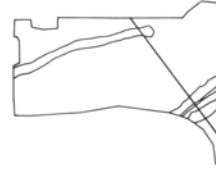
植物痕（丸岩3区） 炭化しているもの。

第3章 FP層下面の調査

地表面の硬度 蹄跡の残存状況の差が、地面の硬さによるのかどうか、裸地と草地では地面の硬さが異なるのかどうかなどを考えるために、地表面の硬度を測定した。FP以降の地層の堆積による圧縮や、



第9図 南中道遺跡5区の地表面硬度



土壌の乾燥の程度など、測定時の条件によって、当時の地表面の硬度とは異なるだろうが、相対的な硬度差は確認できると考えた。

南中道5区で全面的に硬度の測定を行ったが、顕著な差は見いだせなかった。北中道1区では、一直線上で計測したところ、道の部分が他より僅かに硬く、畦の部分が軟らかい傾向が認められる。

いずれも地表面を検出した後、しばらく経ってから測定している。

自然科学分析 プラント・オパール分析当時の植生復元のために行った。調査区域全体を通じた分析の他に、FA降下後からFP降下直前までの変化、区画による地表面の色調の違い、畦状遺構と平坦面の差、株痕の確認、立木痕の確認などを考えるための分析を行った。なお、花粉分析については試験的な分析から、花粉の残存が認められず、分析不可能と判断されたため、本格的な分析は行っていない。

炭化材同定 当時の植生を知るために、地表面に散っているもの、畦上のもの、畦中に含まれるもの

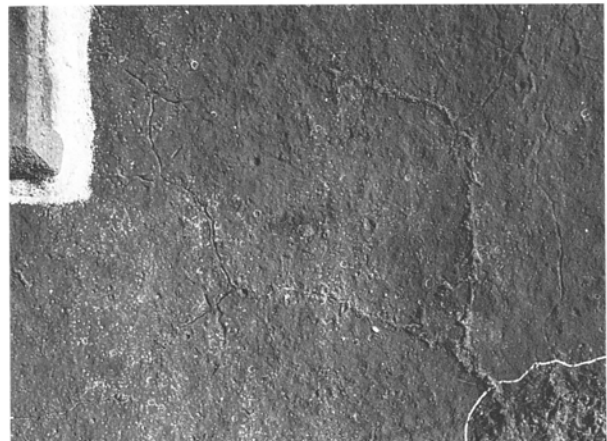
などを対象に行った。

炭化種子同定 土地利用の状況、栽培植物、植生を知るために、FPとFAの間の土壌の洗い出しを行い、炭化種子の同定を行った。FPとFAの間の土壌層は、炭化種子を数多く含んでいた。

テフラ分析 基本層序中のテフラを特定するため、および畦の最上層に含まれる軽石、畦上のFP層のユニットについての同定を行った。畦の最上層の軽石は、それがFAに伴うものか、FPに伴うものかが畦の最上層の成因に関係すると考えられるためである。また、畦上のFP層のユニットの調査は、畦部分に構造物や植物の繁茂した状態があった場合、ユニットが乱れるのではないかと、FPが降下しはじめたころ、畦部分についてはFPを攪拌するような作用があり、ユニットが乱れるのではないかなどの考えが出され、その解明のために行った。



現代の植物の根による攪乱（北中道3区）



動物生痕？（丸岩3区） モグラなどのトンネルか？

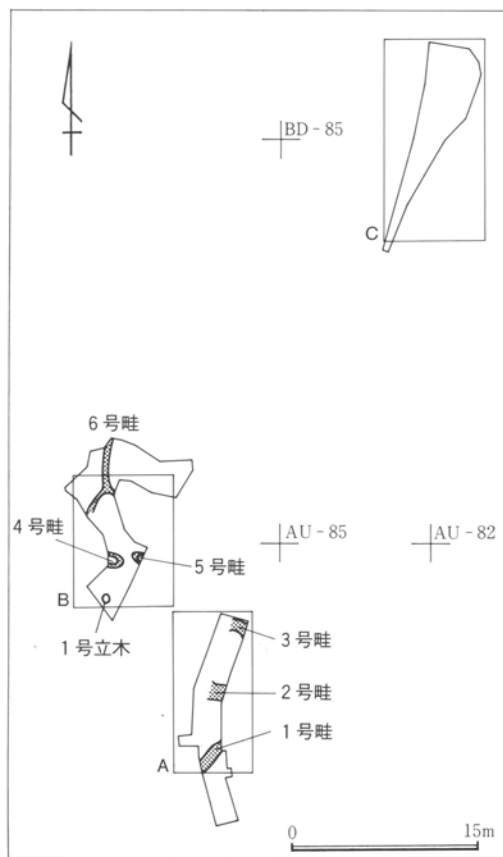


分析試料の採取（丸岩3区）

第2節 白井二位屋遺跡

1区概要

微地形 北西が高く、南東に向かって傾斜している。調査区の西寄りりで小さな段がつく。**遺構** 調査範囲が小さいため、遺構も断片的である。畦状遺構は6本確認されたが、それらの関連性はよくわからない。Bブロックで性格不明の方形区画が検出された。**跡跡分布** 全体に散らばるが、Cブロックの南寄りが多い。



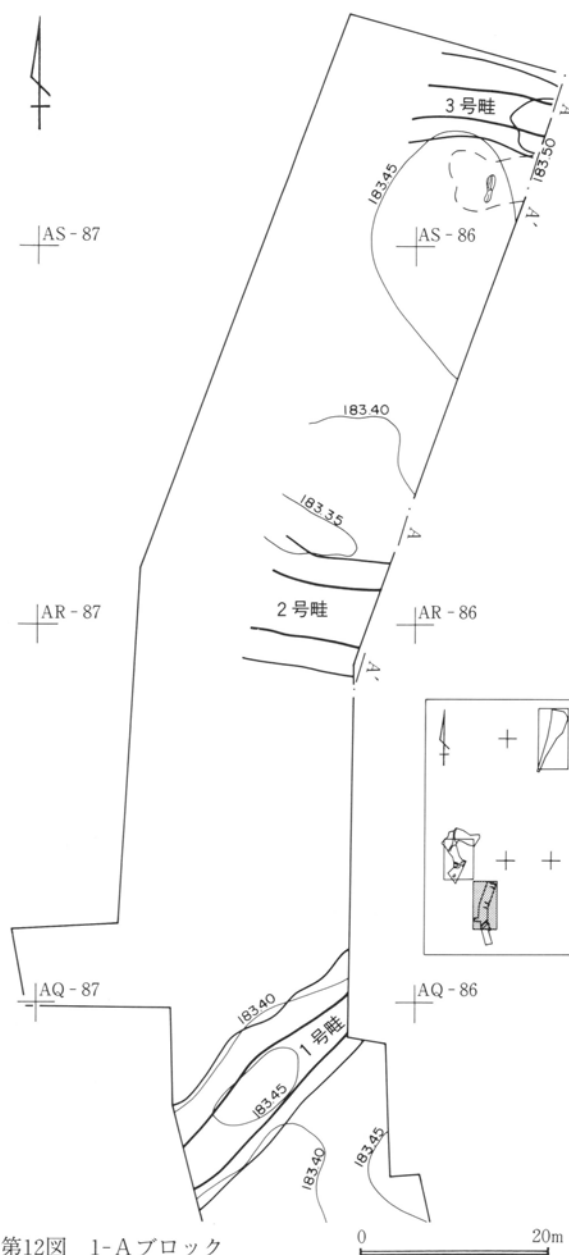
第11図 二位屋1区全体図



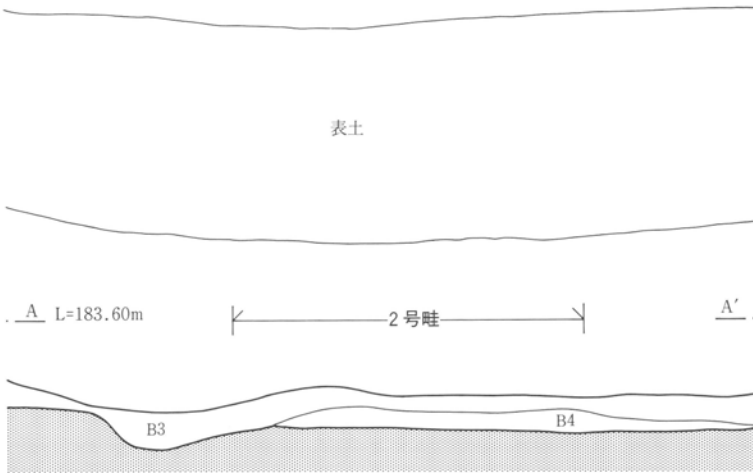
二位屋1区全景（北から）

1-Aブロック

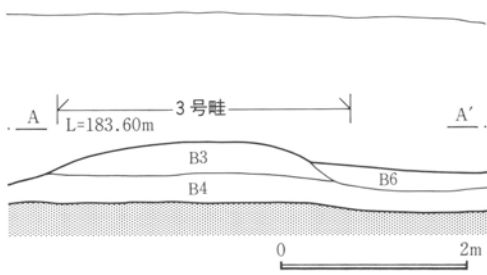
畦状遺構 3本の畦状遺構が検出されたが、いずれも僅かな高まりである。1号畦：幅1.1m、高さ8cm、走向N-49°-E。2号畦：幅1.3m、高さ3cm、走向N-8.1°-W。畦の北側が低くなっており、その部分はFA上面も窪んでいる。3号畦：幅0.8m、高さ5cm、走向N-78°-W。その他 3号畦の南側に、焼土の広がる範囲があり、炭化材も出土している。焼土が何に起因するのかわからない。



第12図 1-Aブロック



3号畦南側の焼土と炭化物



第13図 2号・3号畦断面図



1号畦 (西から)



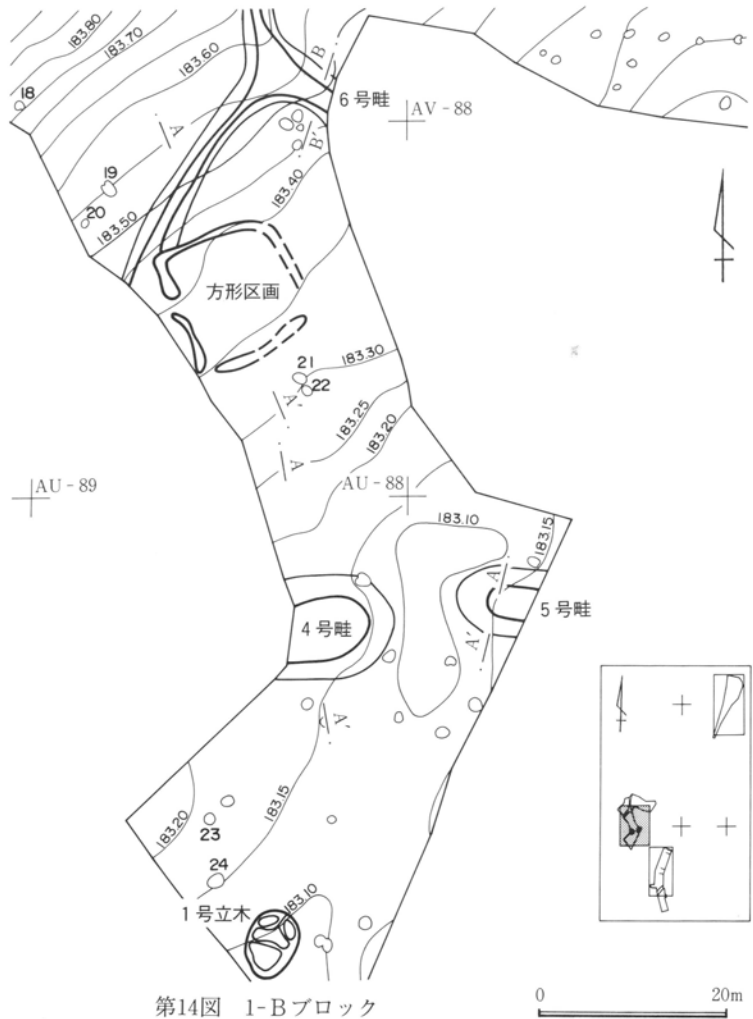
2号畦 (西から)



1-Aブロック全景 (北から)

1-Bブロック

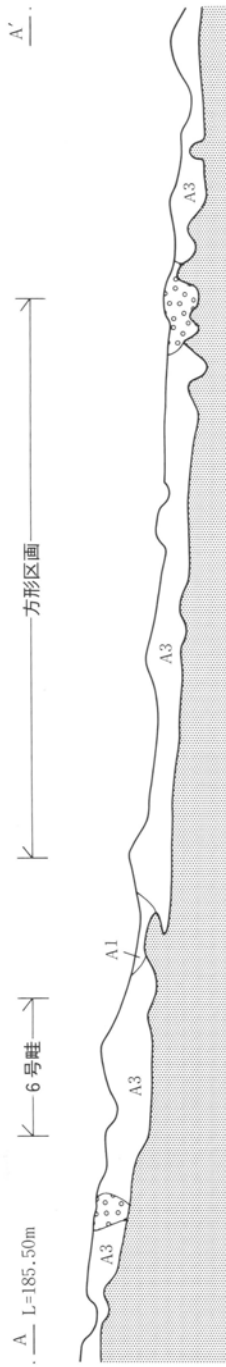
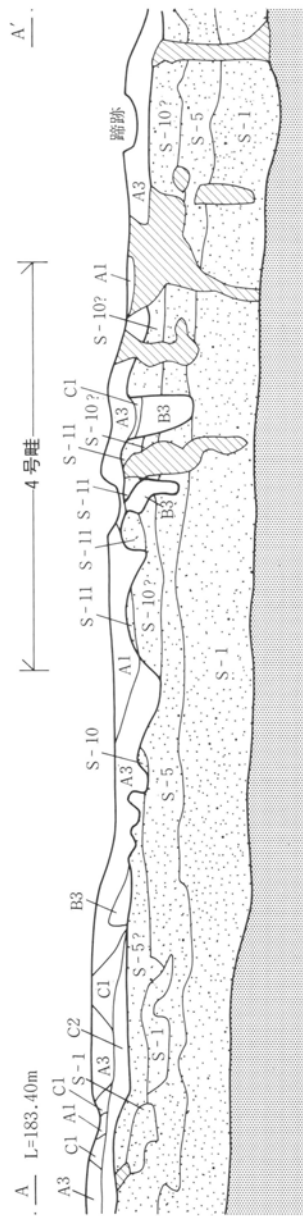
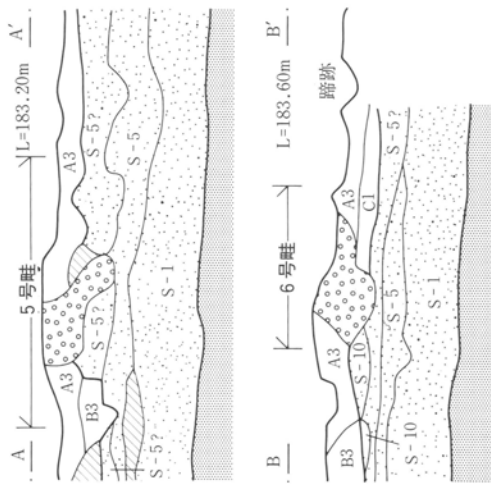
畦状遺構 4号畦：畦の一端が検出された。幅1.0m、高さ5cm、走向N-87°-W。0.7mの間をおいて5号畦と向き合っている。断面Aの観察から、中央部に幅10cm、深さ17cmのピット状の落ち込みを確認した。その形状から畦上に立てられた杭の柱穴の可能性はある。 5号畦：畦の一端のみ検出。幅0.8m、高さ5cm、走向N-80°-W。 6号畦：幅0.3m、高さ4cm、走向N-33°-Eで、斜面に斜行する。中程で枝分かれし、東に伸びる部分があり、T字状になっている。 **蹄跡** 数は少ないが、全体的に広がる。 **立木** 1号立木：調査区南端で、不定形で底面に凹凸のある落ち込みが検出された。 **その他** AU-88で、一辺が1.4mの方形の区画が検出された。南西の辺は溝になっているが、他は幅の細い僅かな高まりで区切っている。方形区画の内側は、地表面の凹凸が少ない。焼土や炭化物は検出されなかった。



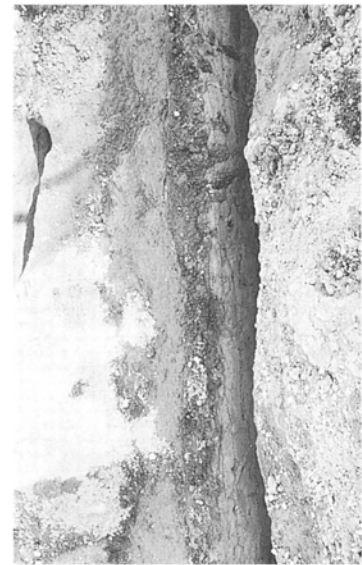
第14図 1-Bブロック



1-Bブロック全景（北から）



第15図 4号・5号・6号畦・方形区断面図



4号畦断面 (西から)



5号畦断面 (西から)



方形区画 (西から)

第3章 FP層下面の調査

1-Cブロック

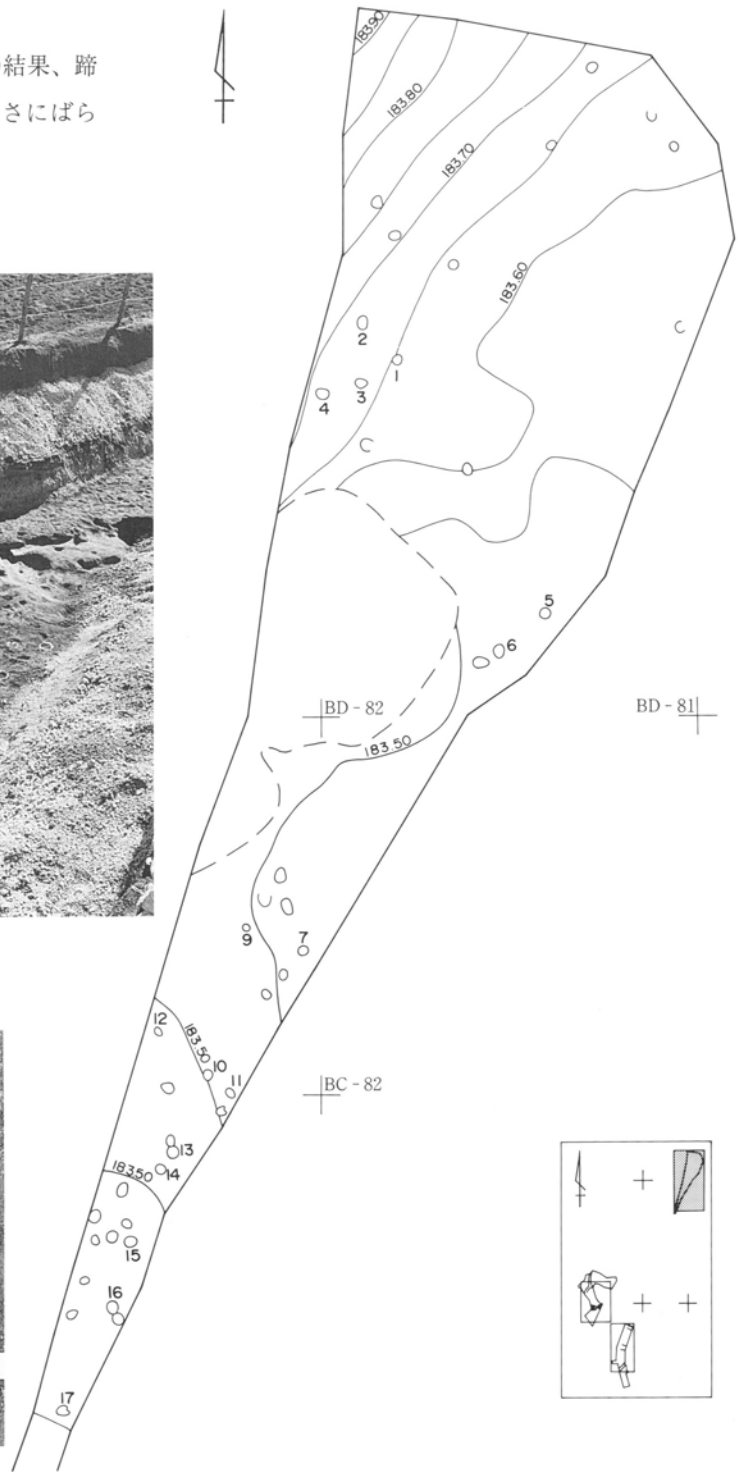
蹄跡 残存状況がよく、数も多い。計測の結果、蹄跡の幅が最小で60mm、最大で105mmと大きさにばらつきがみられた。



1-Cブロック全景（北から）



蹄跡



第16図 1-Cブロック

二位屋1区畦セクション

遺構番号	断面番号	幅 m	高さ cm	FP混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面の凹凸	その他
2	A	0.8	3	—	—	—	—	不明	畦の北側のFA上面窪む。
3	A	1.4	6	—	△	—	—	不明	畦の南側に焼土・炭化物あり。
4	A	1.1	6	—	—	—	S-11有	—	柱穴と思われる落ち込みあり。
5	A	0.8	5	○	—	—	S-5?	—	
6	A	0.3	5	—	—	—	—	—	
6	B	0.4	5	○	—	—	S-10	—	

2区概要

微地形 調査区の中央が、北東から南西にかけて尾根状に高くなっており、表土のすぐ下がローム層になる。FPが堆積し、古墳時代の地表面が検出できたのは、主に尾根の東側で、北西が高く南東に向かって傾斜している斜面である。

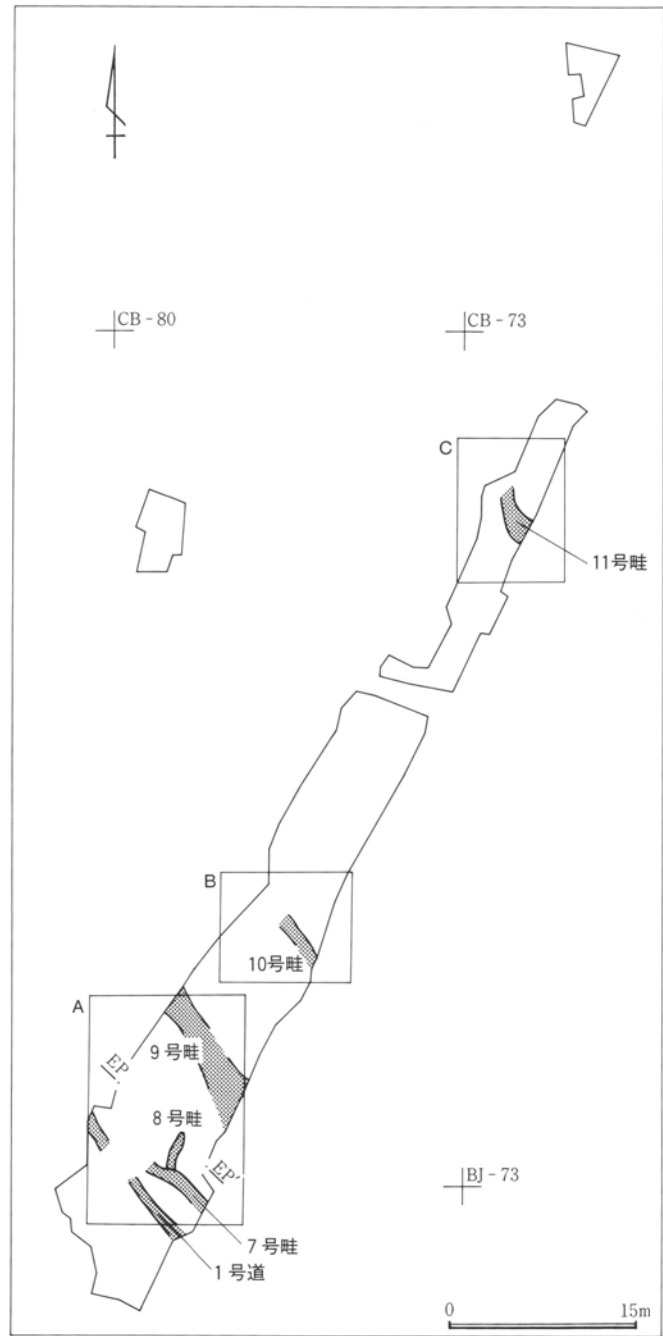
遺構 斜面の等高線に直行するように伸びる4本の畦状遺構と、等高線に平行する短い畦状遺構1本が確認された。調査区南寄りでは、畦に平行する道を検出した。いずれの遺構も、FP上面の遺構に切られており断片的である。

跡分布 全体的に広がるが密度は低い。

地表面の様子 1号道の両側は他の場所に比べ、地表面が黒ずんでいる。

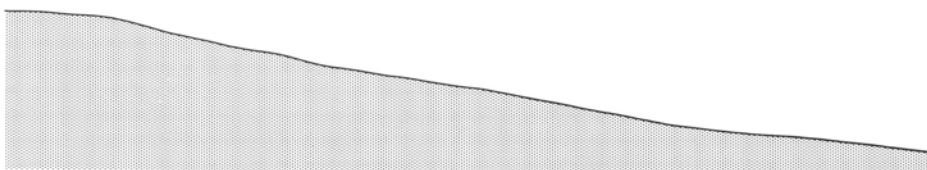


二位屋2区全景(北から)



第17図 二位屋2区全体図

EP L=185.50m



第18図 2区断面図

EP'

第3章 FP層下面の調査

2-Aブロック

畦状遺構 7号畦：1号道に沿うように伸びている。幅1.2m、高さ9cm、走向はN-56°-Wで、斜面の等高線と直行している。途中で8号畦と交わる。切り合い関係から8号畦の方が新しいものと思われる。道との関係は、最も接近する箇所がFP上面の遺構で壊されており不明であるが、しかし、道と平行に北西に伸びていく痕跡はない。8号畦：幅0.7m、高さ5cm、走向N-19°-Eで、ほぼ等高線に沿っている。ごく僅かな高まりで、7号畦を越えた南側へは続かない。9号畦：幅2.6m、高さ9cm、

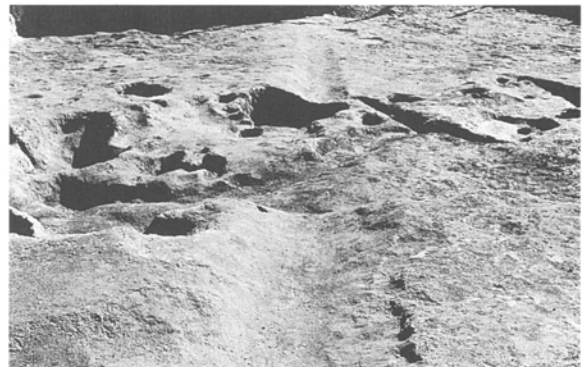
走向N-35°-W。FP上面の遺構によって分断されており、7号畦と同様に等高線と直行している。畦の南側が畦に沿って、浅い溝状に低くなっている。
道 1号道：調査区の南端を、等高線と直行するように、直線的に横切っている。上幅は平均70cm、下幅は28cm、走向N-37°-Wである。硬く踏みしめられており、周囲の地表面よりも浅いところで5cm、深いところで18cm窪んでいる。
蹄跡 全体的に蹄跡が残されており、畦や道を境にして変化しない。数は少ないが、畦の上にも蹄跡がある。



二位屋2区全景（南東から）



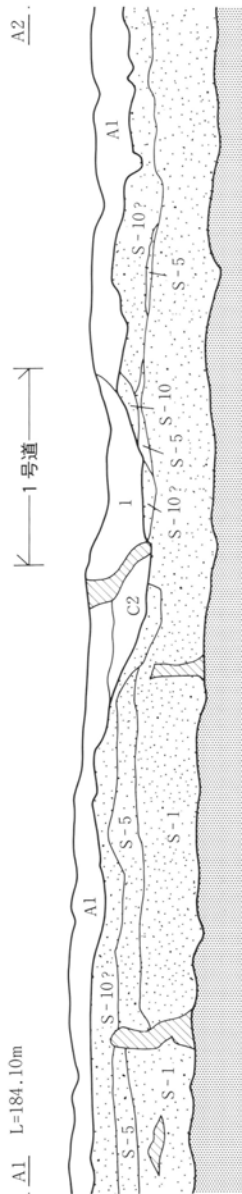
1号道と8号畦（北東から）



1号道（南東から）

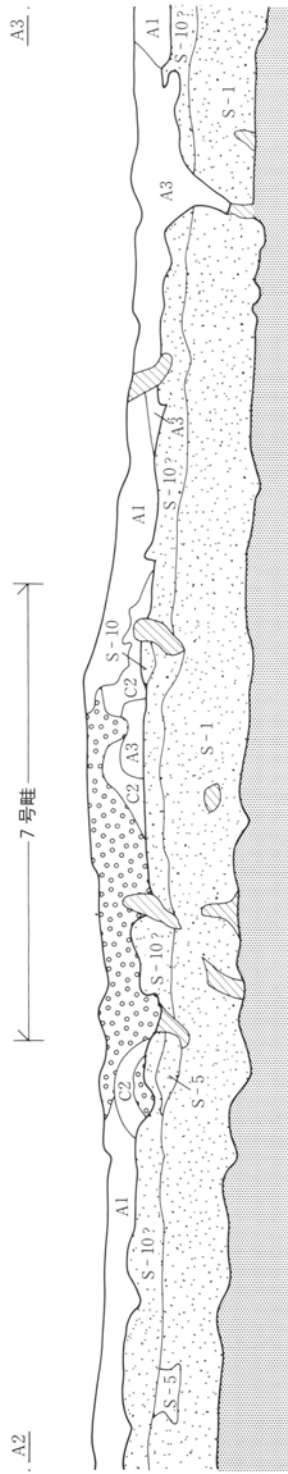


第19図 2-Aブロック



1号道

- 1 緑灰色土。鉄分凝集層が7層以上ある。径3～5mmの軽石をごく少量含む。



第20図 1号道、7号畦断面図



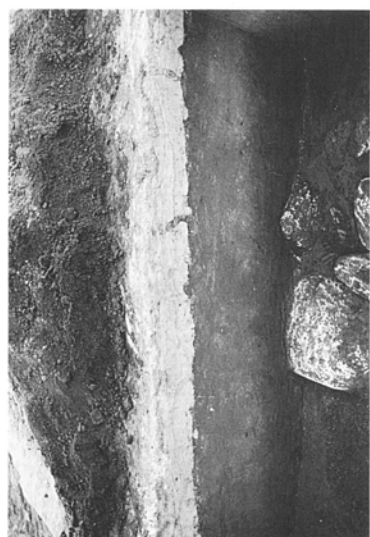
7号畦、1号道 (東から)



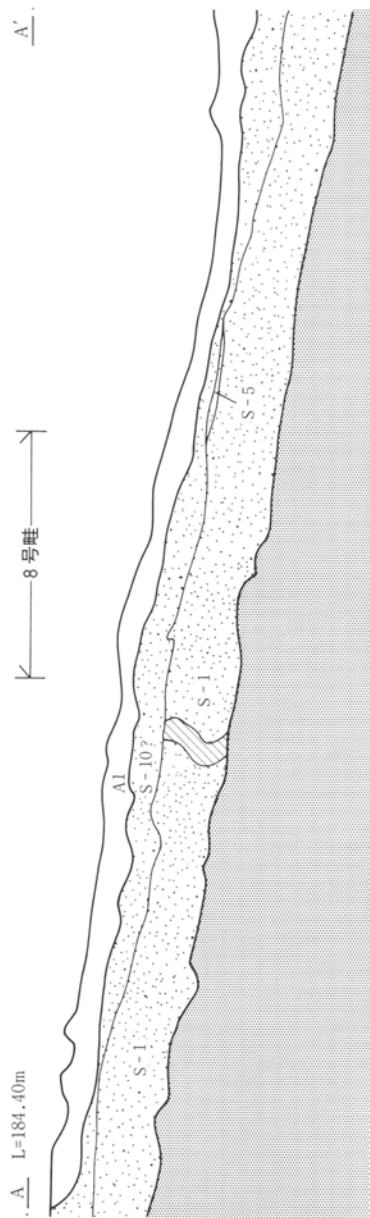
7号畦断面 (東から)



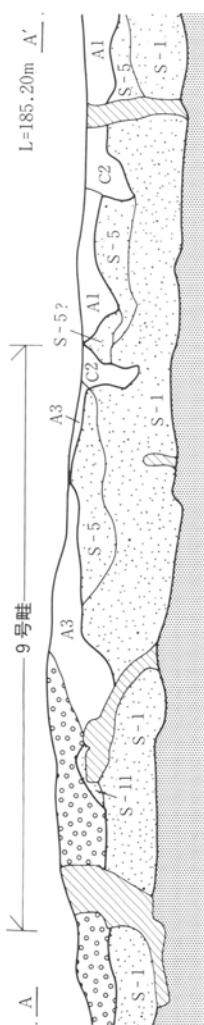
4号畦断面 (北から)



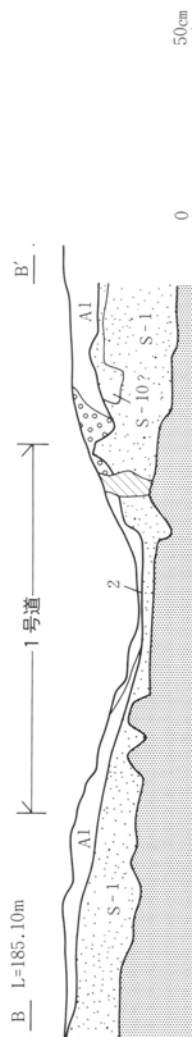
8号畦断面（北から）



9号畦断面（南東から）



- 1号道
- 2 暗黄橙色土。径1～2mmの白色軽石を多く含む。粒子は細かく、鉄分の影響を受け下位は濃橙色となっている。

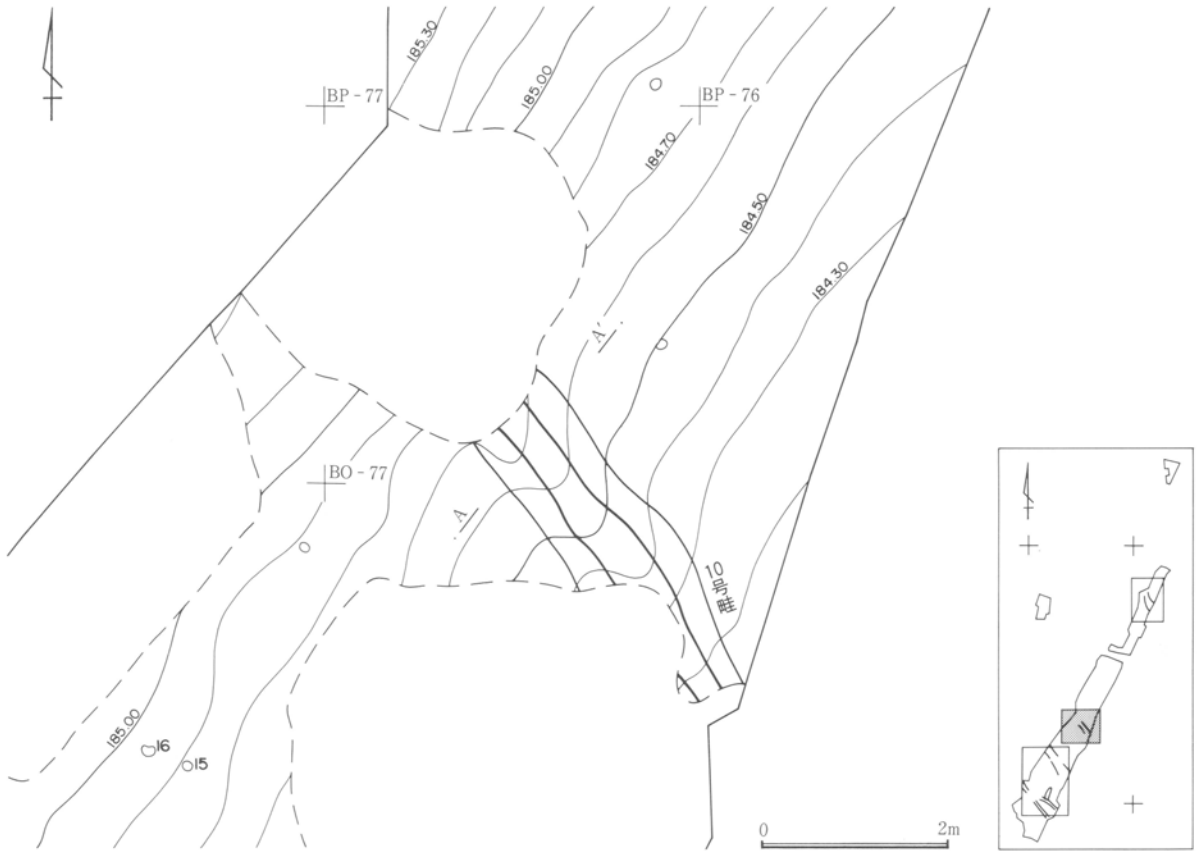


第21図 8号・9号畦、1号道断面図

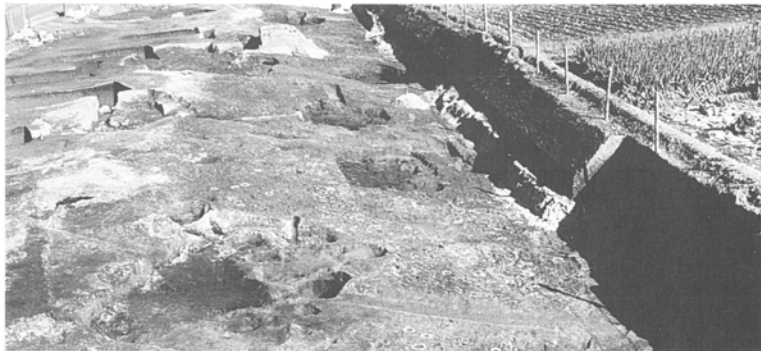
2-Bブロック

畦状遺構 10号畦：幅1.1m、高さ9cm、走向N-36°-Wで、斜面の等高線と直行している。断面Aで

は、植物の根が原因と思われる、垂直方向の攪乱が多く見られる。 蹄跡 少ない。



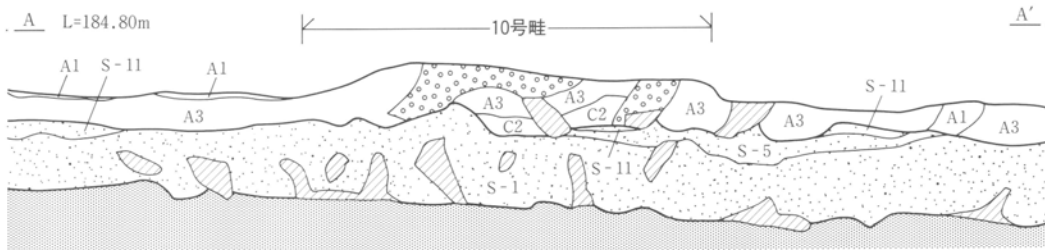
第22図 2-Bブロック



10号畦全景（南から）



蹄跡



第23図 10号畦断面図

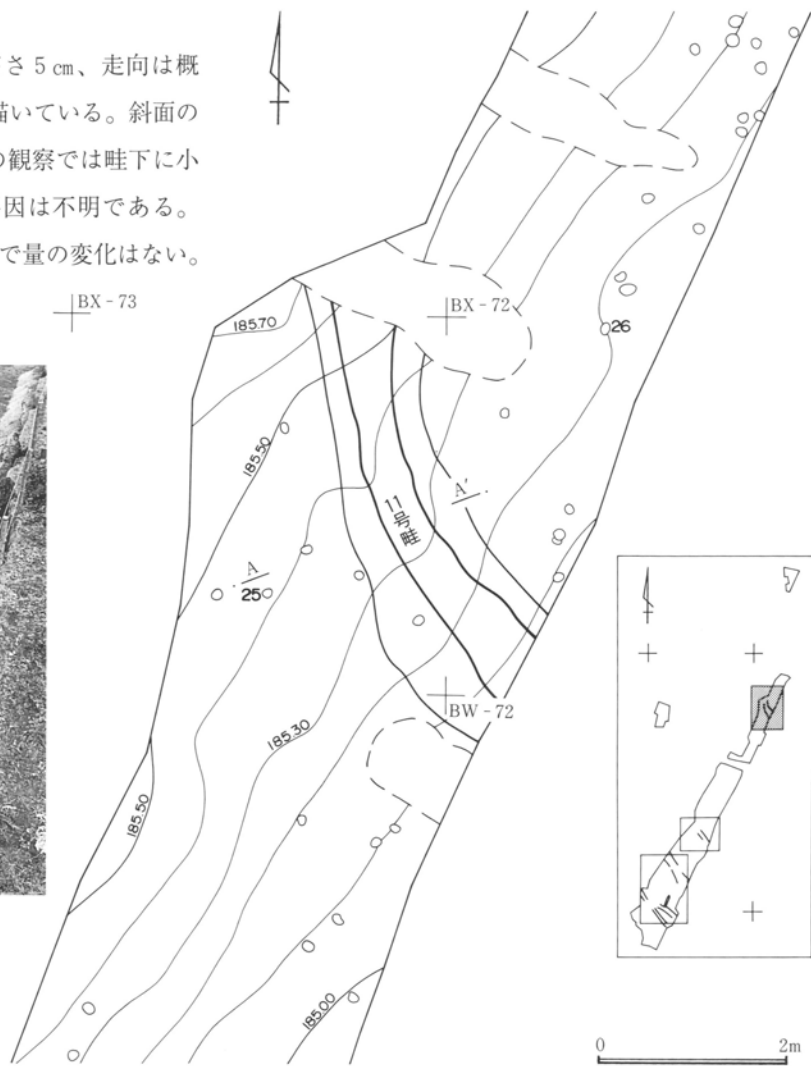
2-Cブロック

畦状遺構 11号畦：幅1.2m、高さ5cm、走向は概ねN-28°-Wであるが、緩く弧を描いている。斜面の等高線と直行している。断面Aの観察では畦下に小さな落ち込みがあるが、その要因は不明である。

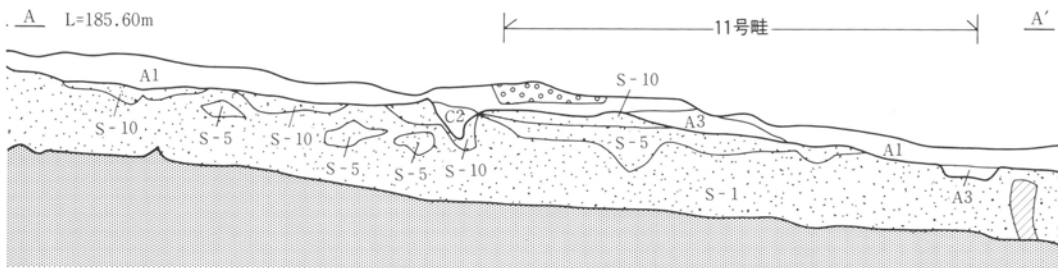
蹄跡 全体的に少なく、畦の左右で量の変化はない。



2-Cブロック全景（南から）



第24図 2-Cブロック



第25図 11号畦断面図

二位屋2区畦セクション

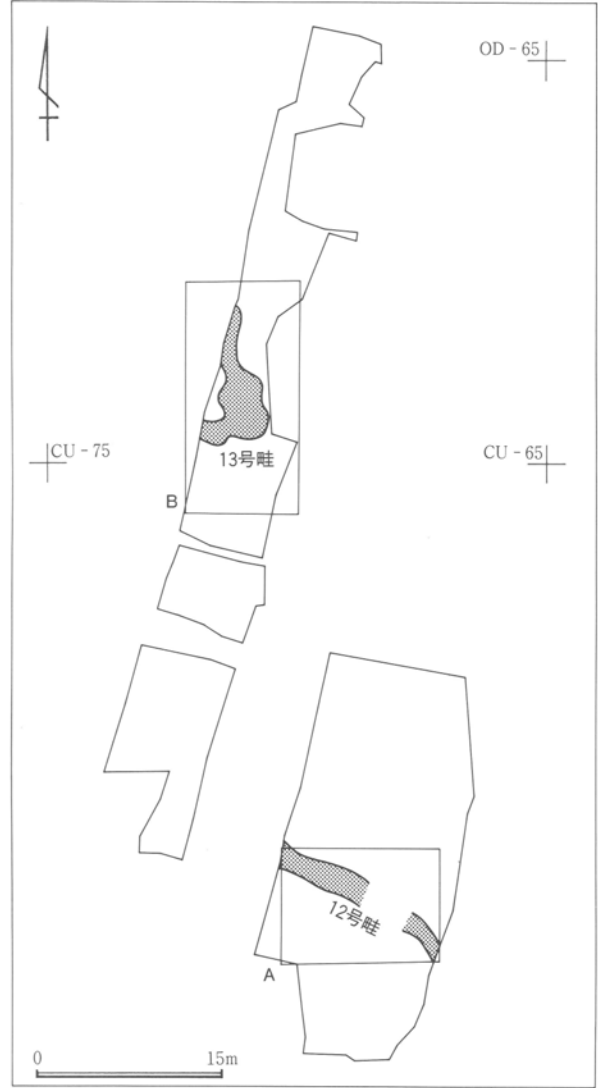
遺構番号	断面番号	幅m	高さcm	F P混じり土	炭化物	焼土	F Aの残存	F A下面の凹凸	その他
7	A	1.2	8	○	-	-	S-10	僅か凹	畦上に蹄跡あり。
8	A	0.6	5	-	-	-	S-10?	-	畦上に蹄跡あり。
9	A	1.8	9	○	-	-	S-11	-	畦上に蹄跡あり。
10	A	1.2	10	○	-	-	S-11	-	
11	A	1.3	5	○	-	-	S-10	僅か凹	畦上に蹄跡あり。

3区概要

微地形 現在の村道の東側に位置する調査区の南東隅が、東へ低くなる緩やかな斜面となっている。他の部分は比較的平坦な面である。
遺構 調査区の南寄り直線的な畦状遺構が1本と、中央西よりで不定形の畦状遺構を1本検出した。
跡分布 13号畦の南側でやや密集する部分があるが、全体としては少ない。
地表面の様子 FA災害時の倒木によって形成された高まりの痕跡が、13号畦の不定形に広がる部分に相当している。



調査風景



第26図 二位屋3区全体図

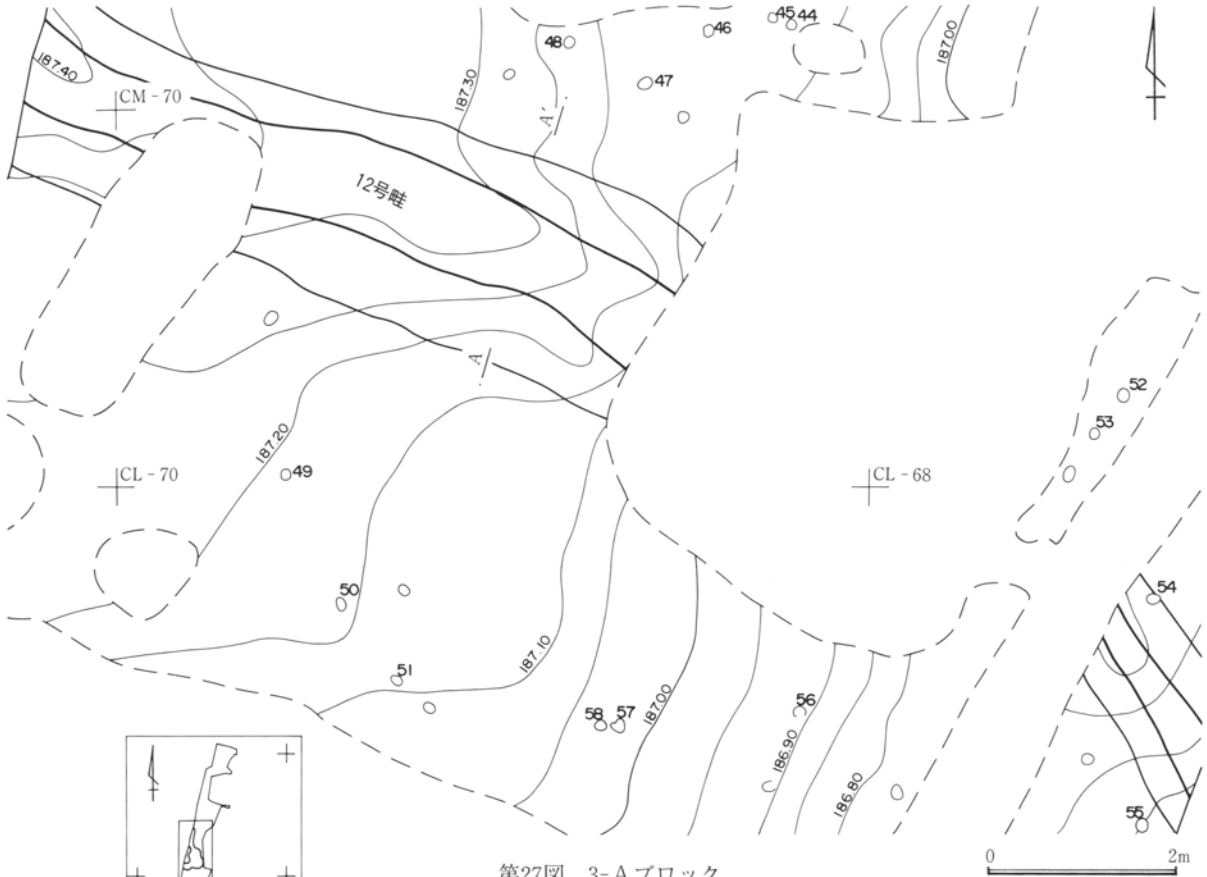


二位屋3区全景（北から）

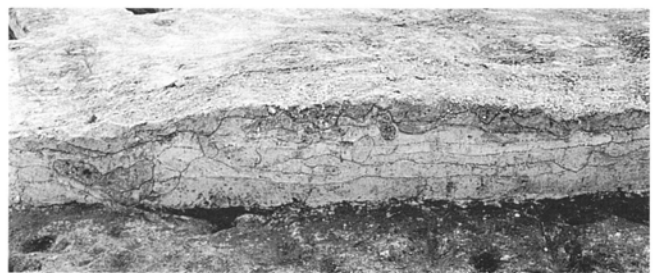
3-Aブロック

畦状遺構 12号畦：幅2.2m、高さ10cm、走向N-60°-W。調査区南東隅で、斜面の等高線に直行に伸びている。現在の村道を挟んだ西側の区画では、畦の続きが検出されていない。畦の断面Aを見ると、

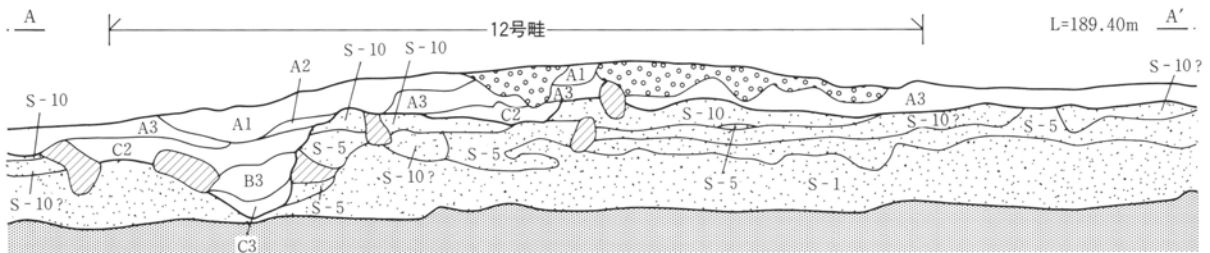
畦の南側に暗褐色土の落ち込みがあるが、これは後述するFA災害時の倒木の幹跡（P333参照）である。この倒木はFP直下面では痕跡はない。跡跡 少ない。12号畦の両側で跡跡の量に変化はない。



第27図 3-Aブロック



12号畦断面（東から）



第28図 12号畦断面図

3-Bブロック

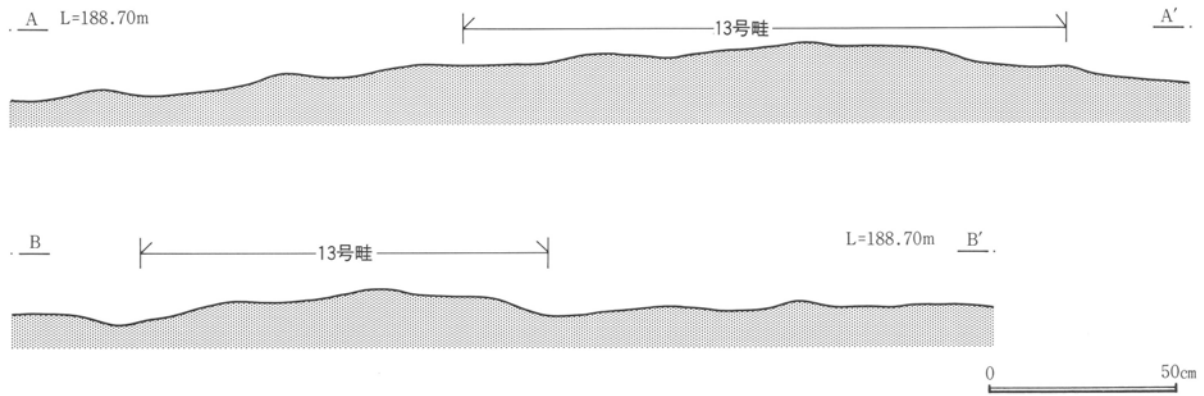
畦状遺構 13号畦：幅1.0m～1.6m、高さ6cm、走向N-82°-E、N-18°-Wである。調査区内で、ほぼ90°曲がり、曲がり角部分が不定形に高まる。高まり部分は、FA災害時の倒木の痕跡（P336参照）で、持ち上げられた根の部分にあたる。**蹄跡** 13号畦の南側でやや多い。数は少ないが、13号畦上にも蹄跡がついている。



FP下面



第29図 3-Bブロック



第30図 13号畦断面図

二位屋3区畦セクション

遺構番号	断面番号	幅 m	高さ cm	FP混 じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面 の凹凸	そ の 他
12	A	2.2	11	○	—	—	S-10△	—	FA倒木の幹痕あり。
13	A	1.6	8	不明	不明	不明	不明	不明	FA倒木の高まりと重なる。畦上に蹄跡あり。



3-Bブロック全景（南西から）

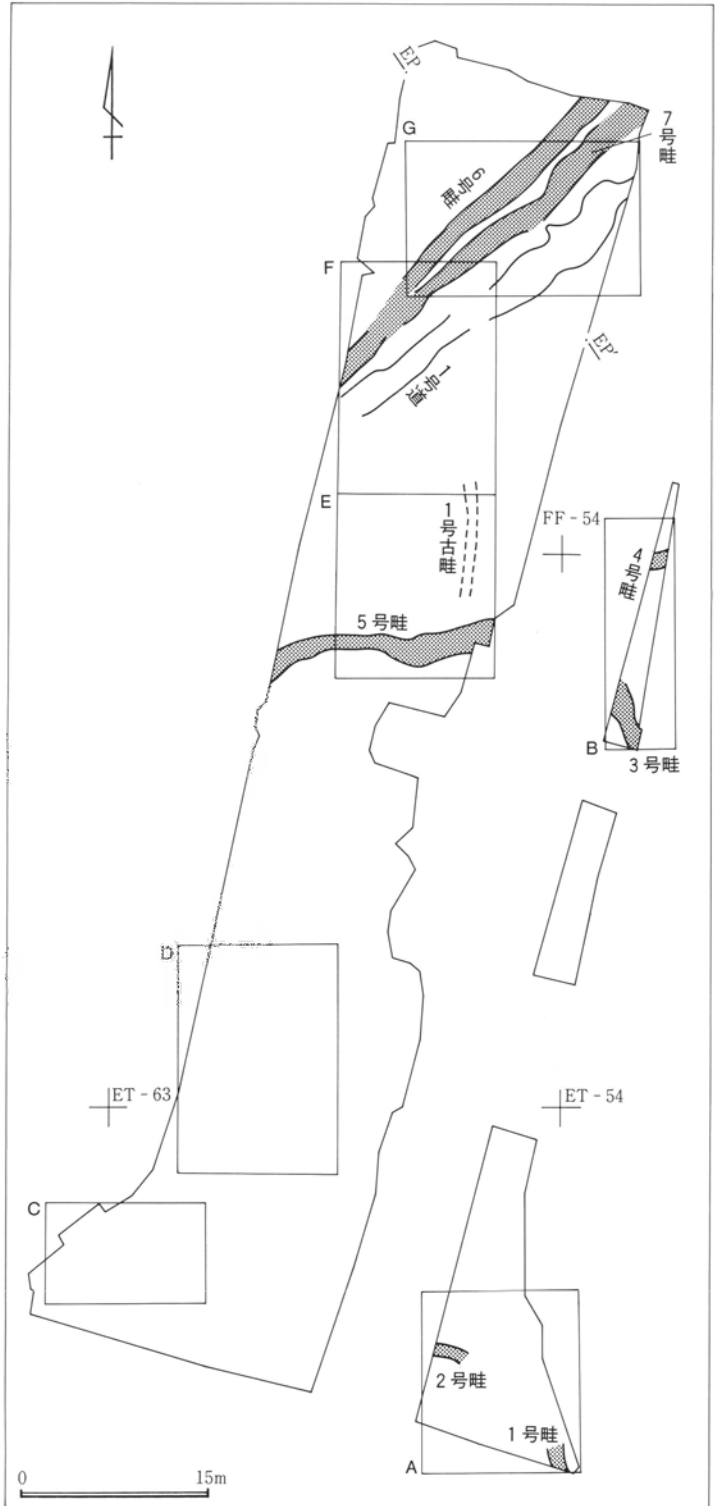
第3節 白井南中道遺跡

2区概要

微地形 調査区の北隅が、北西へ向かって高くなる斜面となっている。その他の部分は、平坦な面が続いている。所々に、FA災害時の倒木の痕跡が、小さな凹凸として残り、高まり部分に円礫を伴うものがある。
遺構 畦状遺構が7本と道が1条検出された。現在の村道の東側では、調査区が狭いため畦状遺構は断片的な確認であったが、西側の調査区では北隅の斜面の裾に沿うように、2本の畦状遺構と道が、平行に並んでいる。調査区中央北寄りでは、南北方向の走向を持つ古い畦状遺構を検出した。
跡分布 全体的に広がるが、南西部と北東部を除いては密度が低い。畦状遺構の上にも、跡が残る。



南中道2区村道西側全景（南から）



第31図 南中道2区全体図

EP L=190.00m



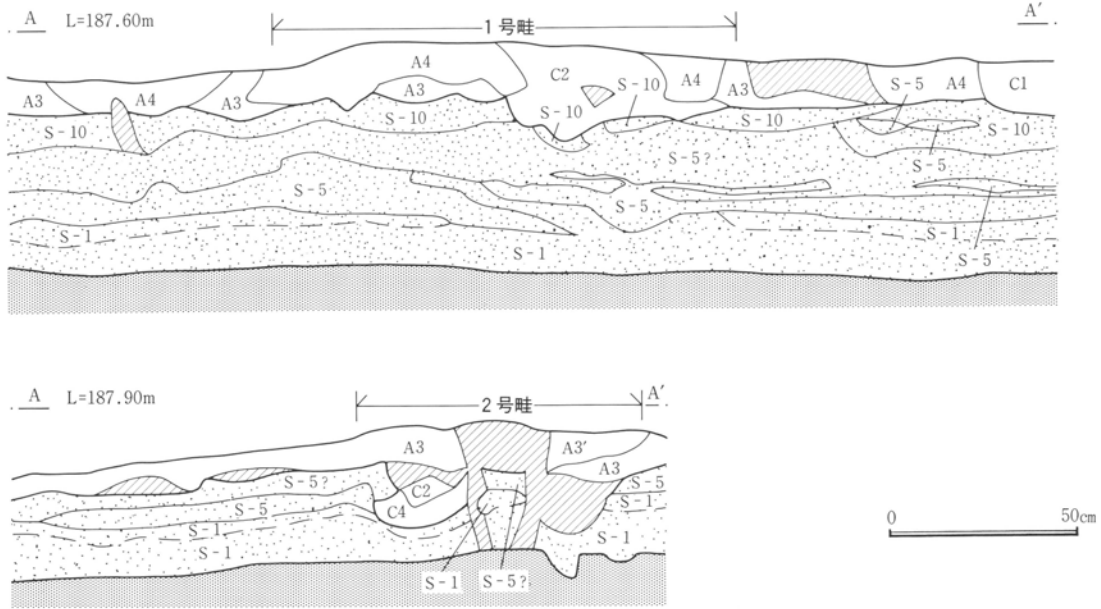
第32図 2区断面図

0 5m

2-Aブロック

畦状遺構 1号畦：幅1.2m、高さ8cm、走向N-9°-W。調査区の南東隅で確認されたが、FP上面の遺構に切られており、断片的である。 2号畦：幅

0.7m、高さ5cm、走向N-79°-Wで、1号畦と同様に断片的である。断面Aでは、畦下に落ち込みが見られるが、これはFA災害時の倒木の幹の痕跡である。 跡跡 少ない。1号畦上にも跡跡が残る。



第33図 1号・2号畦断面図



1号畦断面A (西から)



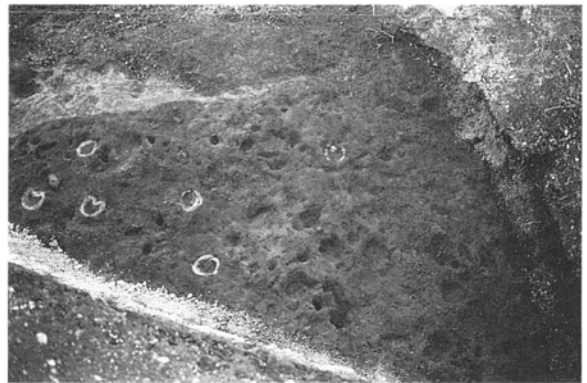
2号畦断面A (東から)



第34図 2-Aブロック



2-Aブロック全景 (北から)



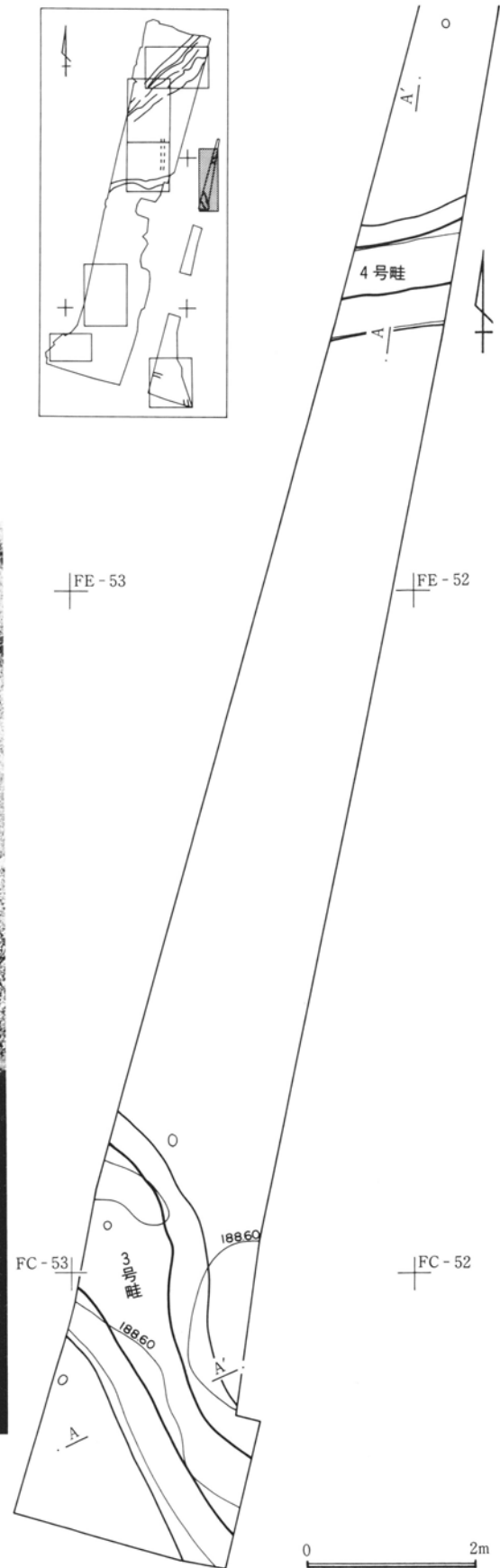
1号畦全景 (南から)

2-Bブロック

畦状遺構 3号畦：幅1.3m、高さ6cm、走向N-2.7°-W。調査区が狭いため、遺構が検出できたのはほんの一部である。断面Aでは、FA下の旧地表面にも盛り上がりがある。この畦は、村道を挟んだ西側の区画の5号畦に続く可能性がある。 4号畦：幅1.0m、高さ6cm、走向N-83°-E。断面Aで、畦の高まりの右側に落ち込みがあるが、これはFA災害時の倒木の幹の痕跡である。



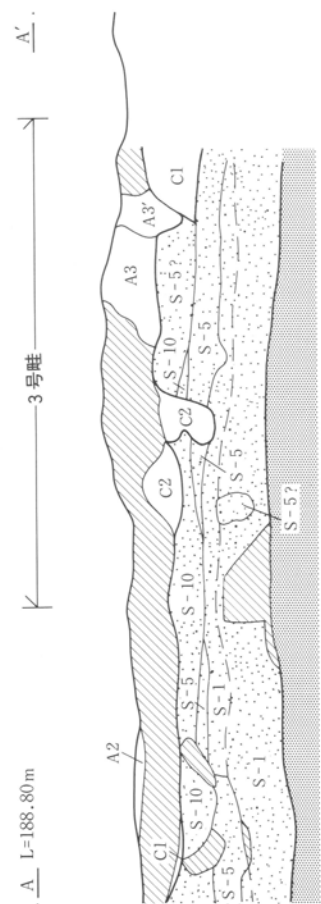
2-Bブロック全景（南から）



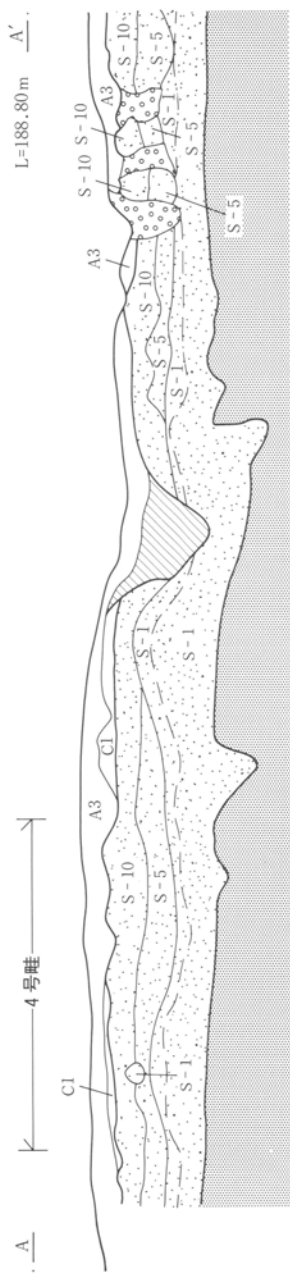
第35図 2-Bブロック



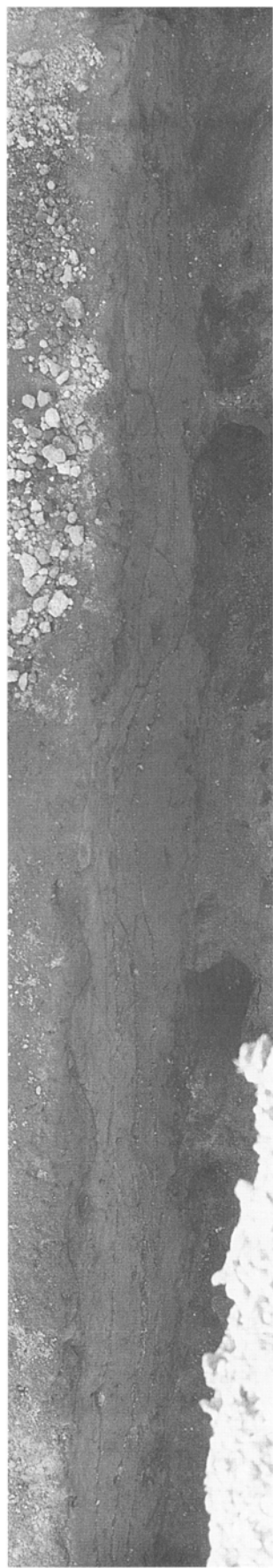
3号畦断面A (北から)



42



第36図 3号・4号畦断面図



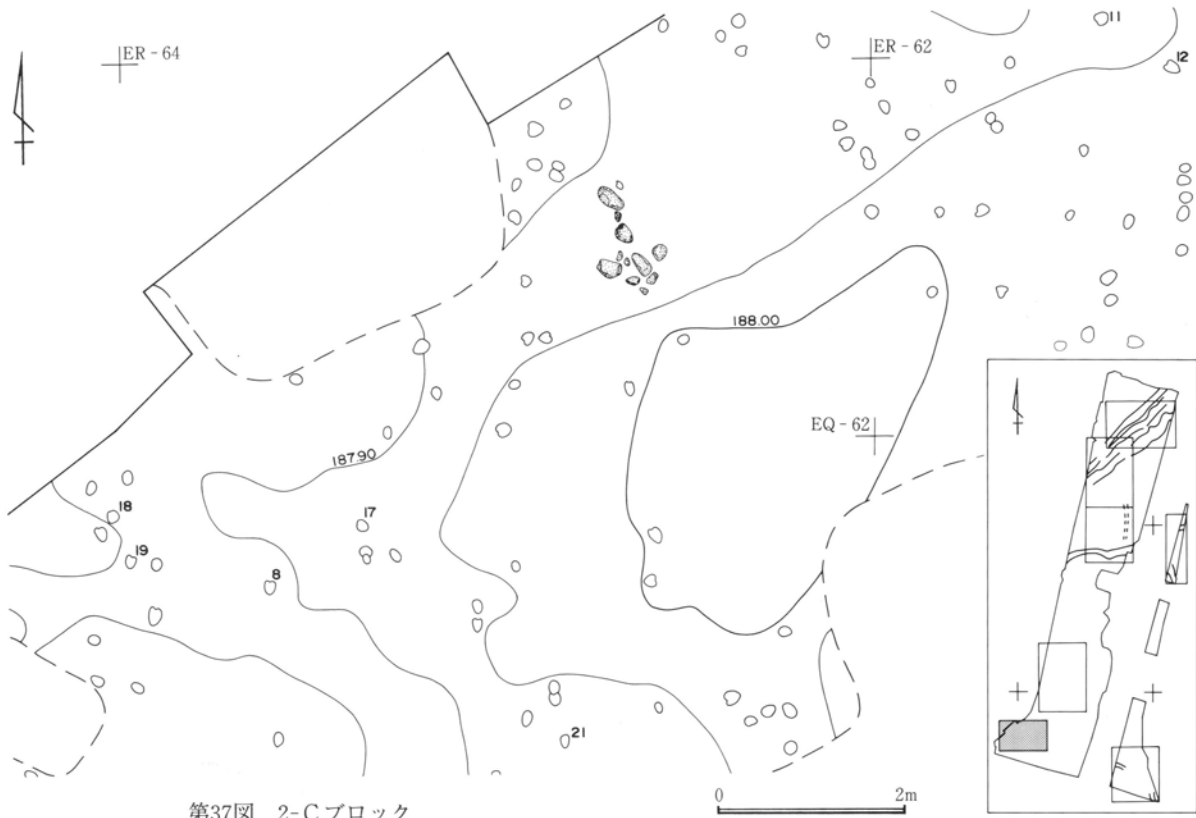
4号畦断面A (東から)

0 50cm

2-Cブロック

蹄跡 分布量は中程度で、2区の中ではこのブロック周辺が、比較的蹄の形が良く残っていた。その他 EQ-62グリッドで、円礫が10数個まとまって出

土した。大きなもので長径30cm程である。これらは、FA災害時の倒木(5号倒木、P343参照)によって、段丘礫層中の礫が持ち上げられたものである。



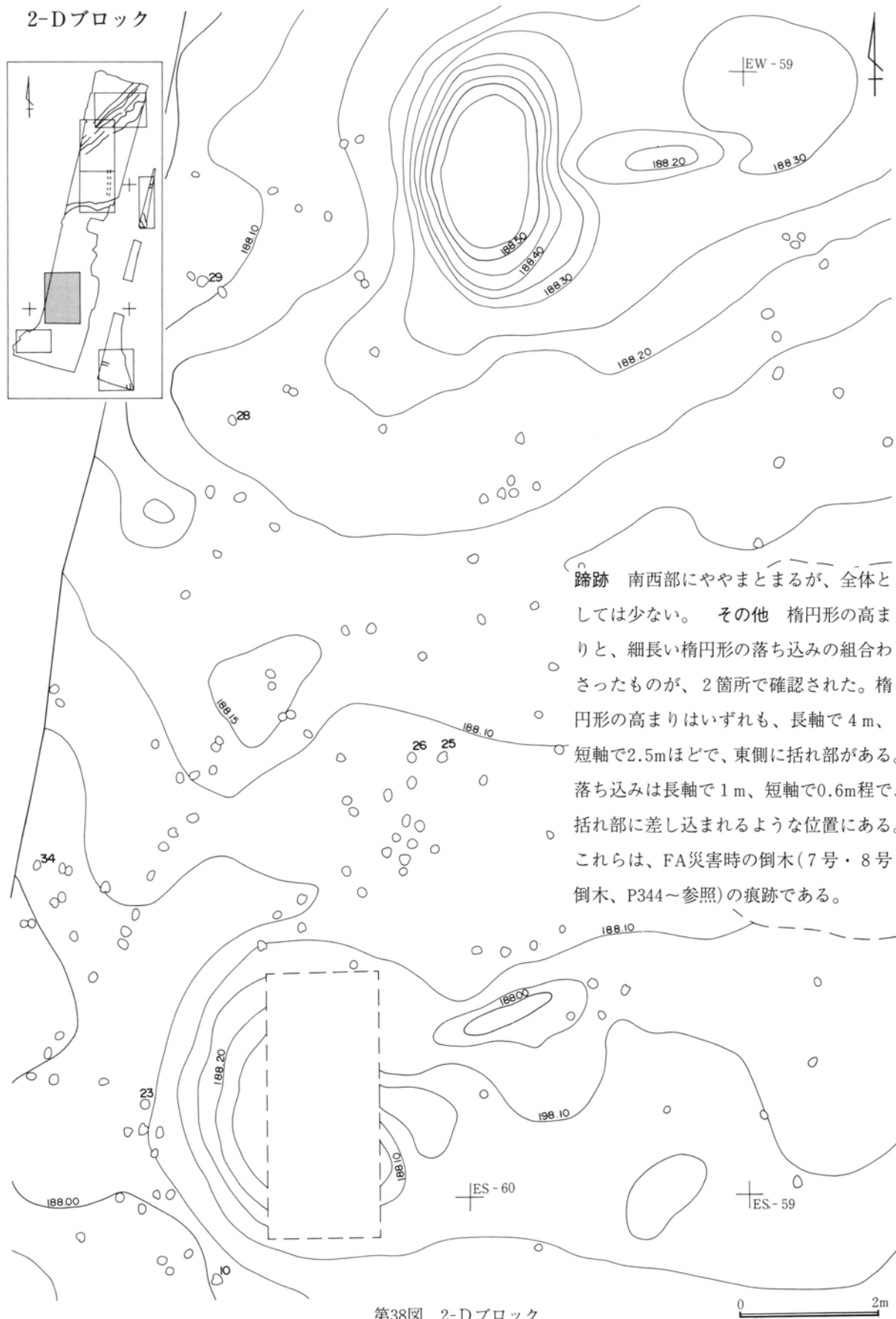
第37図 2-Cブロック



2-Cブロック付近(南から)

礫のまとまっている部分が数カ所あるが、これらはFAの火砕流による倒木によって持ち上げられた、基盤の礫である。一番左手にあるのが2-Cブロックのもの。

2-Dブロック



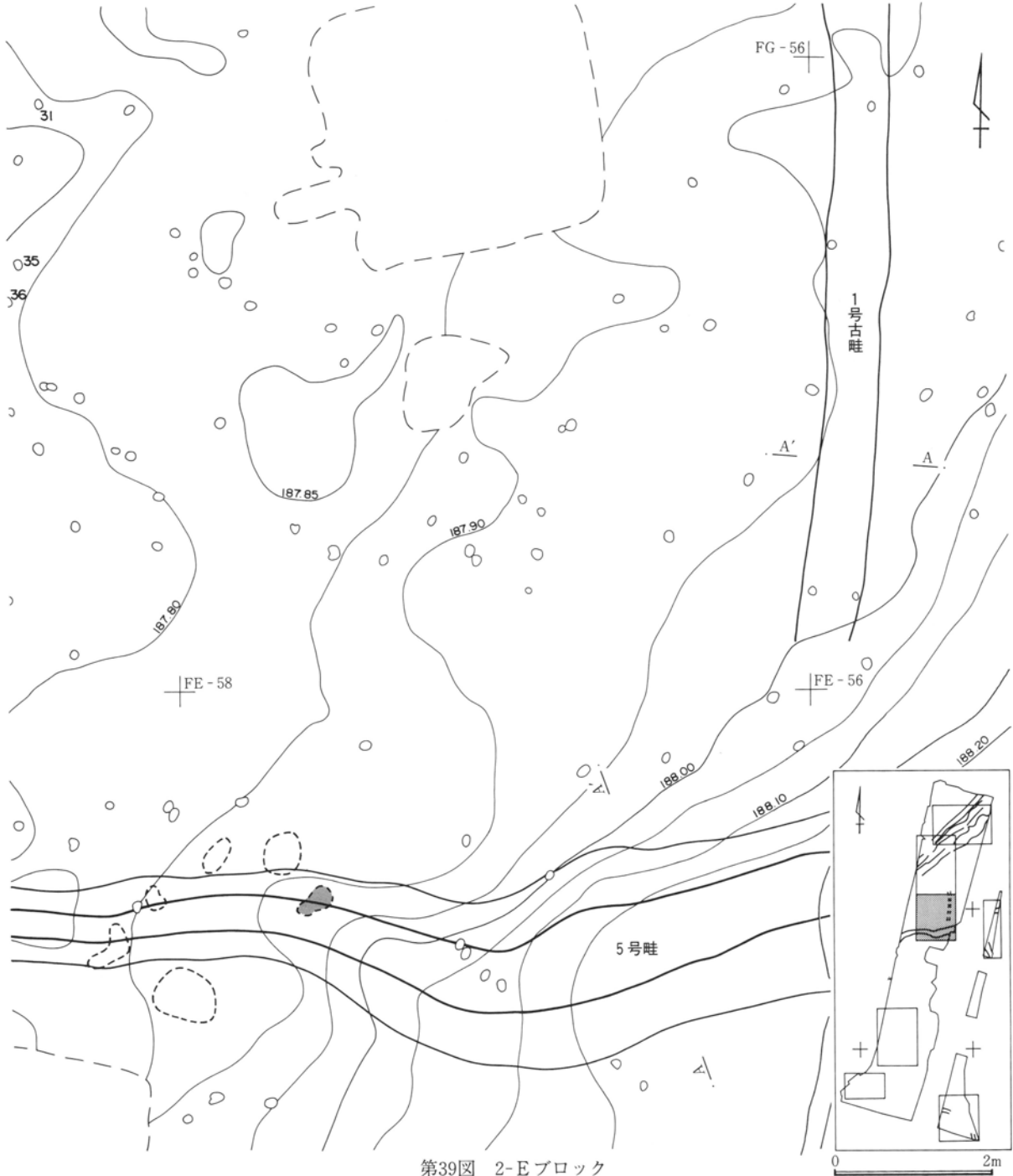
跡跡 南西部にややまとまるが、全体としては少ない。その他 楕円形の高まりと、細長い楕円形の落ち込みの組み合わせたものが、2箇所を確認された。楕円形の高まりはいずれも、長軸で4m、短軸で2.5mほどで、東側に括れ部がある。落ち込みは長軸で1m、短軸で0.6m程で、括れ部に差し込まれるような位置にある。これらは、FA災害時の倒木(7号・8号倒木、P344~参照)の痕跡である。

第38図 2-Dブロック

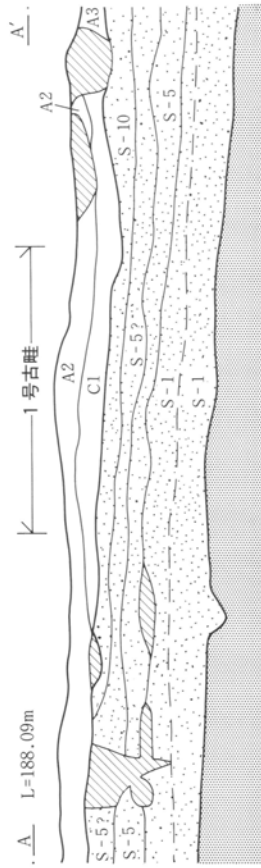
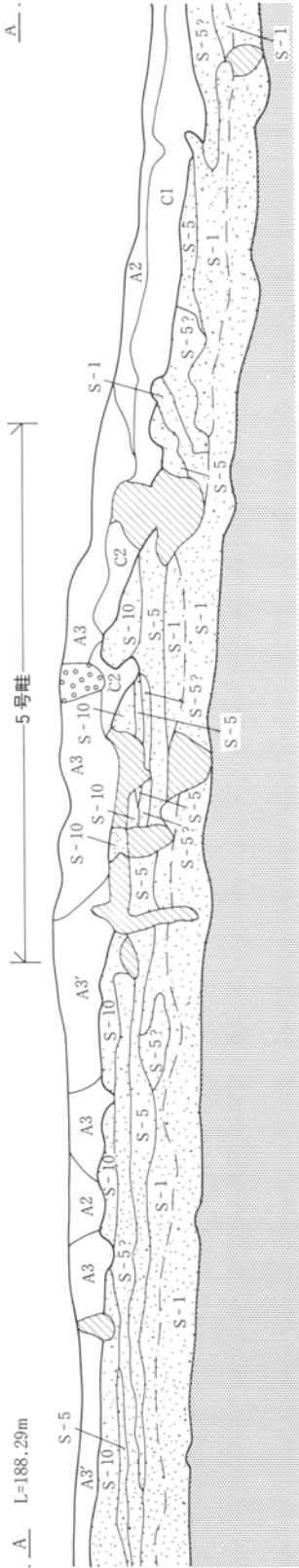
2-Eブロック

畦状遺構 5号畦：最大幅2.4m、最小幅0.9m、高さ10cm、走向N-83°-E。緩いS字カーブを描きながら、ほぼ東西方向に伸びる。断面Aの観察では、畦の北側のFAが、畦下や畦の南側に比べて、残存状況が悪い。しかし他の断面観察箇所では残存状況に差がないことから、畦の北側のFAが全て乱されているわけではない。また、畦が細くなりかけた部分

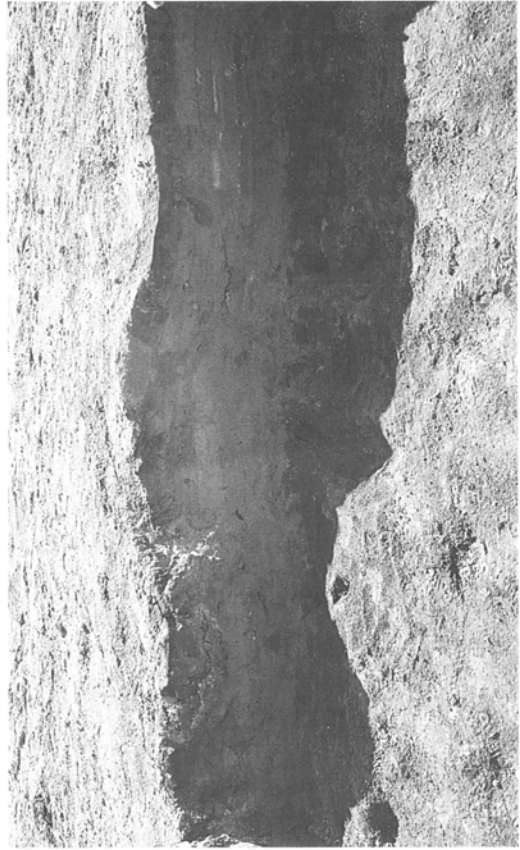
で、焼土が検出された。この焼土は植物珪酸体分析を行っており、試料No. 1は周囲に比べ、ウシクサ族(ススキ属など)の値が高くなっていた(P381参照)。畦上と畦脇には細かな炭化材が散っており、樹種はコナラ節とクリ?である(P420参照)。古い**畦状遺構** 1号古畦：幅約1.6m、高さ5cm、走向N-5°-E。僅かな高まりで、表面は周囲の地表面と変わらない。**蹄跡** 少ない。畦の上にも蹄跡がある。



第39図 2-Eブロック



第40図 5号畦、1号古畦断面図



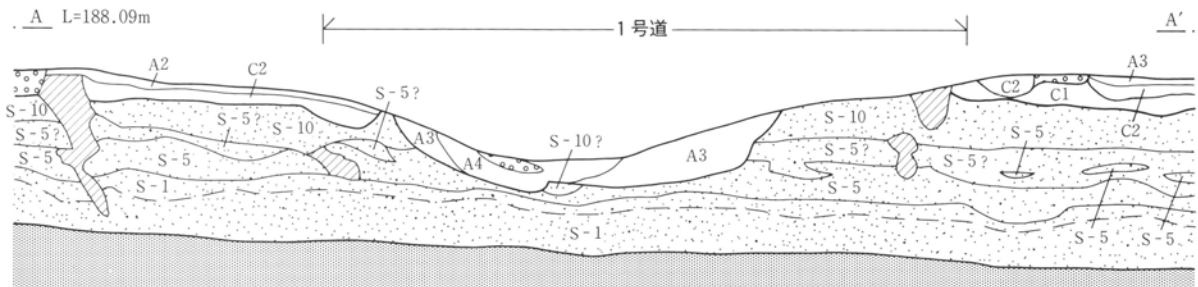
2-Fブロック

畦状遺構 6号畦：6号畦と7号畦がひとつに収束する。結合部分の様子は、FP上面の遺構に切られており、よくわからない。収束後の幅は1.8m、走向はN-42°-Wである。畦上と畦脇には、細かな炭化材が散っている。樹種同定の結果、コナラ節とヤナギ属であった。道 1号道：上幅1.7m、下幅0.3m、走向N-50°-E。6号畦と平行するように伸びる。断面Aでは、周囲より20cmほど低くなっており、道下のFAの残存状況が悪い。低い部分には細かな炭化

物を含んだ黒みの強い土が堆積している。顕著な硬化面は認められないが、規模や形状、水の流れたような痕跡がないことなどから道と判断している。**跡跡** 少ない。その他 1号道の南側に、地表面が凸凹する部分がある。2-Dブロックほどははっきりしないが、円形～楕円形の高まりと、細長い楕円形の落ち込みが組合わさったものが3箇所認められる。これらは、FA災害時の倒木（9号・10号・11号倒木、P346～参照）の痕跡である。



1号道断面A（北から）



第41図 1号道断面図



2-Fブロック全景（南から）



第42図 2-Fブロック

2-Gブロック

畦状遺構 6号畦：幅1.9m、高さ12cm、走向N-47°-E。畦上には、細かな炭化材が散っている。

7号畦：幅1.8m、高さ14cm、走向N-50°-E。6号畦から独立して、6号畦と平行するように伸びる。畦上に円礫が見える部分があるが、これはFA災害時の倒木（12号倒木、P348参照）の痕跡である。

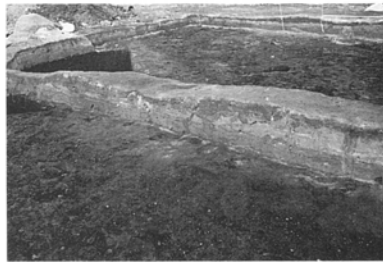
道 1号道：この付近では、上端の形状が乱れている。しかし、下幅はほぼ一定している。顕著な硬化面はない。上端の乱れている部分に、細長い落ち込みがあるが、これは倒木（12号倒木、P348参照）の幹の痕跡である。 蹄跡 2区の中では比較的多い。畦や道の上面にも蹄跡が残る。

南中道2区畦セクション

遺構番号	断面番号	幅 m	高さ cm	F P混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面の凹凸	その他
1	A	1.2	8	-	-	-	S-10△	-	畦上に蹄跡あり。
2	A	0.7	5	-	-	-	S-5?△	僅かに凸	FA倒木の幹痕あり。
3	A	1.3	6	-	-	-	S-10△	凸	
4	A	1.2	6	-	-	-	S-10△	-	FA倒木の幹痕あり。
5	A	2.4	10	△	-	-	S-10○	凸	畦の北側でFAの残りが悪い。畦上に蹄跡あり。
6	A	1.7	12	△	△	-	S-5△	-	畦上に蹄跡あり。
7	A	1.9	14	-	△	-	S-10△	-	畦上に蹄跡あり。
1古	A	1.6	5	-	△	-	S-10△	僅かに凸	畦上に蹄跡あり。



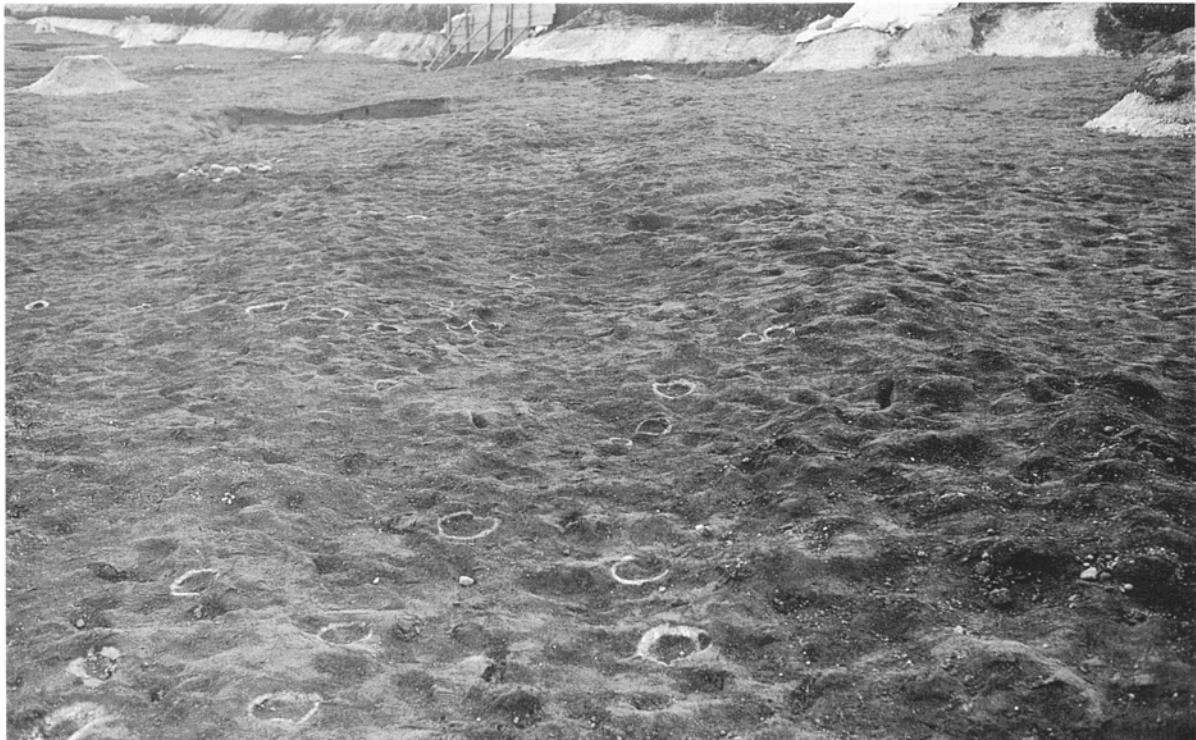
6号畦断面A (南から)



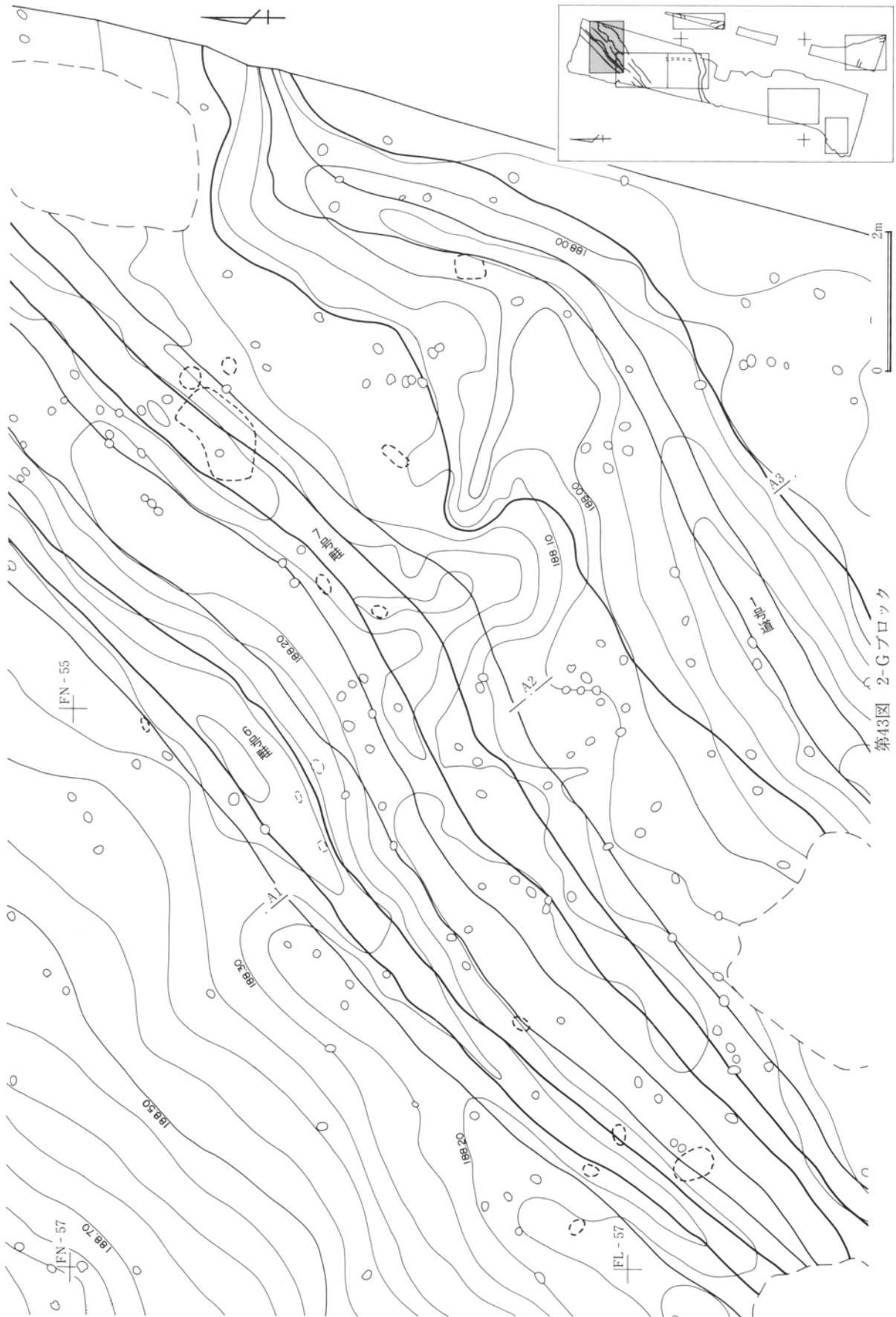
7号畦断面A (南から)



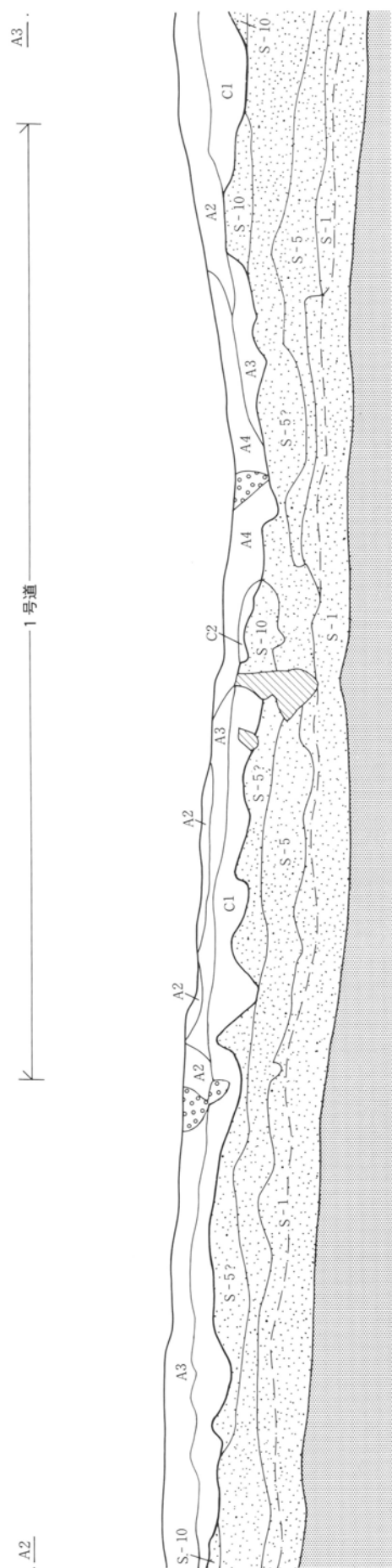
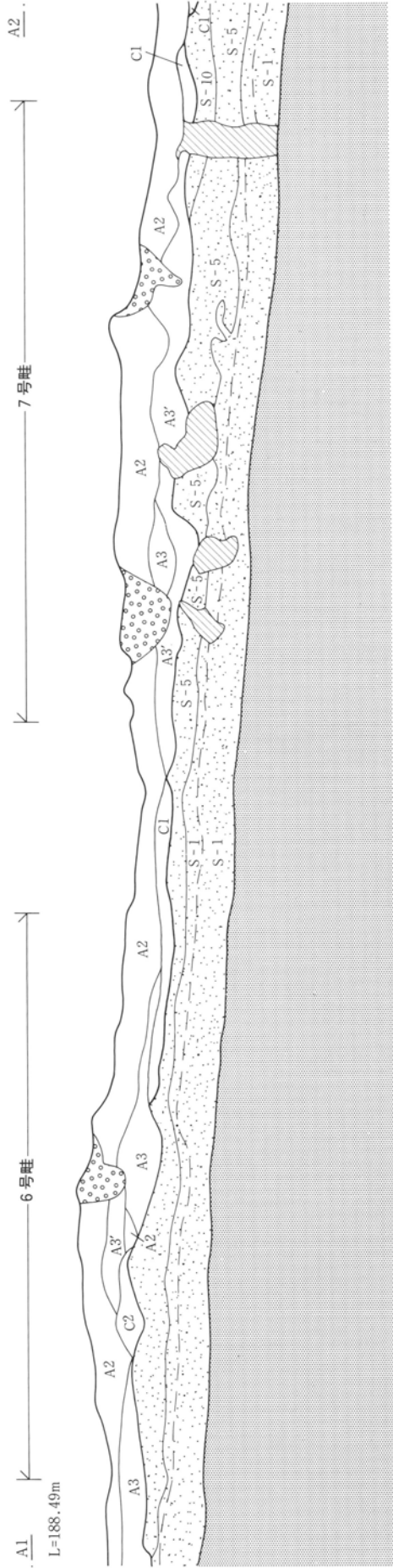
1号道断面A (南から)



2-Gブロック全景 (北東から)



第43図 2-Gプロック

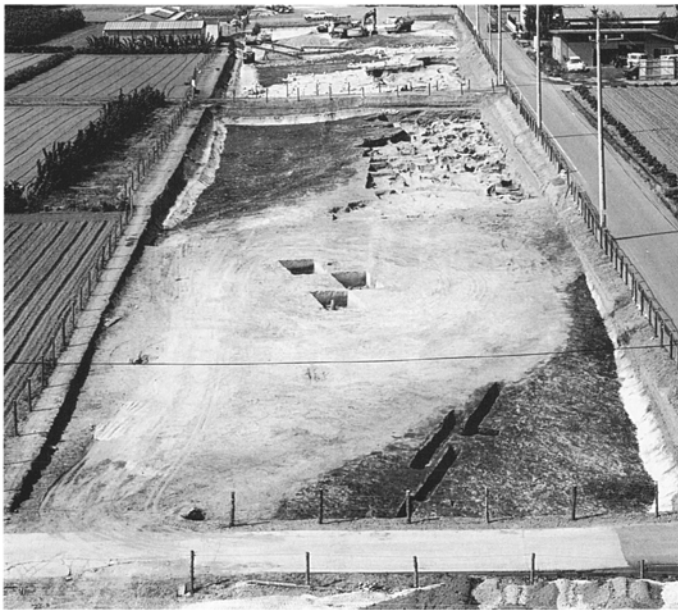


0 50cm

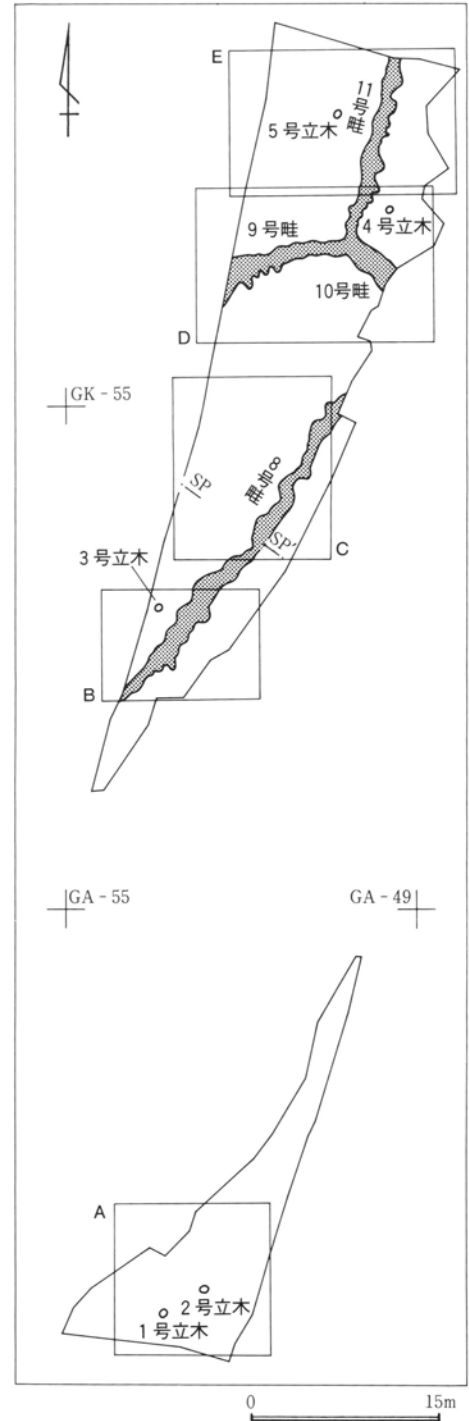
第44图 6号・7号畦、1号道断面图

3区概要

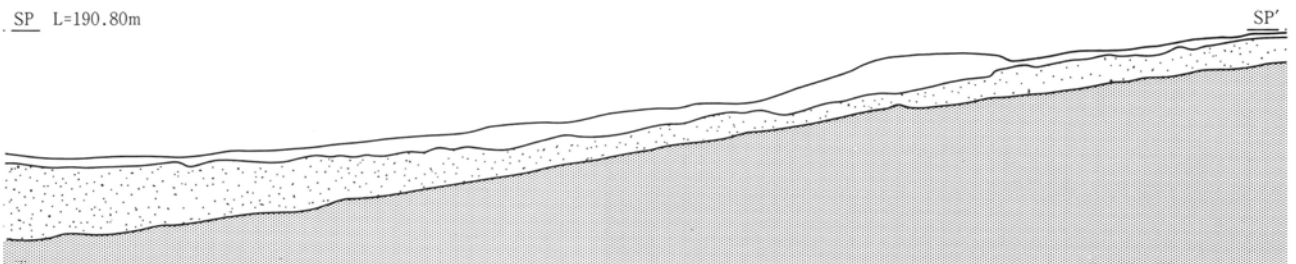
微地形 調査区の中央部が、北東から南西にかけて帯状に高くなっており、古墳時代の地表面は残存せず、ローム層が露出している。調査区の南東部は、南東に向かって低くなる斜面となっており、北西部は平坦な面が広がる。
遺構 調査区北部に、Y字に交わる3本の畦状遺構が検出され、その南側に直線的に伸びる畦状遺構が1本確認された。
蹄跡分布 全体的にやや多く、万遍なく広がっている。畦状遺構で区切られた北西隅では、ウマの蹄跡だけではなく、ヒトの足跡も検出された。
地表面の様子 大勢としては細かな凹凸が多く、FPが隙間に入り込んでいるが、ヒトの足跡が検出された北西隅は、地表面が滑らかで、凹凸が少ない。また、プラントオパール分析の結果、3区の西寄りでは、ススキ属の他にヨシ属が多く検出されている。



南中道3区全景(南から)



第45図 南中道3区全体図



第46図 3区断面図

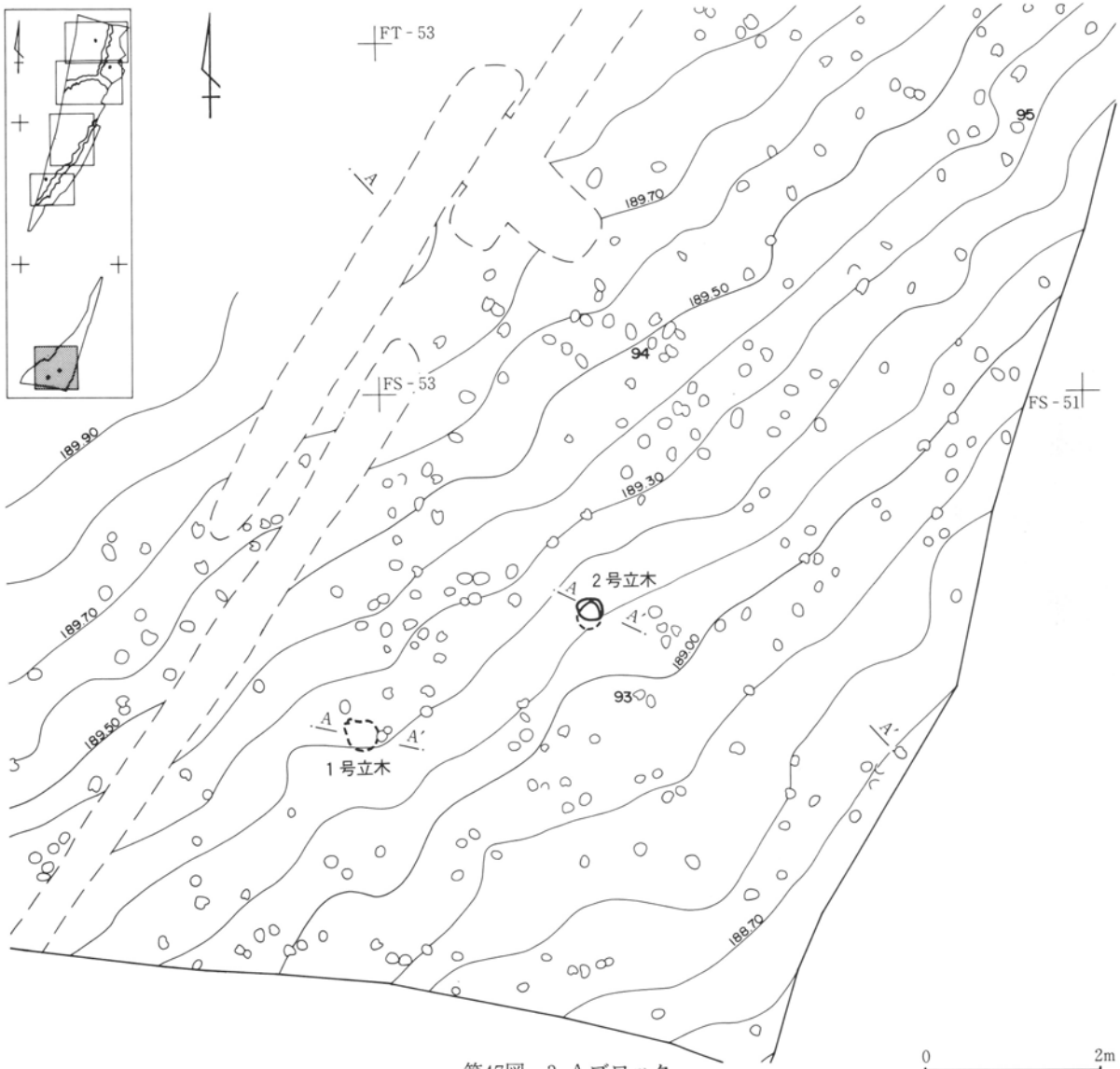
SP L=190.80m

SP'

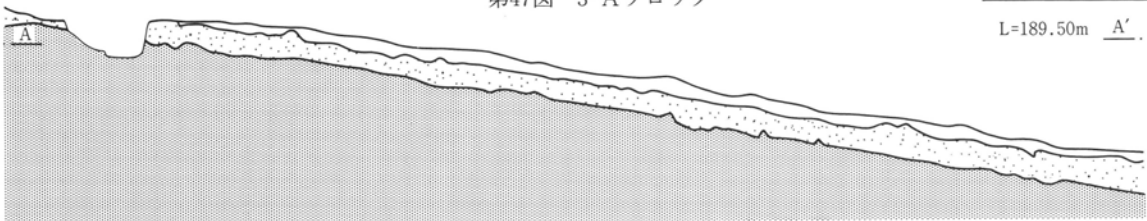
3-Aブロック

蹄跡 比較的多い。特にFR-52グリッドは、60個の蹄跡が検出された。 立木 1号立木：この立木はFA上面の調査時に検出されたが、FP混じりの暗褐色土が落ち込むため、この面で扱う。FA層が幅30cmにわたって、堆積しておらず、根跡部分の土層にFAが混じらないことから、FA降下時には木が生え

ていたものと考えられる。 2号立木：FPで埋まる径12cm、深さ27cm程の落ち込みが検出された。断面Aでは、FA層が幅40cmにわたって途切れている。根跡部分の土層にFAが混じることから、FA降下後の木の可能性がある。FP下の地表面から75cm下まで、根の影響が及んでいる。

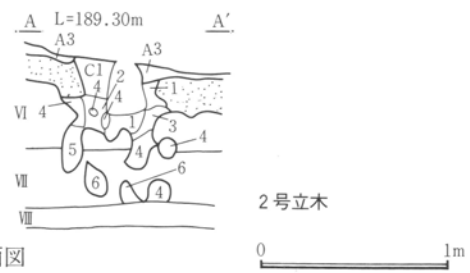
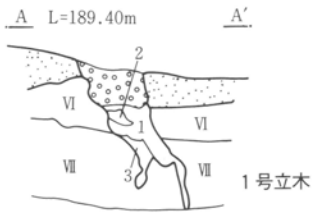


第47図 3-Aブロック



第48図 Aブロック断面図

第3章 FP層下面の調査



第49図 1号・2号立木断面図

1号立木

- 1 暗褐色土。ローム粒含み、締まりがない。
- 2 黒褐色土。
- 3 暗褐色土。基本土層Ⅶ層主体で、締まりがない。

2号立木

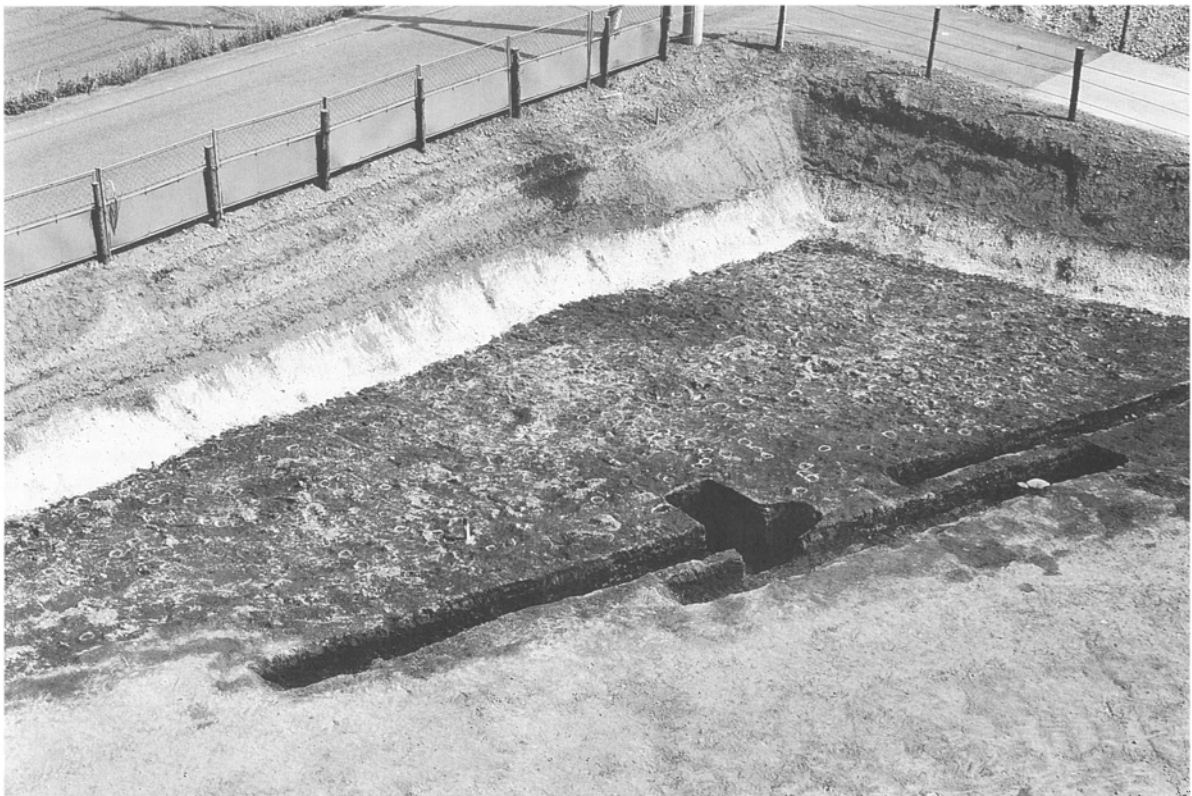
- 1 褐色土。細粒。FAを少量含む。Ⅵ層を粒状に多く含む。
- 2 褐色土。1層に似るが、FAを多く含む。
- 3 黒褐色土。基本土層Ⅵ層主体で、1層を含む。
- 4 黒褐色土。基本土層Ⅵ層主体で、締まりがない。
- 5 暗褐色土。基本土層Ⅶ層主体で、黒褐色土ブロックを含む。締まりがない。
- 6 暗褐色土。基本土層Ⅶ層主体で、締まりがない。



1号立木断面 (南から)



2号立木断面 (南から)

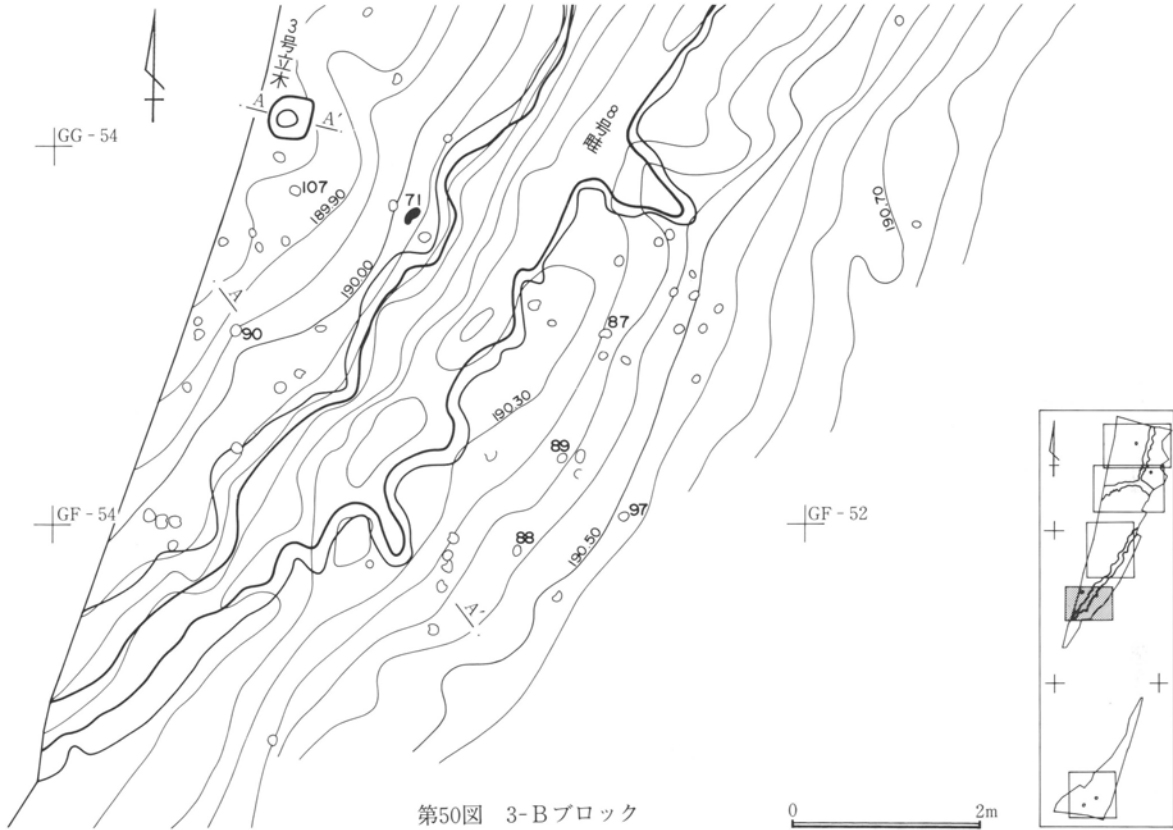


3-Aブロック全景 (北西から)

3-Bブロック

畦状遺構 8号畦：幅1.9m、高さ8cm、走向N-40°-E。ほぼ等高線に沿うように直線的に伸びる。断面Aでは、全体的に炭化物を多く含み、特にB7層では黒色灰層が、FA-FP間に多いところで3枚認められる。畦の両脇がわずかに低い。蹄跡 分布量は中程度で、畦の両側で分布状況に差はない。

ヒトの足跡 GF-53グリッドで1つだけ確認された。立木 3号立木：FPで埋まる径44cm、深さ47cm程の落ち込みが検出された。根跡部分の土層にFAが混じることから、FA降下後の木の可能性がある。FP下の地表面から74cm下まで、根の影響が及んでいる。



3-Bブロック全景（南西から）

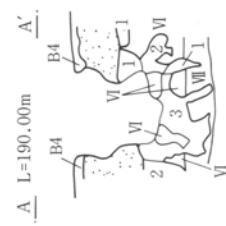


0 50cm

第51図 8号畦断面図

3号立木

- 1 黒色土。基本土層VI層にFA(S-1)を含む。
- 2 褐色土。FA (S-1主体) を含み、締まりがない。
- 3 黒褐色土。基本土層VI層に似るが、締まりがない。

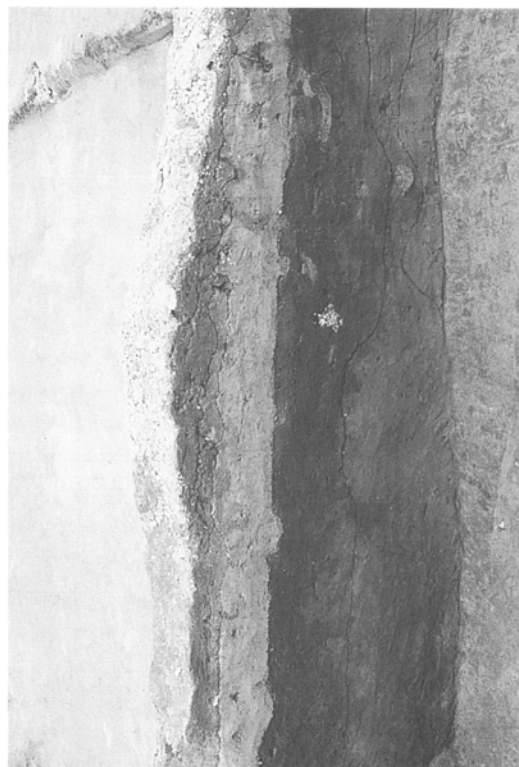


0 1m

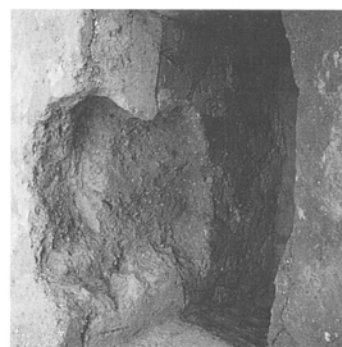
第52図 3号立木断面図



8号畦断面A (南から)



8号畦断面A (南から)

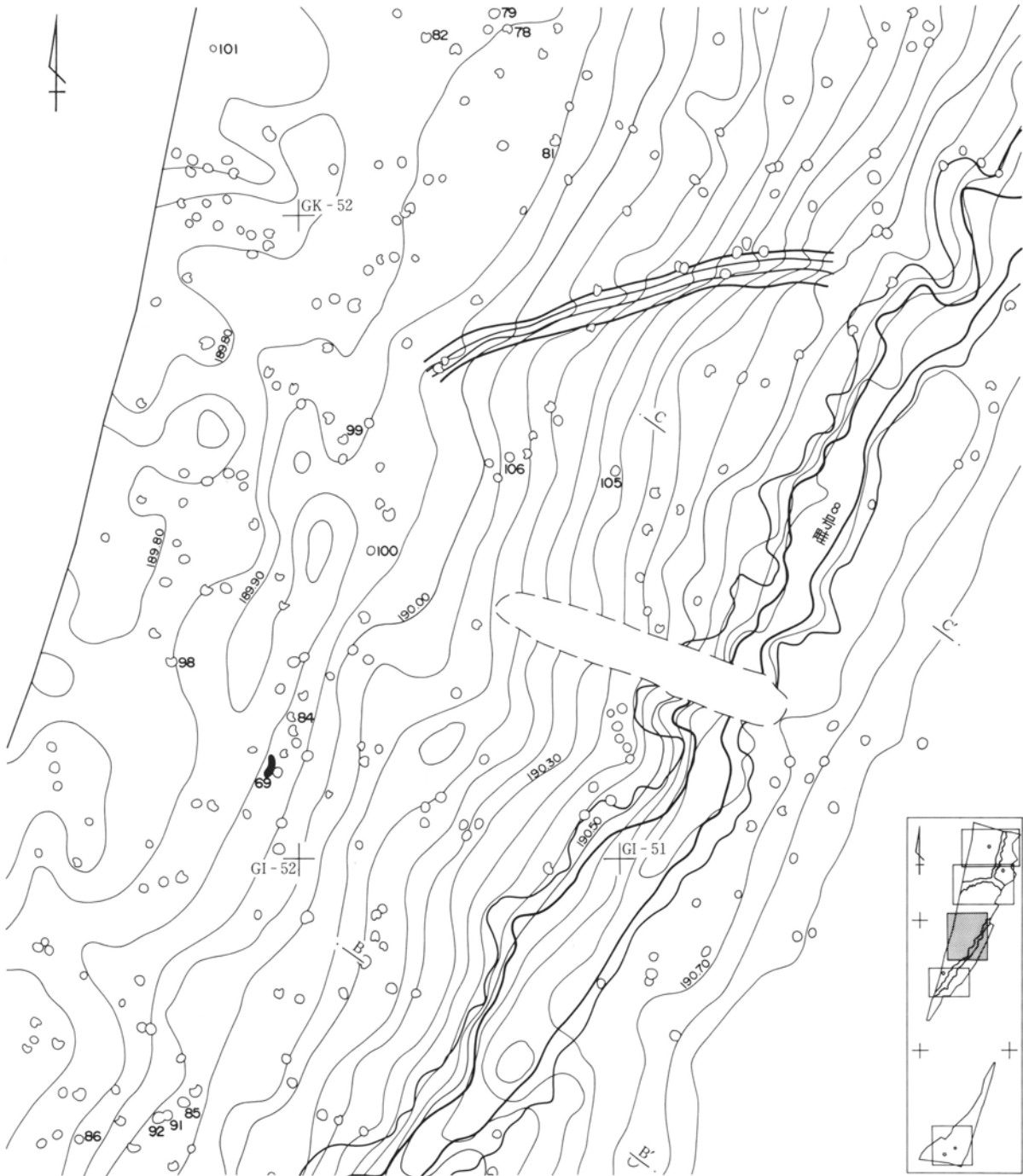


3号立木断面 (南から)

3-Cブロック

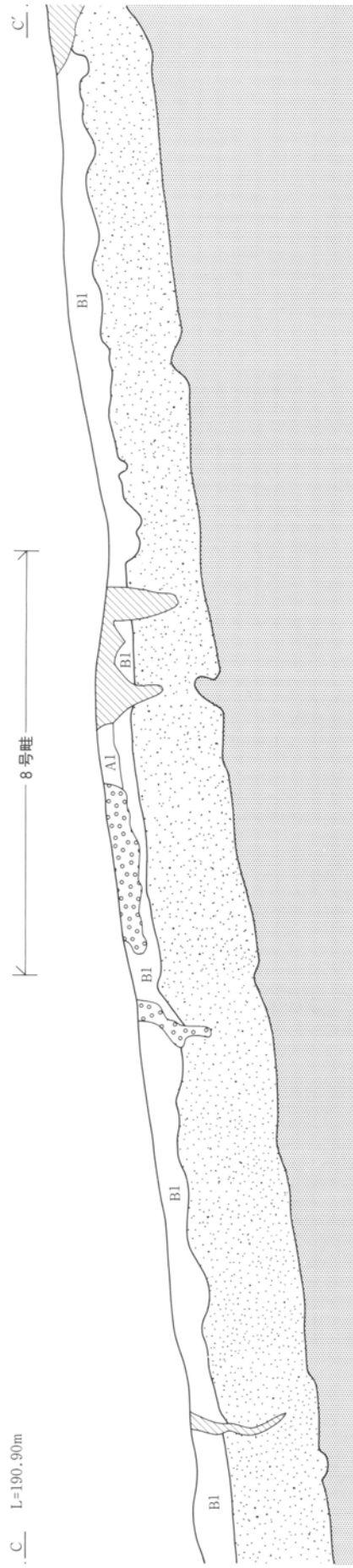
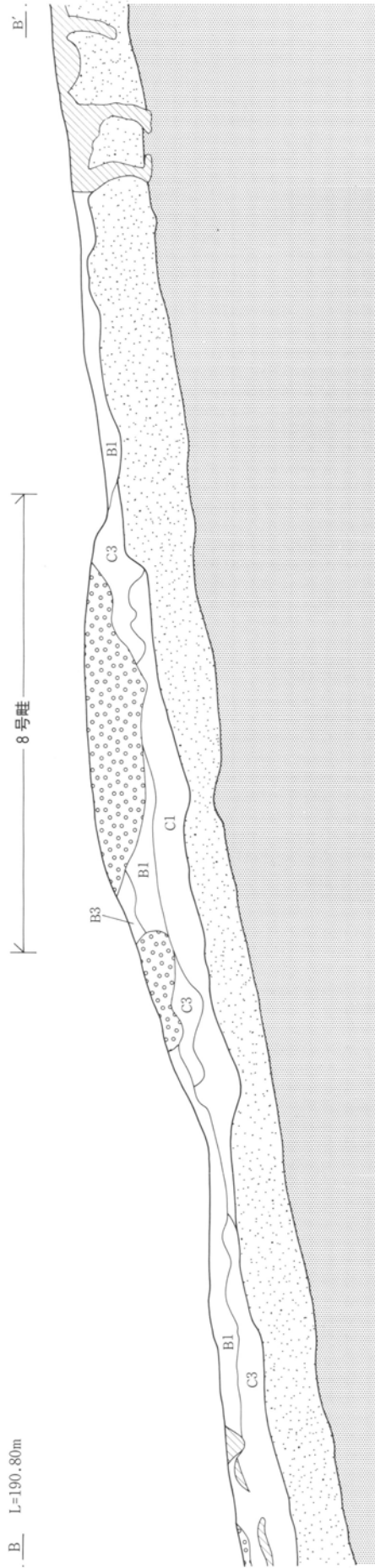
畦状遺構 8号畦：幅1.4m、高さは断面Bで16cm、断面Cで5cm、走向はN-32°-Eである。3-Bブロックで見られたような炭化物層は、認められない。断面B付近では畦の西側が低くなっている。断面Cでは逆に畦の東側が低くなっている。**蹄跡** 畦の両側に分布する。8号畦の裾にいくつか蹄跡が認められるが、畦の主体部の上には蹄跡はない。 **ヒトの足**

跡 GI-52グリッドで1つだけ確認された。その他 GI-50グリッド付近に、幅0.3m程の細長い窪みが、長さ9.0mにわたって確認された。形態は道に似るが、連続性がないこと、硬化面が認められないことから、道とは考えられない。また、この付近では倒木は確認されておらず、倒木の幹の痕跡の可能性もない。なお、この窪みにも蹄跡が付いている。



第53図 3-Cブロック

第3章 FP層下面の調査



第54図 8号畦断面図



8号畦断面B (南から)



跡跡No105後足



8号畦断面C (北東から)



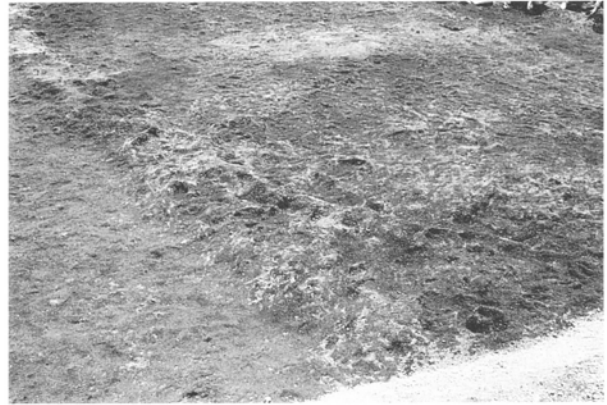
跡跡No106前足



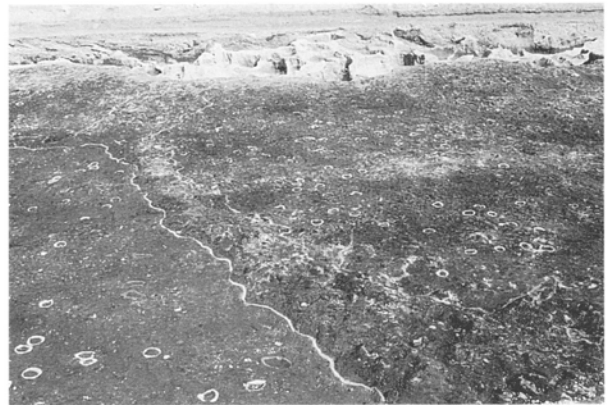
3-Cブロック全景 (北西から)

3-Dブロック

畦状遺構 9号畦：幅0.9m、高さ約12cm、走向N-80°-E。断面Bでは畦部分に炭化物を層状に含む黒褐色土層がある。断面Aでは畦の北側が、わずかに低くなっている。10号畦：幅1.9m、高さ10cm、走向N-54°-W。
蹄跡 9号畦の南側は、残存状況が良く、数も多い。9号畦の南側と9・11号畦に囲まれた北西部分で、1グリッドに1個づつ程度ではあるが、幅80mm以下の小さな蹄跡が認められた。
ヒトの足跡 9・11号畦に囲まれた、北西部の平坦な範囲で、多数の足跡が検出された。連続した歩行を追えるものはない。大きさは3区全体の平均で、幅9.0cm、長さ22.7cmである。ウマの蹄跡とヒトの足跡は入り乱れている。
立木 4号立木：FPで埋まる上端径40cm、深さ20cm程の落ち込みが検出された。
その他 9号畦の南側と11号畦の東側は、地表面に小さな凹凸が多いが、ヒトの足跡の残る北西部は、凹凸がなく、滑らかである。このことは、地表面から1～2cm削った下位の面でも、土色の差として確認できる。一方、9号畦上とその両側について、調査区西壁でFPの堆積状況を確認したが、変化はなかった。(P370参照)



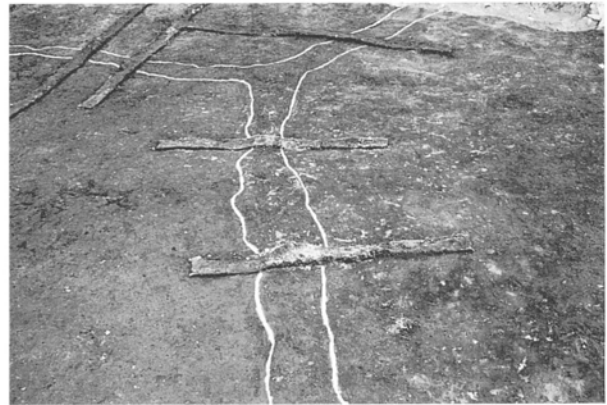
GN-51付近(白線記入前)(西から)



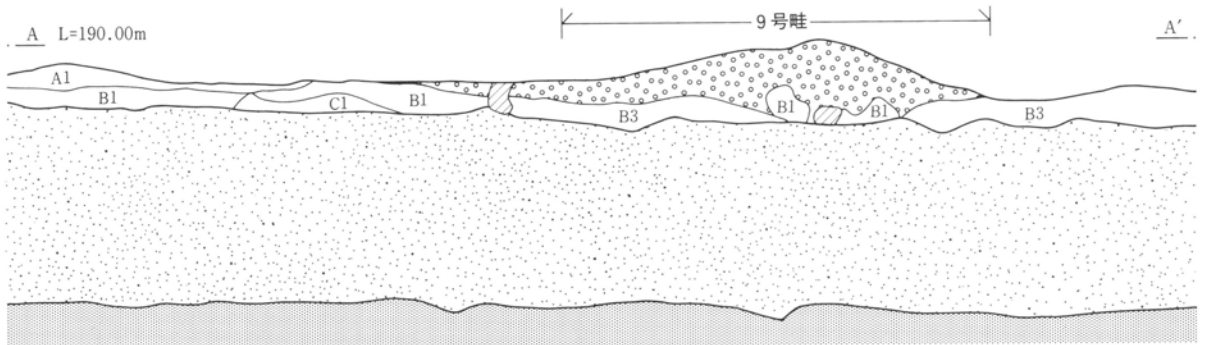
GN-51付近(白線記入後)(西から)



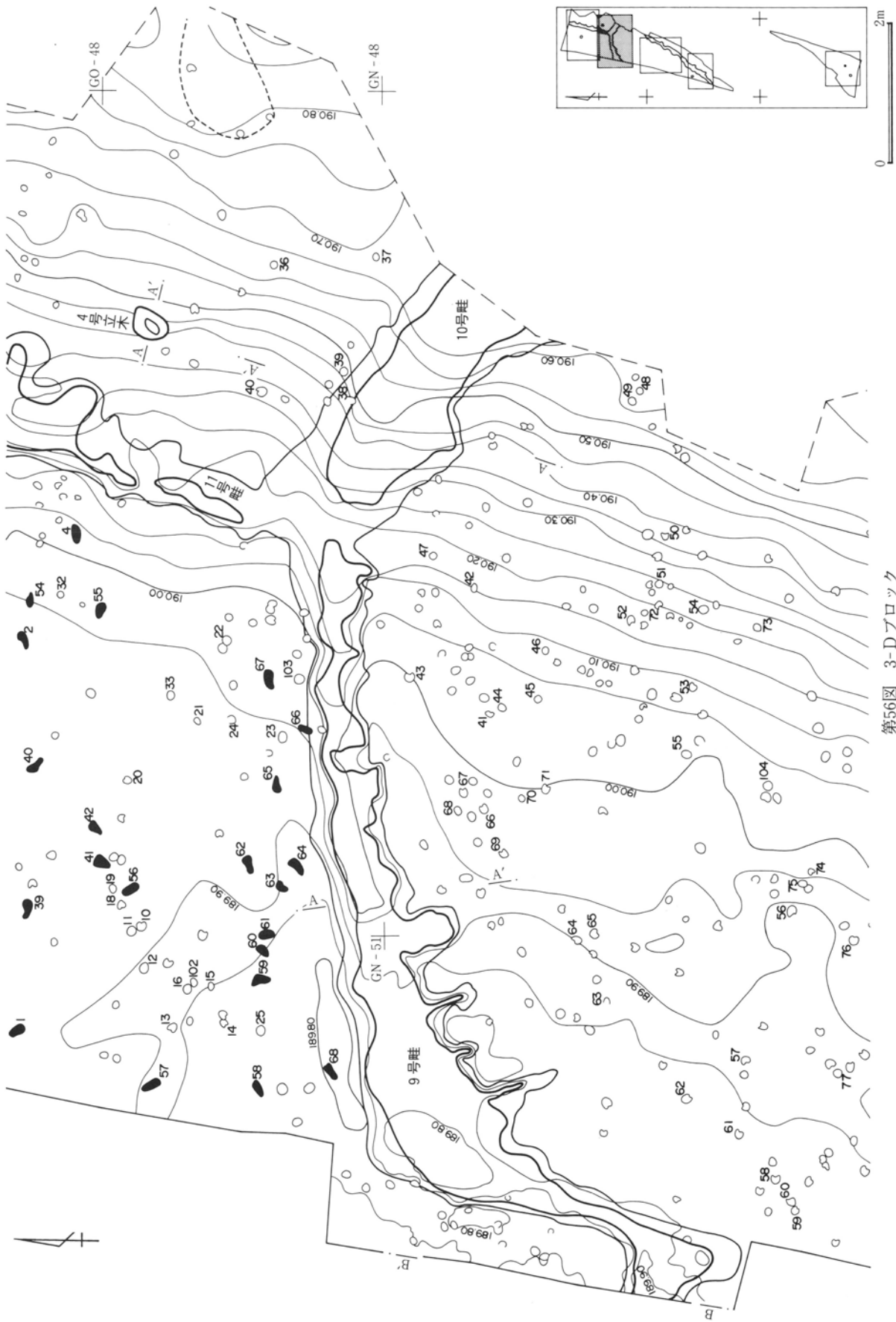
蹄跡(右上の小さなものは子ウマの蹄跡)(北から)



GN-51付近(旧地表面を削り、IV層中位で広げた様子)(西から)



第55図 9号畦断面図



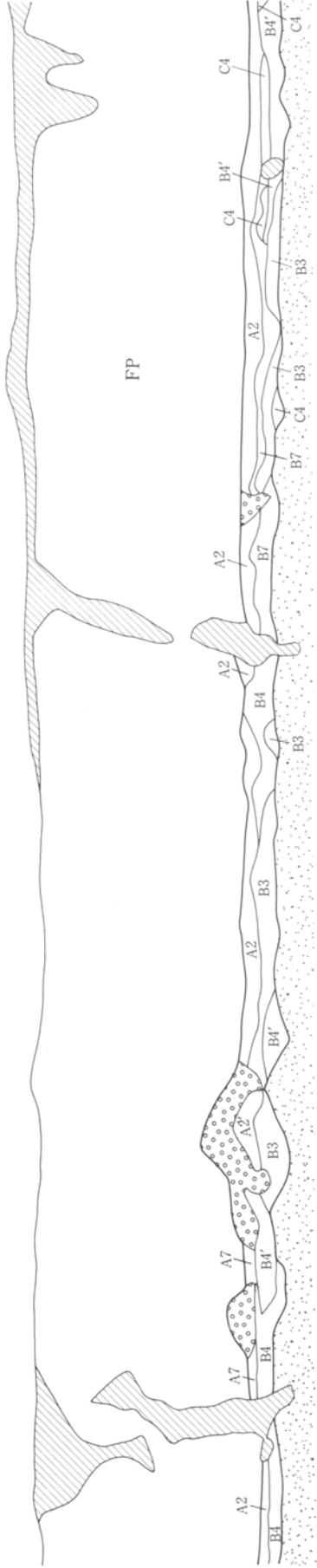
第56図 3-Dブロック

B'

9号畦

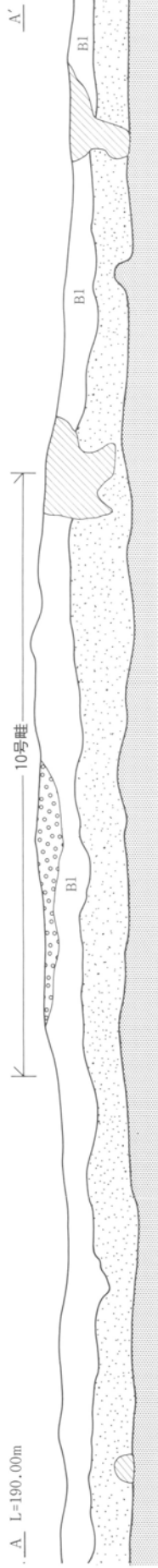
L=190.80m

62



A L=190.00m

10号畦

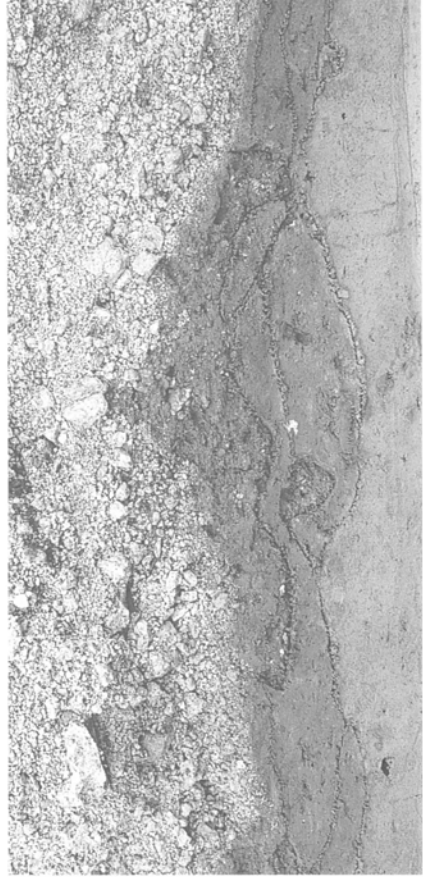


第57図 9号・10号畦断面図

0 50cm



9号畦断面B (東から)



9号畦断面B拡大 (東から)

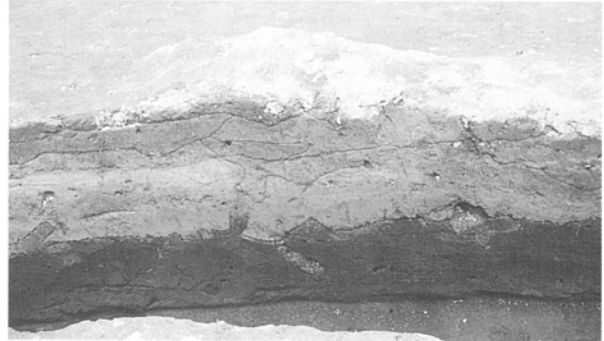
3-Eブロック

畦状遺構 11号畦：幅0.8m～1.4m、高さ約10cm、走向N-15°-E。斜面と平坦面の変換点付近を、等高線に平行して伸びる。畦の西側の下端は、比較的に直線的であるが、東側の下端は出入りが激しい。

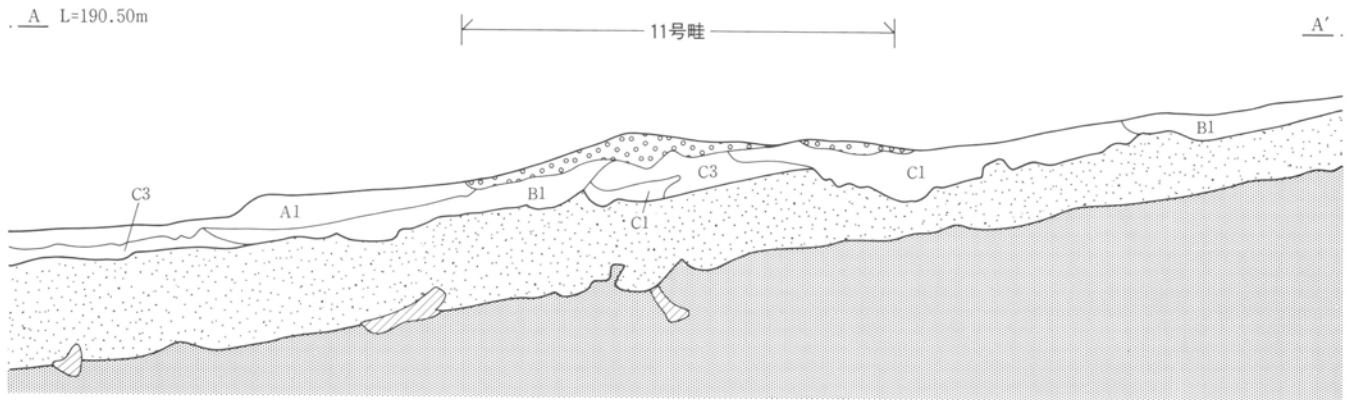
蹄跡 畦の両側に分布するが、11号畦の西側では小さな蹄跡が認められる。**ヒトの足跡** 11号畦の西側で多数の足跡が検出された。大きさは平均で、幅9.0cm、長さ22.7cmである。**立木** 5号立木：FPで埋まる上端径46cm、深さ45cm程の落ち込みが検出された。主な根跡部分の土層にFAは混じらない。

その他 11号畦の西側は、地表面に凹凸がなく、滑

らかである。また、GP-50グリッド付近に、炭化物が多く散在している。樹種同定の結果、コナラ節が主で、クヌギ節が2点含まれていた。



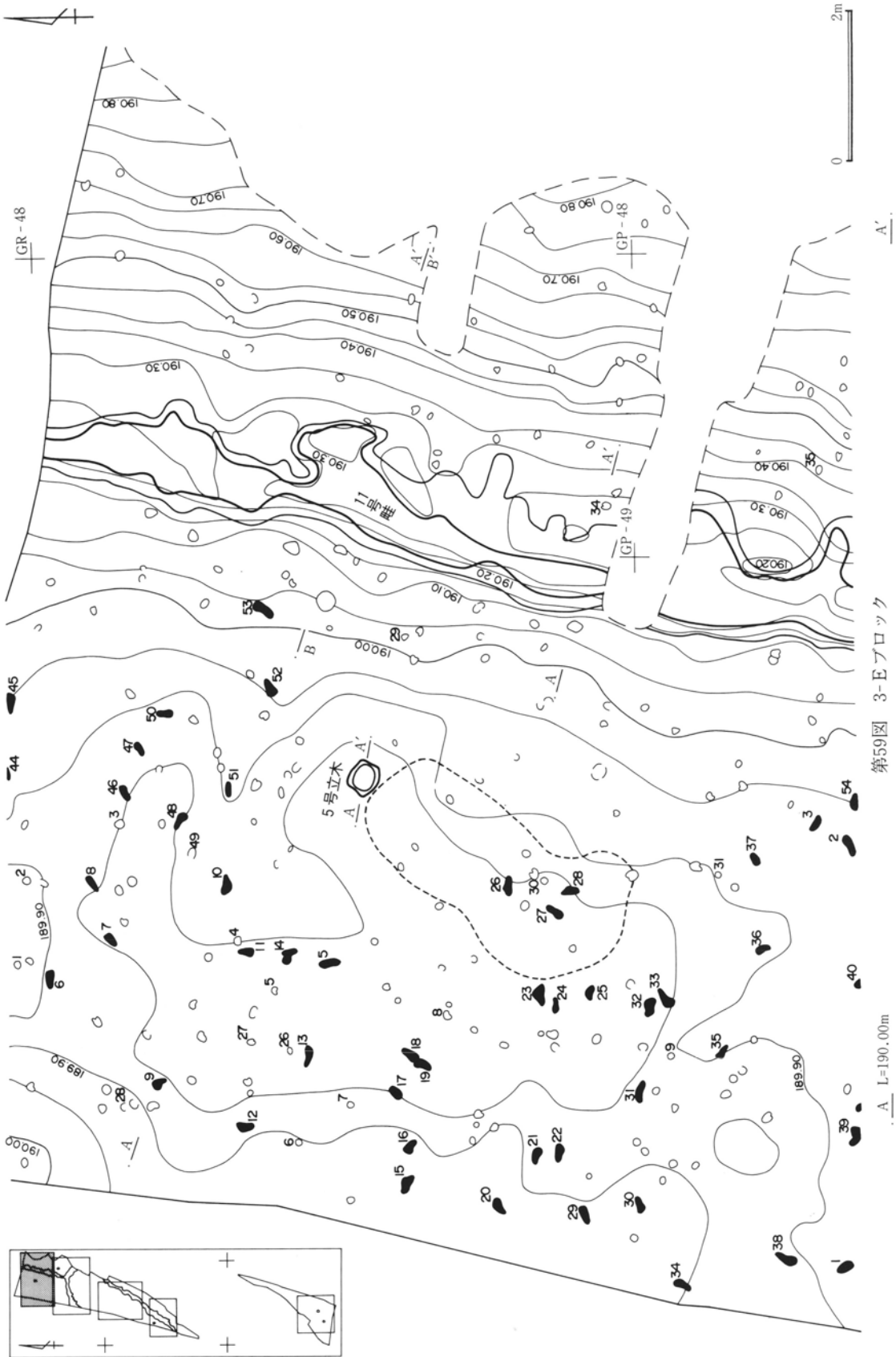
11号畦断面A (南から)



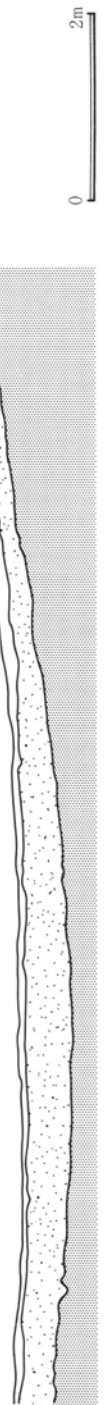
第58図 11号畦断面図



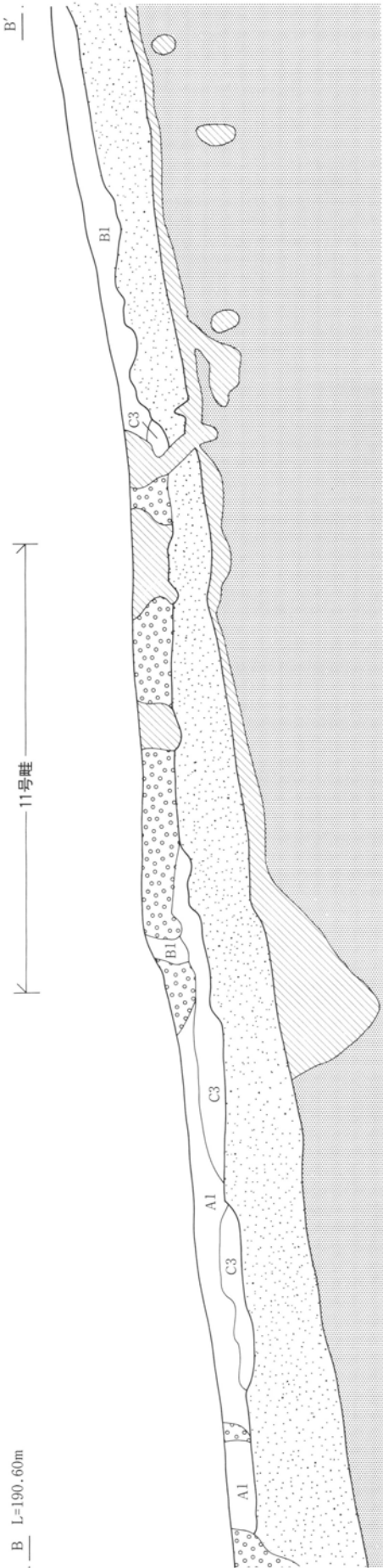
3-Eブロック全景 (北から)



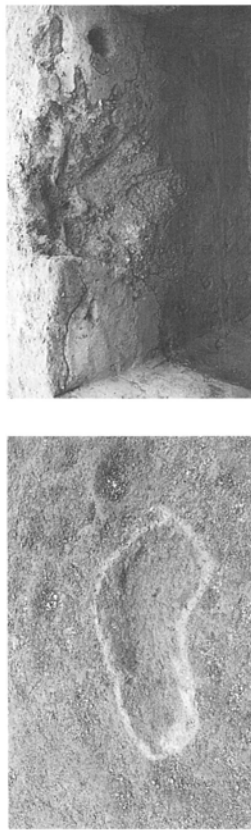
第59図 3-Eブロック



第60図 Eブロック断面図

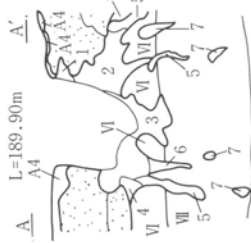


第61図 11号畦断面図



ヒトの足跡No 5

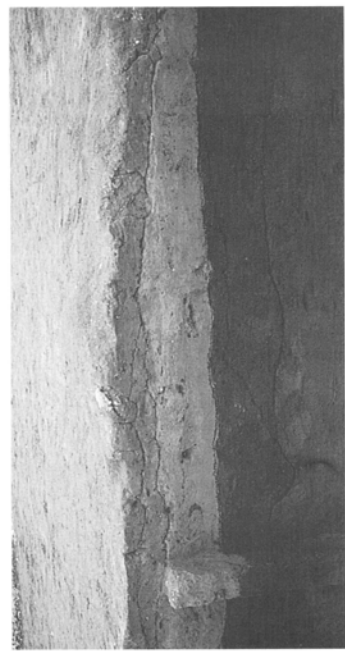
5号立木断面 (南から)



第62図 5号立木断面図

- 5号立木
- 1 黒褐色土。細粒でFPをごく少量含む。
 - 2 明褐色土。細粒でやや粘性を帯びる。FPを少量含む。
 - 3 褐色土。細粒で締まりがない。FPを多量に含む。
 - 4 暗褐色土。細粒でやや粘性を帯びる。FAを含む。
 - 5 暗褐色土。4層に明褐色土粒を少量含む。
 - 6 褐色土。2層に似るが色調やや暗く、FPをごく少量含む。
 - 7 灰褐色土。細粒で締まりがない。砂質土粒(FA?)を含む。

南中道3区畦セクション



11号畦断面B (南から)

遺構番号	断面番号	高さ cm	幅 m	FP混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FAの凹凸	その他
8	A	1.8	8	○	○	-	-	僅かに凸	FA倒木の幹痕あり。
8	B	1.4	16	○	-	-	-	僅かに凸	畦脇が低い。畦下のFA薄い。
8	C	1.3	5	○	-	-	-	-	畦脇が低い。
9	A	1.2	12	○	-	-	-	-	-
9	B	0.9	14	○	-	-	-	不明	FA上面凹凸あり。
10	A	1.9	10	○	-	-	-	僅かに凸	-
11	A	1.2	11	○	-	-	-	-	畦の東脇のFAが削られている。
11	B	1.4	7	○	-	-	-	-	畦の西側の下端は直線的だが、東側は複雑。

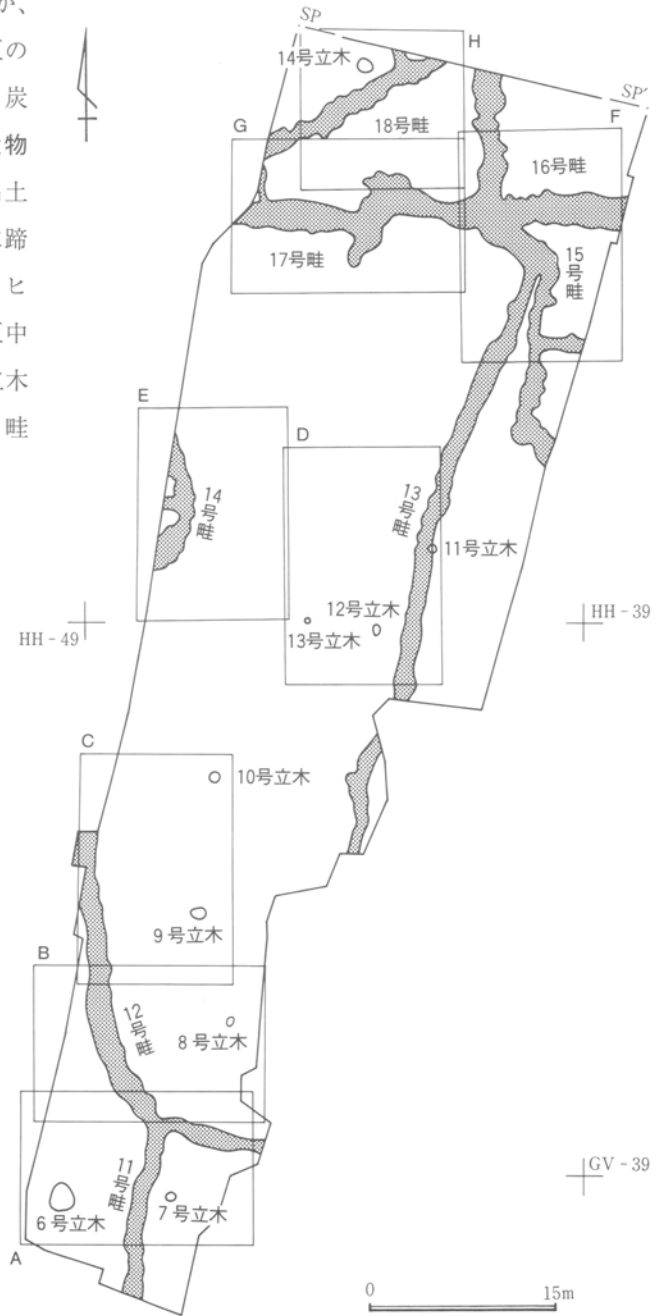
4区概要

微地形 全体的に東が高く、南西に向かって緩く傾斜しており、南西隅は平坦面となっている。南東部はFP上面の遺構により、古墳時代の地表面は削られている。**遺構** 8本の畦状遺構が検出されたが、これらについて特に規則性は見られない。調査区の北部は畦状遺構が集中し、複雑に交わっている。炭化物や焼土を多く含む畦状遺構がある。**遺物** GW-48、GW-49グリッドで、土師器の坏片が出土した。**跡跡分布** 調査区全体に広がり、所々に跡跡の集中する部分がある。調査区南西部などで、ヒトの足跡が検出された。**地表面の様子** 調査区中央部に、南北方向に点々と炭化物が分布する。立木痕は、9箇所確認された。また調査区南壁で、畦

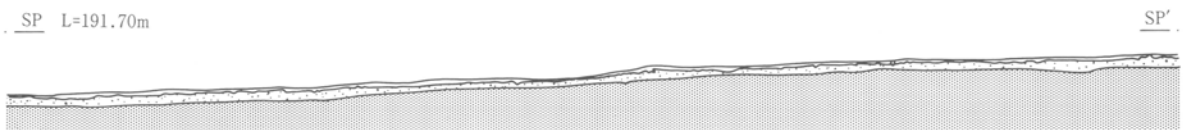
上と畦脇のFPの堆積状況を調べたところ、通常は識別可能な最下層のI-1とI-2が混じっており、分層ができなかった。(P370参照)



南中道4区全景(北から)



第63図 南中道4区全体図

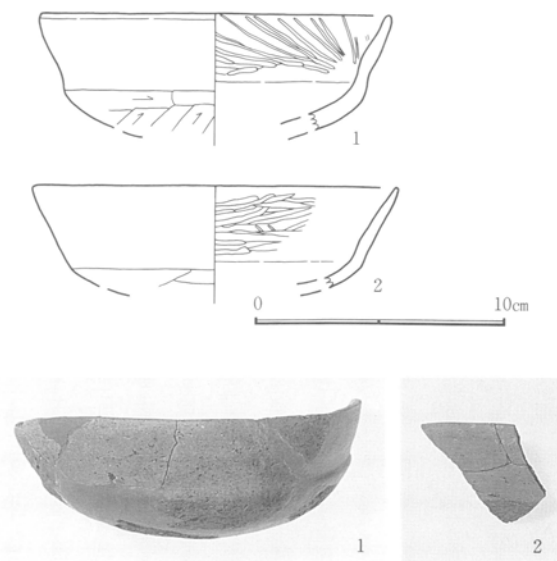


第64図 4区断面図

4-Aブロック

畦状遺構 11号畦：3区から連続している。幅0.6m～1.3m、高さ約15cm。調査区南端では走向N-12°-Eであるが、途中で走向をN-77°-Wに変える。その変換点から12号畦が分岐する。 **蹄跡** 11号畦の西側では小さな蹄跡が認められる。また、11号畦の東西方向に伸びる部分では、畦上にも蹄跡が残る。 **ヒトの足跡** 3区Eブロックから続く、11号畦の西側の範囲でヒトの足跡が検出された。大きさは平均で、幅9.0cm、長さ24.5cmである。 **立木** 6号立木：FP下面では、浅い皿状の落ち込みとして確認された。根跡部分の土層はFAが混じる。FP降下時には、すでに当時の表土が窪みをおおっている。7号立木：FP下面で、径75cm程の範囲でFPを多量に含む褐色土が確認された。根跡部分の土層はFPを含む部分と、FAを含む部分がある。 **遺物**

GW-48、GW-49グリッドで、土師器の坏片が出土した。2個体あり、6世紀前半に位置づけられる。

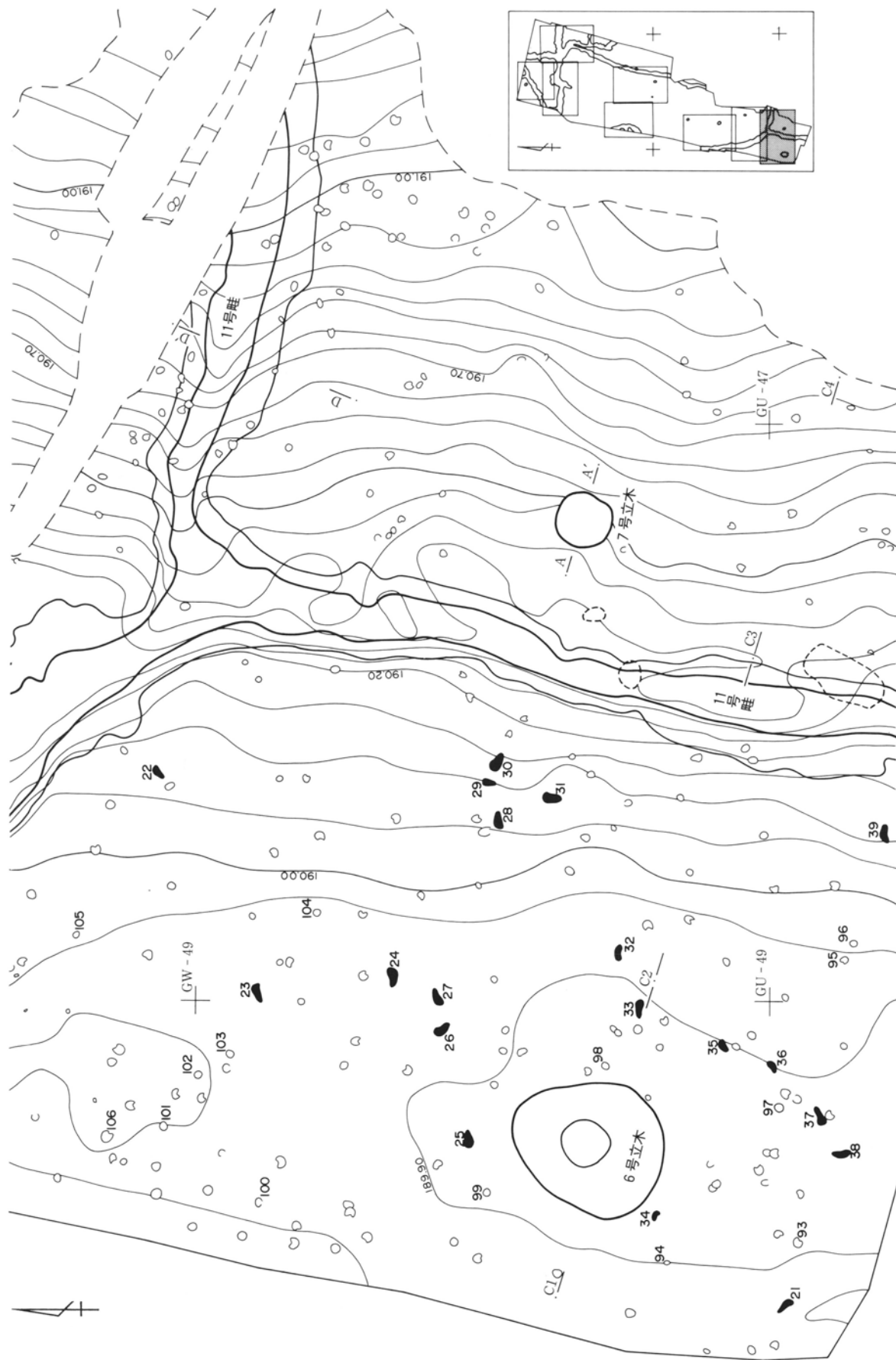


第65図 4-Aブロック出土遺物

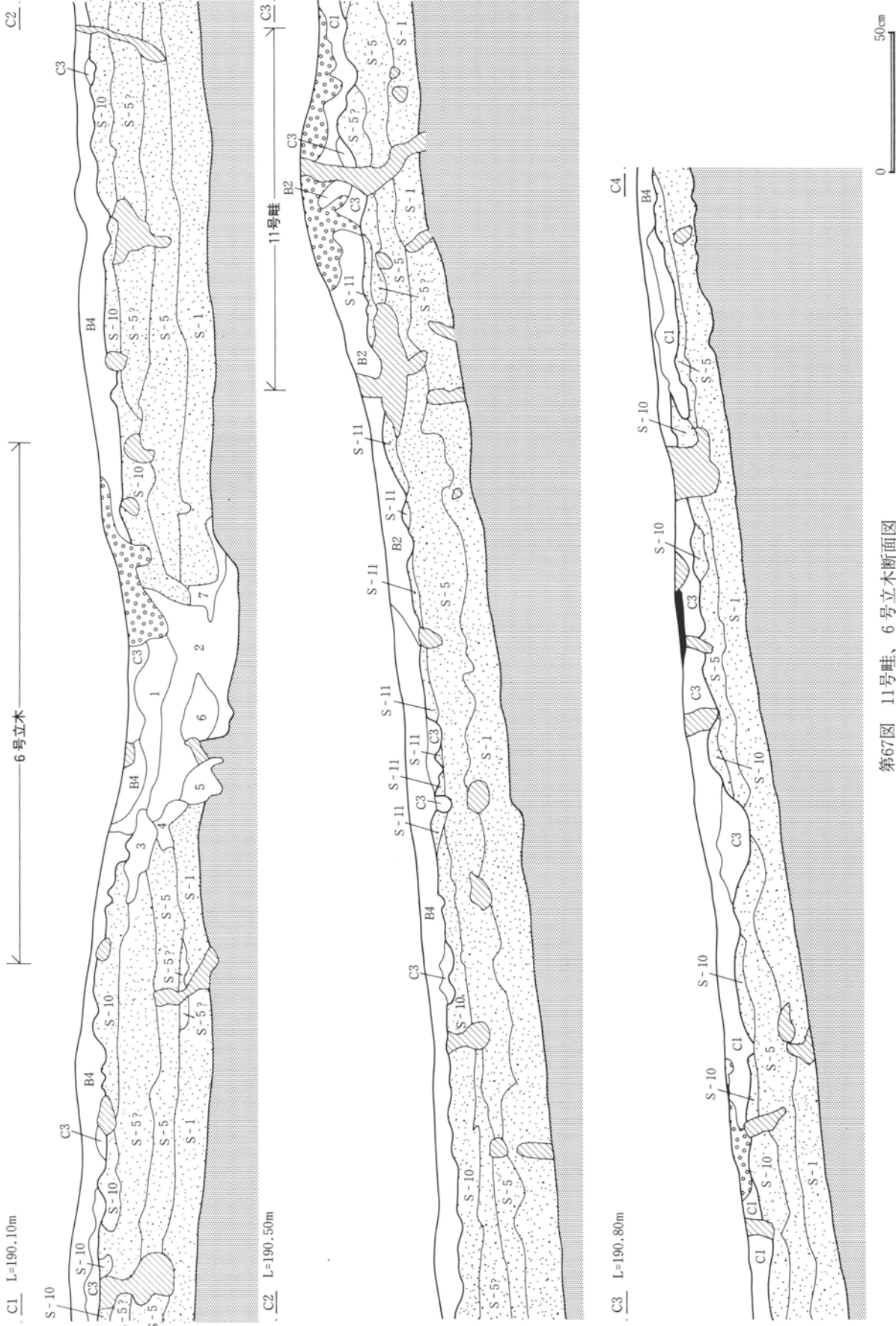
番号	種類 器種	出土 層位	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	土師器 坏	FP直下	口(14.0) 底— 高—	外面 口縁部横撫で、体部匏削り 内面 口縁部横撫で後斜横位匏研磨、体部撫で	①細礫、粗粒砂 ②普通 ③明赤褐色	口～体部1/3
2	土師器 坏	FP直下	口(14.2) 底— 高—	外面 口縁部横撫で、体部匏削り 内面 口縁部横撫で後横位匏研磨	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部破片



4-Aブロック全景(南から)

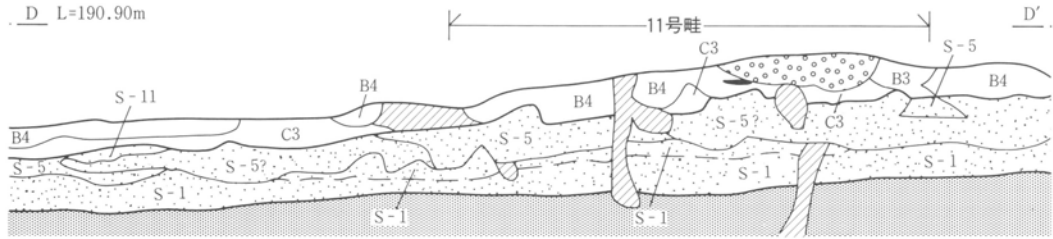


第66図 4-Aブロック



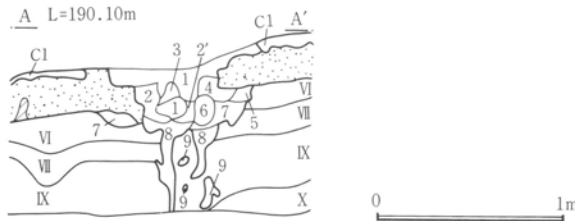
第67図 11号畦、6号立木断面図

第3章 FP層下面の調査



第68図 11号畦断面図

0 50cm



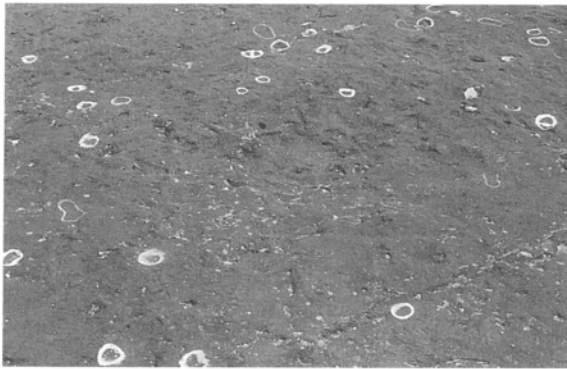
第69図 7号立木断面図

6号立木(前ページ)

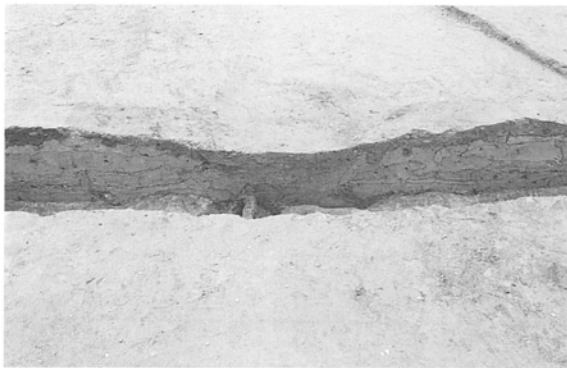
- 1 暗褐色土。FA・炭化物を含む。
- 2 褐色土。FAを主体とし、1層が混じる。
- 3 褐色土。FAの上部層が混じり合う。
- 4 褐色土。FAの下部層が混じり合う。
- 5 にぶい黄褐色土。FA (S-1) に似るが、黄色みを帯び締まりなし。
- 6 暗褐色土。2層に似るが黒みが強い。
- 7 黒褐色土。基本土層VI層主体だが、締まりなし。

7号立木

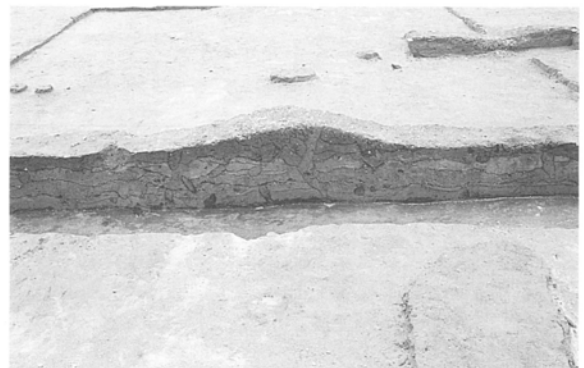
- 1 褐色土。軽石を多量に含む。炭化物を含む。
- 2 褐色土。軽石、炭化物を含む。
- 3 暗褐色土。軽石、炭化物を含む。
- 4 褐色土。軽石、FAを含む。
- 5 黒色土。基本土層VI層にFA (S-1) を含む。
- 6 褐色土。軽石、FAを多量に含む。
- 7 褐色土。FA (S-1) を多く含む。
- 8 暗褐色土。基本土層VI・VII層主体で、軽石含む。締まりなし。
- 9 褐色土。基本土層VII層が主体だが、締まりなし。



6号立木(窪み部分)(西から)



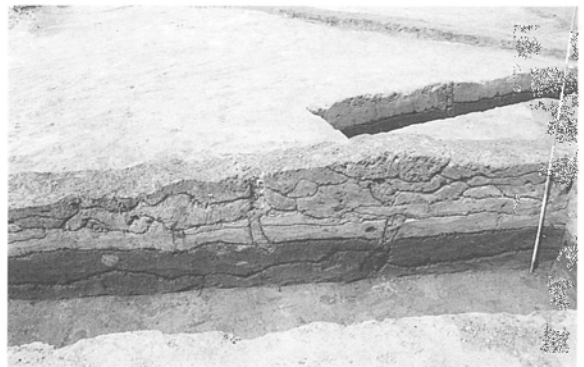
6号立木断面(南から)



11号畦断面C(南から)



7号立木断面(南から)

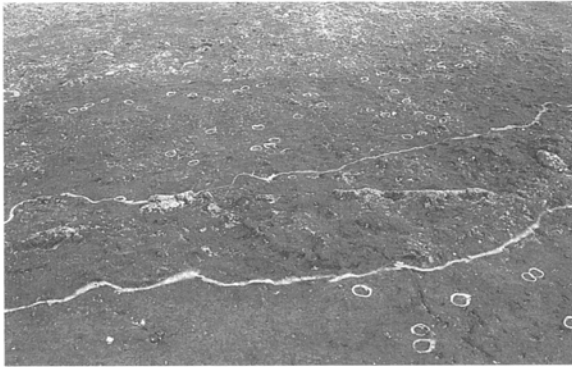


11号畦断面D(東から)

4-Bブロック

畦状遺構 12号畦：幅1.8m、高さ約12cm、走向N-19°-W。断面Aでは畦下のFAは、西よりで残存が良く、東よりで悪い。GY-48グリッドでは畦上に多くの炭化材が確認され、樹種同定の結果、それらはコナラ節であった。 蹄跡 12号畦の東側に集中

する箇所があるが、他は少ない。 ヒトの足跡 12号畦の西側で検出された。 立木 8号立木：FPで埋まる上端長径75cm、深さ45cm程の落ち込みが検出された。主な根跡部分の土層にFAは混じらない。 その他 12号畦より東側で、焼土や炭化物が点在している。



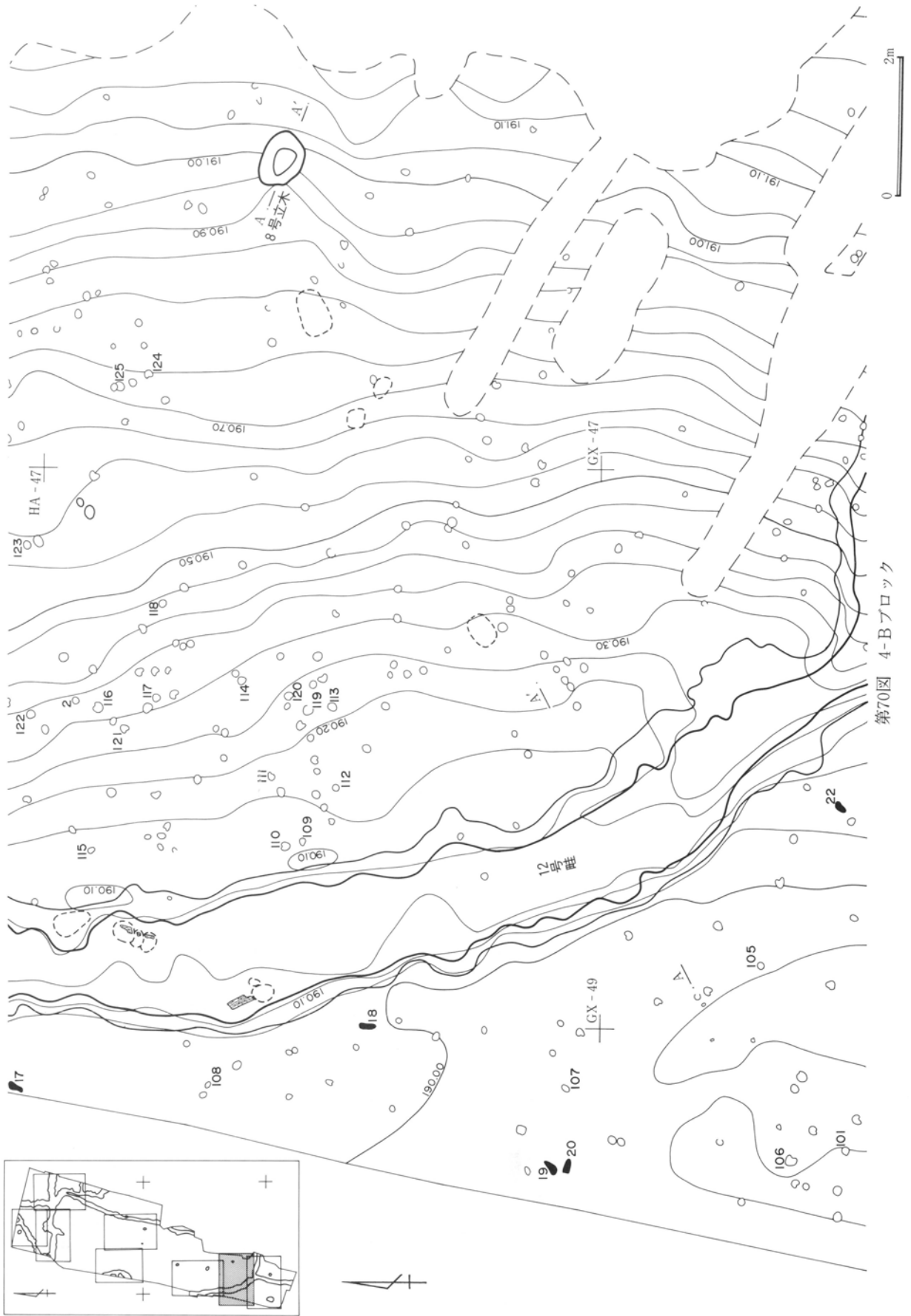
FP下面炭化物出土状態（東から）



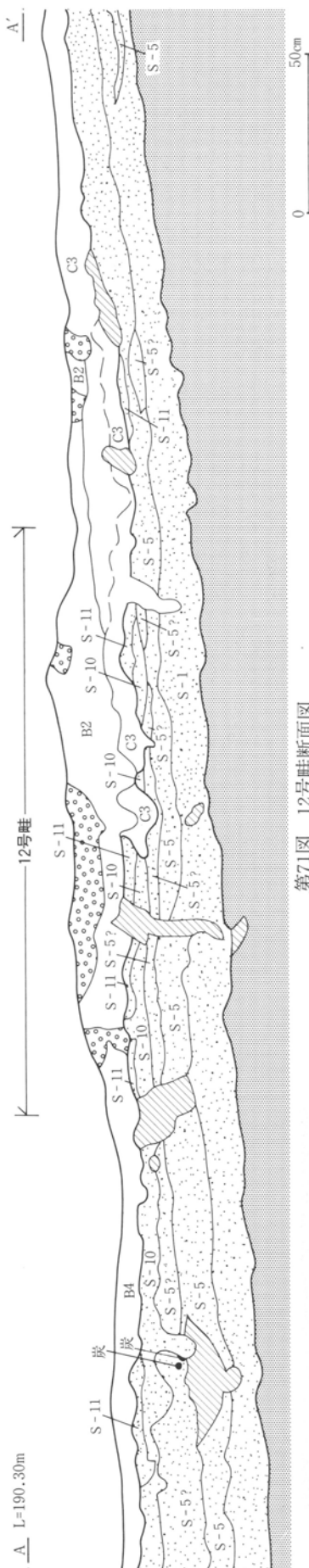
GY-48付近（西から）



4-Bブロック全景（北西から）



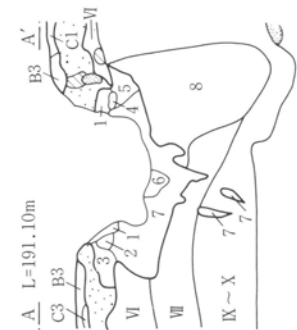
第70図 4-Bプロック



第71図 12号畦断面図



12号畦断面A拡大 (南から)



第72図 8号立木断面図



8号立木断面 (南から)

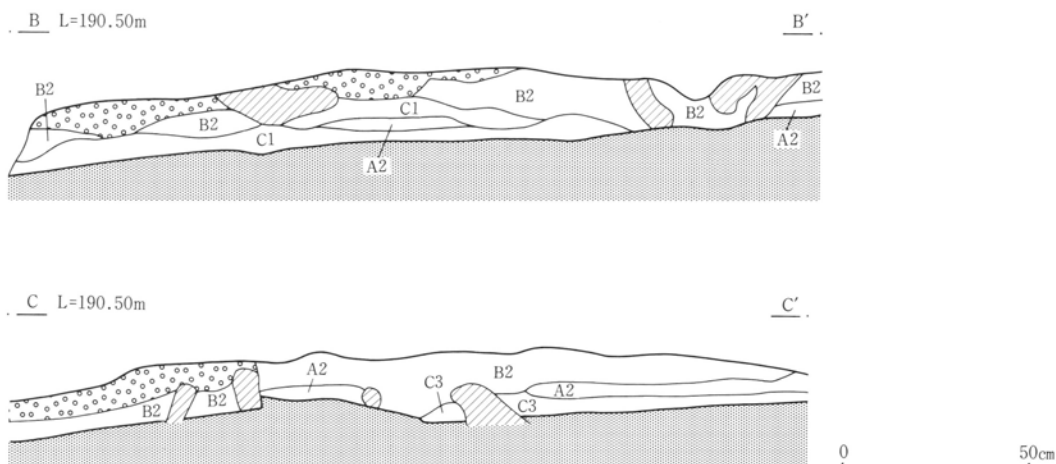
- 8号立木
- 1 褐色土。軽石、FAを多量に含む。
 - 2 FA (S-1) ブロック。
 - 3 褐色土。FA (S-1) を多く含む。
 - 4 黒褐色土。基本土層Ⅵ層主体で、軽石含む。縮まりなし。
 - 5 褐色土。基本土層Ⅶ層が主体だが、縮まりなし。
 - 6 基本土層Ⅶ層のプロック。
 - 7 暗褐色土。基本土層Ⅵ・Ⅶ層主体で、軽石含む。縮まりなし。
 - 8 黒褐色土。硬くしまっている。縄文時代の土坑か。

第3章 FP層下面の調査

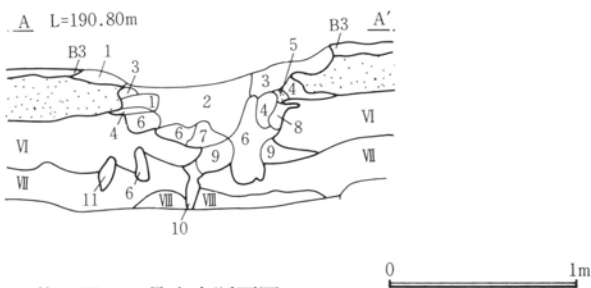
4-Cブロック

畦状遺構 12号畦：幅1.6m、高さ約9cm、走向N-5°-W。FA-FP間の土壤層の中程に、炭化物を含む黒褐色土層がある。 **蹄跡** 全体的に広がるが少ない。 **ヒトの足跡** 12号畦の東側で1個、西側で3個検出された。 **立木** 9号立木：FP下面で、

長径1m程の範囲でFPを多量に含む黒褐色土が確認された。根跡部分の主な土層はFPを含む。 10号立木：FP下面で、長径75cm程の範囲でFPを多量に含む黒褐色土が確認された。根と根の間に挟まれた基本土層VI層は、硬化している。



第73図 12号畦断面図



第74図 9号立木断面図

9号立木

- 1 褐色土。軽石を多く含む。締まりなし。
- 2 黒褐色土。軽石を多量に含む。炭化物を少量含む。締まりなし。
- 3 褐色土。軽石、FAを含む。
- 4 褐色土。FA(S-1)を多く含む。
- 5 FA(S-1)ブロック。

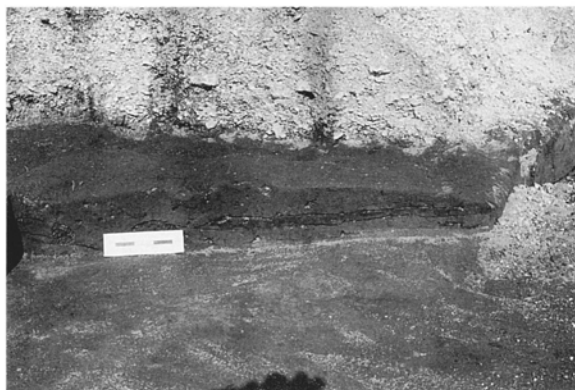
- 6 黒褐色土。基本土層VI層主体で、軽石を多く含む。
- 7 暗褐色土。基本土層VI・VII層主体で、軽石・炭化物含む。締まりなし。
- 8 黒色土。基本土層VI層にFA(S-1)を含む。
- 9 暗褐色土。基本土層VIとVII層が混じる。
- 10 褐色土。
- 11 空洞。



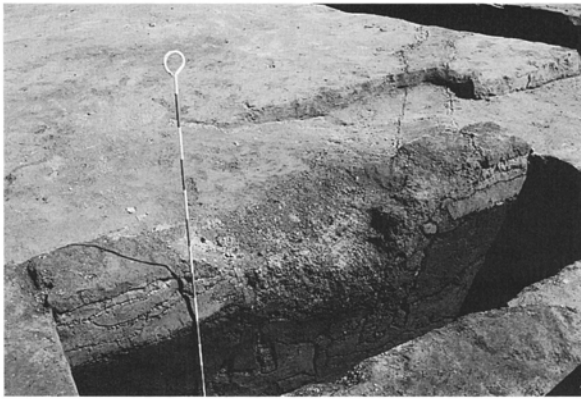
12号畦（調査区拡張部分）（東から）



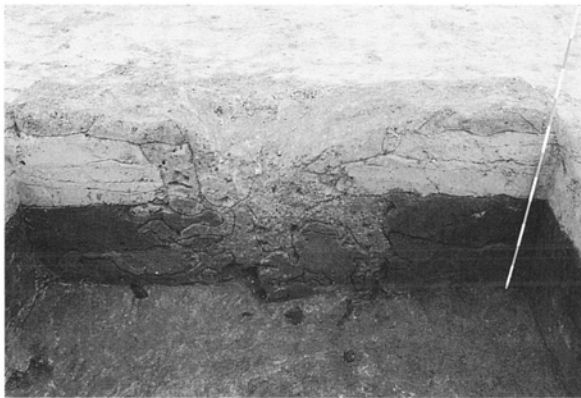
12号畦断面（南から）



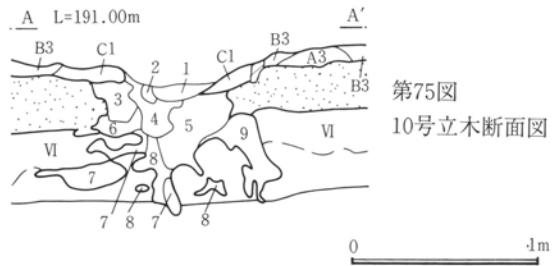
12号畦断面C（南から）



9号立木断面 (南から)



10号立木断面 (南から)



- 1 黒褐色土。軽石を多量に含む。炭化物を少量含む。締まりなし。
- 2 暗褐色土。FAを含む。
- 3 褐色土。軽石、FAを含む。
- 4 褐色土。FAを多く含む。軽石を少量含む。
- 5 黒褐色土。基本土層VI層主体で、軽石を多く含む。
- 6 黒色土。基本土層VI層にFA(S-1)を含む。
- 7 暗褐色土。基本土層VI層主体で、褐色土・軽石を少量含む。
- 8 褐色土。細粒で、粘性あり。
- 9 暗褐色土。基本土層VI・VII層主体で、軽石含む。締まりなし。

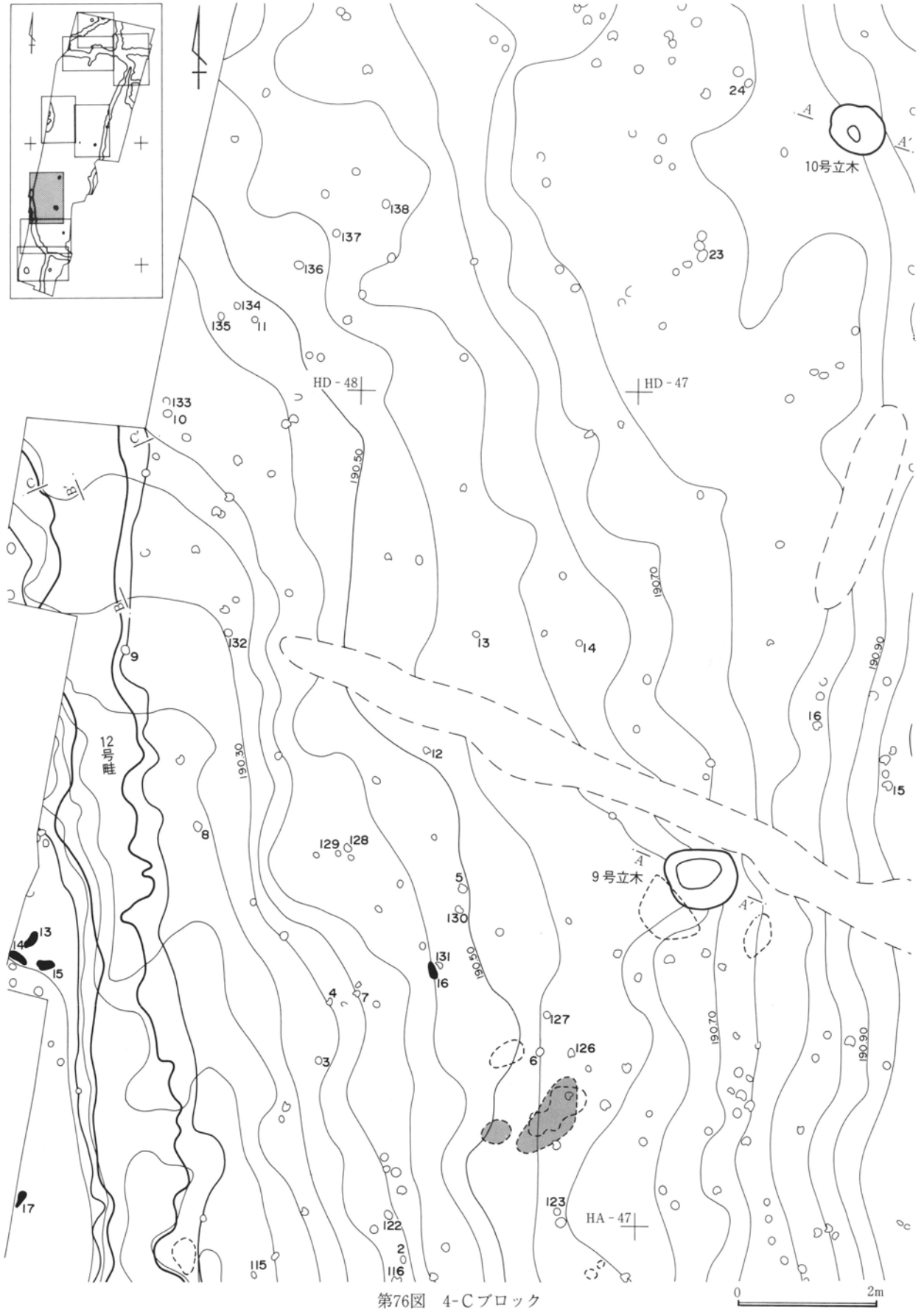


ヒトの足跡 (左足)



4-Cブロック全景 (北西から)

第3章 FP層下面の調査

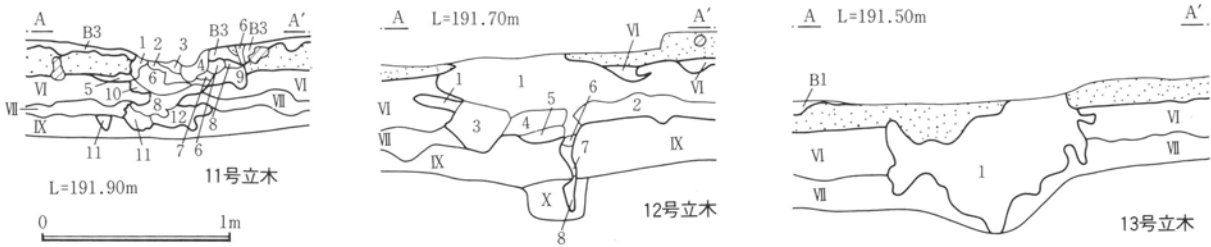


第76図 4-Cブロック

4-Dブロック

畦状遺構 13号畦：幅1.1m、高さ6cm、走向N-15°-E。FA-FP間の土壌層の中期に、炭化物を含む黒褐色土層がある。**蹄跡** 全体的にはやや少なめで、13号畦上にも分布する。**立木** 11号立木：径40cm程の範囲でFPを多量に含む褐色土が確認された。根跡部分の土層はFPと、FAを両方含む。12号立木：この立木はFA上面の調査時に検出された。

根跡部分の土層はFP混じりの黒褐色土でFAが混じらない。13号立木：トレンチの断面で確認された。平面の形態はわからない。FPを多量に含む黒褐色土で埋まる。**その他** 13号畦にはほぼ平行するように、炭化物を多く含む箇所が帯状に並んでいる。この部分はFAの残存状況も良い。古い畦としての、範囲を特定することはできないが、畦の痕跡の可能性はある。また13号畦の両側でも点々と炭化物が散る。



第77図 11号・12号・13号立木断面図

11号立木

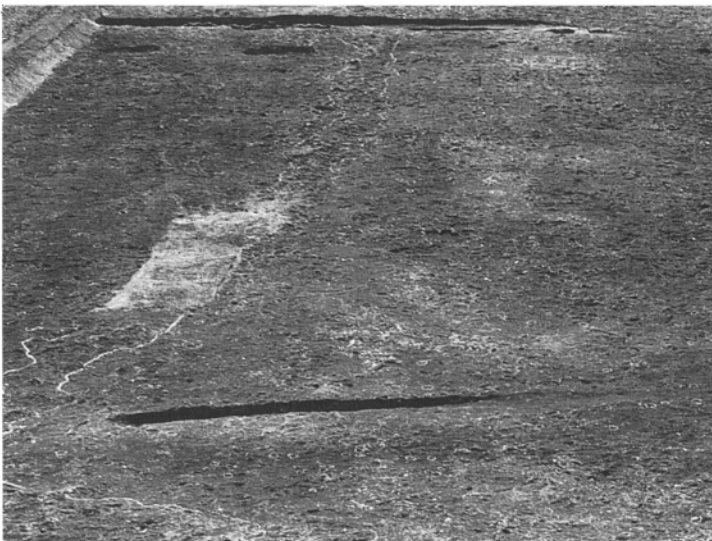
- 1 褐色土。軽石を多く含む。締まりなし。
- 2 基本土層VI層のブロック。
- 3 黒色土。基本土層VI層にFA(S-11?)を含む。
- 4 褐色土。軽石、FAを含む。
- 5 褐色土。FA(S-1)を多く含む。
- 6 淡黄橙色土。FA主体で、VI層・軽石を含む。
- 7 FA(S-5)ブロック。
- 8 褐色土。軽石、FAを多量に含む。
- 9 黒色土。基本土層VI層にFA(S-1)を含む。
- 10 黒褐色土。基本土層VI層主体で、軽石含む。締まりなし。
- 11 暗褐色土。灰褐色土を含み、締まりなし。
- 12 暗褐色土。ローム粒を多く含み、締まりなし。

12号立木

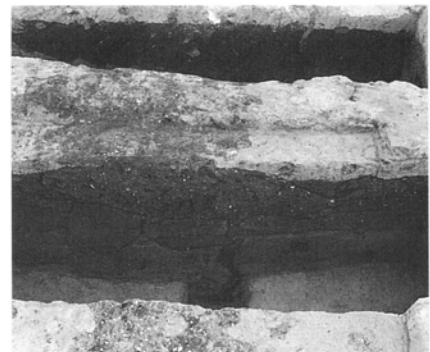
- 1 黒褐色土。基本土層VI層に軽石を多量に含む。褐色土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土。1層に基本土層IX層を多量に含む。
- 3 黒褐色土。基本土層VI層よりも色調明るい。褐色土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土。2層に似るが、軽石を少量含む。
- 5 黒褐色土。3層に似るが、締まりなし。
- 6 褐色土。基本土層IX層にVI層を少量含む。
- 7 基本土層VI層のブロック。
- 8 明黄褐色土。基本土層X層にVI層を少量含む。

13号立木

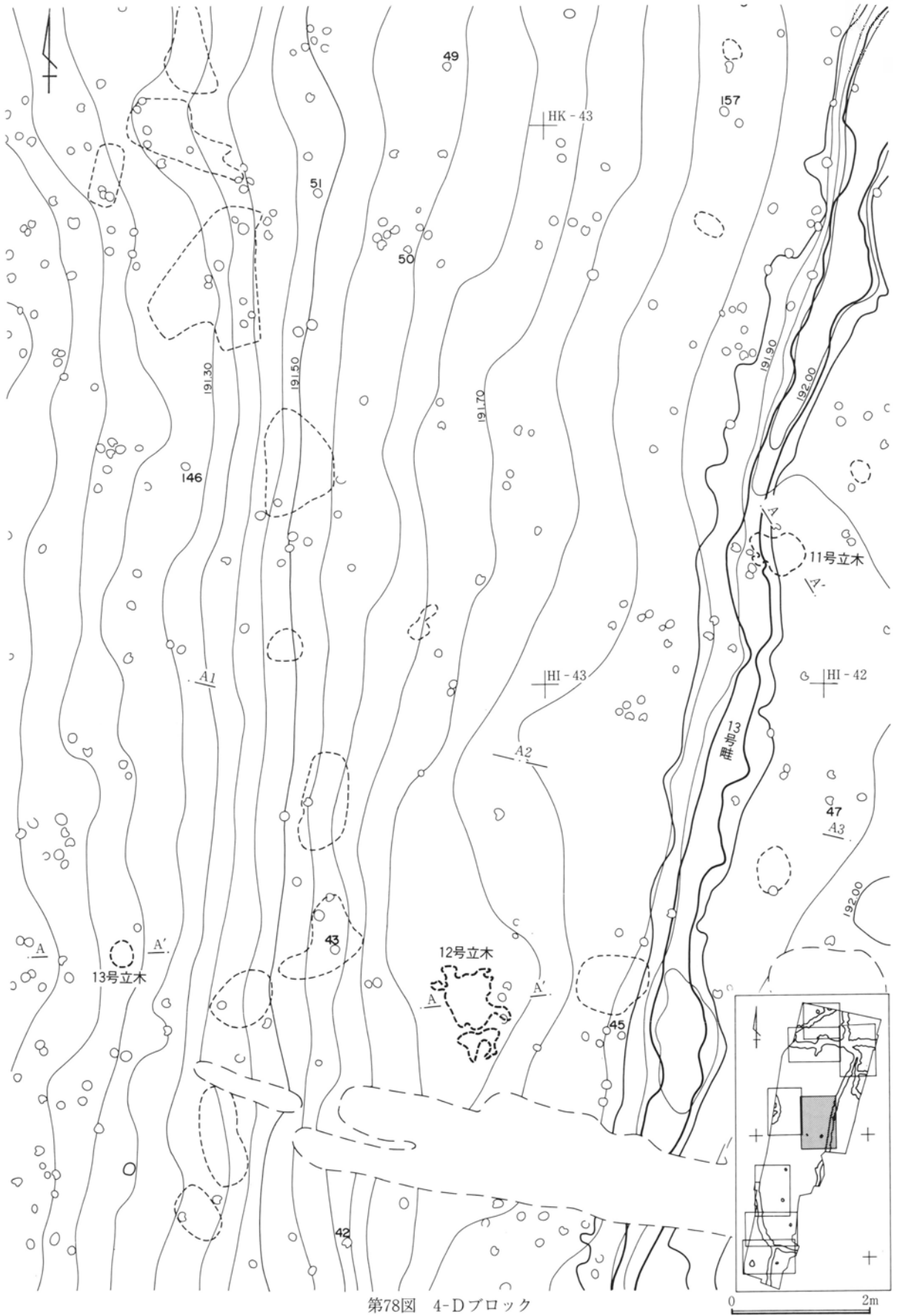
- 1 黒褐色土。FPを多量に含む。FAを僅かに含む。



4-Dブロック全景 (北から)

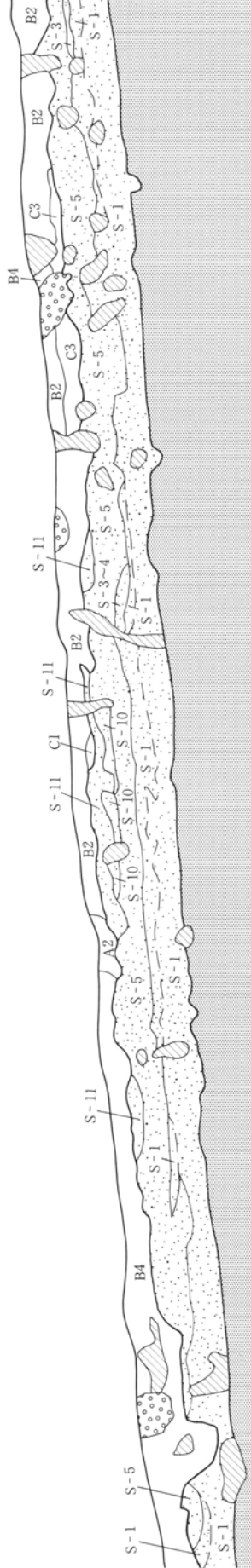


12号立木断面 (南から)



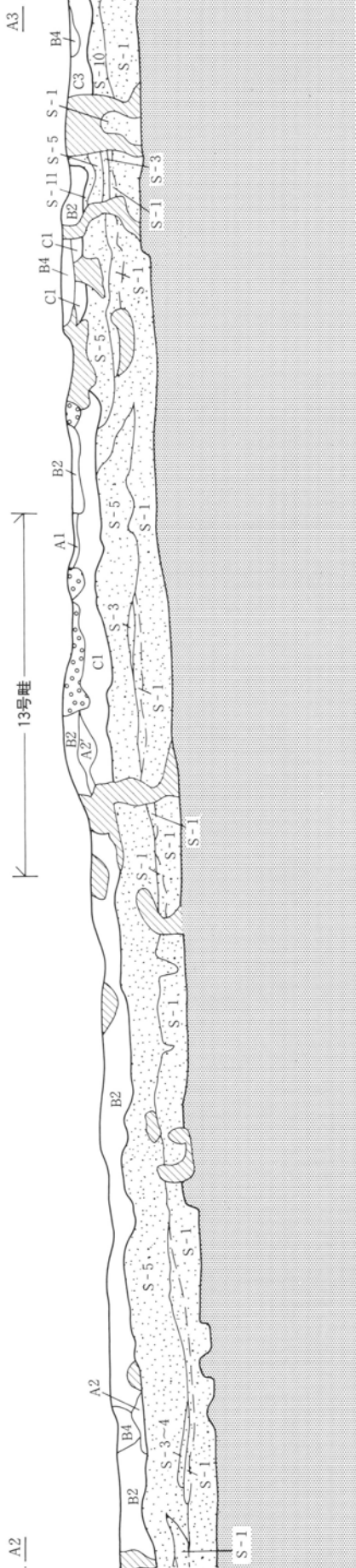
A1 L=191.90m

A2



A2

A3



0 50cm

第79図 13号畦断面図



13号立木断面 (南から)



11号立木断面 (南西から)



13号畦断面A (南から)

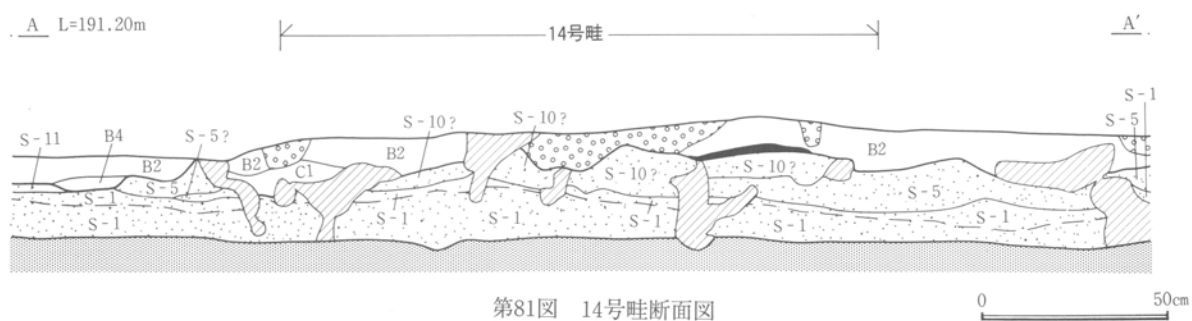
4-Eブロック

畦状遺構 14号畦：調査区の西端で一部が検出された。幅1.0m～1.6m、高さ約6cm。弧を描くように

伸び、途中で分岐している。 蹄跡 比較的残存状況が良く、数点を石膏で型どりした。 ヒトの足跡 HK-46グリッドで1個確認された。



第80図 4-Eブロック



14号畦断面A (南から)



調査風景



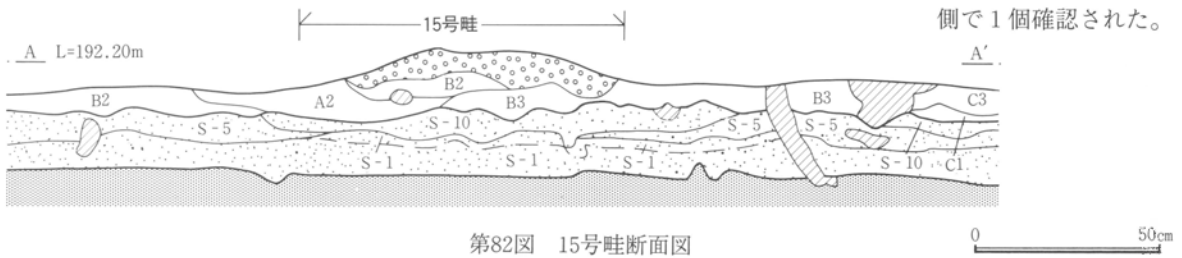
4-Eブロック全景 (北西から)

第3章 FP層下面の調査

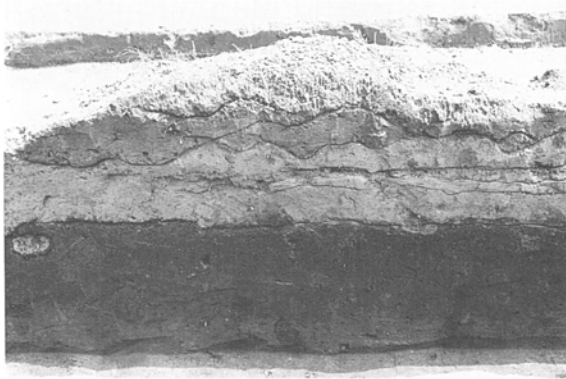
4-Fブロック

畦状遺構 13号畦：Dブロックより連続している。幅1.1m、高さ10cm、走向N-22°-Eであるが、途中で15号畦と合流する。15号畦：13号畦と合流前は幅0.9m、高さ9cm、合流後は幅2.4m、高さ9cmである。走向は大勢としてはN-8°-Eであるが、13号畦との合流点付近で北西に曲がる。合流後は断面Bのように、高まりのピークが2箇所でき、2つの畦の痕跡をとどめる。FA-FP間の土壤層の中間に、炭化物

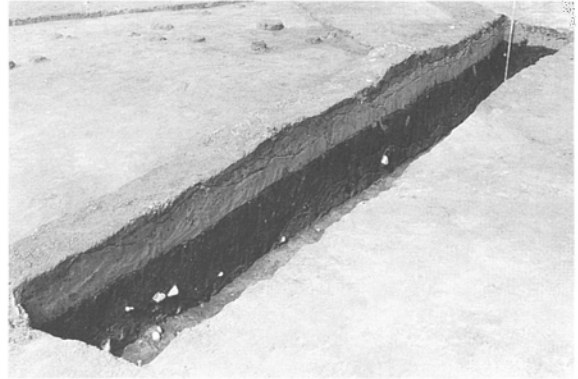
の薄層がある。16号畦：幅2.2m、高さ12cm、走向は、N-3°-WとN-84°-Wである。HP-41グリッドに四方から畦が集まっているが、形状から、東へ伸びるものと、北へ伸びるものを一連の16号畦とした。東へ伸びる部分では、焼土や炭化物が検出された。これらは畦の上面のみでなく、FA-FP間の土壤層にも含まれている。跡跡 やや多い。特にHP-39グリッドで多く、16号畦上にも跡跡が残る。ヒトの足跡 15号畦と16号畦の西側で7個、16号畦の東側で1個確認された。



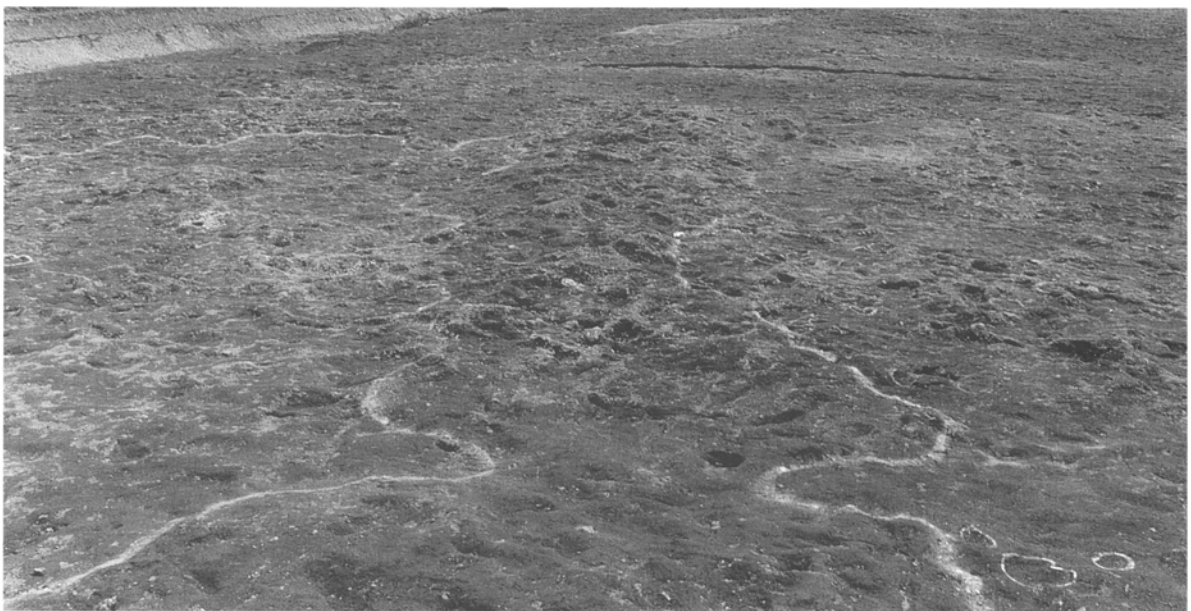
第82図 15号畦断面図



15号畦断面A拡大（西から）

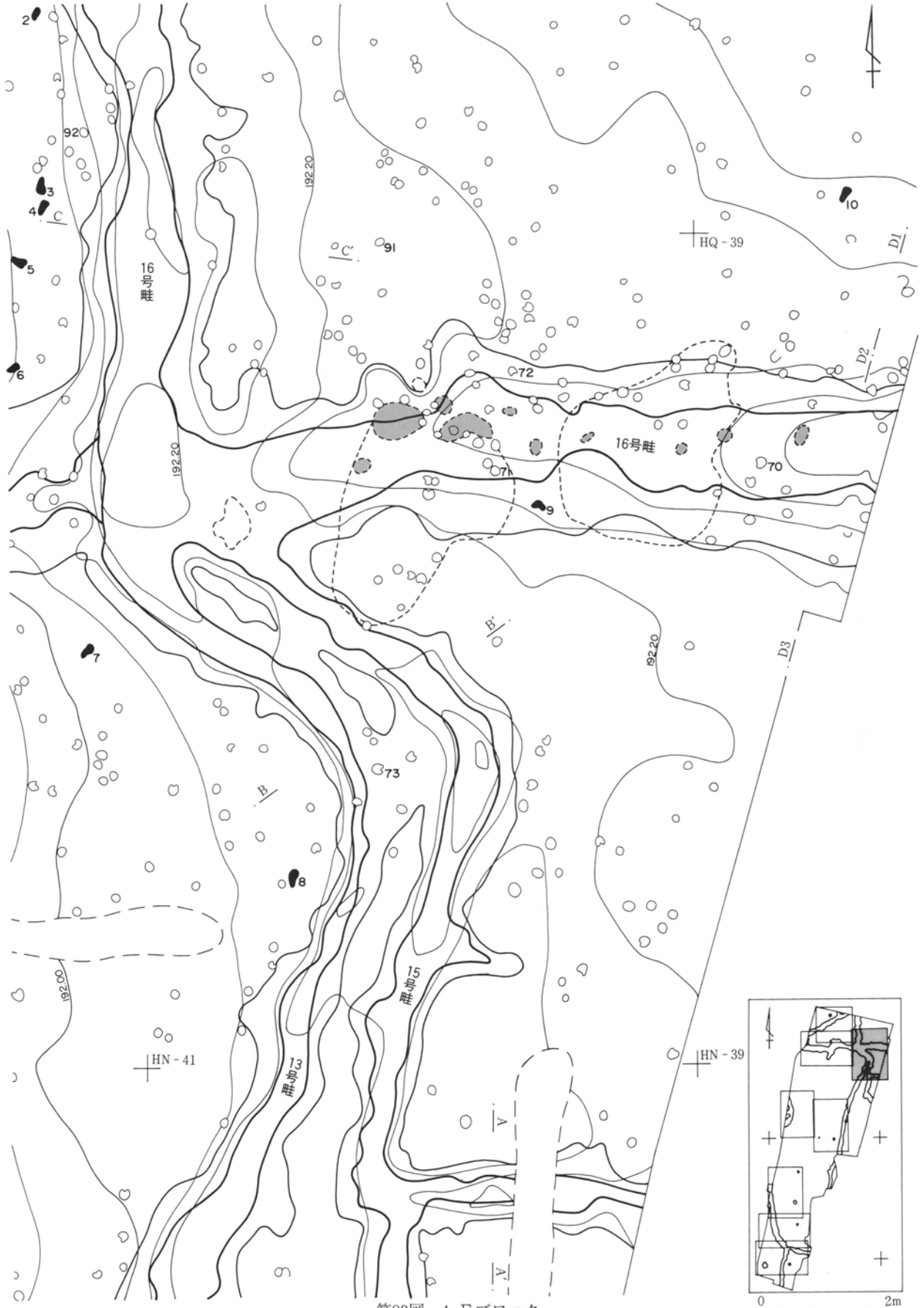


15号畦断面B（南から）

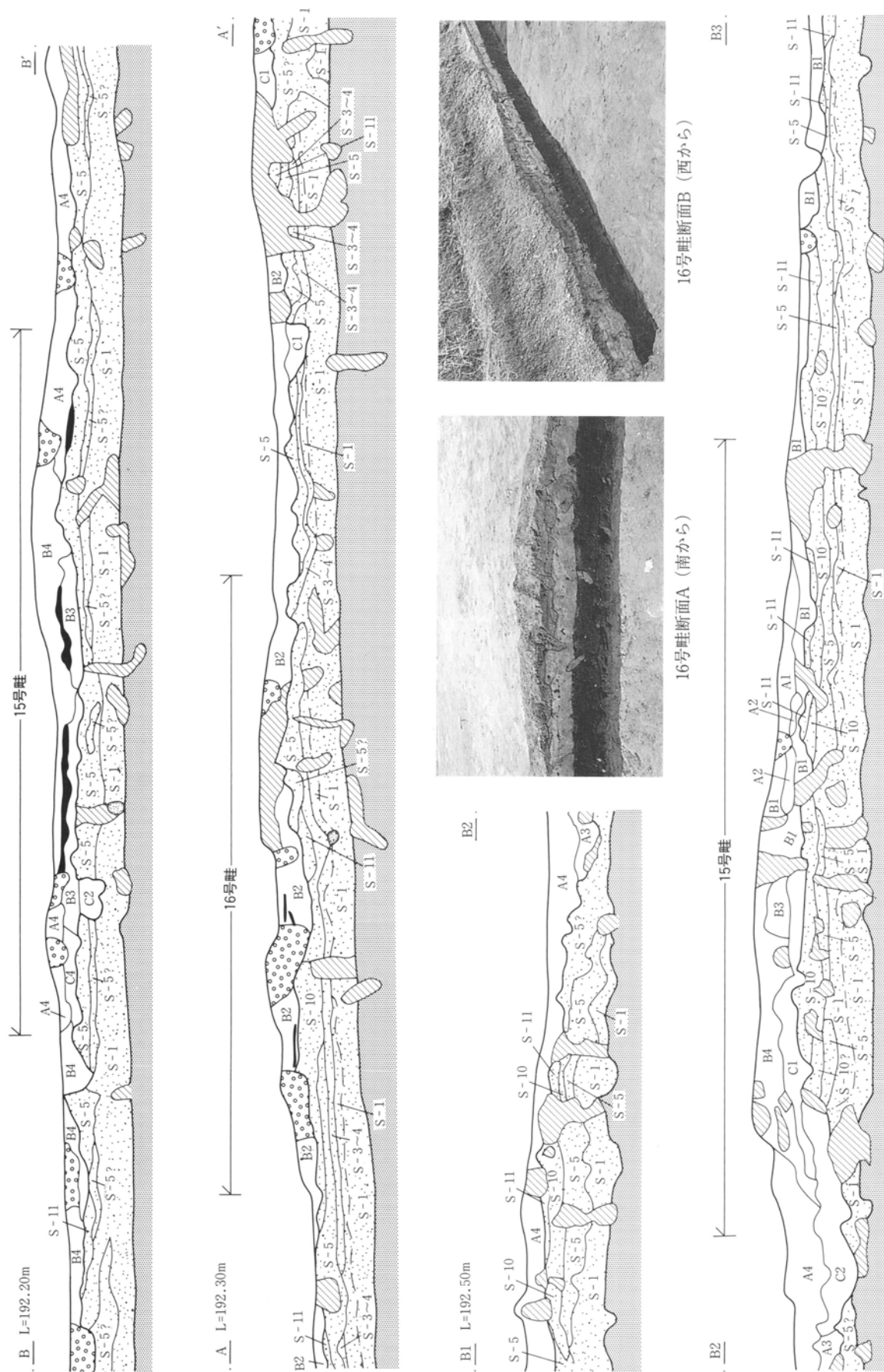


4-Fブロック全景（北から）

第3節 白井南中道遺跡



第83図 4-Fブロック



第84図 15号・16号畦断面図

4-Gブロック

畦状遺構 17号畦：幅1.8m、高さ7cm、走向N-88°-E。西寄りでは畦の形状がはっきりしているが、HP-43グリッド付近から16号畦との交点までの間は不明瞭で、この間は焼土や炭化物が散っている。焼

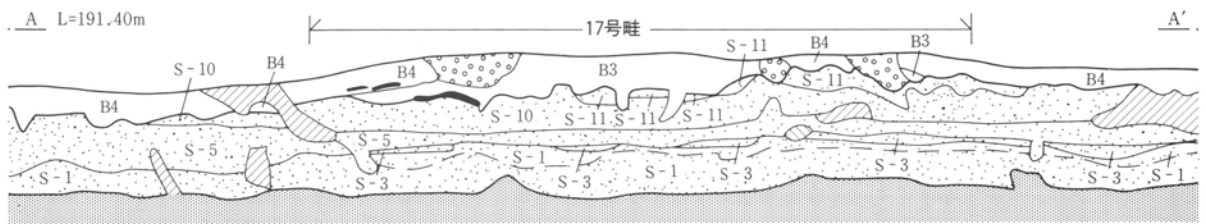
土・炭化物・蹄跡の状況から、16号畦の東西方向に伸びる部分と、17号畦が一連のものである可能性もある。**蹄跡** やや多く、17号畦上にも蹄跡が残る。**ヒトの足跡** HO-43グリッドで1個確認された。



17号畦下の焼土と炭化物（南から）



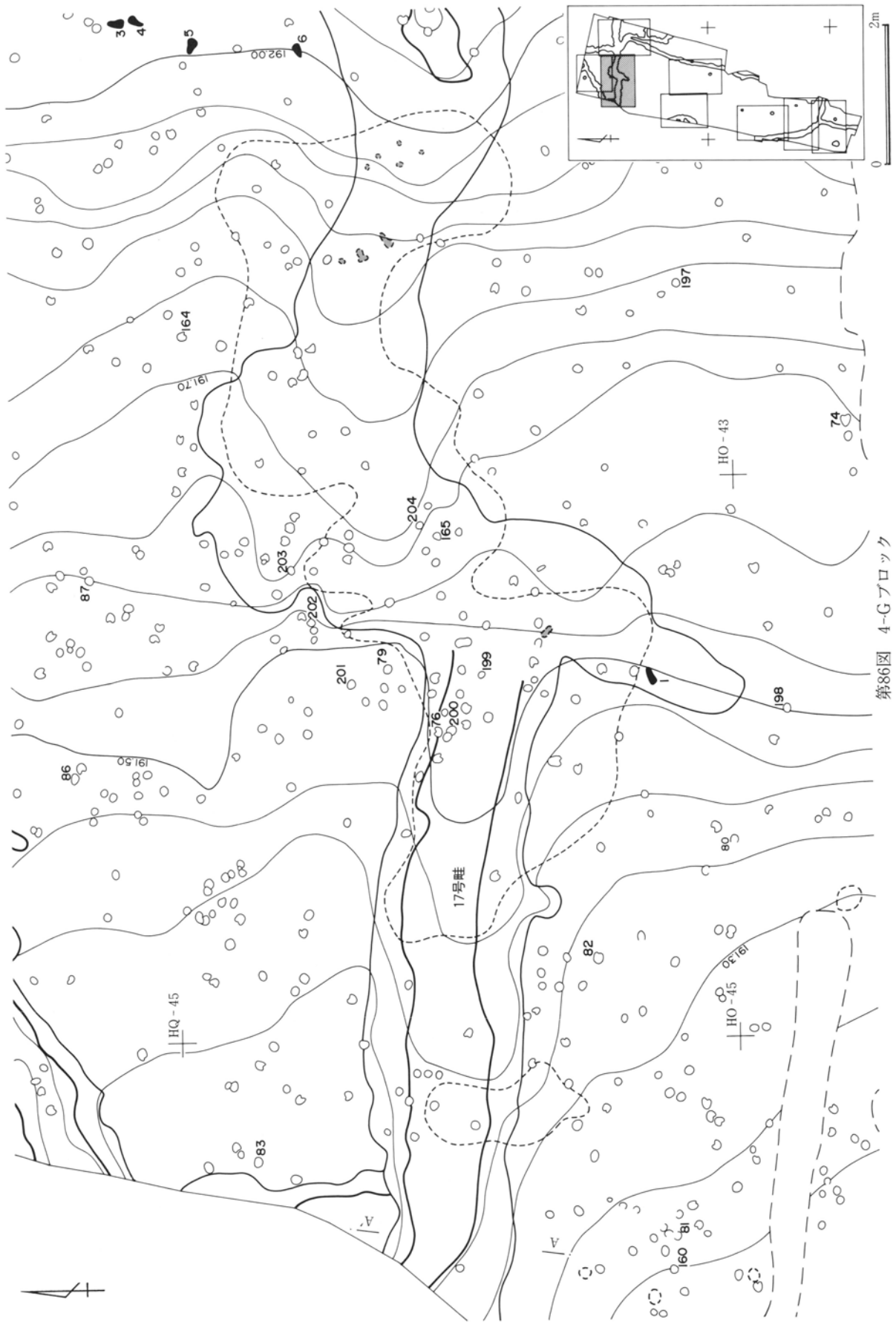
17号畦断面A（東から）



第85図 17号畦断面図



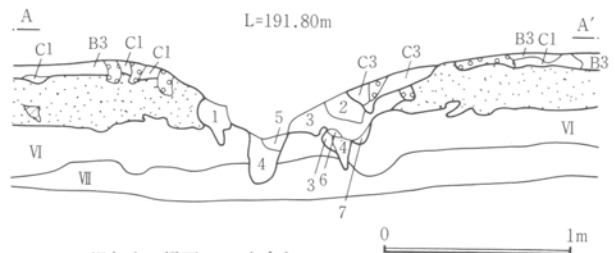
4-Gブロック全景（北から）



第86図 4-Gブロック

4-Hブロック

畦状遺構 18号畦：幅1.4m、高さ12cm、走向N-60°-E。調査区北辺で二股に分かれたのち、それぞれ収束し、5区へは続かない。調査区北壁の断面で、畦から垂直にFPまじりの黒褐色土が上に伸びている。この黒褐色土の周囲では、FPの堆積が乱れ、他の部分より盛り上がっている。これはFP降下後の攪乱ではなく、FP降下時に何らかの物体があったものと思われる。この部分についてFA上面で平面確認を行ったところ、径14cmの円形の落ち込みが検出された。以上のことから、畦上に杭が立てられていた可能性がある。また、畦上の一部でFPの噴火初期の軽石I-1、I-2(P 370参照)が、堆積していない部分がある。 **蹄跡** やや多い。14号立木の西側に集中する箇所あり。 **立木** 14号立木：FP下面ですり鉢状の落ち込みが検出された。根跡部分の土層はFPと、FAを両方含む。

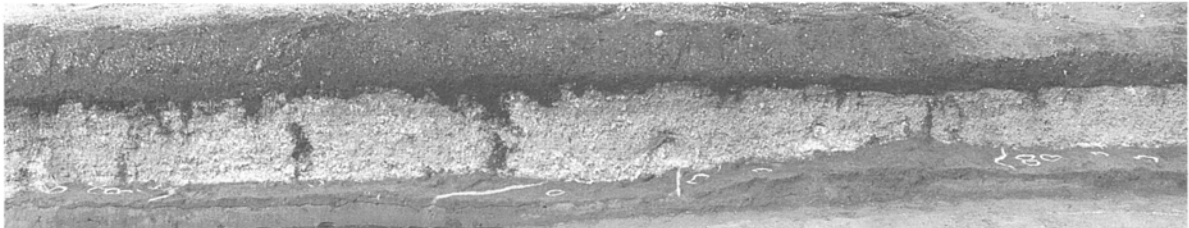


- 1 褐色土。軽石、FAを含む。
- 2 褐色土。FA(S-1、S-11)を多く含む。
- 3 褐色土。FA(S-1)を多く含む。
- 4 暗褐色土。基本土層VI・VII層主体で、軽石含む。締まりなし。
- 5 褐色土。軽石を多量に含む。炭化物を含む。
- 6 基本土層VI層のブロック。
- 7 黒色土。基本土層VI層にFA(S-1)を含む。

第87図 14号立木断面図



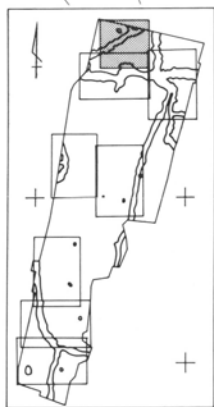
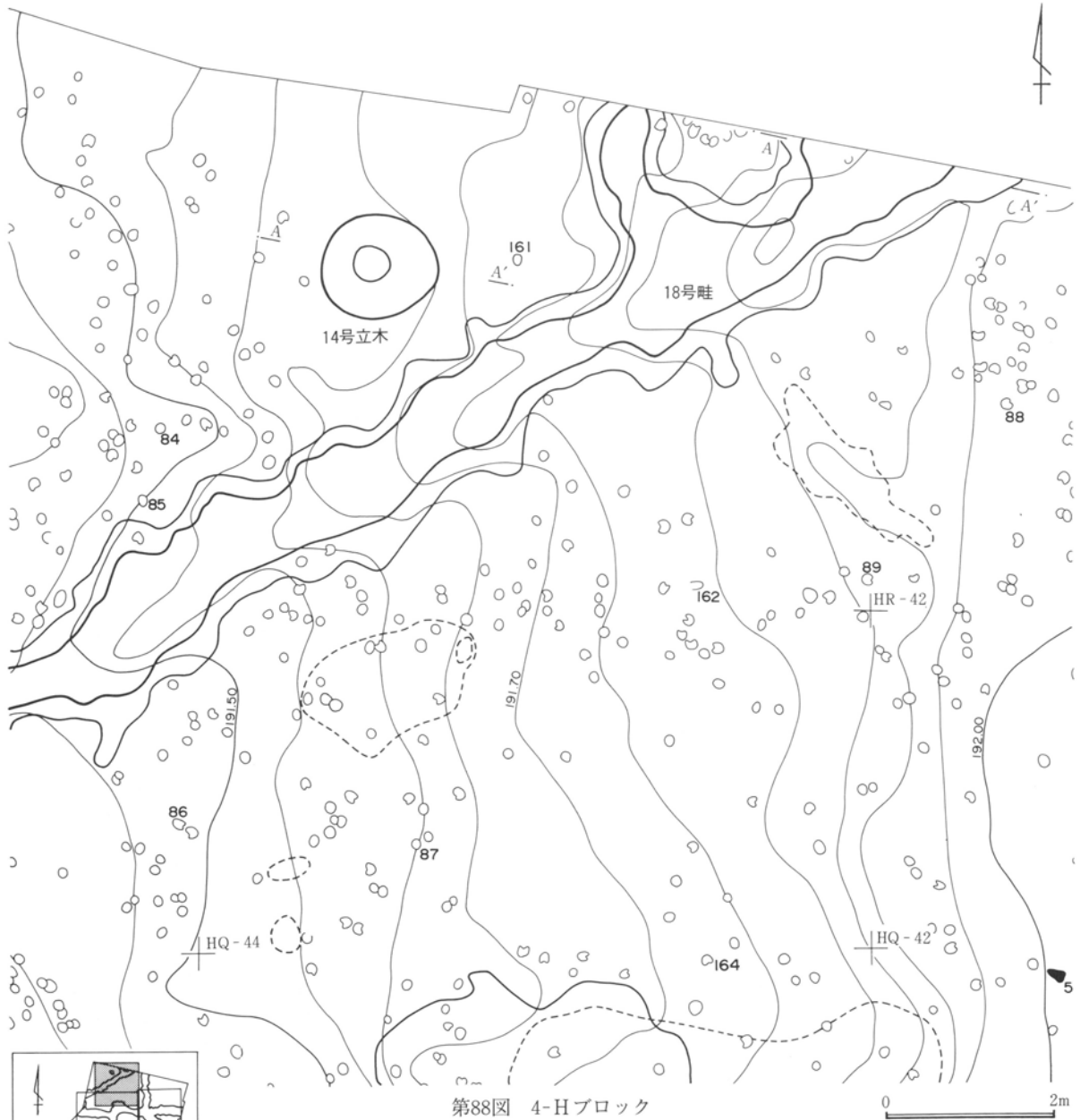
14号立木断面（南から）



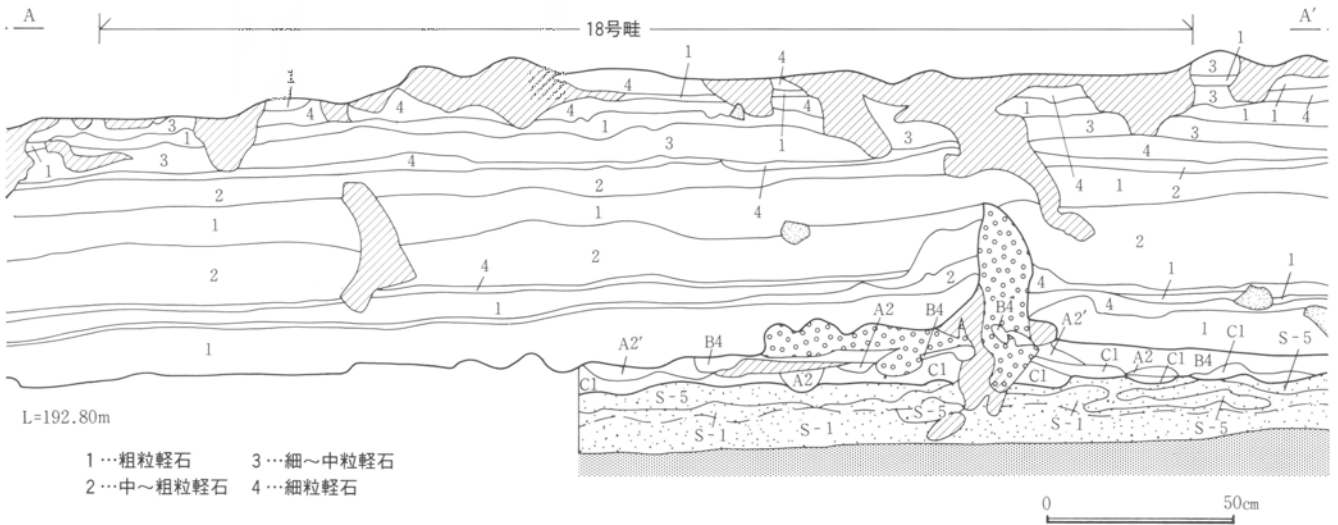
調査区北壁断面（南から）



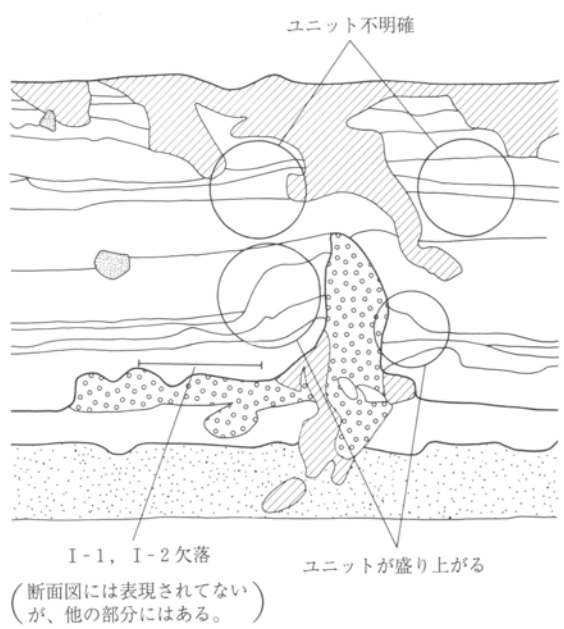
4-Hブロック全景（南西から）



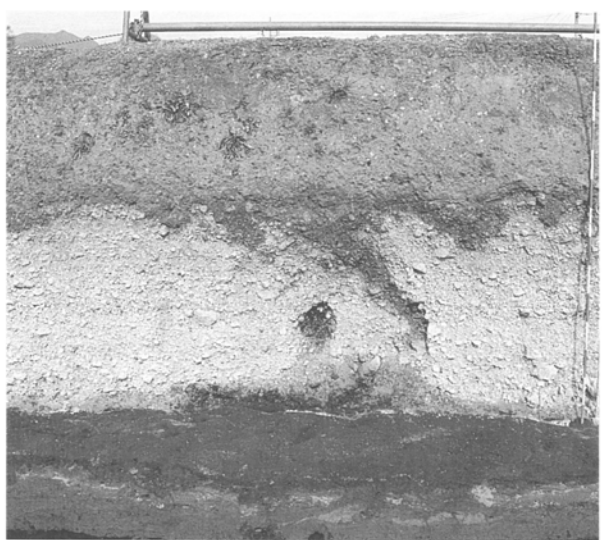
14号立木（窪み部分）（北から）



第89図 18号畦断面図



第90図 18号畦断面拡大図



18号畦断面A (南から)

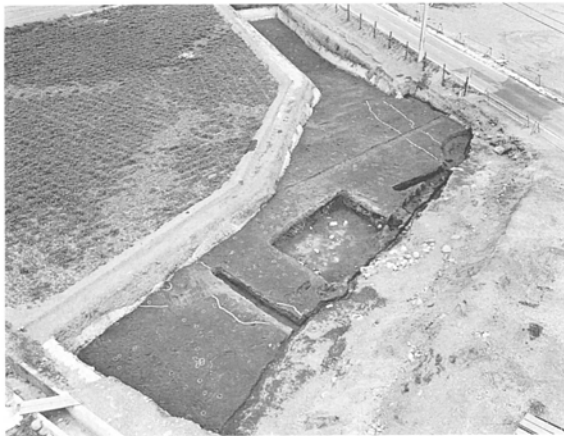
南中道4区畦セクション

遺構番号	断面番号	幅 m	高さ cm	FP混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面の凹凸	その他
11	C	1.2	14	○	△	-	S-11△	僅かに凸	
11	D	1.3	6	○	○	-	S-5△	-	畦上に蹄跡あり。
12	A	1.4	12	○	△	-	S-11△	-	畦下のFAは残存の良い部分と悪い部分がある。
12	C	2.1+	9	○	△	-	不明	不明	
13	A	1.1	6	○	△	-	S-5△	-	畦上に蹄跡あり。
14	A	1.6	6	○	△	-	S-1×	-	
15	A	0.8	9	○	△	-	S-10△	-	
15	B	2.4	10	○	○	-	S-5△	僅かに凸	高まり2列。畦上に蹄跡あり。
16	A	2.2	11	○	○	-	S-11○	僅かに凸	畦上に蹄跡あり。
16	B	2.8	12	-	○	-	S-10×	-	畦北脇のFAの残存悪い。
17	A	1.8	7	○	○	-	S-11○	-	FA直上に炭化物層がある。畦上に蹄跡あり。
18	A	2.8	12	○	△	-	S-5×	-	畦上の障害物により、FPの堆積が乱れる。

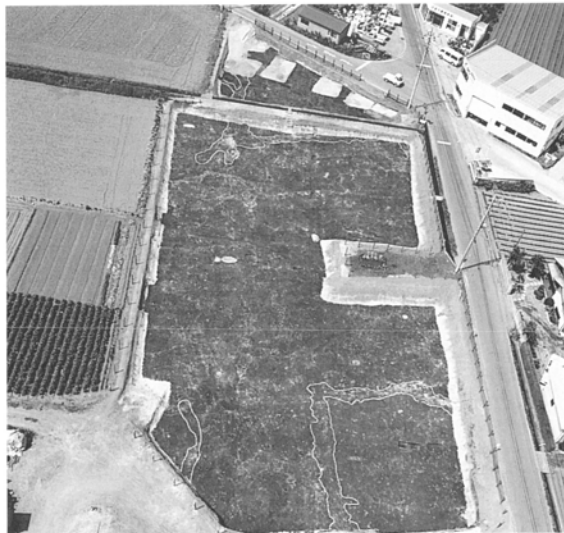
5区概要

微地形 全体的に平坦な調査区であるが、北西隅には丸岩1区から続く谷がある。谷の比高差は1.5m程である。遺構 調査区南部には、南中道4区から続く畦状遺構があり、途中で走向を約90°変えている。この他に4本の畦状遺構と1本の古い畦状遺構が検出された。調査区を横切るように現在の農業用水路があり、その北側はFP上面の遺構で、かなり乱されている。跡跡分布 調査区全体に広がり、所々に跡跡の集中する部分がある。地表面の様子 植物の痕跡がIC-43グリッド周辺で、良く残っている。立木痕は11本検出された。また、この区は土壤

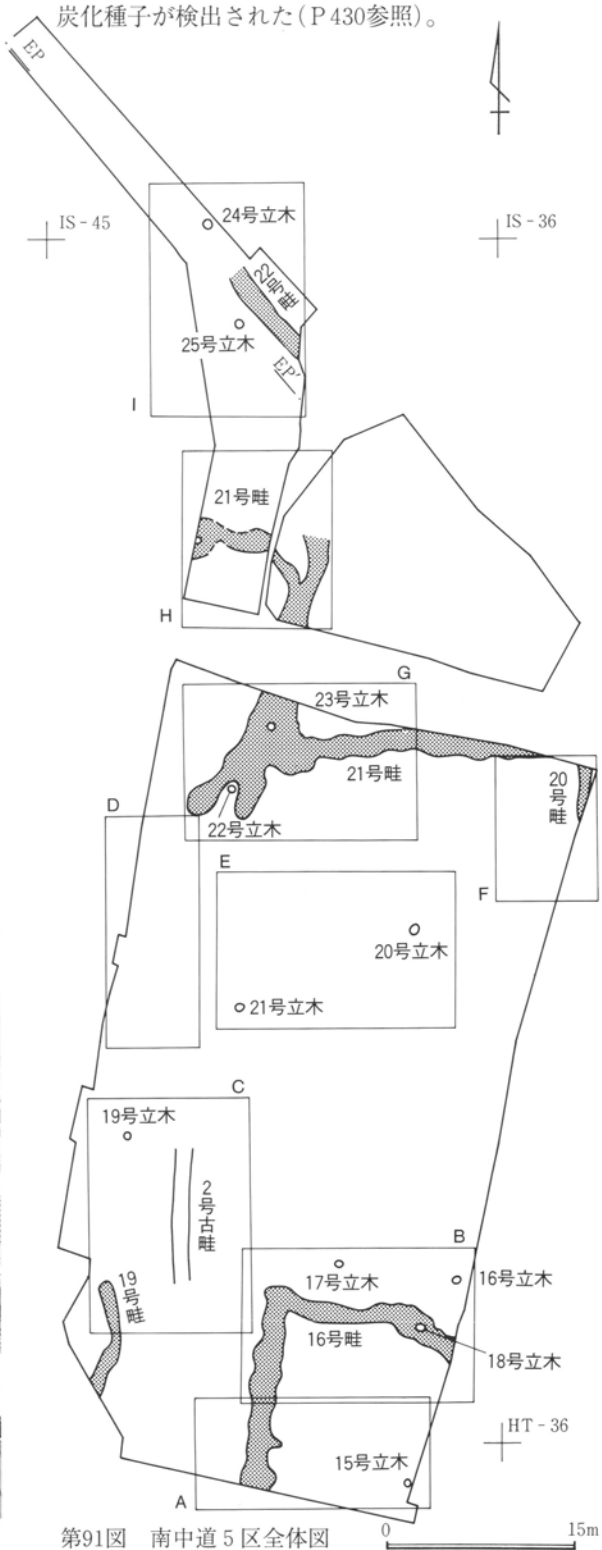
の水洗を行い、微量であるがアワ・ソバ・シソ科の炭化種子が検出された(P430参照)。



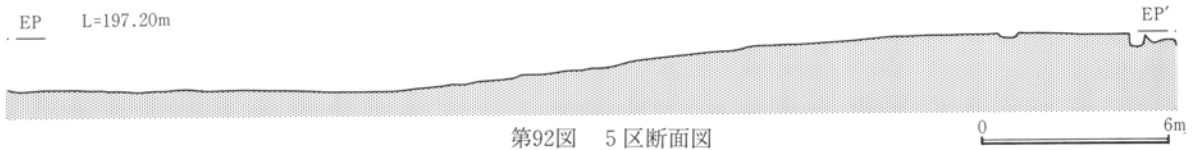
南中道5区北部(南東から)



南中道5区全景(南から)



第91図 南中道5区全体図

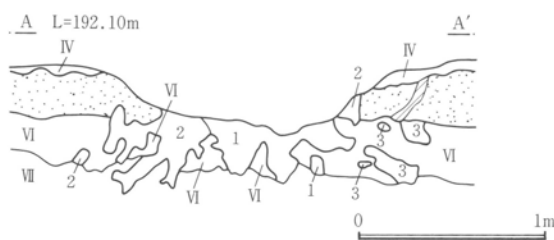


第92図 5区断面図

EP L=197.20m

5-Aブロック

畦状遺構 16号畦：幅2.6m、高さ12cm、走向N-6°-E。南中道4区から続く畦で、調査区内では方形の区画を作っている。断面Cでは、4区北壁断面のような、FPの堆積の乱れはわからない。また、畦の土壌の水洗を行ったところ、炭化したササ類の根株片が検出された。**蹄跡** 16号畦の東側に多い。**立木** 15号立木：FP下面で上幅1.4m、深さ30cmの、円形の落ち込みが検出され、根跡部分の主な土層はFPを含む。



第93図 15号立木断面図

- 1 黒褐色土。FPを多量に含む。
- 2 褐色土。FAを主体とし、FPを含む。
- 3 暗褐色土。FPを含む。



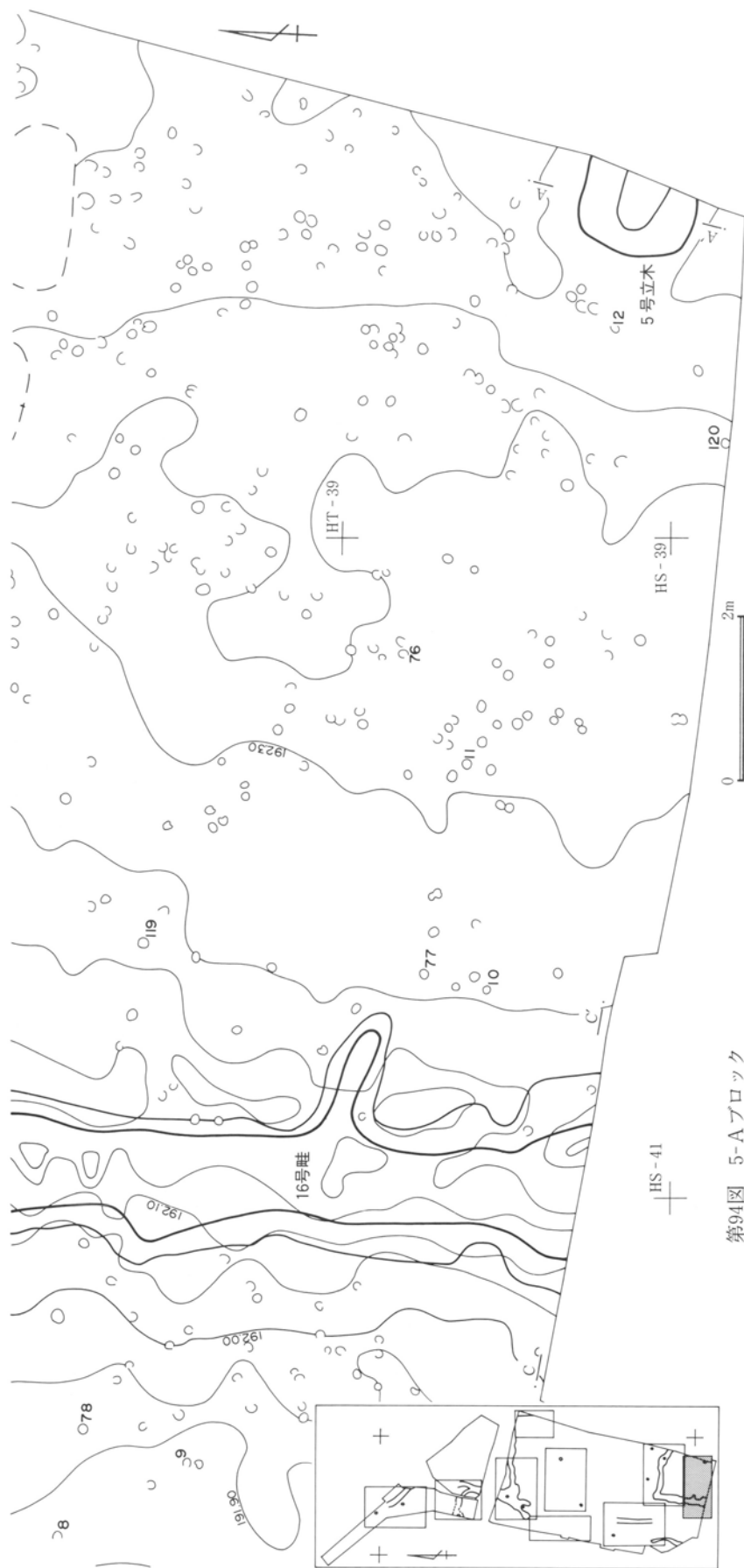
16号畦断面C (北から)



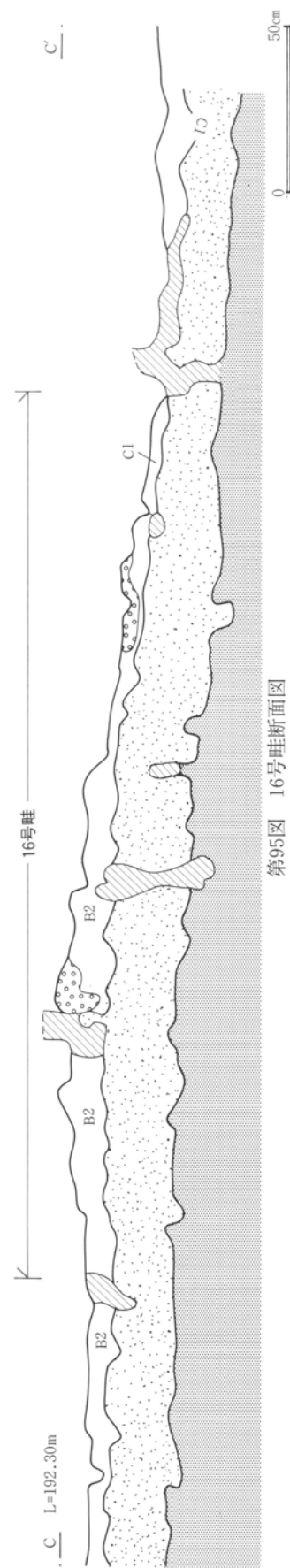
15号立木断面 (西から)



5-Aブロック全景 (東から)



第94図 5-Aブロック

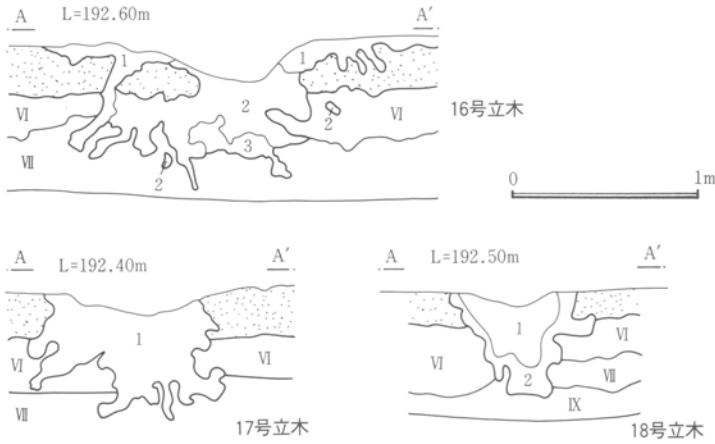


第95図 16号畦断面図

5-Bブロック

畦状遺構 16号畦：幅0.9m～2.4m。HV-40グリッドで走向を約90°変え、走向N-10°-Eとなる。調査区の東端付近では、畦の中央に立木痕(18号立木)がある。
蹄跡 少ない。畦上にも、少量だが蹄跡がある。
立木 16号立木：上幅86cmの落ち込みとして検出された。根跡部分の土層はFPを含む。大き

な塊状のFAを取り込んでいる。17号立木：径60cm程の円形の浅い落ち込みが確認された。根跡部分の土層はFPを含む。18号立木：1号畦上で円形の落ち込みが確認された。根跡部分の土層はFPを含む。
その他 畦の周囲の土層からは、コナラ節やタケ亜科(ササ類)の炭化物が検出されている。



第96図 16号・17号・18号立木断面図

16号立木

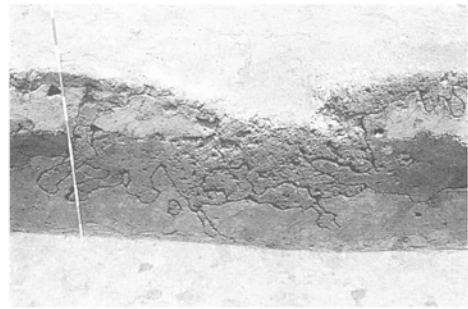
- 1 褐色土。基本土層IV層に類似し、FPを含む。
- 2 暗褐色土。FPを多く含む。
- 3 暗褐色土。基本土層VI層主体で、FPを含む。

17号立木

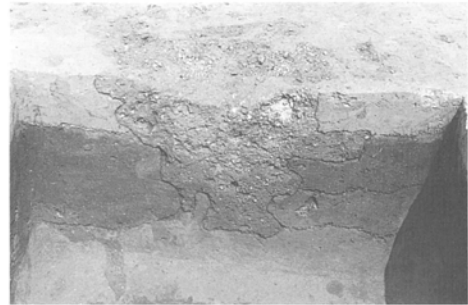
- 1 黒褐色土。FPを多く含む。中央部ほどFPが多い。

18号立木

- 1 暗褐色土。FPを多く含む。
- 2 黒褐色土。FPを含む。



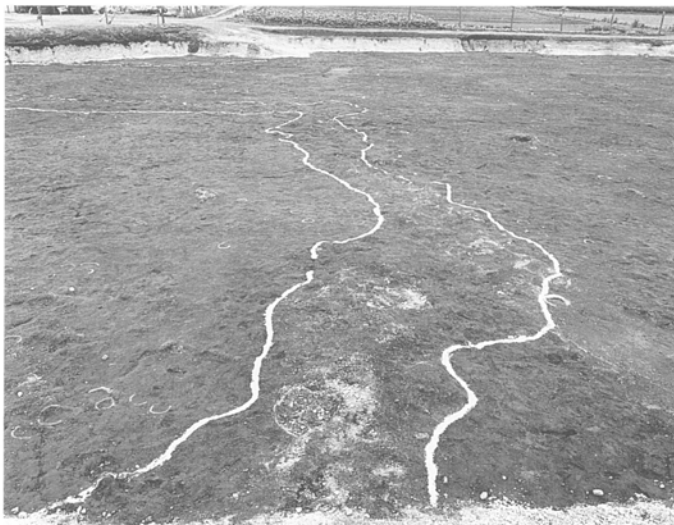
16号立木断面 (南から)



18号立木断面 (南から)



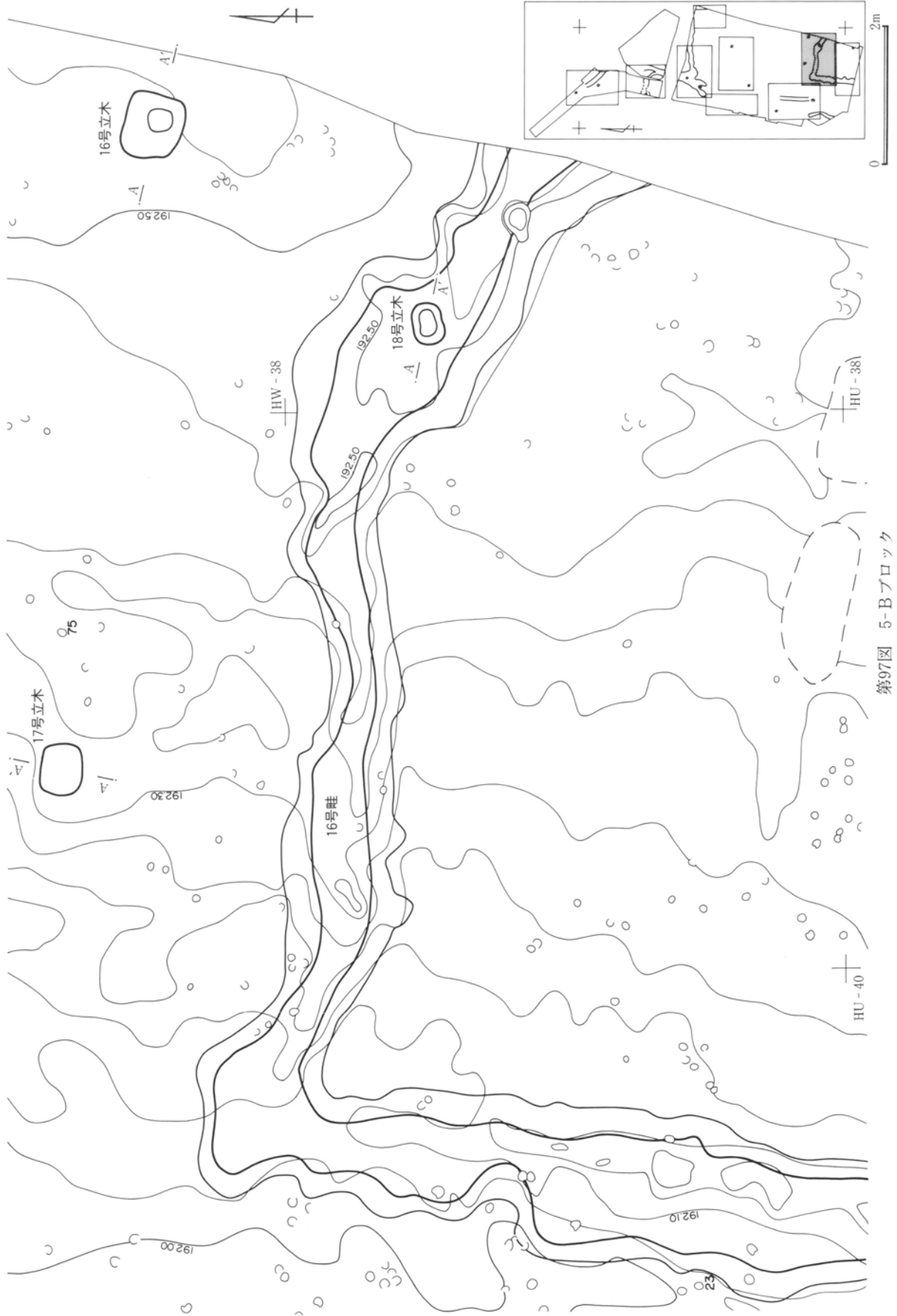
17号立木 (完掘状況) (西から)



5-Bブロック全景 (東から)



17号立木断面 (検出状況) (北東から)



第97図 5-Bブロック

5-Cブロック

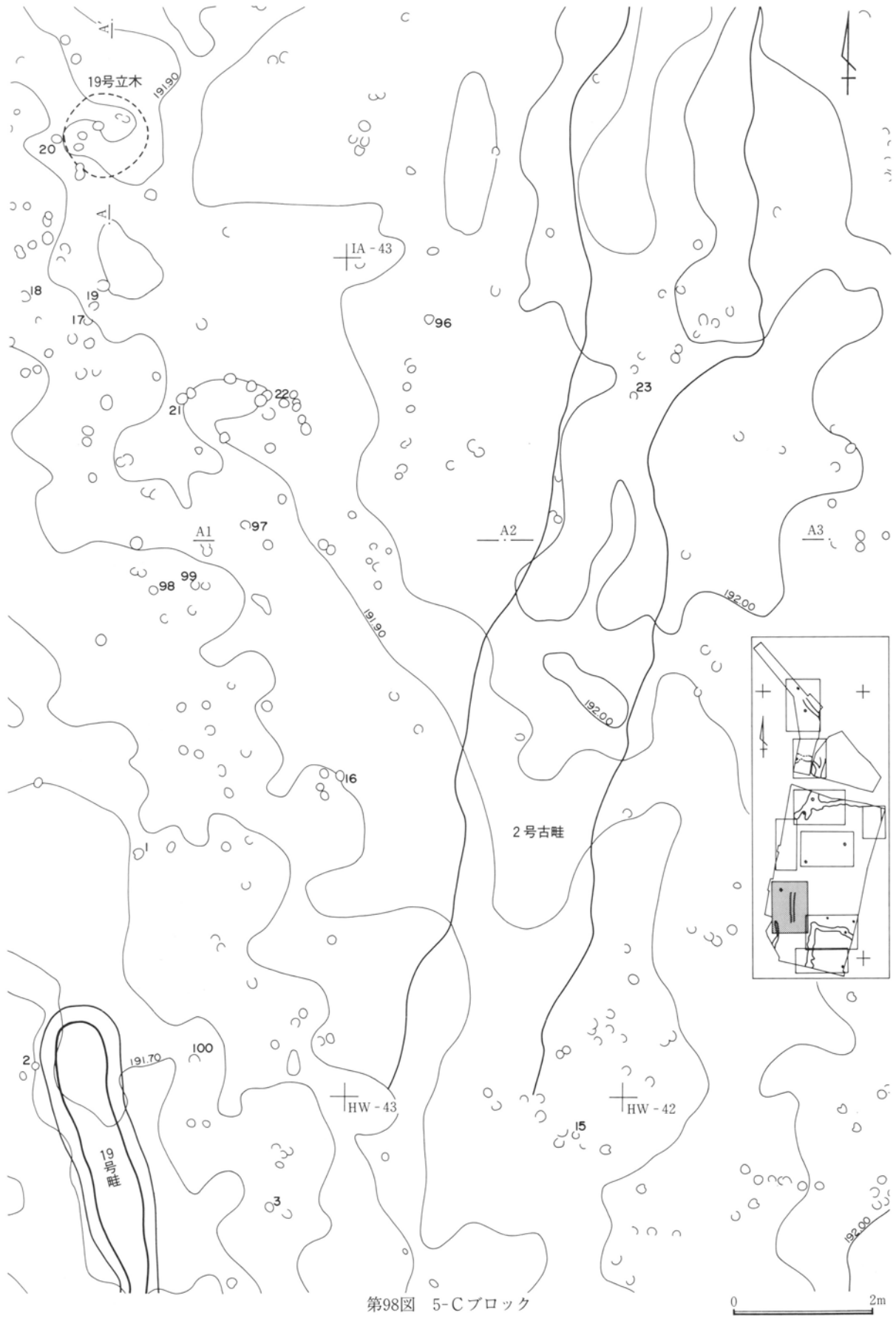
畦状遺構 19号畦：幅0.6m～1.1m、高さ5cm、走向N-10°-W。調査区の中に畦の一端がある。**古い畦状遺構** 2号古畦：幅2.0m、高さ5cm、走向N-10°-E。FP下面では、なだらかな僅かな高まりが部分的に確認できる程度である。FA-FP間の土壌層を少し削ると、畦部分のみ帯状に炭化物が多く、他と識別できる。**蹄跡** 2号古畦の西側に、帯状に蹄跡の多い箇所がある。しかし連続した歩行跡は確認できなかった。**立木** 19号立木：この立木はFA上面の調査時に検出された。根跡部分の土層はFPを含む黒褐色土で、基本土層Ⅵ層の下面では、横方向に1.3mの広がりをもつ。

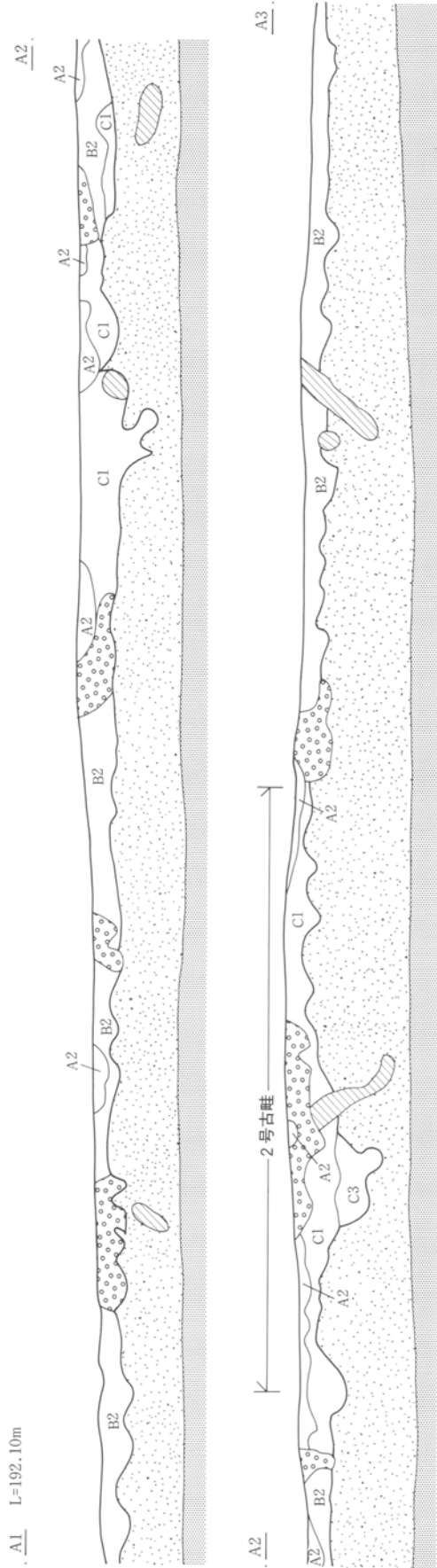


2号古畦炭化物出土状態（南から）



5-Cブロック全景（北から）





第99図 2号古畦断面図

0 50cm

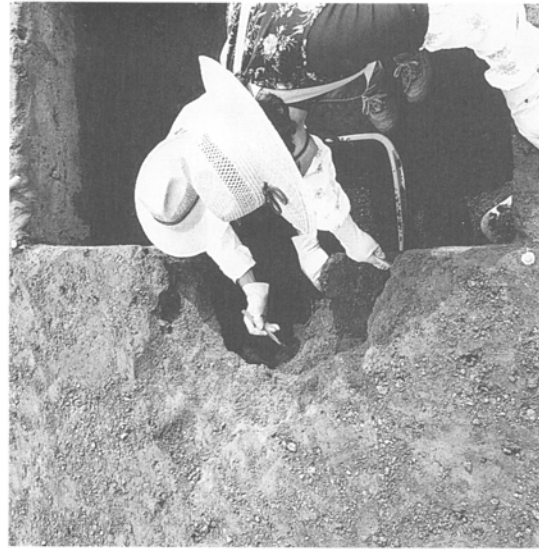


A L=191.90m

19号立木

1 黒褐色土。FPを多く含む。

0 1m



5-Dブロック

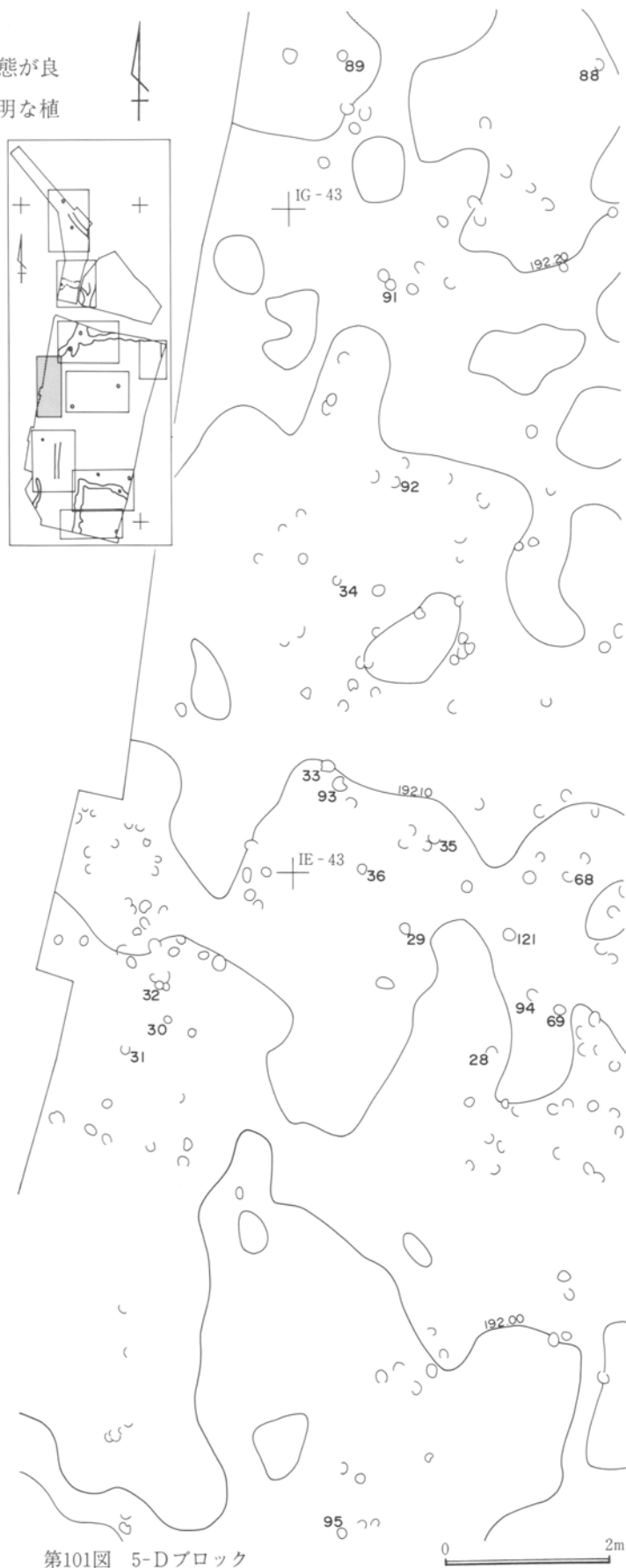
蹄跡 带状に蹄跡の多い箇所があり、保存状態が良い。その他 IC-43グリッド付近では、鮮明な植物痕が検出された。



5-Dブロック蹄跡



IC-43グリッド植物痕 (東から)



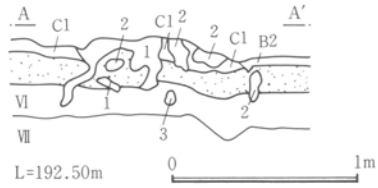
第101図 5-Dブロック

5-Eブロック

跡跡 全体的に少ないが、帯状に跡跡のやや多い箇所がある。立木 20号立木：不定形な落ち込みで、内部に盛り上がりがある。根跡部分の土層はFPとFAを含む。 21号立木：FA上面の調査時に検出された立木である。根跡部分の土層はFPとFAを含む。



IC-37グリッド植物痕（北から）



20号立木

- 1 黒褐色土。FAを多く含む。FPを含む。
- 2 暗褐色土。FPを含む。
- 3 暗褐色土。FAを含む。

第102図 20号立木断面図



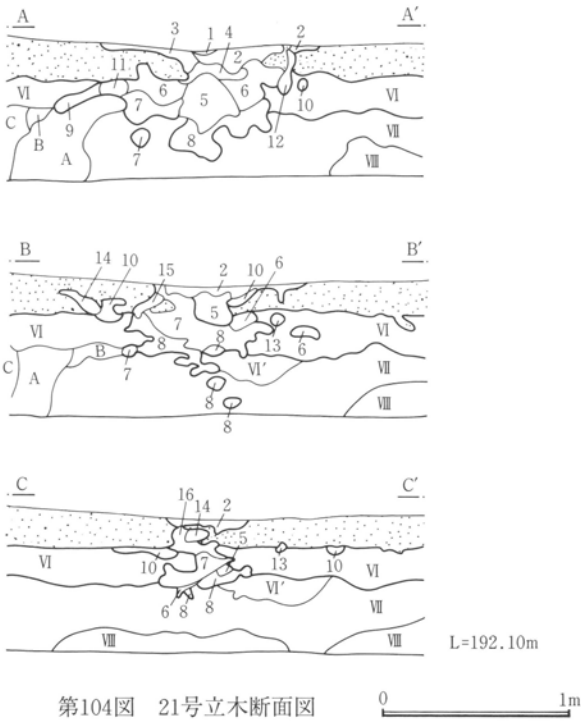
調査風景



5-Eブロック全景（北から）



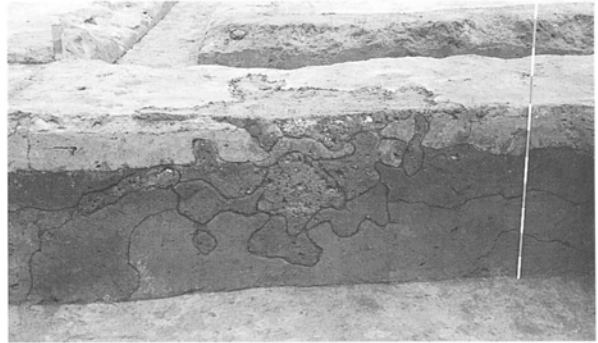
第103図 5-Eブロック



第104図 21号立木断面図

21号立木

- 1 褐灰色土。FPを多量に含む。
 - 2 褐灰色土。FPを多量に含む。FAを含む。
 - 3 灰黄褐色土。基本土層VI層をブロック状に含む。
 - 4 灰褐色土。FPを少量含む。FAを含む。
 - 5 褐灰色土。FPを多量に含む。FA、基本土層VI層を含む。締まりなし。
 - 6 黒褐色土。FP、FAを含む。
 - 7 黒褐色土。FP、FA、基本土層VII層を少量含む。
 - 8 黒褐色土。基本土層VII層を多量に含む。FP、FAを僅かに含む。
 - 9 黒色土。FPを多量に含む。
 - 10 黒褐色土。FAを多く含む。
 - 11 褐灰色土。FA主体で、基本土層VI層を含む。
 - 12 黒褐色土。基本土層VI層主体で、基本土層VII層を含む。締まりなし。
 - 13 黒褐色土。明黄褐色土を多く含む。
 - 14 にぶい橙色土。FA主体で、基本土層VI層を少量含む。
 - 15 にぶい橙色土。FA主体で、基本土層VI層を多く含む。
 - 16 にぶい橙色土。FAと基本土層VI層が混じり合う。
- A・B・Cは倒木流入土。



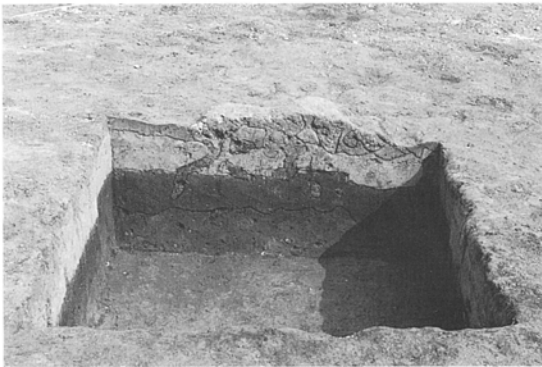
21号立木断面A (西から)



21号立木断面B (西から)



21号立木断面C (西から)



20号立木断面 (北西から)



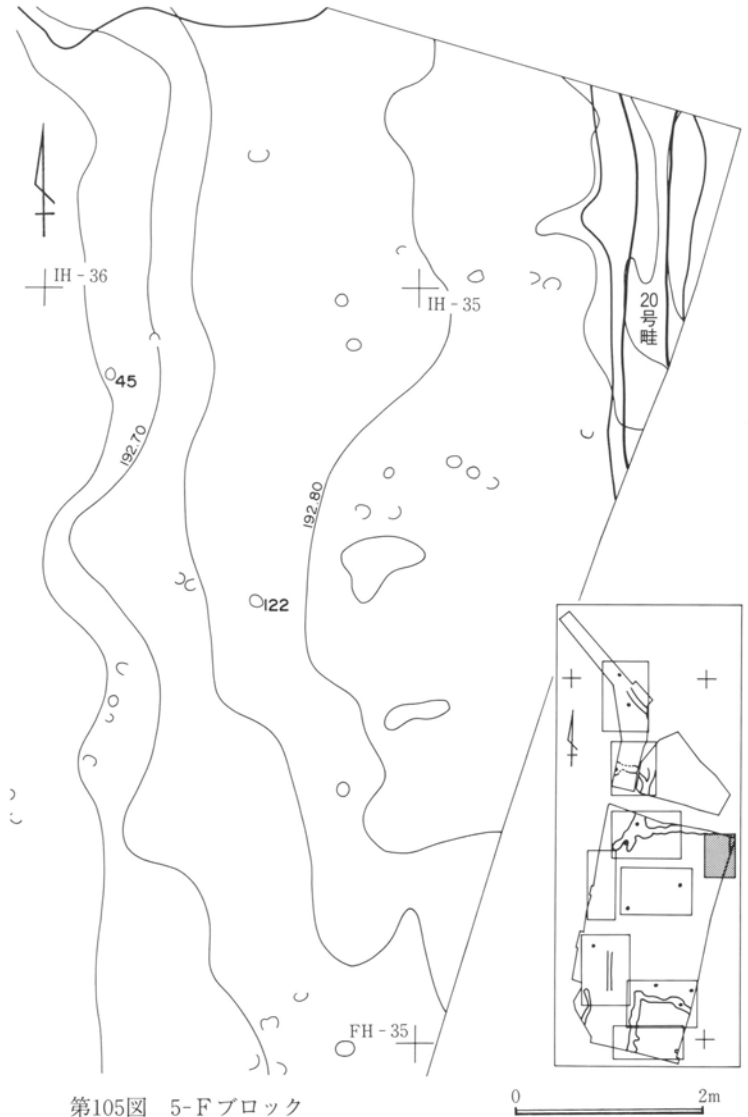
20号立木 (北から)

5-Fブロック

畦状遺構 20号畦：幅1.1m、高さ5cm、走向N-3°-W。21号畦との関連は不明。土壌層(IV層)を少し削ると、FP混じりの暗褐色土中に炭化物が点在する。ササ類の地下茎部分と思われる。跡跡 少ない。その他 土壌の水洗を行ったところ、IG-35グリッドで炭化したアワの果実が、2点検出されている。



20号畦下の炭化物(竹串の立っている所が炭化物出土地点)(北から)



第105図 5-Fブロック

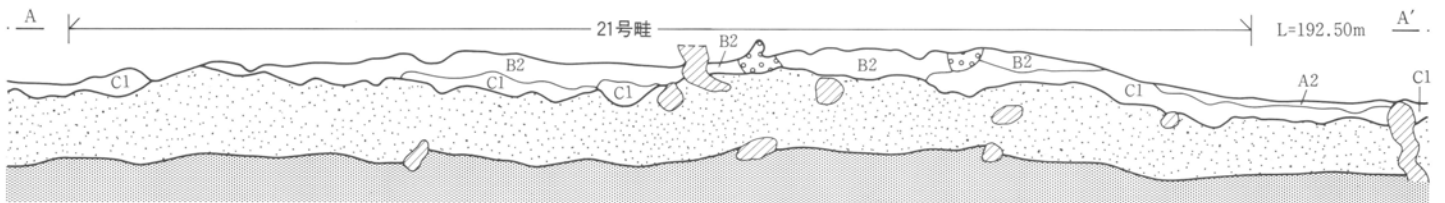


5-Fブロック全景(北から)

5-Gブロック

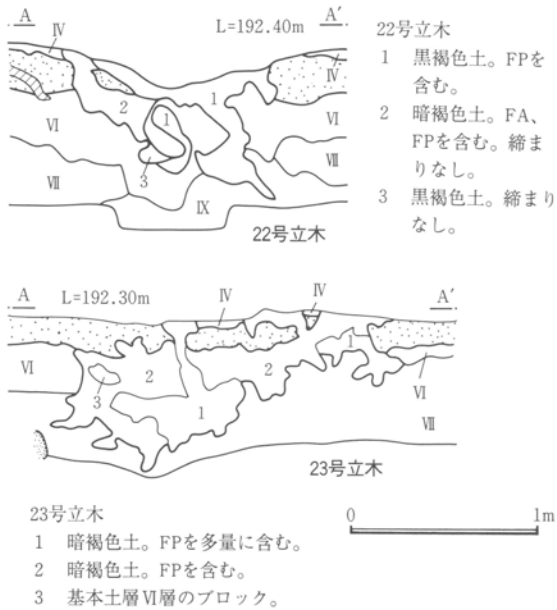
畦状遺構 21号畦：幅1.6m～2.6m、高さ13cm、走向N-34°-E、N-86°-E。II-40グリッドでL字状に曲がり、そこから南西方向に張出しがある。土壌層（IV層）を少し削ると、炭化物や焼土が、畦下の広範囲にわたって検出された。特にIH-39グリッド付近には、焼土塊が集中している。炭化物はササ類の地下茎部分と思われるものが多く、直立していることから、この場所に生えていたものと考えられる。 **蹄跡** 畦の周囲で少ない。また僅かであるが、畦上に

も蹄跡が確認された。 **立木** 22号立木：21号畦が枝分かれしている部分に、挟まれるような場所で、径50cm程の不定形の浅い落ち込みが確認された。根跡部分の土層はFPのみを含む部分と、FPとFAを含む部分がある。 23号立木：21号畦上で検出された。検出面はFA上面であるが、根跡部分の土層はFPを多く含んでいる。 **その他** 土壌の水洗を行った結果、IH-38グリッドで炭化したソバの種子とシソ科の果実が各1点づつ検出されている。

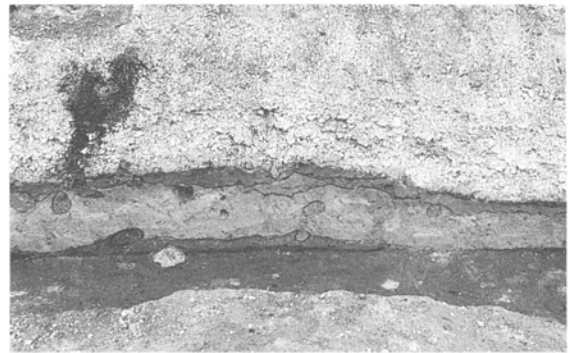


第106図 21号畦断面図

0 50cm



第107図 22号・23号立木断面図



21号畦断面A（南から）



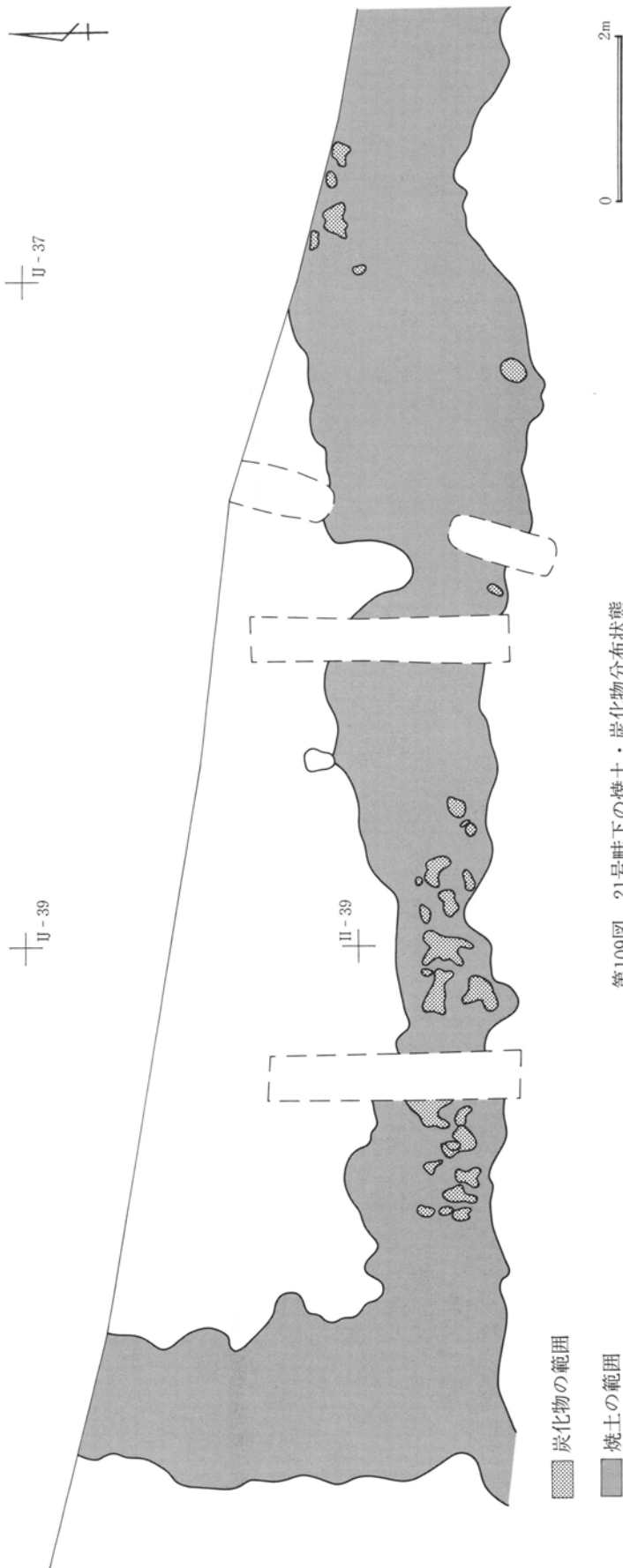
5-Gブロック全景（西から）



22号立木断面（南から）



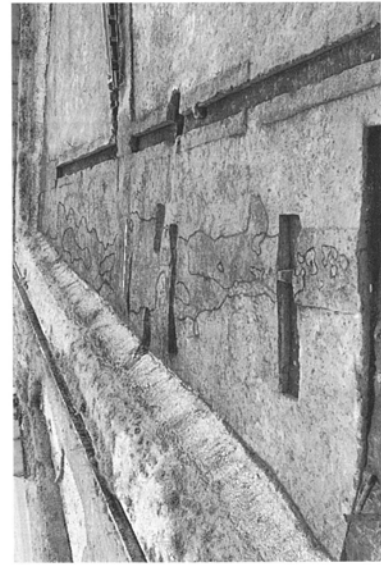
第108図 5-Gブロック



第109図 21号畦下の焼土・炭化物分布状態



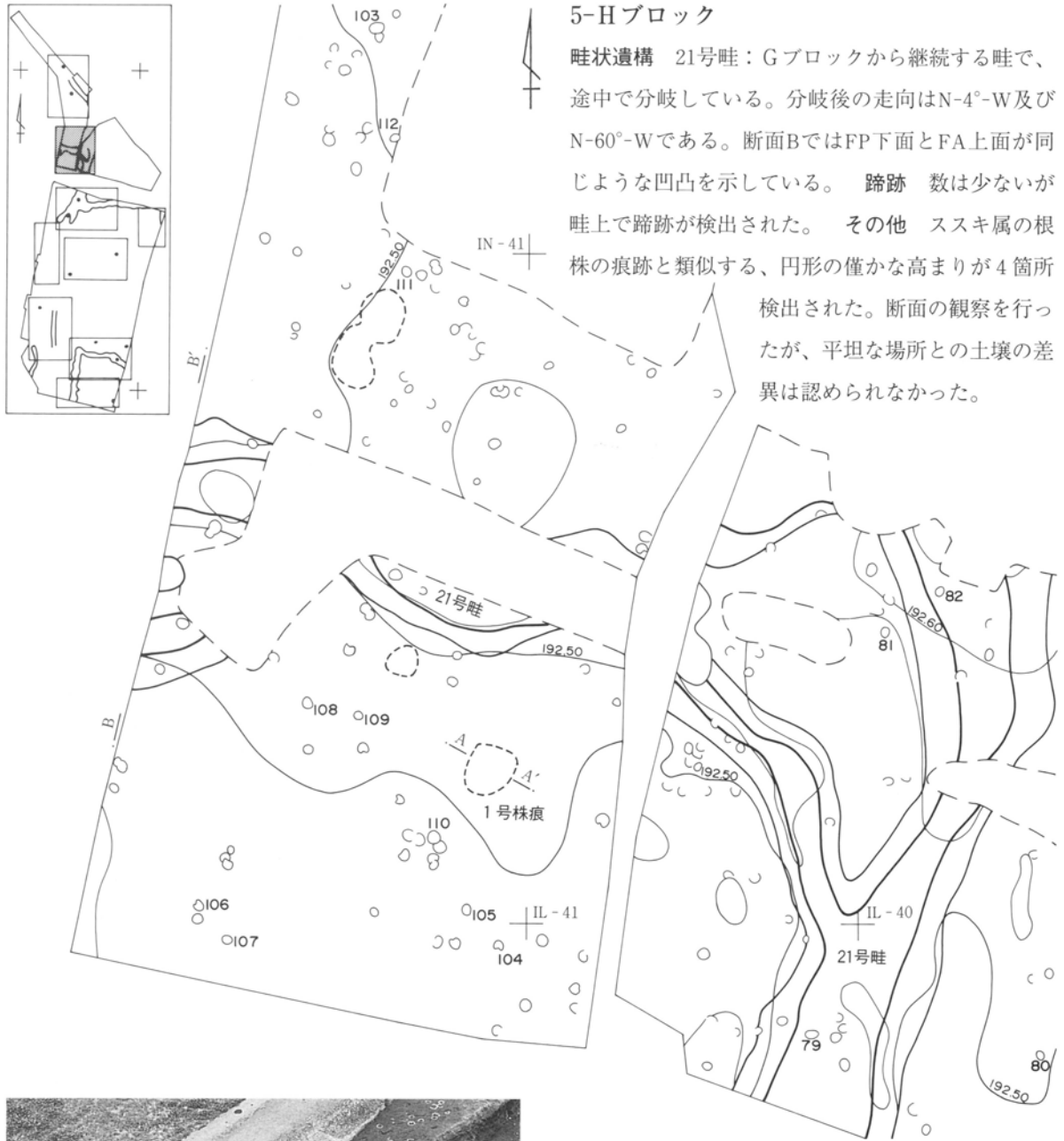
21号畦下の焼土断面 (東から)



21号畦下の焼土・炭化物分布状態 (西から)



21号畦下の焼土・炭化物 (南から)



5-Hブロック

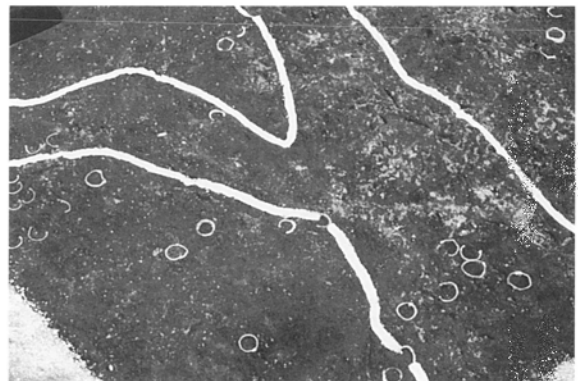
畦状遺構 21号畦：Gブロックから継続する畦で、途中で分岐している。分岐後の走向はN-4°-W及びN-60°-Wである。断面BではFP下面とFA上面が同じような凹凸を示している。 蹄跡 数は少ないが畦上で蹄跡が検出された。 その他 ススキ属の根株の痕跡と類似する、円形の僅かな高まりが4箇所検出された。断面の観察を行ったが、平坦な場所との土壤の差異は認められなかった。

第110図 5-Hブロック

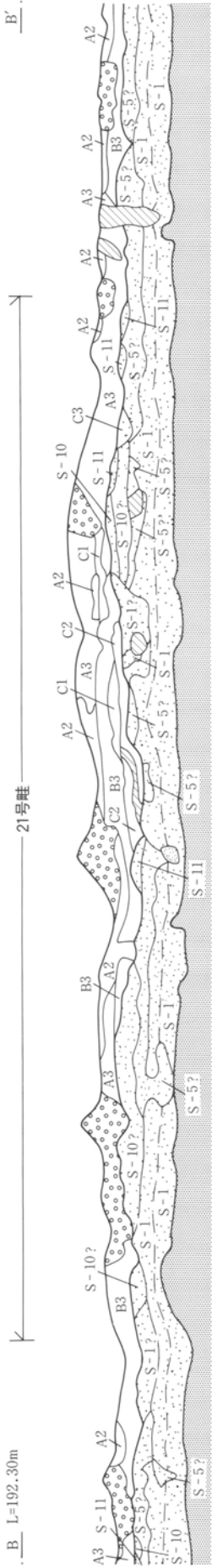
0 2m



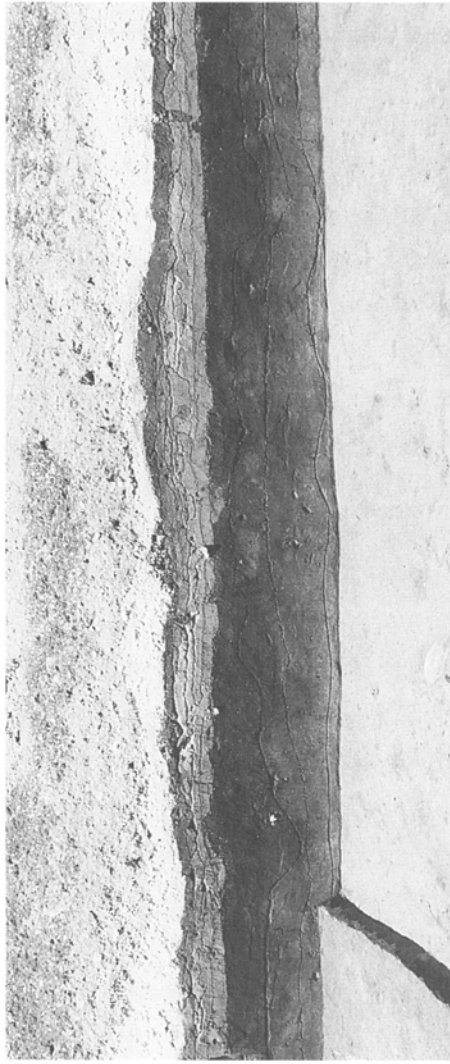
5-Hブロック西部 (南東から)



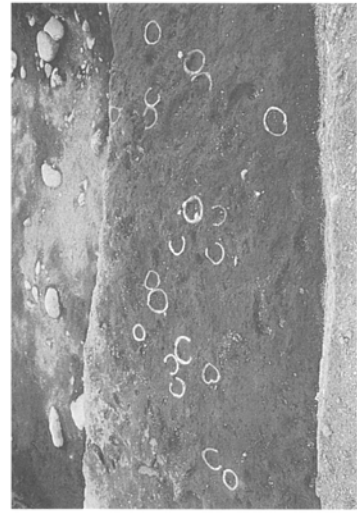
5-Hブロック東部 (南西から)



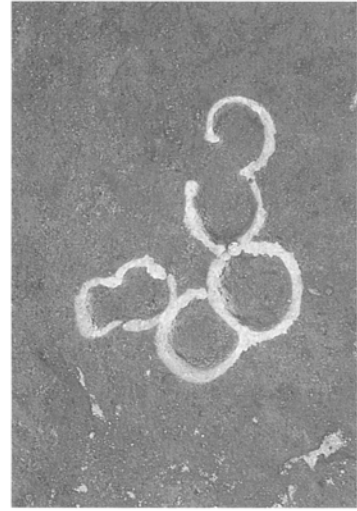
第1111図 21号畦断面図



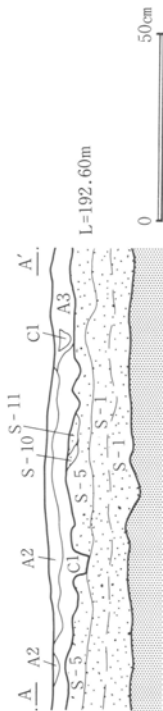
21号畦断面B (東から)



跡跡分布 (西から)



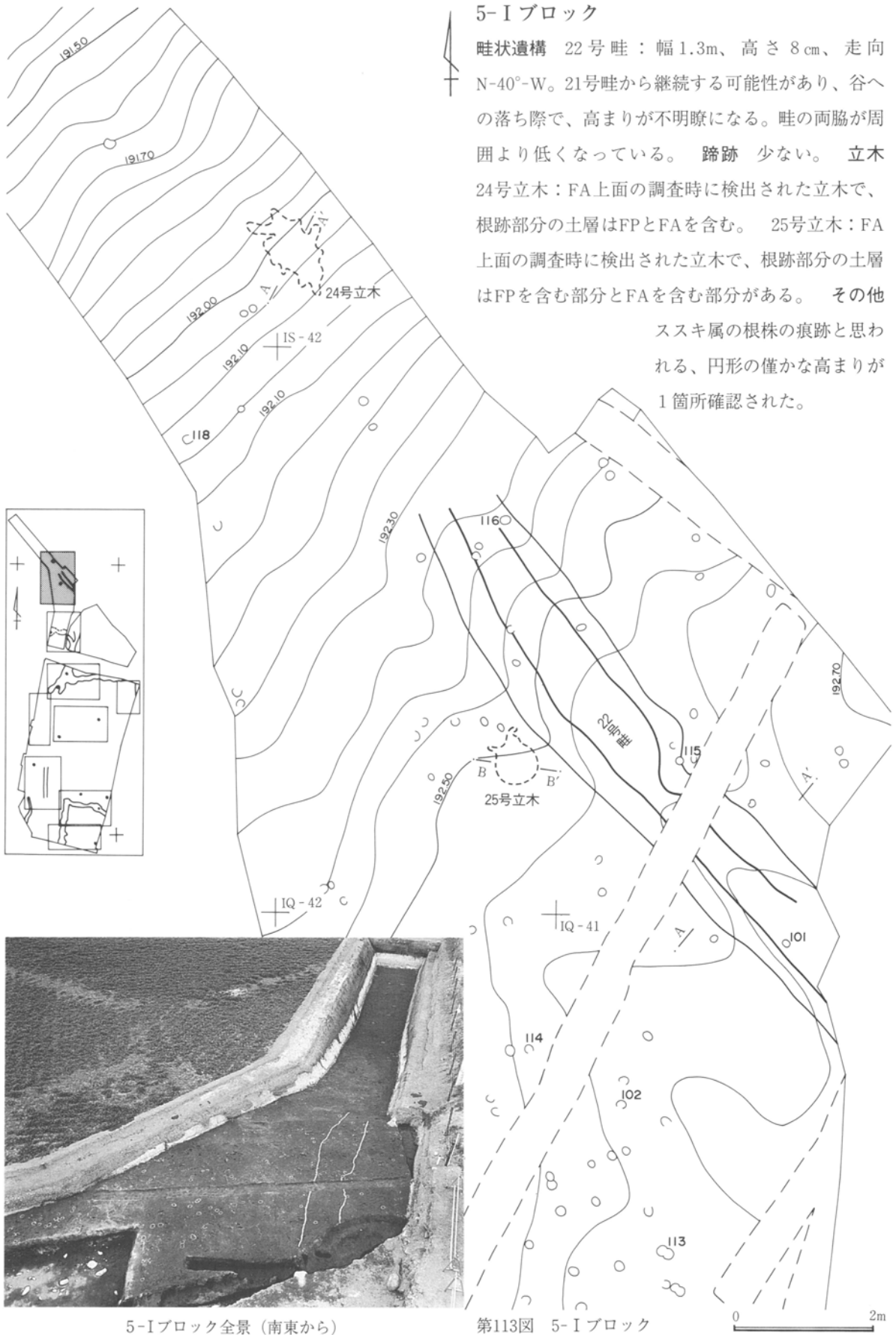
跡跡No.110付近 (北から)



第1112図 1号株痕断面図



1号株痕断面 (南から)

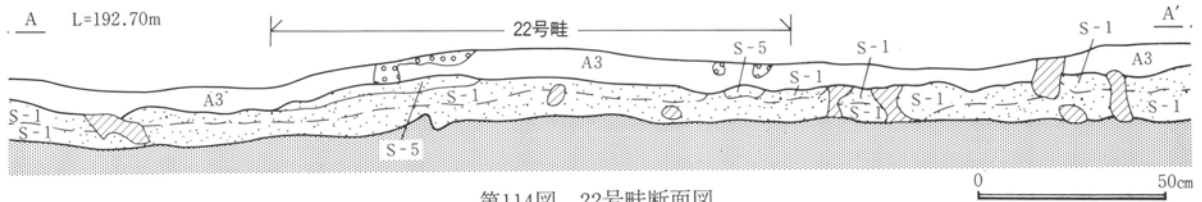


5-Iブロック

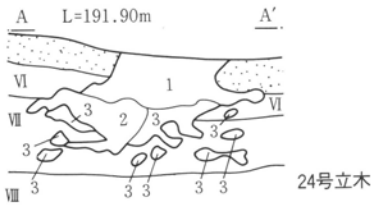
畦状遺構 22号畦：幅1.3m、高さ8cm、走向N-40°-W。21号畦から継続する可能性があり、谷への落ち際で、高まりが不明瞭になる。畦の両脇が周囲より低くなっている。 蹄跡 少ない。 立木 24号立木：FA上面の調査時に検出された立木で、根跡部分の土層はFPとFAを含む。 25号立木：FA上面の調査時に検出された立木で、根跡部分の土層はFPを含む部分とFAを含む部分がある。 その他 ススキ属の根株の痕跡と思われる、円形の僅かな高まりが1箇所確認された。

5-Iブロック全景 (南東から)

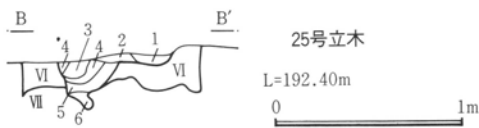
第113図 5-Iブロック



第114図 22号畦断面図



24号立木



25号立木

第115図 24号・25号立木断面図

24号立木

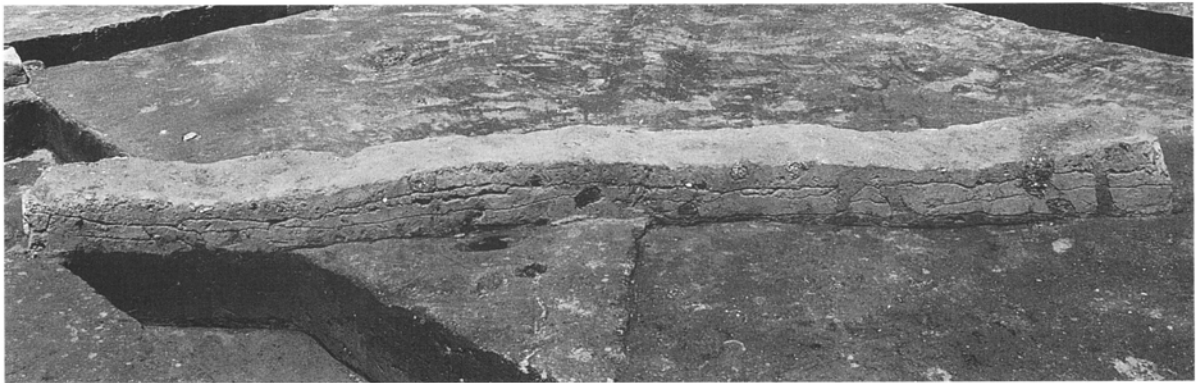
- 1 黒褐色土。基本土層VI層主体で、FPを多く含む。FAを少量含む。
- 2 黒色土。基本土層VI層主体で、FPを含む。FAを少量含む。
- 3 黒褐色土。基本土層VII層、VIII層主体で、FPを少量含む。

25号立木

- 1 FA (S-1)。
- 2 暗褐色土。FAに基本土層VI層を含む。
- 3 暗褐色土。基本土層VI層にFA、FPを含む。
- 4 にぶい橙色土。FA主体で基本土層VI層を少量含む。
- 5 黒褐色土。基本土層VI層主体で、FPを少量含む。
- 6 暗褐色土。基本土層VII層主体で、VI層・FPを少量含む。

南中道5区畦セクション

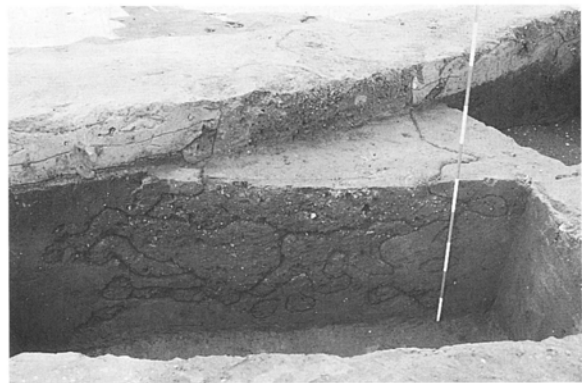
遺構番号	断面番号	幅m	高さcm	F P混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面の凹凸	その他
16	C	2.3	12	○	△	-	-	僅かに凸	畦上に蹄跡あり。
21	A	3.6	13	△	△	-	-	凸	断面図には表れてないが、焼土あり。畦上に蹄跡あり。
21	B	3.2	13	○	△	-	S-11○	僅かに凸	FA上面に畦と同様の凹凸がある。畦上に蹄跡あり。
22	A	1.4	8	○	-	-	S-5○	僅かに凸	畦の両脇が低い。畦上に蹄跡あり。
2古	A	2.2	5	○	△	-	○	-	



22号畦断面A (東から)



25号立木断面 (南から)



24号立木断面 (東から)

第4節 白井丸岩遺跡

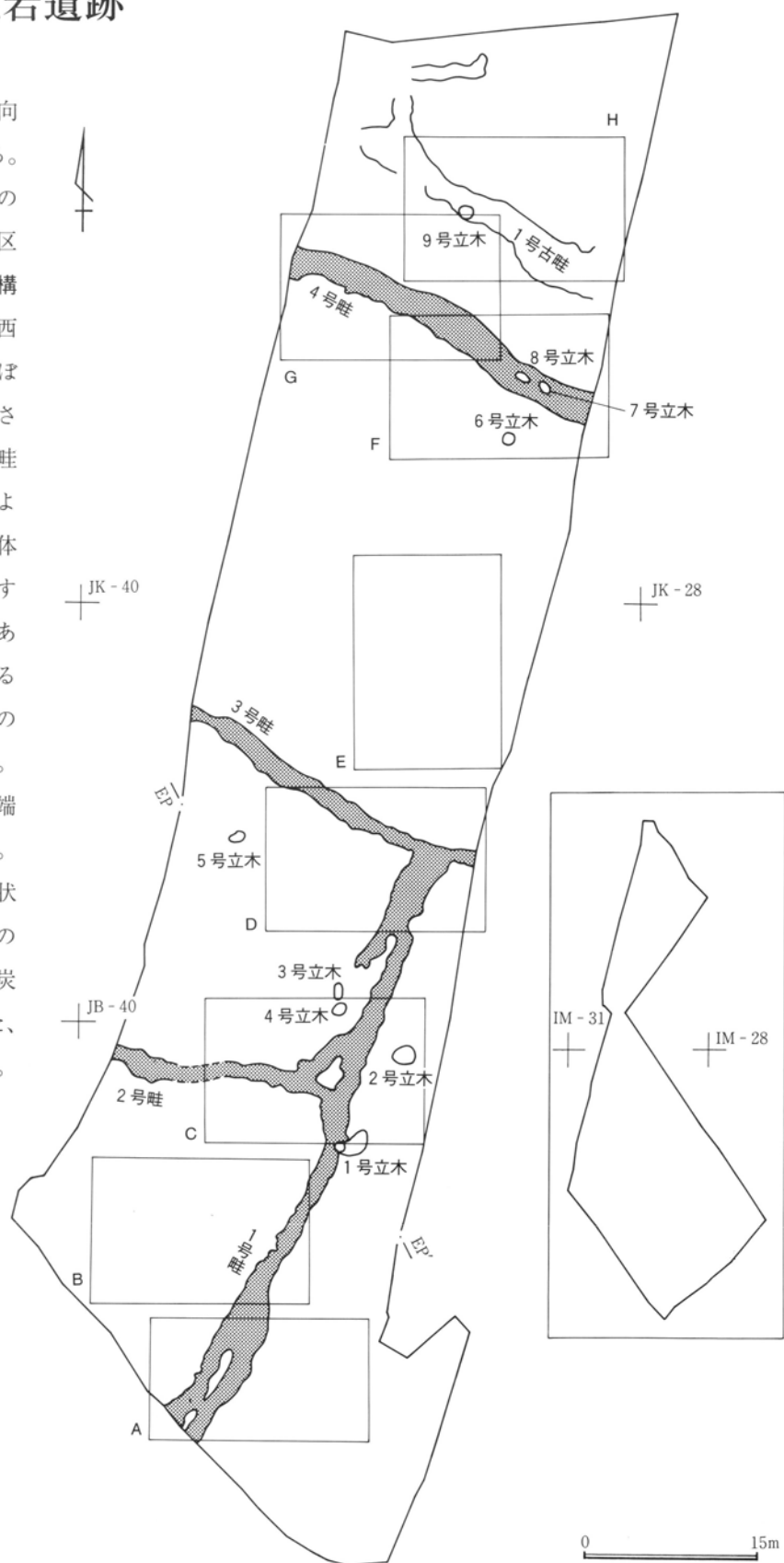
1区概要

微地形 北東側が高く南西に向かって低くなる谷が、2本ある。北側の谷は浅いが、南側のものは徐々に深くなり、南中道5区の谷へと続いている。

遺構 調査区南半部では、北東-南西方向の畦状遺構と、それにほぼ直行する畦状遺構が2本検出された。北半部では、幅の広い畦状遺構が直線的に、谷を渡るように伸びる。

蹄跡分布 全体的には少ないが、所々に集中する部分がある。列になる所もあるが、はっきりと行跡のわかるものはない。3号畦と4号畦の間で小さな蹄跡が検出された。また、4号畦周辺と調査区北端で、ヒトの足跡が検出された。

地表面の様子 植物痕の残存状況が良く、特に南東部で多くの植物痕が認められる。細かな炭化物が点々と散っている。また、立木痕が8箇所確認された。



第116図 丸岩1区全体図

EP L=193.50m

EP'



第117図 1区断面図

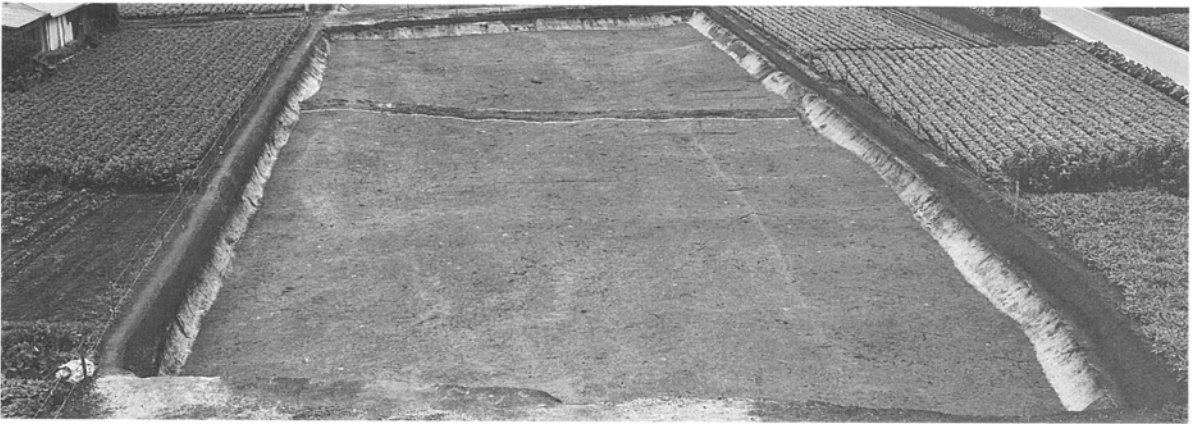
0 50cm



調査風景 (南から)



村道東側調査区全景 (西から)



丸岩1区北部 (南から)

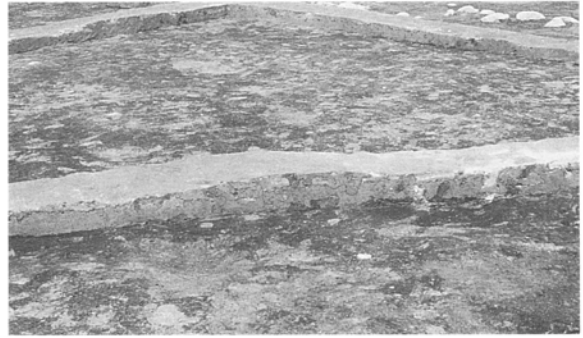


丸岩1区南部 (南から)

第3章 FP層下面の調査

1-Aブロック

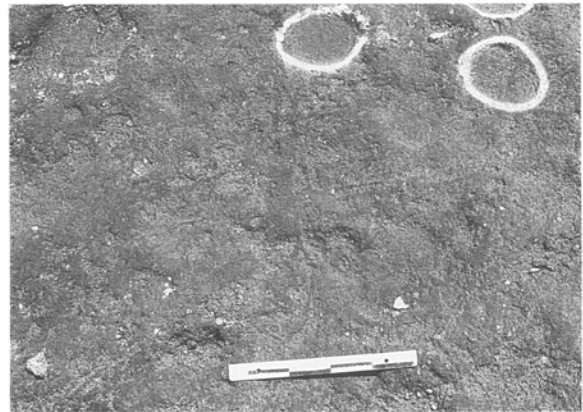
畦状遺構 1号畦：幅3.8m、高さ12cm、走向N-35°-E。高い畦と低い畦が2本並ぶように伸びていたが、東側の低い畦が高い畦と合流する。蹄跡少ないが、1号畦の西側でややまとまる。畦上にも蹄跡が分布する。その他 細かな炭化物が点々と地表面に分布する。植物痕の残存状況が良い。



1号畦断面A (南東から)



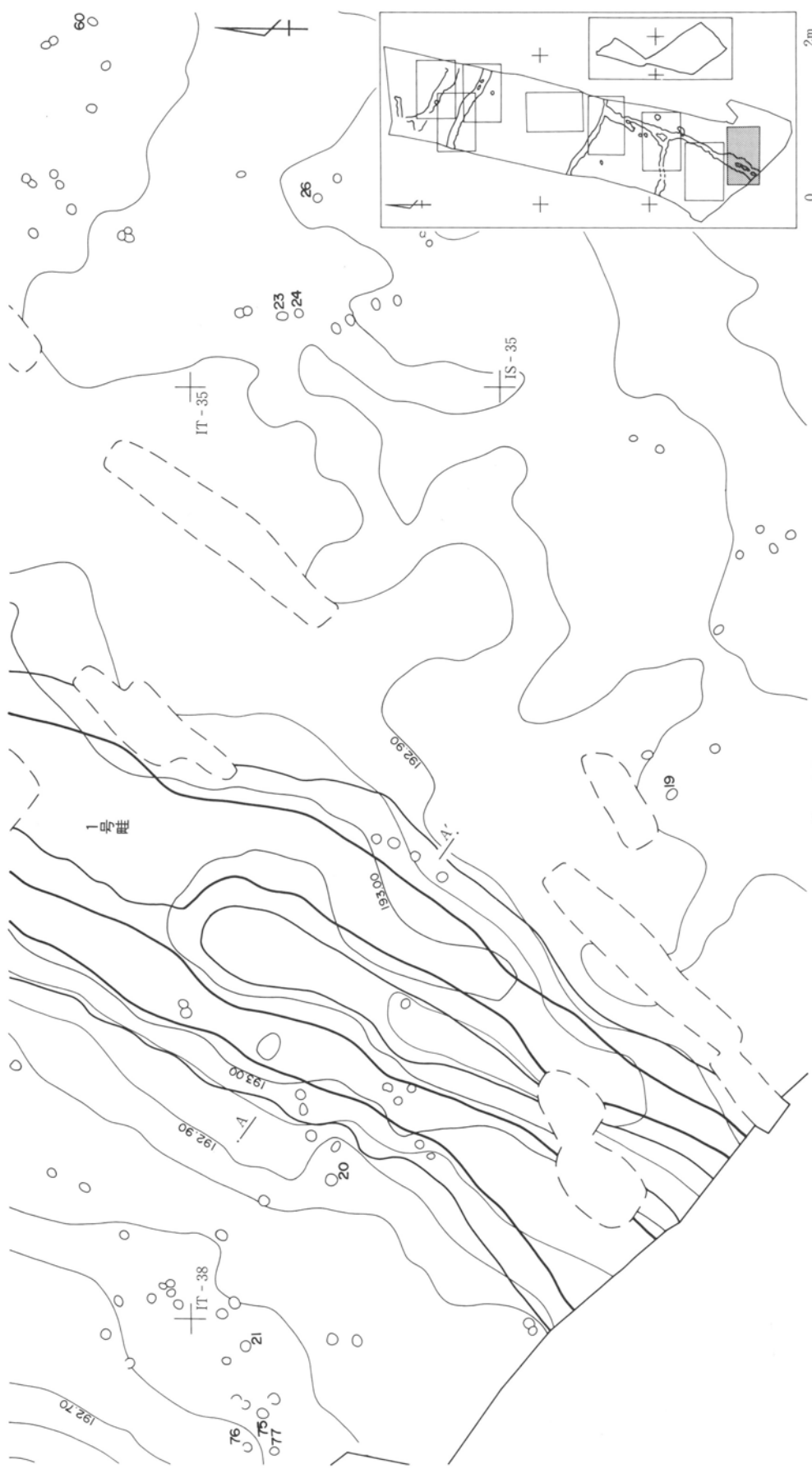
丸岩1区より子持山を望む



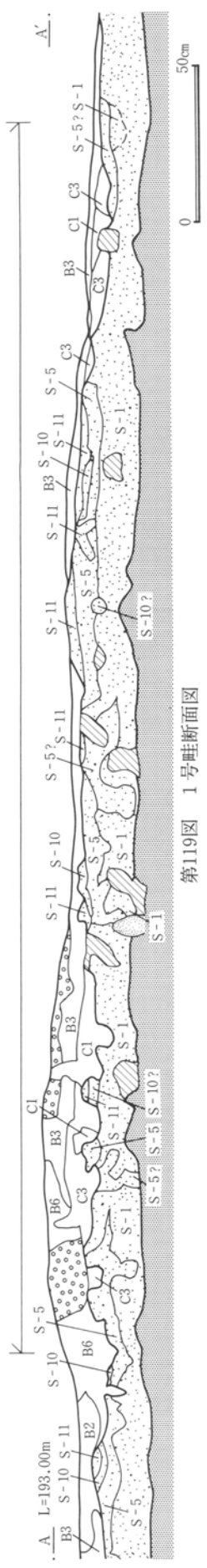
植物痕



1-Aブロック全景 (南から)



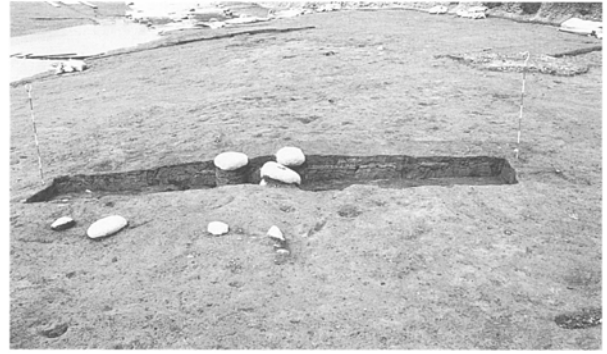
第118図 I-Aブロック



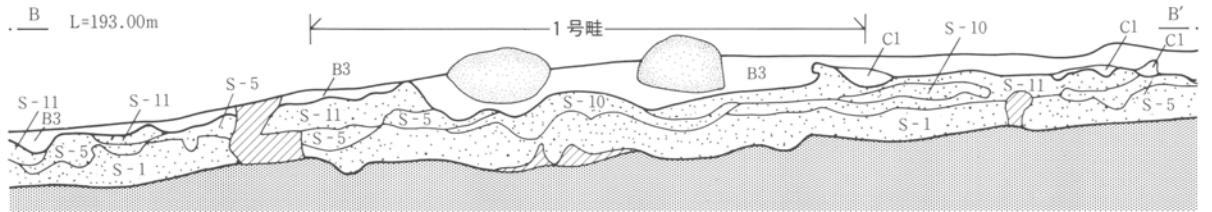
第119図 1号畦断面図

1-Bブロック

畦状遺構 1号畦：幅1.7m、高さ5cm、走向N-32°-E。畦上に円礫があり、断面で確認したところ畦中に埋まり込んでいる。 蹄跡 全体的には少ないが、北東部と西部でややまとまっている。畦を横切るように蹄跡が残る部分があるが、行跡は追えない。 その他 地表面に円礫が点々とあるが、これらは過去の倒木によって、段丘礫層から持ち上げられたものである。



1号畦断面B (南から)



第120図 1号畦断面図

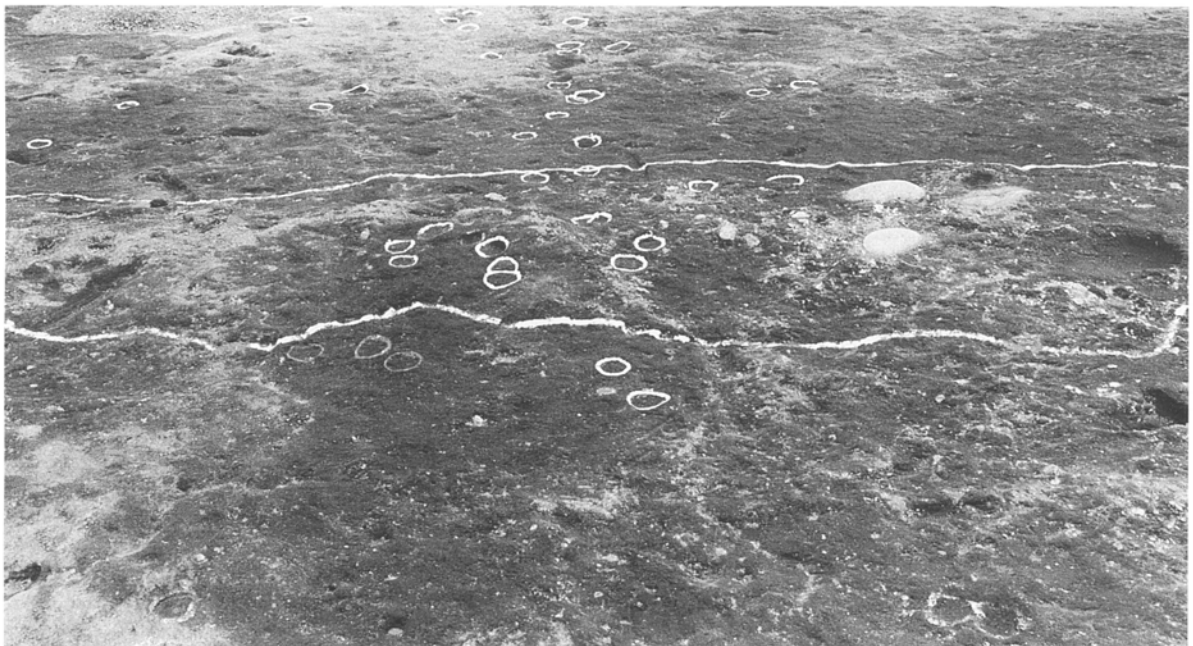
0 50cm



1-Bブロック西部 (東から)

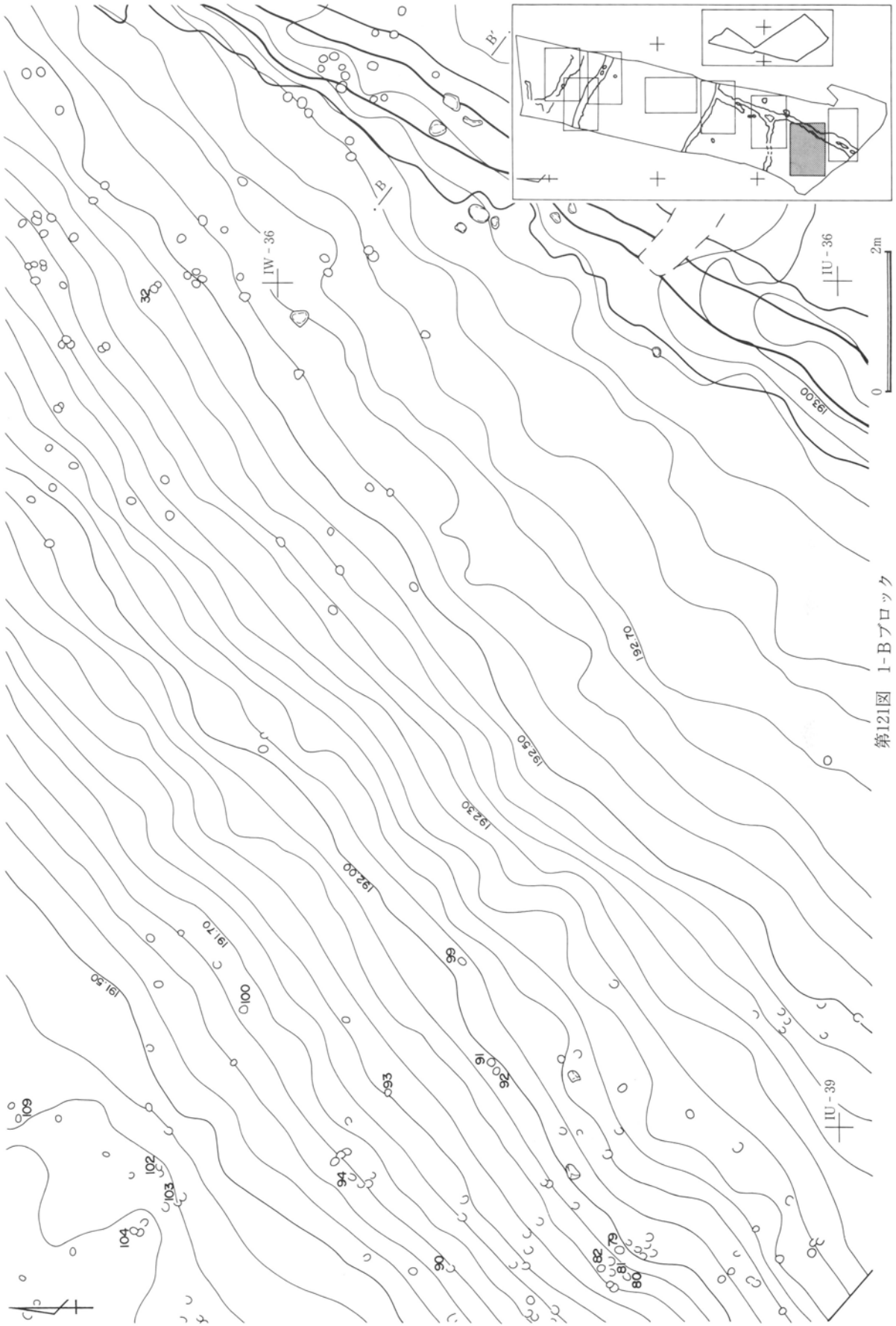


1-Bブロック東部 (南から)



IV-35グリッド蹄跡 (西から)

第4節 白井丸岩遺跡



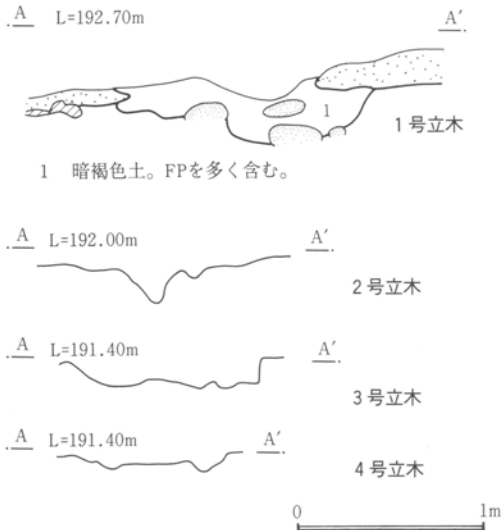
第121図 1-Bブロック

第3章 FP層下面の調査

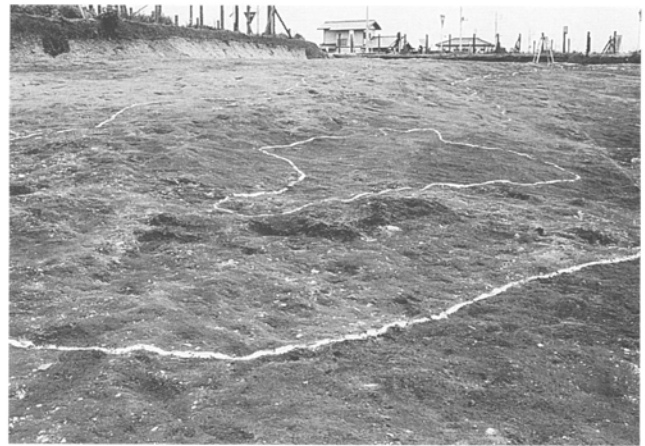
1-Cブロック

畦状遺構 1号畦：幅2.1m、高さ5cm、走向N-19°-E。Bブロックまでは谷の肩を伸びていた畦が、谷の斜面を下り、谷の底面へと伸びる。途中で2号畦が接続する。2号畦：幅1.1m、高さ8cm、走向N-80°-W。1号畦の手前で二股に分かれ、Y字状になった後、1号畦と交わる。畦上には炭化物が多

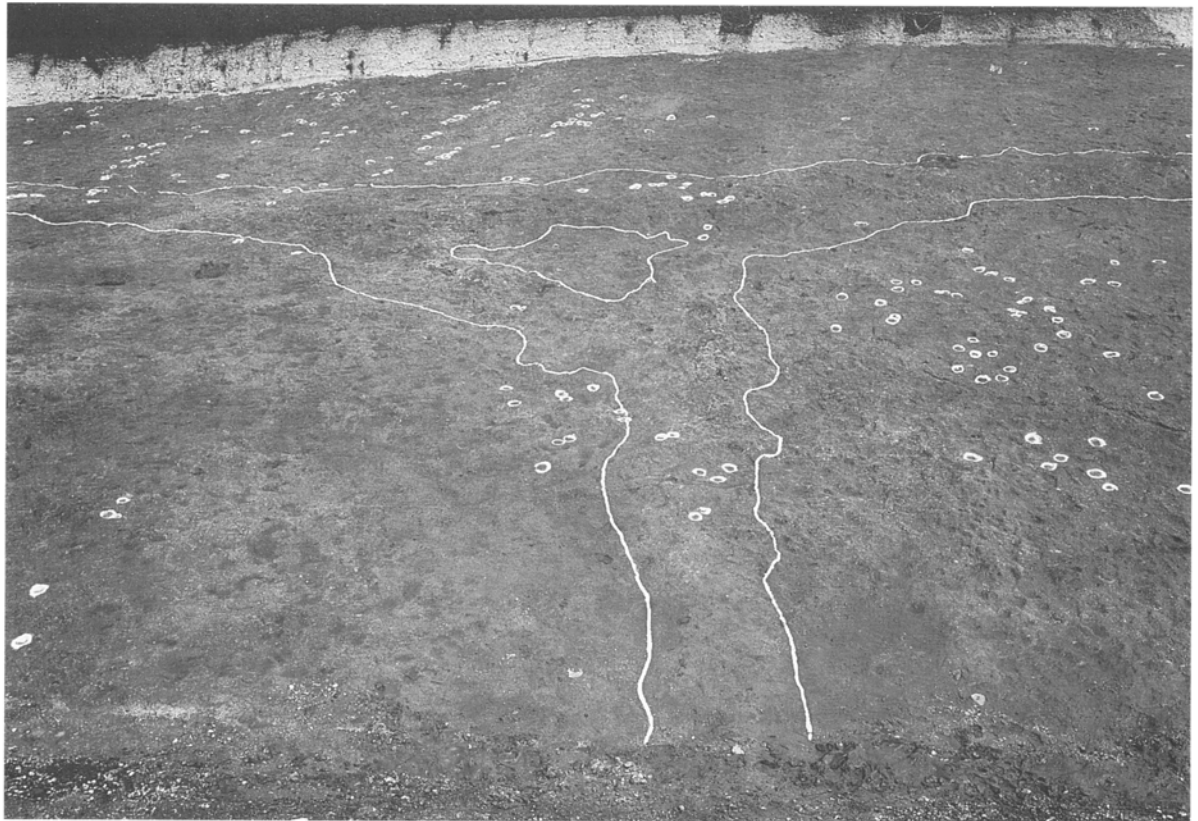
い。西へ行くほど畦が不明瞭になる。 **蹄跡** 1号畦の東と2号畦の南で多い。畦上にも蹄跡が分布する。 **立木** 1号立木：FA上面で確認されたが、根跡部分の土層はFPを含む。1号畦と重複しているが、1号畦検出時には立木の痕跡は確認できなかった。2号立木：FA上面で確認されたが、根跡部分の土層はFPを含む。3号立木：2号立木と同様の立木である。4号立木：2号立木と同様の立木である。



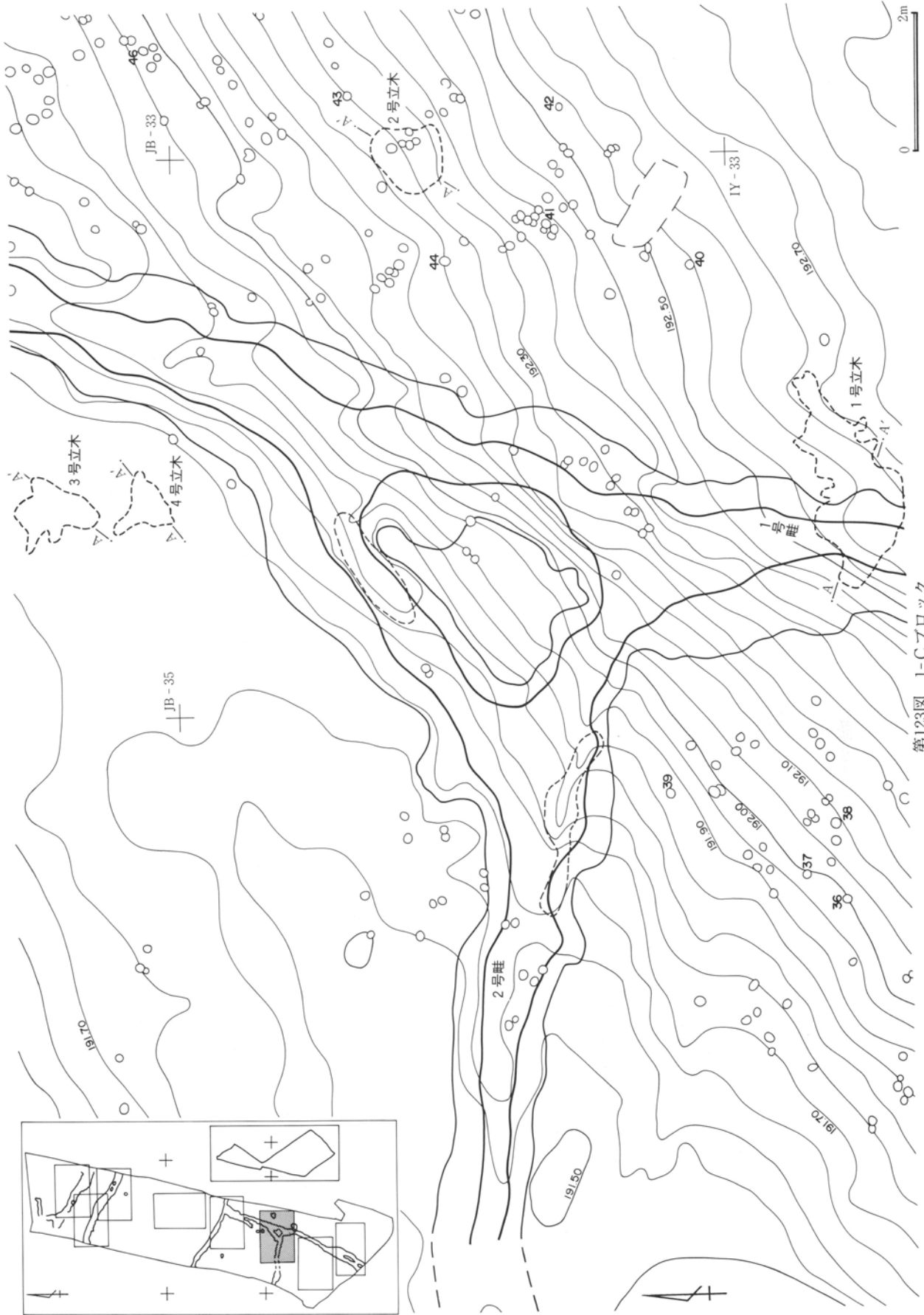
第122図 1号・2号・3号・4号立木断面図



2号畦分岐部炭化材出土状態（北から）



1-Cブロック全景（西から）



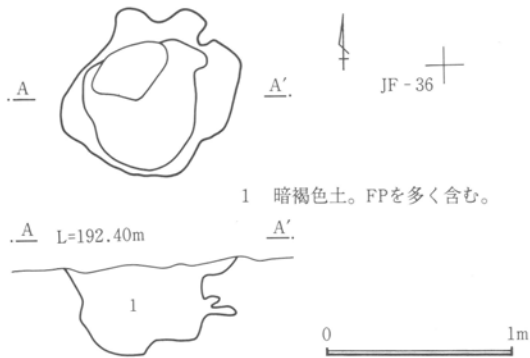
第123図 1-Cアブロック

第3章 FP層下面の調査

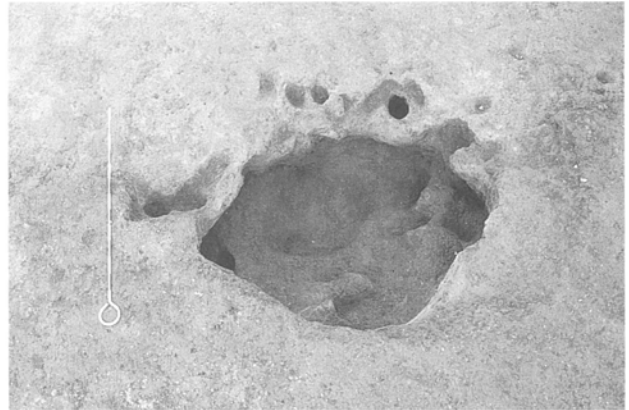
1-Dブロック

畦状遺構 1号畦：幅2.7m、高さ6cm、走向N-28°-E。幅がやや広くなる。3号畦：幅1.4m、高さ12cm、走向N-63°-W。1号畦とはほぼ垂直に交わり、4号畦とは約40mの間隔をあけて、ほぼ平行している。 蹄跡 やや多く、3号畦の北側では列を

なしている。しかし、行跡の追えるものはない。1号畦上には多くの蹄跡が残る。 立木 5号立木：JE-36グリッドのFA上面で確認された。根跡部分の土層はFPを含む。 その他 JE-33グリッドの3号畦の南側で、焼土が検出された。焼土は下位に炭化物層を伴っている。



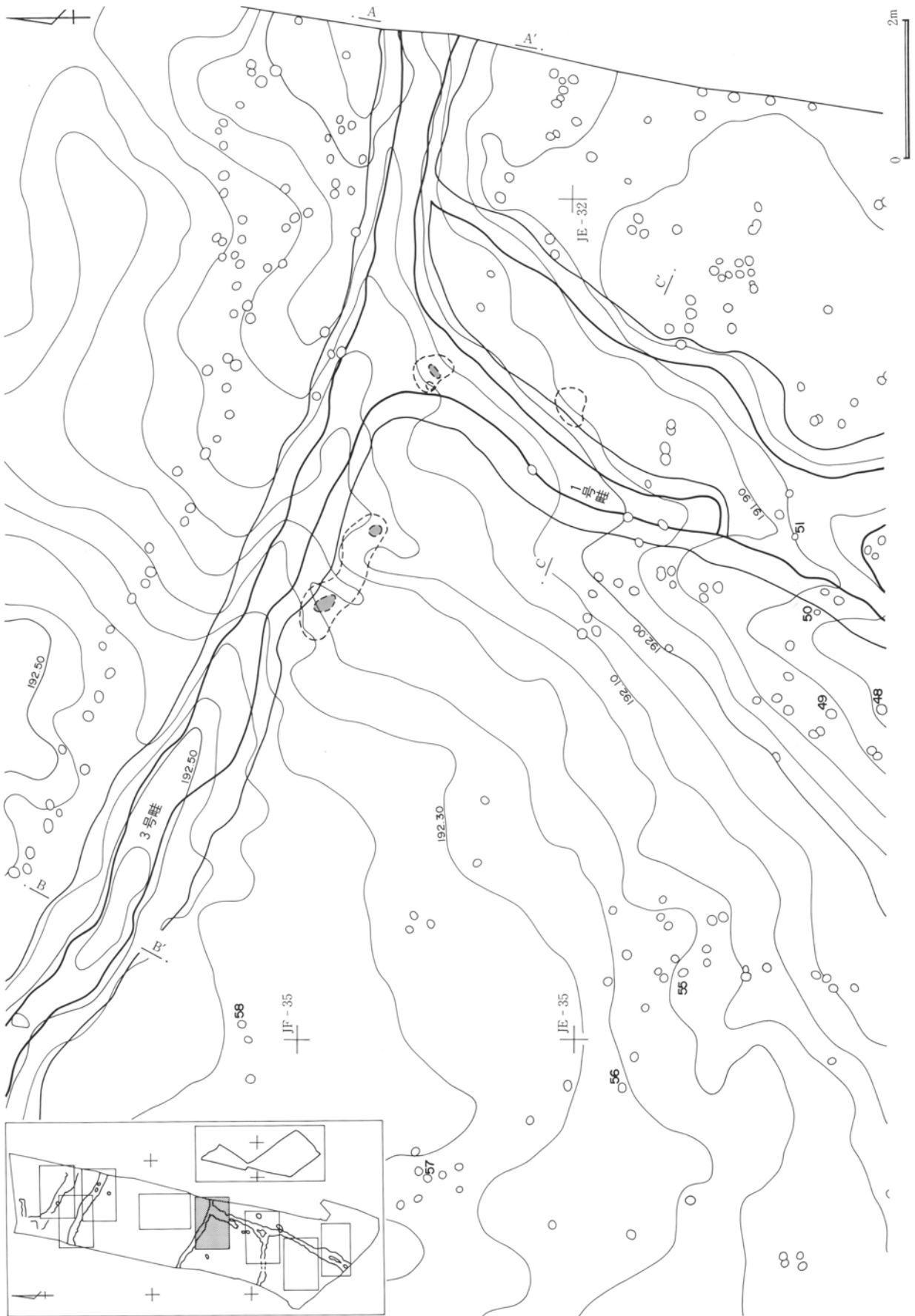
第124図 5号立木平・断面図

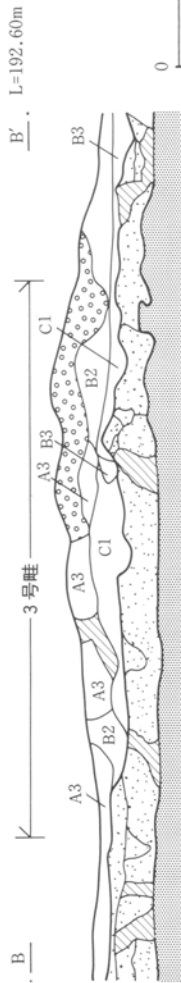
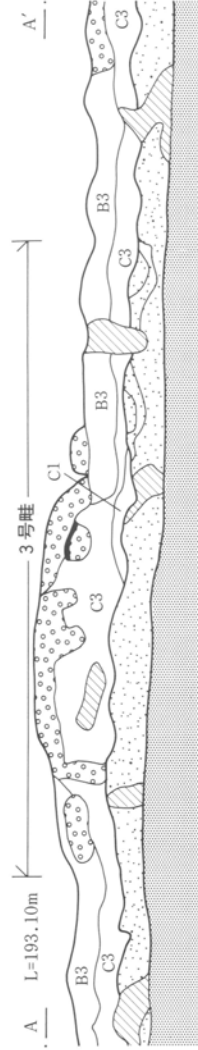
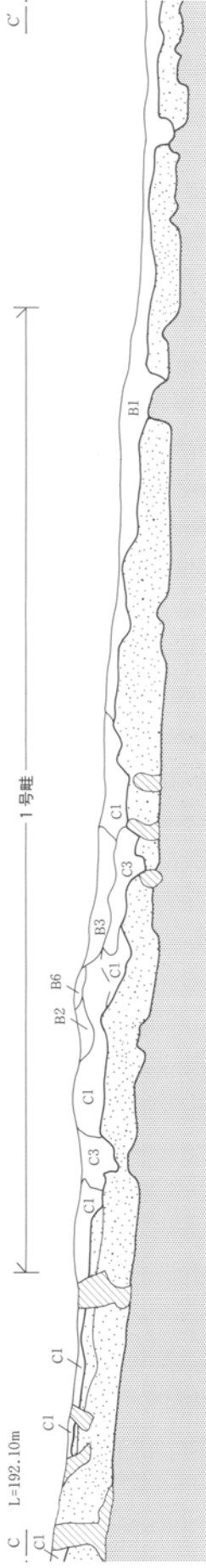


5号立木断面（南から）



1-Dブロック全景（西から）



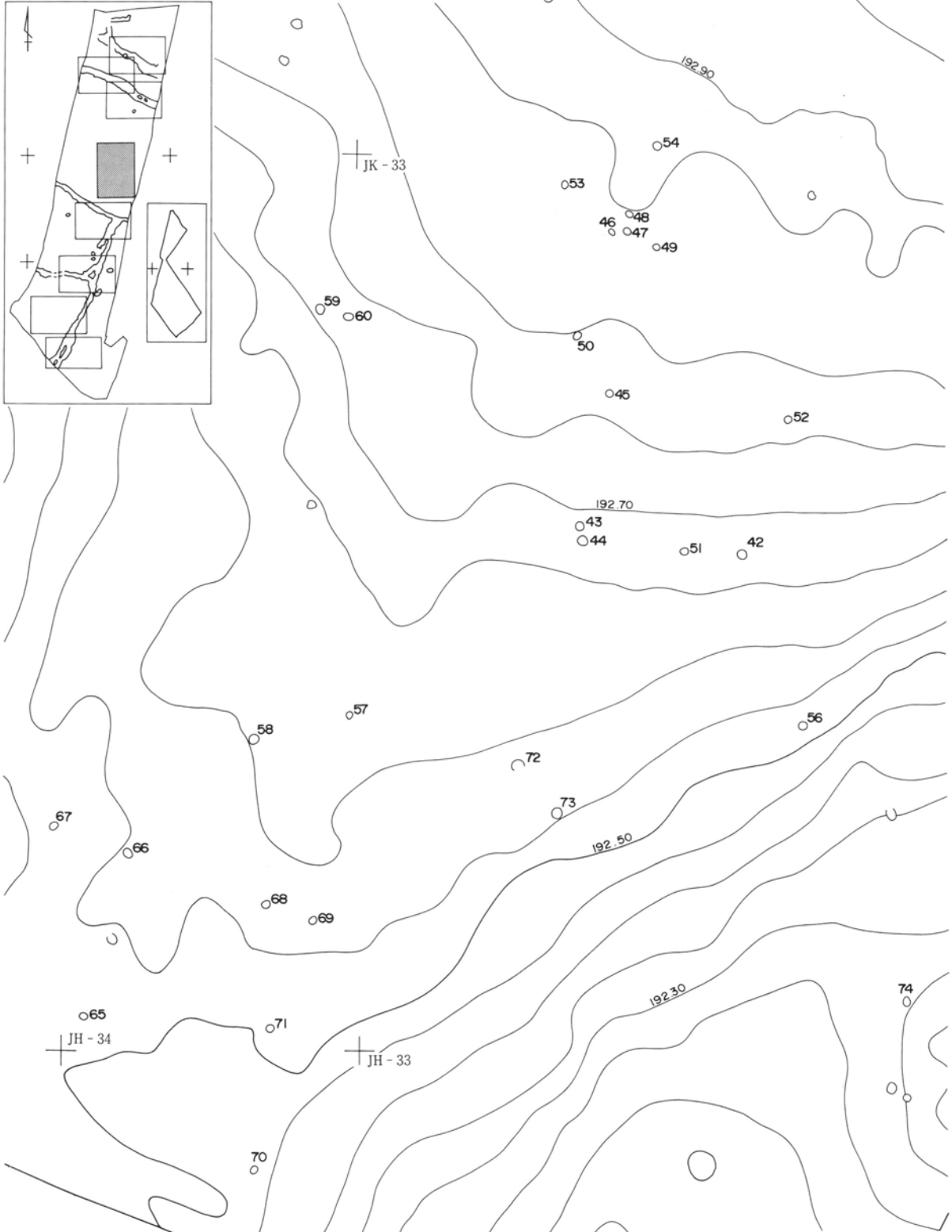


第126図 1号・3号畦断面図



1-Eブロック

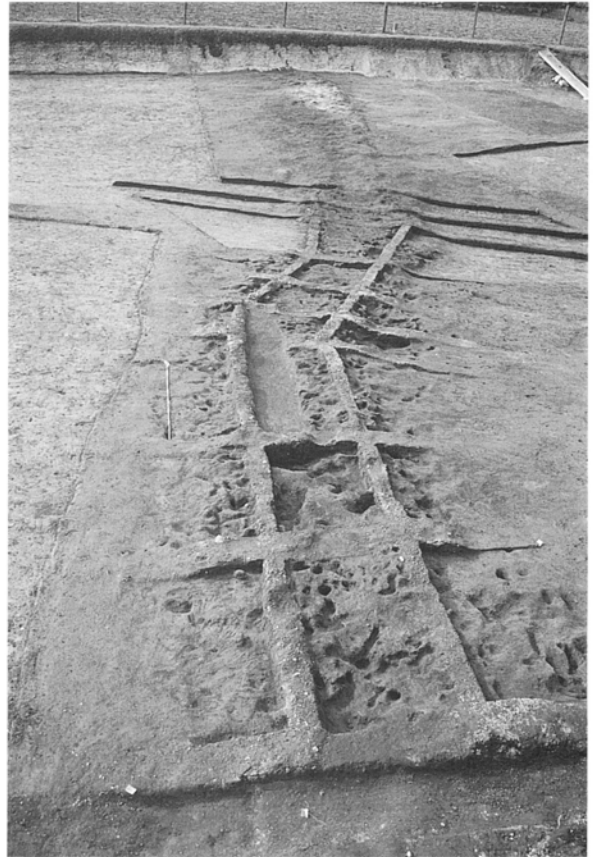
蹄跡 数は少ないが、残存状況が良く、計測可能なものが多い。幅が60mm以下の小さな蹄跡がまとまって検出された。連続した歩行跡は確認できなかった。



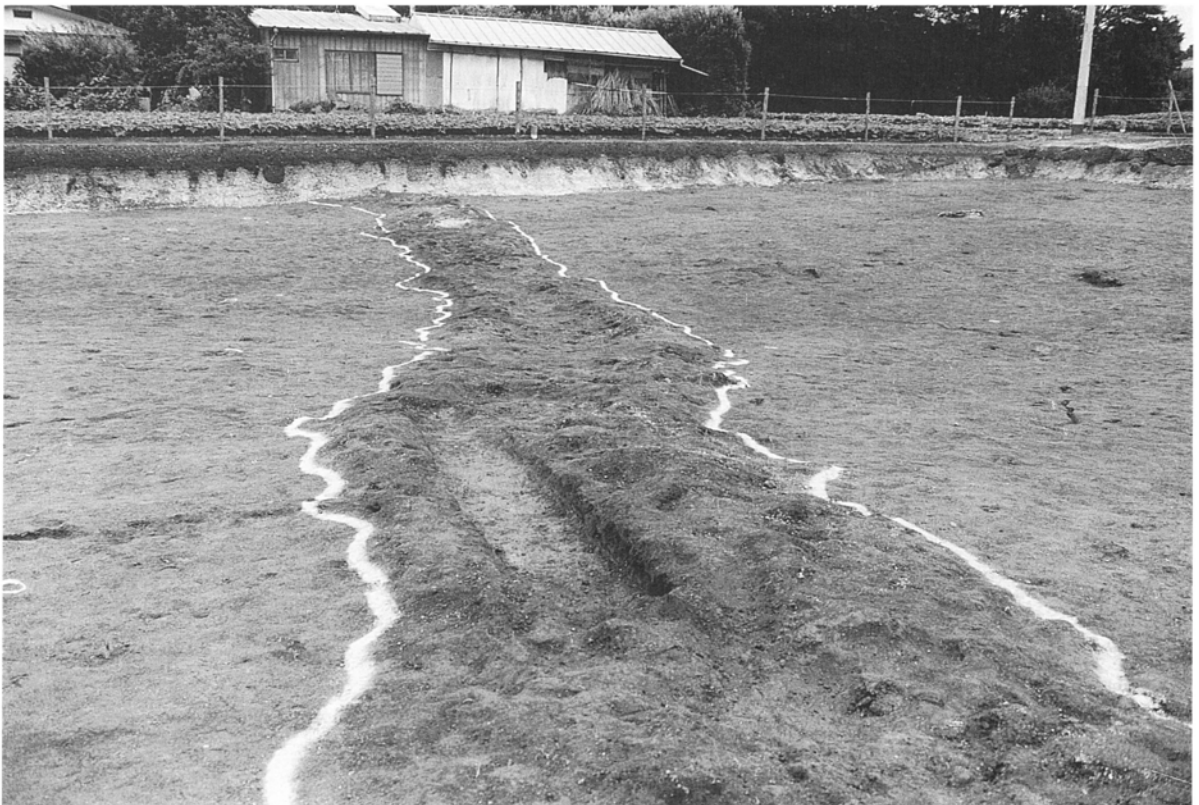
第127図 1-Eブロック

1-Fブロック

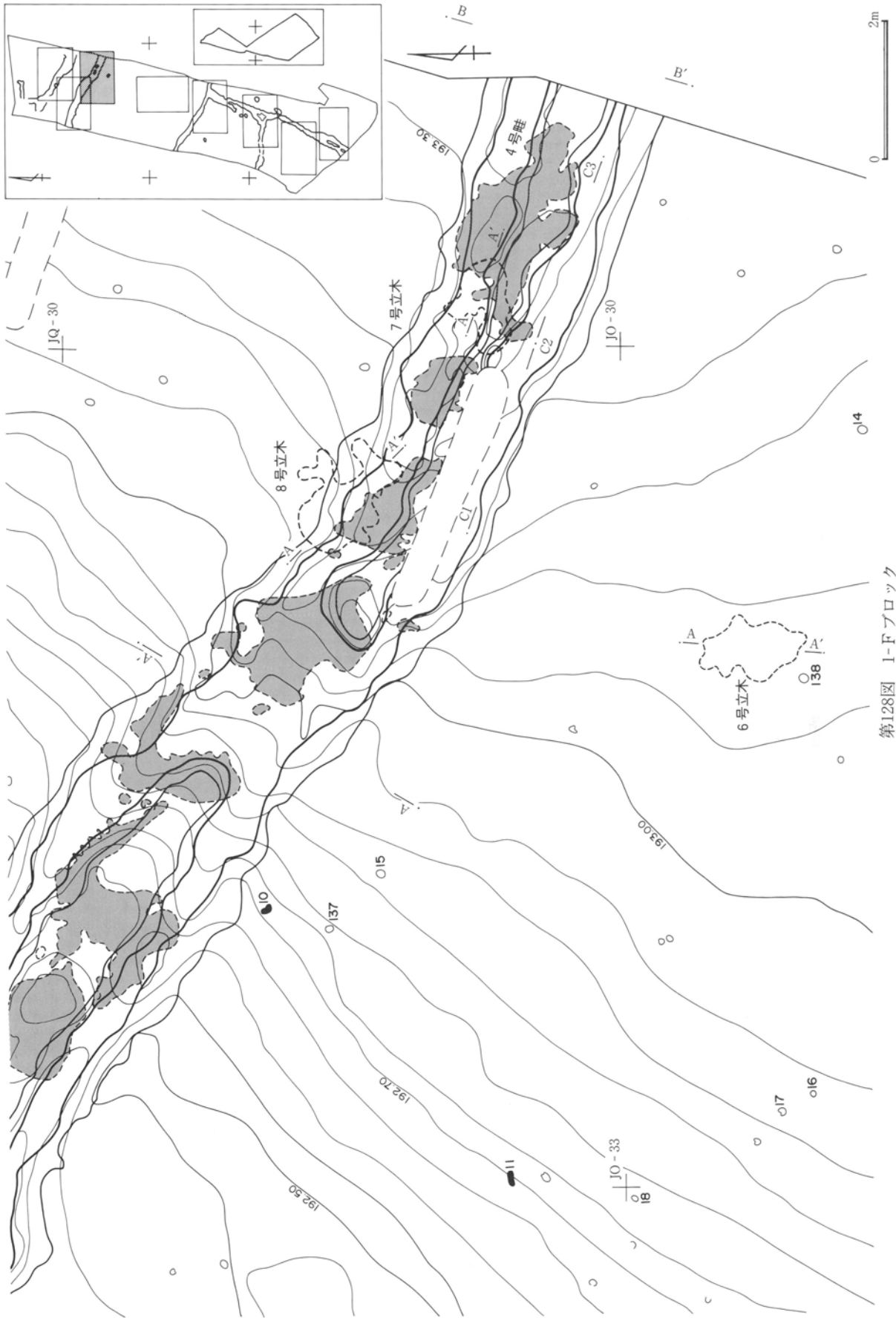
畦状遺構 4号畦：幅2.6m、高さ12cm、走向N-59°-W。谷を横断し、ほぼ直線的に伸びている。谷部分と調査区の東壁寄りでは、畦の中央部が低くなっており、2本の畦が並んでいるようである。畦上には焼土塊が断続的に分布しており、断面の観察から、焼土塊の下には炭化物を伴う場合が多いことがわかった。 蹄跡 少ない。 ヒトの足跡 JO-32グリッドとJP-32グリッドで各1個ずつ確認された。 立木 6号立木：この立木はFA下面で確認された。根跡部分の土層はFPを多量に含む。 7号立木：FA下面で確認されたが、根跡部分の土層はFP・FAを含む。 8号立木：この立木はFA下面で確認されたが、根跡部分の土層はFP・FAを含む。4号畦と重複しているが、4号畦検出時には立木の痕跡は確認できなかった。 その他 JO-28グリッドの4号畦上で、植物珪酸体分析を行ったところ、イネが検出された。しかし僅かな量であるため、栽培の可能性は低い。



4号畦調査状況（南東から）

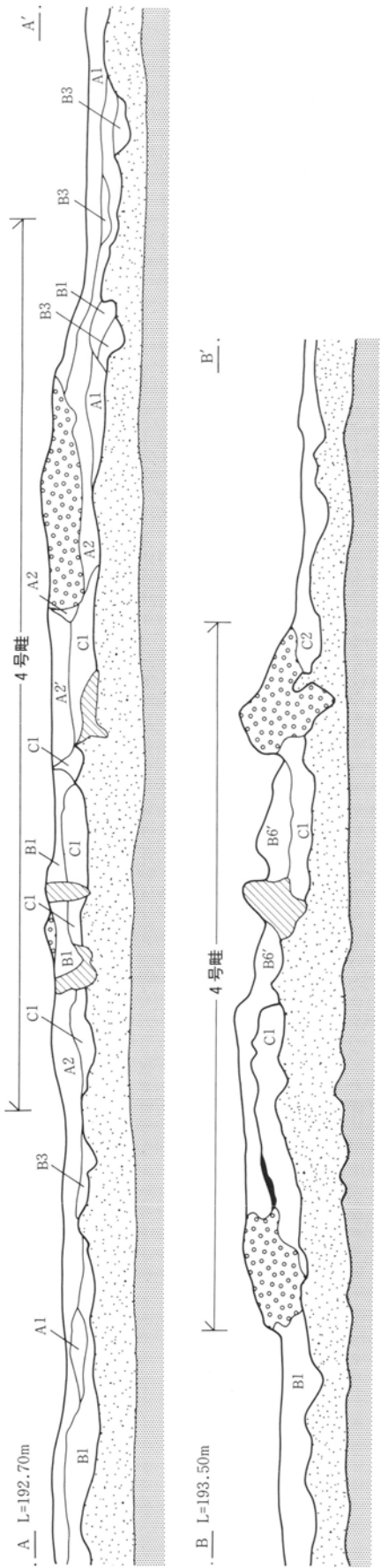


1-Fブロック全景（東から）

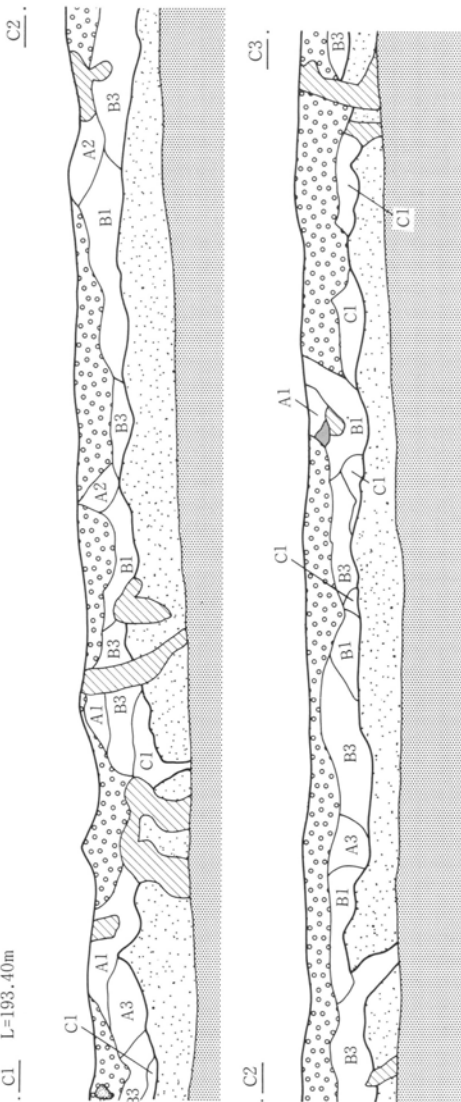


第128図 1-Fブロック

第3章 FP層下面の調査

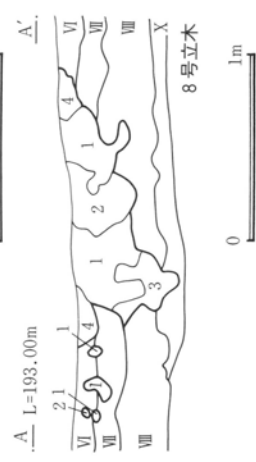


- 6号立木
- 1 褐色土。FPを多量に含む。炭化物を含む。
 - 2 黒褐色土。基本土層Ⅵ層とⅧ層が混じる。締まりなし。
 - 3 黒褐色土。基本土層Ⅷ層主体で、締まりなし。
- 7号立木
- 1 黒色土。基本土層Ⅵ層主体で、FPを少量含む。
 - 2 黒色土。基本土層Ⅵ層主体で、FA・FPを多く含む。
 - 3 黒色土。基本土層Ⅵ層主体で、FAを少量含む。ローム粒を少量含む。
 - 4 FA (S-I)。



第129図 4号畦断面図

- 8号立木
- 1 暗褐色土。基本土層Ⅵ層主体で、FPを含む。FAを少量含む。締まりなし。
 - 2 暗褐色土。I層に似るが、FA・FPを多く含む。締まりなし。
 - 3 黒色土。基本土層Ⅷ層主体だが、色調がより黒く、FPを少量含む。
 - 4 黒色土。基本土層Ⅵ層主体で、FPを少量含む。



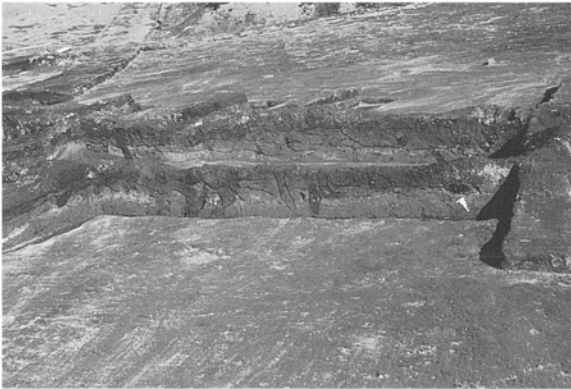
第130図 6号・7号・8号立木断面図



4号畦断面A (東から)



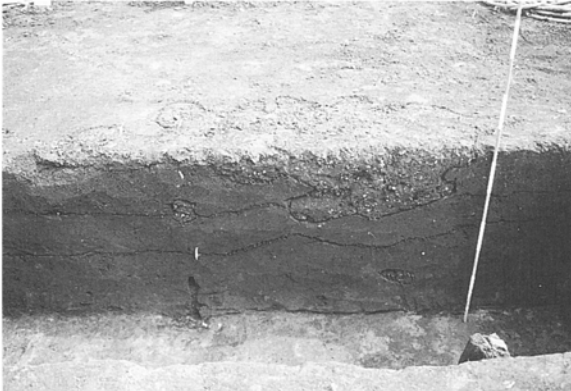
4号畦断面B (西から)



4号畦断面C (南から)



4号畦断面C (南から)



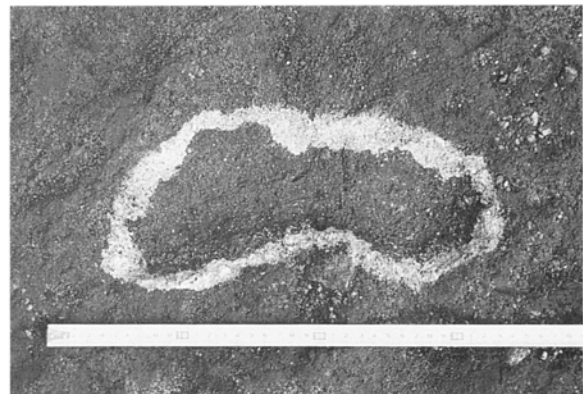
6号立木断面 (西から)



7号立木断面 (南から)



8号立木断面 (南西から)



ヒトの足跡

1-Gブロック

畦状遺構 4号畦：幅2.6m、高さ10cm、走向N-65°-W。Fブロックと同様の特徴を示す。畦に構造物が伴ったかどうか調べるために、土層観察用のベルトを残して、徐々に掘り下げたが、柵列の存在

を示すようなピットは確認できなかった。 蹄跡 少ない。 ヒトの足跡 4号畦の北側で数個確認された。 立木 9号立木：FP下面で、円形の落ち込みとして検出された。根跡部分の土層はFP・FAを含む。



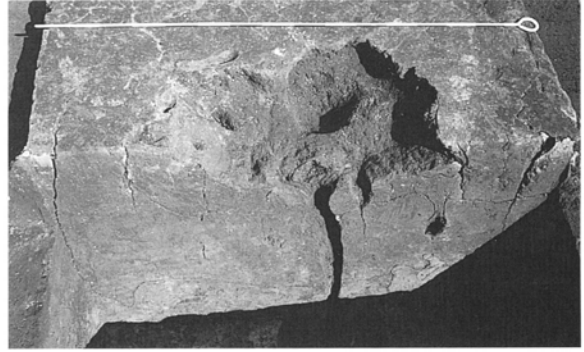
4号畦断面D南半（東から）



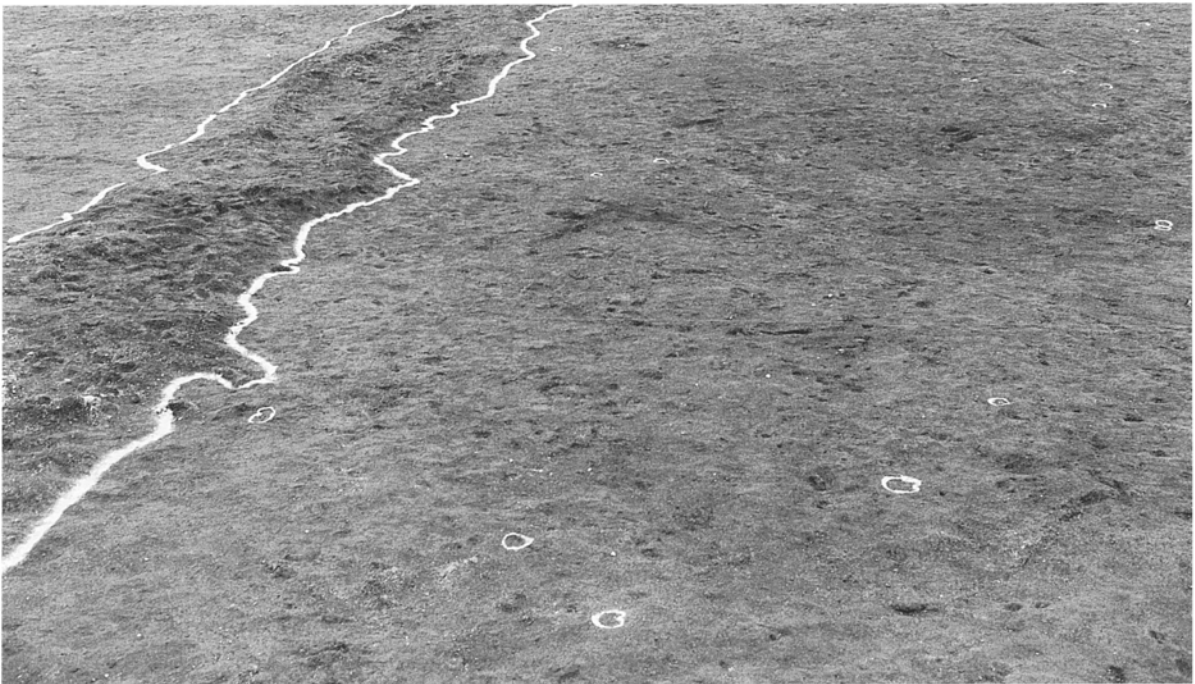
4号畦断面D北半（東から）



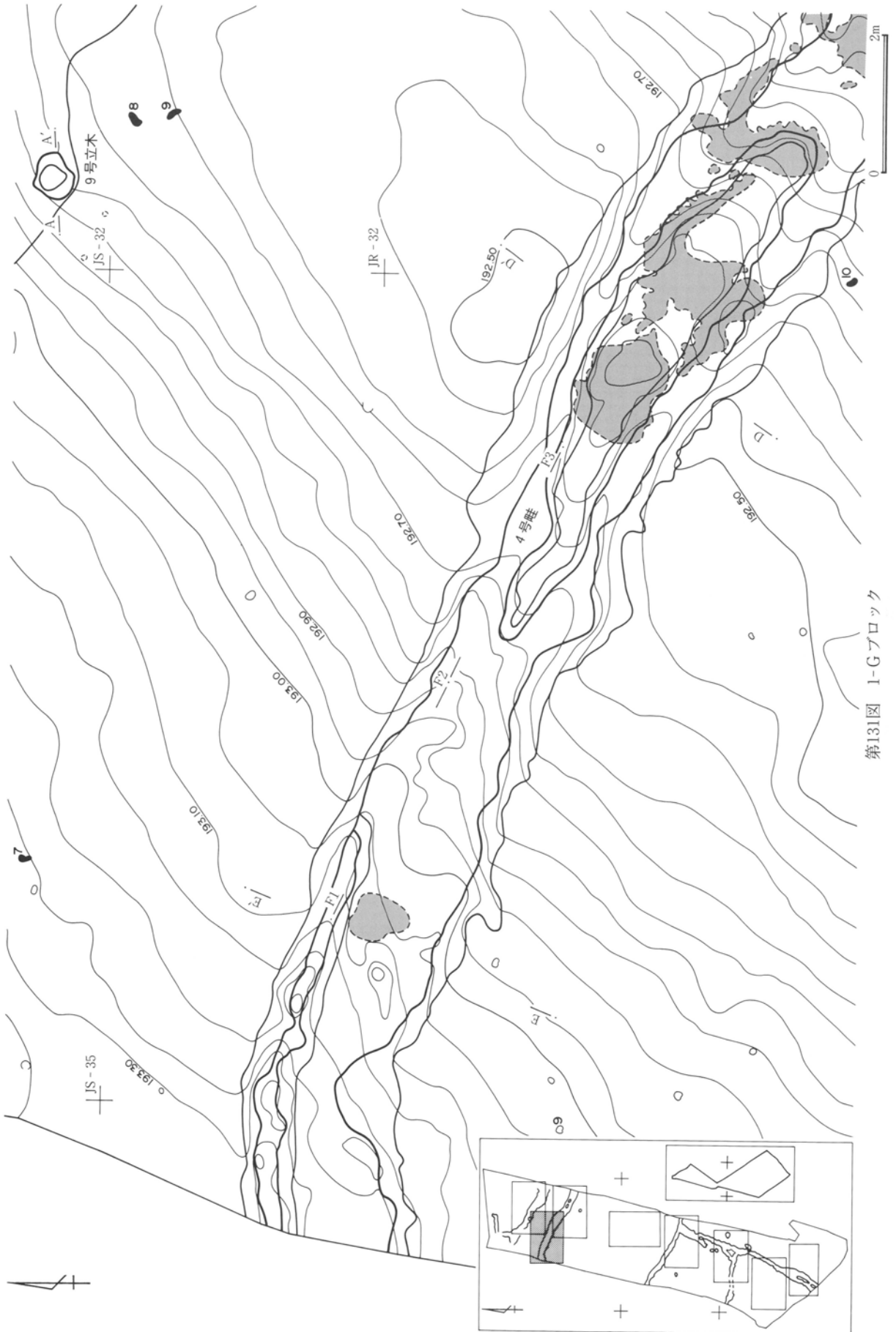
4号畦断面E（東から）



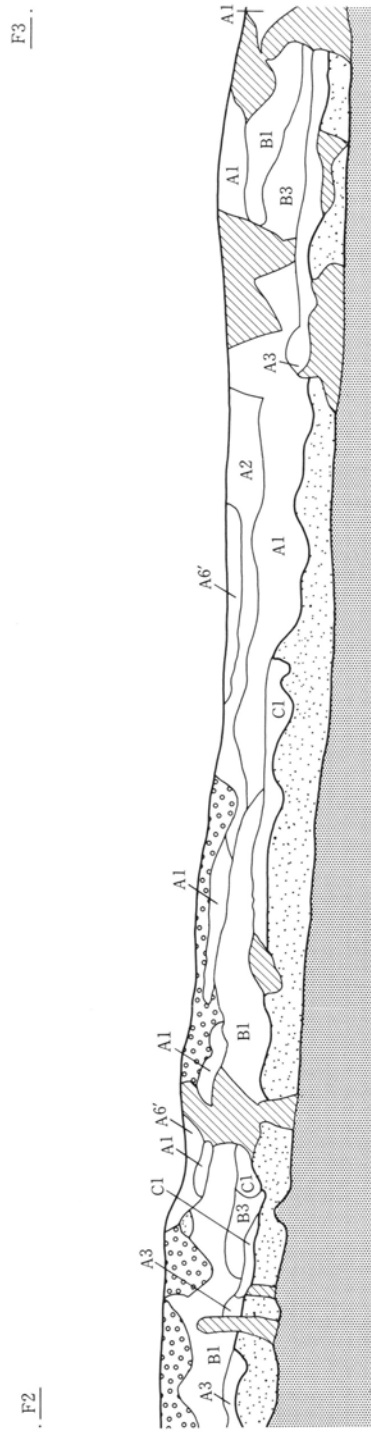
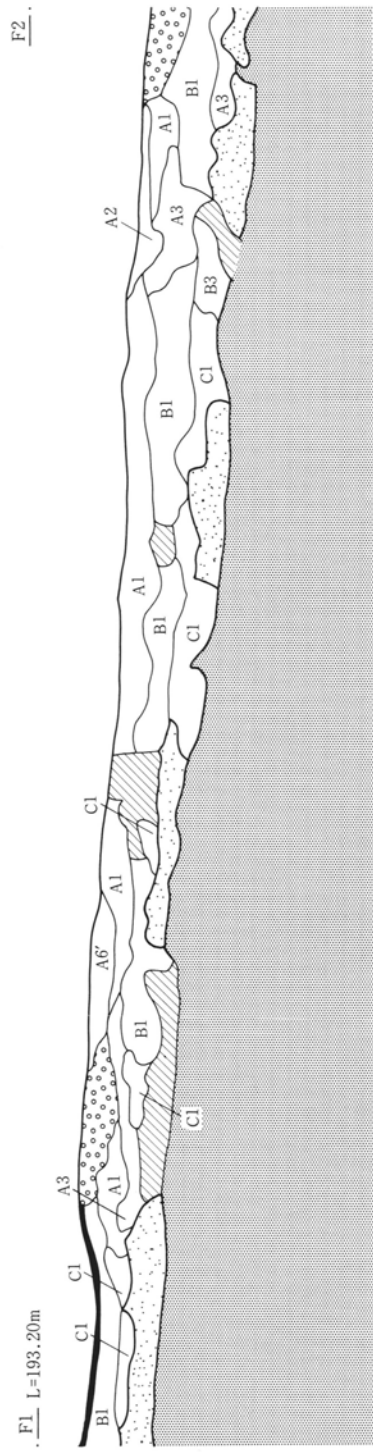
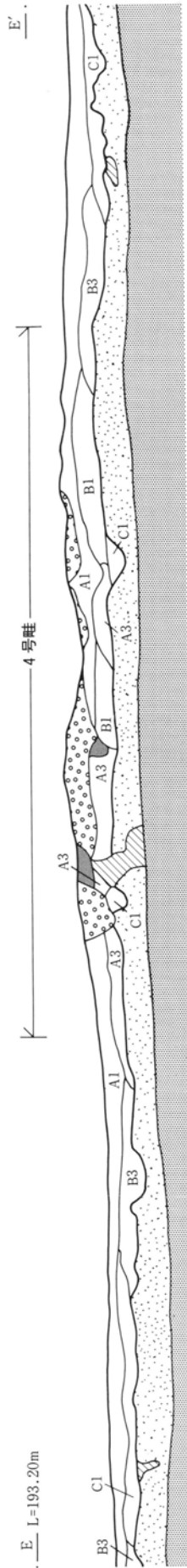
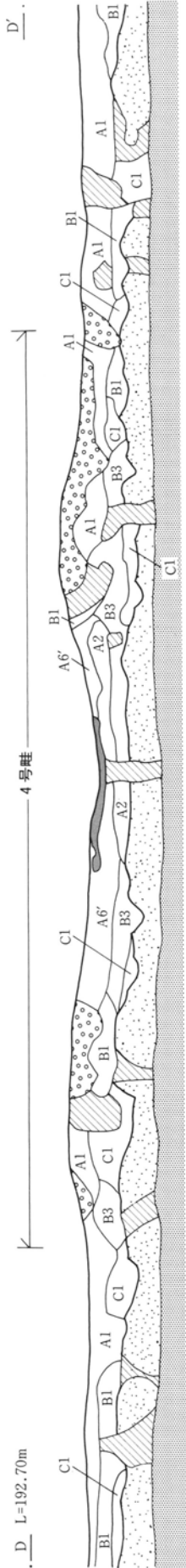
9号立木断面（南から）



1-Gブロック全景（西から）

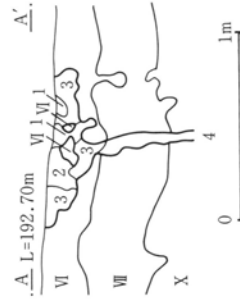


第131図 1-Gブロック



- 1 褐色土。FPを多量に含む。炭化物を含む。
- 2 褐色土。基本土層VI層とFAの混合層。FPを含む。炭化物を多く含む。
- 3 暗褐色土。基本土層VI層とFAの混合層。炭化物を含む。
- 4 黒色土。基本土層VI層主体で、縮まりなし。

第132図 4号畦断面図



第133図 9号立木断面図

第132図 4号畦断面図

1-Hブロック

古い畦状遺構 1号古畦：FP-FA間の土壤層を少し削ると、炭化物を多く含む箇所が、带状に連なっている。ほぼ4号畦と平行しており、谷を横断している。FP下面で高まりは確認できなかったが、畦の痕跡と思われる。 蹄跡 少ない。 その他 JS-31グリッドの1号古畦部分で出土した炭化材は、コナラ節であると同定結果がでている。9号立木に近いので、立木との関係も考えられるが、その点は不明である。



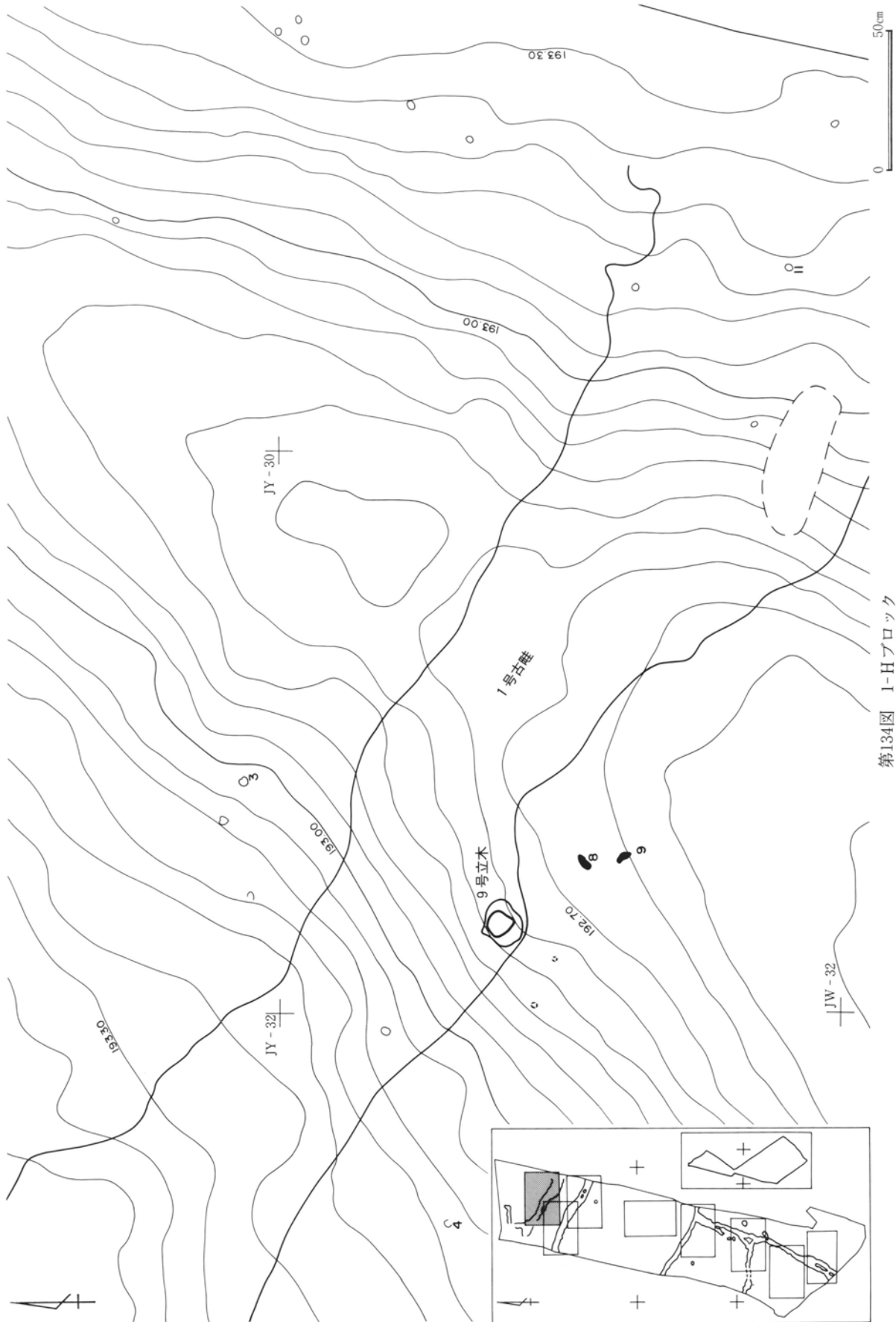
炭化物出土状態

丸岩1区畦セクション

遺構番号	断面番号	幅 m	高さ cm	FP混じり土	炭化物	焼土	FAの残存	FA下面の凹凸	その他
1	A	3.8	12	○	△	△	-	僅かに凸	畦下のFA上面乱れる。畦上に蹄跡あり。
1	B	1.6	5	-	-	-	-	僅かに凹	円礫がのる。畦上に蹄跡あり。
1	C	3.0	6	-	△	△	-	僅かに凸	畦上に蹄跡あり。
3	A	1.4	11	○	○	-	-	僅かに凸	
3	B	1.4	12	○	△	-	-	-	
4	A	2.6	11	○	○	-	-	-	
4	B	2.4	17	○	○	○	○	僅かに凸	
4	D	2.8	8	○	○	○	-	中央凹む	中央部低い。
4	E	2.2	9	○	-	○	-	僅かに凸	中央部低い。



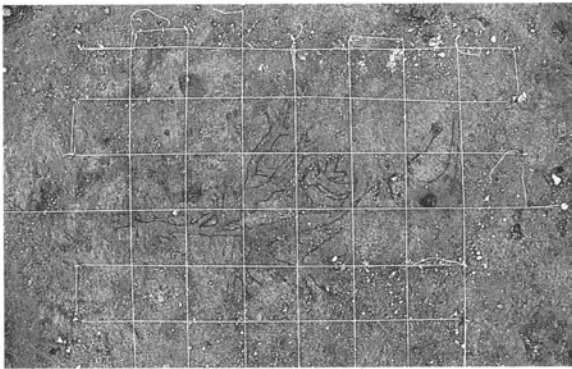
4号古畦全景（焼土・炭化物が多い部分）（西から）



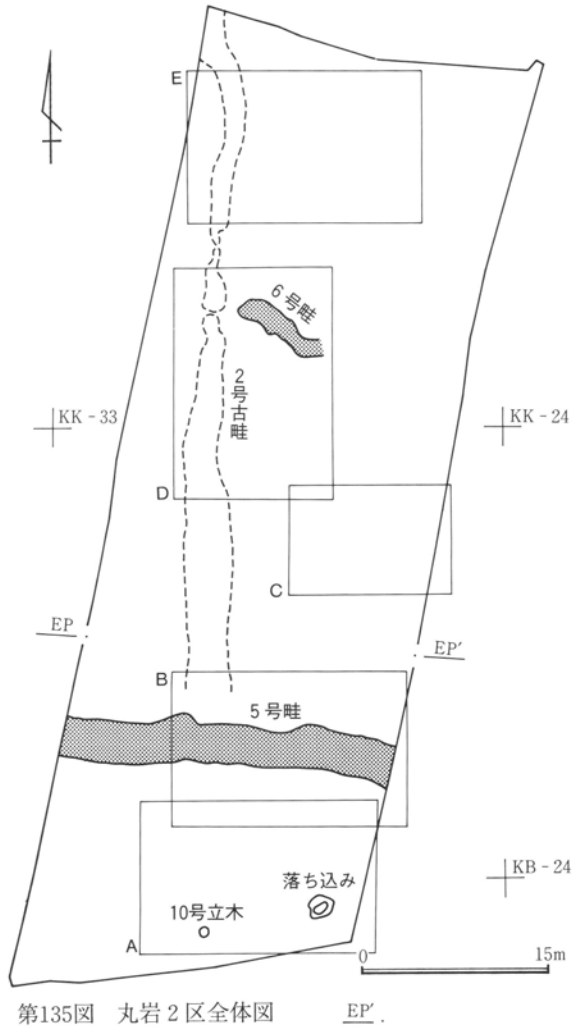
第134図 1-Hプロック

2区概要

微地形 調査区の中央に、南北方向の浅い谷がある。この谷は南へ向かって低くなっており、1区の谷へと続いている。**遺構** 調査区の南よりで、ほぼ東西の走向をもつ幅の広い畦状遺構が確認された。この畦状遺構にT字に交わるように、南北の走向の古い畦状遺構がある。また、谷頭付近に数mで途切れてしまう畦状遺構がある。いずれも焼土・炭化物を多く含む。**跡分布** 全体的に少ないが、調査区中央部でドーナツ状に、北よりで帯状に、ややまとまっている。**地表面の様子** 細かな凹凸はあるが、滑らかで、植物の痕跡の残存状況が良い。全体的に地表面の色調の黒みが強い。



EP L=195.00m 植物痕 (西から)



第135図 丸岩2区全体図



第136図 2区断面図

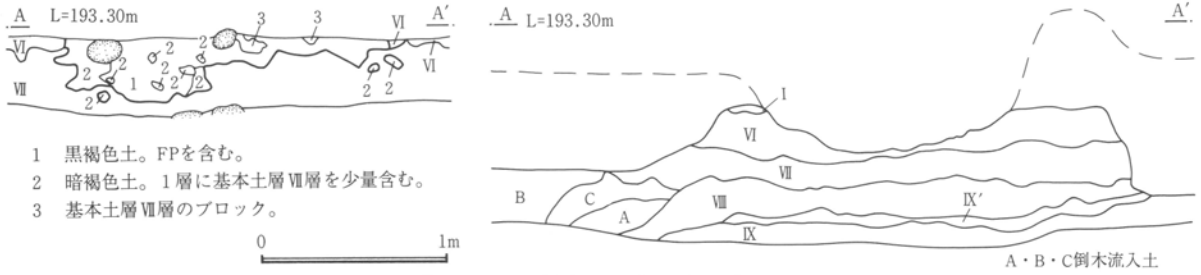


丸岩2区全景 (北から)

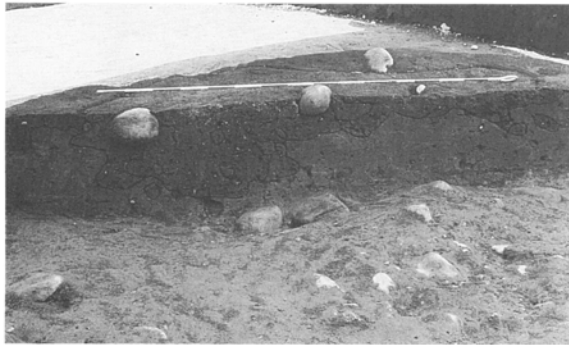
2-Aブロック

跡跡 少ない。立木 10号立木：この立木はFA下面で確認されたが、根跡部分の土層はFPを含む。
 その他 南東隅で、不定形の落ち込みとその脇に盛り上がりがあるのが確認された。倒木か立木の痕跡

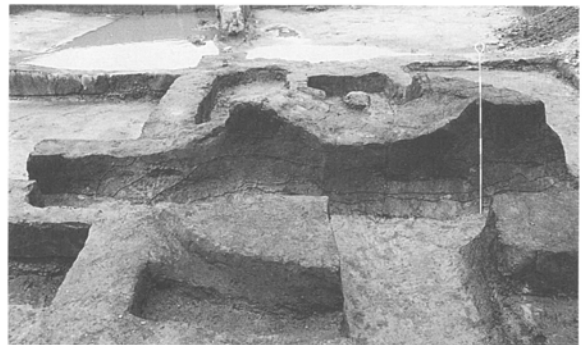
と思われたが、断面の観察では基本土層に変形はなく、削り取られて低くなっているようである。土坑と認定するには形状が明瞭でなく、人為的なものと判定できない。



第137図 10号立木、落ち込み断面図



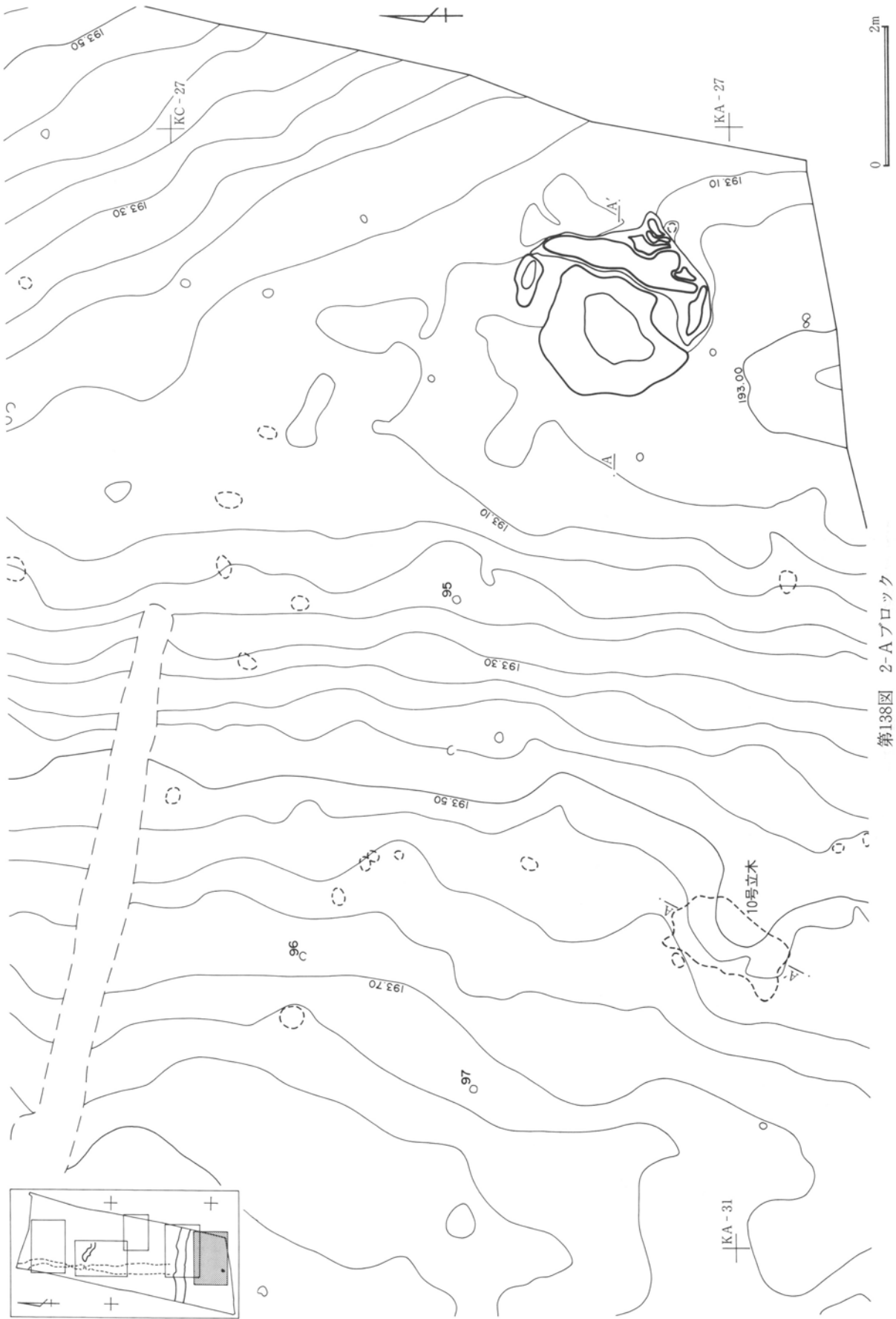
10号立木断面（東から）



落ち込み断面（南から）



2-Aブロック全景（手前に見えるのが性格不明の落ち込み）（南東から）



第138図 2-Aブロック